兵庫県文化財調査報告書第55冊

森　遺　跡

－淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－

昭和63年３月

兵庫県教育委員会

森　遺　跡

―淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ―

昭和63年３月

兵庫県教育委員会

例　　言

1. 本報告書は洲本市上内膳里字森に位置する森遺跡の報告書である。
2. 発掘調査は、本州四国連絡橋公団による淡路縦貫道建設に伴って、昭和58年11月から昭和59年２月にかけて発掘調査を実施したもので、本州四国連絡橋公団の委託を受けて、兵庫県教育委員会が実施した。
3. 現地での作業は株式会社橋詰建設の協力を得て、小川良太、吉識雅仁、岸本一宏が担当して実施した。
4. 整理調査は吉識が主となって担当し、昭和61・62年に実施した。
5. 発掘調査、整理調査に伴う経費は全て本州四国連絡橋公団が負担した。
6. 遺構の実測は原田和幸の補助を受け、調査員が実施した。遺物の実測は、土器を山根実生子、社領育代が行い、石器を大下明が行った。
7. 遺構・土器実測図のトレースは山根・社領が行い、石器は大下が行った。
8. 遺構写真は各調査員が撮影したが、遺物については森昭氏に依頼した。
9. 本書の編集は吉識が担当し、山根の補助を得て、実施した。
10. 遺物類の番号は、本文・挿図・写真図版とも統一している。
11. 本書の挿図等に利用した標高の数値は、本州四国連絡橋公団の工事用Ｂ.Ｍ.を利用した海抜高であり、方位は磁北である。
12. 本書に掲載した挿図・写真図版の内、第１図の地図は国土地理院発行の1/25000の地図をもとに作成したものであり、写真図版の内、図版第１の航空写真は国土地理院撮影の1/10000のものを利用した。
13. 原稿の執筆分担は下記の通りであるが、石器については全て大下が、遺物観察表は、山根が担当した。

    小川良太　　第４章第１節２、第２節３、第３節
    吉識雅仁　　第１章、第２章、第３章第１・２・４節、第４章第１節１
    岸本一宏　　第３章第３・５節、第４章第２節１
    原田和幸　　第４章第２節２
    山根実生子　土器観察表

14. 出土した遺物類は兵庫県教育委員会で保管している。
15. 本書の作成にあたって、地理的な環境について高橋学氏の、中世の遺物について岡田章一氏の教示を得たほか、波毛康宏氏、浦上雅史氏を始め淡路考古学研究会の方々、本州四国連絡橋公団など、関係各方面から多大なる協力を得た。記して感謝の意を表します。

本　文　目　次

第1章　はじめに……1
　第1節　調査に至る経過……1
　第2節　調査の体制……2
　第3節　遺跡の環境……4
第2章　確認調査……11
　第1節　調査の方法と経過……11
　第2節　調査の概要……13
　第3節　遺物……16
　第4節　まとめ……20
第3章　本調査……21
　第1節　調査の経過……21
　第2節　遺跡の構造……22
　第3節　Ⅰ・Ⅱ区の調査……25
　　1．調査区の概要……25
　　2．遺構……28
　　3．遺物……31
　　4．小結……37
　第4節　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区の調査……43
　　1．調査区の概要……43
　　2．遺構……44
　　3．遺物……59
　　4．小結……80
　第5節　Ⅵ区の調査……81
　　1．調査区の概要……81
　　2．遺物……81
　　3．小結……90
第4章　まとめ……92
　第1節　遺構……92
　　1．弥生・古墳時代の遺構……92
　　2．中世の遺構……94
　第2節　遺物……95
　　1．弥生時代の遺物……95
　　2．古墳時代の遺物……98
　　3．中世の遺物……101
　第3節　まとめ……103
土器観察表……105

挿　図　目　次

第１図　位置と周辺の遺跡……9・10
第２図　グリッド配置図……12
第３図　土層断面図……14
第４図　確認調査出土弥生土器……17
第５図　弥生土器拓影図……18
第６図　確認調査出土須恵器……18
第７図　確認調査出土中世土器……19
第８図　確認調査出土石器……19
第９図　周辺の地形と遺跡の範囲……23
第10図　各区配置図……26
第11図　Ⅰ区配置図……27
第12図　Ⅱ区土層断面図（東壁）……28
第13図　Ⅱ区トレンチ位置図……28
第14図　Ⅱ区全体図……29・30
第15図　Ⅱ区トレンチ土層断面図（西壁）……32
第16図　Ⅱ区包含層出土土器類……34
第17図　Ⅰ・Ⅱ区包含層出土金属製品……35
第18図　Ⅱ区包含層出土石器……36
第19図　Ⅱ区トレンチ出土弥生土器・土師器……36
第20図　Ⅱ区トレンチ出土須恵器……37
第21図　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区全体図……39・40
第22図　Ⅳ・Ⅴ区土層断面図（西壁）……41・42
第23図　竪穴住居址11・12……45・46
第24図　竪穴住居址１……47
第25図　竪穴住居址２……48
第26図　竪穴住居址３……49
第27図　竪穴住居址４……50
第28図　竪穴住居址４カマド……51
第29図　竪穴住居址６……52
第30図　竪穴住居址７・８……53
第31図　竪穴住居址７カマド……54
第32図　建物址１……55
第33図　建物址２……56
第34図　土壙１・２……57
第35図　土壙４……58
第36図　土壙５……59

第37図　竪穴住居址12出土弥生土器……60
第38図　竪穴住居址11・12出土弥生土器……61
第39図　紡錘車……62
第40図　竪穴住居址12出土石器……62
第41図　竪穴住居址11出土石器……63
第42図　竪穴住居址11出土石器……63
第43図　竪穴住居址１出土土師器……64
第44図　竪穴住居址２出土須恵器・土師器……64
第45図　鉄鏃……65
第46図　竪穴住居址３・４・６出土須恵器・土師器……66
第47図　竪穴住居址４出土石器……67
第48図　竪穴住居址７出土須恵器・土師器……68
第49図　竪穴住居址７・９出土土師器……69
第50図　竪穴住居址出土製塩土器……69
第51図　住居址７出土石器……70
第52図　竪穴住居址７出土石器……70
第53図　ピット５出土土器……72
第54図　ピット内出土土器……73
第55図　包含層出土弥生土器……73
第56図　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区出土弥生土器拓影図……74
第57図　包含層出土須恵器・土師器……75
第58図　包含層出土陶器……76
第59図　包含層出土陶磁器……76
第60図　Ⅳ・Ⅴ区出土金属製品……77
第61図　包含層出土石器……77
第62図　包含層出土石器……78
第63図　Ⅵ区トレンチ配置図……81
第64図　Ａ・Ｂ・Ｃトレンチ土層断面図（東壁）……83・84
第65図　Ｄトレンチ土層断面図（南壁）……85
第66図　包含層出土弥生土器・土師器……86
第67図　包含層出土須恵器・土師器・製塩土器……87
第68図　包含層出土瓦器・黒色土器……88
第69図　包含層出土土師器・磁器・轆……89
第70図　包含層出土鉄器……90
第71図　包含層出土石器……90

図　版　目　次

図版１　航空写真
図版２　Ⅰ区　上）全景　下）ピット群
図版３　Ⅱ区　上）全景　下）西半柱穴群
図版４　Ⅱ区　上）近世墓　下）トレンチ断面
図版５　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区　古墳時代以前の遺構全景
図版６　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区　上）土層堆積状態　下）住居址４・11・12土層断面
図版７　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区　上）竪穴住居址12　下）竪穴住居址12内土器出土状態
図版８　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区　上）竪穴住居址11　下）竪穴住居址１
図版９　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区　上）竪穴住居址２　下）竪穴住居址２内土器出土状態
図版10　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区　上）竪穴住居址４　下）竪穴住居址４カマド
図版11　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区　上）竪穴住居址３　下）竪穴住居址６
図版12　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区　上）竪穴住居址７・８　下）竪穴住居址７カマド
図版13　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区　中世の遺構全景
図版14　Ⅲ．Ⅳ．Ⅴ区　上）Ⅲ区ピット群　下）Ⅳ区ピット群
図版15　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区　上）Ⅴ区ピット群と建物址　下）建物址１（西より）
図版16　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区　上）建物１（東より）　下）Ⅴ区ピット群
図版17　Ⅵ区　上）Ａトレンチ土層堆積状態　下）Ｂトレンチ土層堆積状態
図版18　弥生時代の遺物（弥生土器）
図版19　弥生時代の遺物（弥生土器）
図版20　弥生時代の遺物（弥生土器）
図版21　弥生時代の遺物（弥生土器）
図版22　弥生時代の遺物（弥生土器文様、紡錘車）
図版23　弥生時代の遺物（石器）
図版24　古墳時代の遺物（須恵器）
図版25　古墳時代の遺物（土師器）
図版26　古墳時代の遺物（土師器）
図版27　古墳時代の遺物（土師器、製塩土器）
図版28　中世の遺物（土師器、須恵器、瓦器）
図版29　中世の遺物（土師器、陶器）
図版30　中世の遺物（土師器、瓦質土器、瓦、陶器）
図版31　中世の遺物（陶磁器）
図版32　金属製品

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

本州四国連絡道路神戸・鳴門ルートは、本州側の神戸市垂水区から、明石海峡を明石海峡大橋で渡り、淡路島を縦断して、鳴門海峡を大鳴門橋で渡って、四国側の徳島県鳴門市に至る、自動車専用のルートである。その内、兵庫県側の陸上部は神戸市内４km、淡路島内60kmに及ぶ。淡路島内は特に淡路縦貫道と通称され、７ケ所のインターチェンジが設けられる計画である。

昭和45年本州四国連絡橋公団（以下本四公団とする）が設立され、昭和47年兵庫県教育委員会（以下県教育委員会とする）に、事業概要の説明と、巾約200ｍの道路計画予定地について分布調査の依頼があった。これを受けた県教育委員会は、計画予定地を３地区に分け、分布調査を淡路考古学研究会に依頼し、昭和47・48年の２ケ年にわたって実施した。この分布調査で26ケ所の散布地が発見され、洲本市内では２ケ所という報告を受けた。報告を受けた県教育委員会は昭和49年に、本四公団、兵庫県淡路縦貫道対策室、淡路考古学研究会の立会いの下で、現地の確認を行った。そこでこの26ケ所が道路計画地内に存在していることが確認されるとともに、今後確認調査等の調査を行うことで、本四公団と県教育委員会との間で合意が成立した。

ところが途中石油ショックの影響を受け、明石海峡大橋の工事計画凍結があり、淡路縦貫道も、南半分の、津名郡津名町（津名インターチェンジ）から大鳴門橋間が先行されることになった。そこで昭和53年、用地買収等の問題が解決した、三原郡西淡町の、三原インターチェンジ予定地内にかかる淡路・志知川沖田南遺跡の確認調査が開始された。

昭和57年洲本市内の２ケ所、大森谷遺跡・寺中遺跡の調査が行われ、寺中遺跡の調査では調査地区以外に遺跡が所在すると報告された。そこで昭和58年６月に淡路考古学研究会の波毛康宏氏の協力を得て、寺中遺跡の所在する洲本インターチェンジ予定地について、分布調査を行ったところ、新たに散布地が発見された。また昭和58年に洲本市教育委員会から、市内詳細分布調査の結果が公表され、淡路縦貫道周辺でも、新たな遺跡発見が報告された。このように淡路縦貫道予定地内及びその周辺で、遺跡の発見が相次いだが、すでに洲本市域では、淡路縦貫道の工事が施行されており、工事中の不時発見という事態が予想されるため、県教育委員会は急遽、本四公団と協議に入り、洲本市域について再度分布調査を行うことで、合意した。

再度の分布調査は、昭和58年11月に行い、本遺跡も含めた８ケ所の散布地が発見された。そのため、急遽、確認調査を実施する事で、県教育委員会と本四公団が協議を行い、同年12月から、確認調査を実施した。

その結果、本遺跡で遺構が確認され、翌昭和59年１月から全面調査を開始する運びとなった。

第２節　調査の体制

昭和58年度の体制

事業内容　確認調査及び本調査

体　制　　（調査事務）社会教育・文化財課

	課長	西沢　良之
	参事	大西　章夫
	副課長	森崎　理一
	副課長	馬田　　力
	課長補佐	池田　義雄
	課長補佐兼管理係長	福永　慶造
	埋蔵文化財調査係長	櫃本　誠一
	主任	八家　　均
	技術職員	大平　　茂
（調査担当）	主任	小川　良太
	技術職員	吉識　雅仁
	技術職員	岸本　一宏
	補助員	原田　和幸
	事務員	浅井多英美
	整理作業員	山岡　仁美　木下ひふみ

昭和61年度の体制

事業内容　整理作業（水洗い・ネーミング・接着・復元・実測・トレース・写真撮影）

体　制　　（整理事務）社会教育・文化財課

	課長	北村　幸久
	参事	森崎　理一
	副課長	黒田賢一郎
	課長補佐	福田　至宏
	課長補佐兼埋蔵文化財調査係長	大村　敬通
	課長補佐兼管理係長	小西　　清
	事務職員	松本　豊彦
	事務職員	足立　彰久

技術職員　渡辺　昇

（整理担当）　主査　小川　良太

主任　吉識　雅仁

技術職員　岸本　一宏

補助員　山根実生子　社領　育代　大下　明

作業員　茨木恵美子　植田　弥生　中谷　邦子

昭和62年度の体制

事業内容　整理作業（報告書作成・レイアウト）

体　制　（整理事務）社会教育・文化財課

課長　北村　幸久

副課長　黒田賢一郎

参事　森崎　理一

課長補佐　福田　至宏

課長補佐兼埋蔵文化財調査係長　大村　敬通

課長補佐兼管理係長　山口　幸作

事務職員　松本　豊彦

事務職員　足立　彰久

主査　小川　良太

主任　岡田　章一

（整理担当）　主任　吉識　雅仁

技術職員　岸本　一宏

補助員　山根実生子　柘植美登里　大下　明

吉本　佳恵

第3節　遺跡の環境

瀬戸内海東部に浮かぶ淡路島は、東は大阪湾に、西は播磨灘に面し、南は太平洋を望む。本州側とは明石海峡で隔てられ、紀伊半島とは紀淡海峡を挟み、四国とは渦潮で有名な鳴門海峡を挟んで対峙する。大経済圏である京阪神と四国を結ぶところに位置し、現在本州四国連絡橋の一つ大鳴門橋の完成によって、四国とは陸続きとなった。

淡路島の気候は年平均気温約15.5℃（洲本市）と温暖で、年間降水量は同じく洲本市で約1550㎜と降水量も少ない[註1]。特に冬季には雨量が少ない上、山肌が海岸に迫り、貯水がしにくく、恒常的に水不足が言われる地域である。

島の地形は北部と南部で異なり、北部は六甲山地に連なり、津名丘陵と呼ばれる、大阪層群で形成された丘陵地帯である。山足がそのまま海に落ち、平野部は少ない。丘陵地帯の南端、洲本平野の北には領家花崗岩で形成された先山山系がそびえる。ただ丘陵はなだらかな上、櫛歯状の谷が深く入り込んでいるため、谷を利用して溜池が作られ、これを灌漑施設として、丘陵は水田化されている。島南部は、島南端を走る中央構造線に沿って、東西に連なる諭鶴羽山地がそびえ、山地の南斜面は急峻で、直接海に落ちる。山地は和泉層群の砂岩を中心に構成され、一部は洲本平野の中央に独立丘陵のような形に伸びている。

この両山地の交会部に僅かに平野部が広がり、分水嶺である中山峠を挟んで西に三原平野、東に洲本平野が広がっている。平野部の面積は三原平野が広く、洲本平野は淡路島第2位の広さである。

本遺跡の位置する洲本平野は、東を除く三方を山に囲まれた平野である。平野の北側には先山山塊がそびえ、その裾部には津名丘陵の南端が広がっている。この丘陵地帯は細く、深い谷が入り込み、先山からの涌水を利用した灌漑施設が発達し、現在丘陵上部まで水田化されている。平野の西から南は諭鶴羽山地に囲まれ、東だけが海に面して開けている。

洲本平野は、諭鶴羽山地に源は発し、北流した後、大きく蛇行して東流する洲本川、同じく輪鶴羽山地を源とし、北流して、洲本川の河口に注ぐ千草川等の水系に広がった平野である。地形的には、これらの河川流域に形成された沖積地と、洲本川の上流域と桶戸野川の上流域に広がる段丘とからなり、沖積地は河川の流域に巾狭く形成されているだけである。その中でも洲本川流域が最も広く、中流域から上流域にかけての付近まで広がっている。平野中央の段丘地形は、平野部のかなりの部分を占めており、段丘上は開析されて、なだらかな起伏がみられる。

また洲本平野は、淡路では遺跡の分布密度が高い地域であるが、特に洲本川の下流から中流域の北岸に集中する傾向がある。桶戸野川、千草川の流域には少なく、桶戸野川では下流域に、千草川では中流域に、僅かに分布が見られる程度である。

現在平野内には旧石器時代の遺跡は知られておらず、淡路島全体でも三原郡三原町神代で採

集された石器がある程度である。[註2] 縄文時代の遺跡も平野内には数少なく、洲本市武山遺跡・池の内大池遺跡・金屋池遺跡が知られているだけである。[註3] 武山遺跡[註4]は洲本川下流の沖積地に位置し、昭和48年に調査が行われ、前期から中期にかけての遺物を中心に、縄文時代全般にわたる土器が出土している。しかし遺構が検出されなかったことから、遺跡の中心は調査区背後の段丘上ではないかとされている。他の2遺跡は段丘上に位置し、灌漑用溜池の底で石鏃・サヌカイトが採集されている。その内容についてははっきりしない。

弥生時代の遺跡は、沖積地とその縁辺に立地するようになり、弥生時代中期後半以降には先山南麓の丘陵地帯にも位置する遺跡が現れる。弥生時代の代表的な遺跡としては先の武山遺跡と洲本市下内膳遺跡があげられ、武山遺跡[註5]は中期後半を欠くが弥生時代前期から後期にかけての遺物を出土している。遺構としては前期の竪穴状遺構、中期（Ⅱ様式）の周溝墓が検出されており、洲本川下流域の拠点的な集落と考えられる遺跡である。下内膳遺跡[註6]は洲本川中流の北岸、舌状に張り出した丘陵裾と段丘上とに位置し、小学校の体育館改築時に調査が行われている。その調査では前期新段階から後期にかけての遺物を出土し、古墳時代以降室町時代に至る遺構・遺物を出土している。洲本川中流域の拠点的な集落と見てよい遺跡であろう。その他前期の遺跡として空の谷遺跡があり、前期新段階の遺物が採集されている。[註7] 平野に望んだ山頂に立地しており、その立地は特異なものといえる。

中期以降の遺跡は、前期から継続する両遺跡のほか、比較的短期間営まれた遺跡が洲本川流域を中心に見られ、桶戸野川下流、千草川中流域にも僅かにみられる。こうしたことから中期以降、遺跡の分布は河川中流域にも拡大するといわれている。[註8] また中期後半から後期の遺跡立地の中で特徴的なのは、先山山麓の丘陵地帯に多くが立地することであろう。その立地からこうした集落遺跡を高地性集落と考えることもできるが、現在その性格を限定することは難しい。

そうした中期以降の遺跡の中で、洲本市下加茂岡遺跡、大森谷遺跡、寺中遺跡等で調査が実施されている。下加茂岡遺跡[註9]では中期後半の隅丸方形住居址と後期の円形住居址が検出されている。大森谷遺跡と寺中遺跡は淡路縦貫道に伴って調査された遺跡で、大森谷遺跡[註10]は先山南麓の丘陵上に位置し、中期末から後期初頭・後期後半の竪穴住居址が検出されている。出土遺物の中に河内産と見られる土器も含まれ、また土器には瀬戸内東部の影響も見られることが指摘されている。寺中遺跡[註11]は段丘端に位置し、中期後半の竪穴住居址・建物址、後期末の竪穴住居址と方形周溝墓が検出され、住居址と周溝墓の関連が注目される遺跡である。

また後期には、塩生産が始まることが、海浜に面した宮崎遺跡等で確認されている。[註12]

さらに淡路島は銅鐸の出土数が多い事で知られ、現在最大数をとれば、13遺跡から20口の銅鐸が出土している。[註13] その内洲本平野の周辺では緑町広田出土の扁平鈕式6区袈裟襷文銅鐸、洲本市中川原出土の菱環鈕式2区横帯文銅鐸、出土地不詳の扁平鈕式6区袈裟襷文銅鐸が知られている。

古墳時代の遺跡の内、集落遺跡として知られている遺跡は少ない。その中で下内膳遺跡[註14]は調査が実施され、前期の住居址が検出されている。遺物のなかには紀伊半島の影響がみられるようである。この時期の集落遺跡の立地は、基本的には弥生時代の集落遺跡の立地と大差ないようである。ただ後期末まで続いた先山山麓の遺跡はこの段階には終焉している。

古墳は淡路島全体でも少なく、洲本平野もその例外ではない。現在16基の古墳が知られ[註15]、その内前期とみられるものは洲本市下加茂コヤダニ古墳[註16]だけである。この古墳は淡路島で唯一の三角縁神獣鏡を出土している。調査によったものでは無いため、出土状況、古墳の構造等明らかではない。宇山牧場古墳群の2基は時期は不明であるが、その他はいずれも後期に属するものである。洲本川下流域の左岸、丘陵上に位置する下加茂岡群集墳は、円墳4基と墳形の不明な2基で構成された平野内唯一の群集墳で、内2号墳は横穴石室を内部主体とする古墳である。その他の古墳は非常に散在しており、地域内にまとまるといった傾向もみられない。その中で千草川下流域の右岸に位置する曲田山古墳は円墳[註17]で、長さ約8.4m、高さ約1.7mと淡路では比較的大規模な横穴石室を内部主体とする古墳である。

古墳については非常に少ないことは前述の通りであるが、それは丘陵地帯の水田化に伴い消失した、あるいは早く中央と結びつき、その支配下に組み込まれたということも一因と考えられる。しかし弥生時代以降の遺跡立地は、沖積地の縁辺と先山山麓の丘陵地帯であり、平野部の中央でかなりの面積をしめる段丘上は空白である。これは遺跡が現在発見されていないだけと見るよりも、地形的な面から見れば、段丘上は水田の生産力に基盤をおくような遺跡が立地し得ない地域と見るほうが妥当であろう。そうした場合洲本平野は狭小な平野となり、その生産力は古墳を多数築くようなものではなかったであろう。とはいっても丘陵地帯にまで水田開発の及んだ地域では、開墾の際に古墳が消失したことも確かであろう。

製塩遺跡は前期から中期にかけての旧城内遺跡[註18]、後期の山下町居屋敷遺跡[註19]、名子の浜遺跡[註20]等が知られている。

律令期以降淡路島全体は「淡路」一国とされ、南海道に編入されて、「下国」に位置づけられる。国府は三原平野側に置かれ、淡路は二郡に分かれて、洲本平野は津名郡に属す。津名郡には10郷が見え、その位置の推定に諸説が見られるものの、洲本平野には「津名」[註21]「物部」[註23]「加茂」「広田」の4郷が置かれたと推定されている[註22]。南海道については定説化していないが、洲本市千種、物部、宇原、大野と経由し、そこから西進して国府に至ると言う説が比較的有力な説であり[註24]、南海道の「大野駅」は洲本市大野付近に推定されている。

この時期の遺跡としては、先の下内膳遺跡[註25]と寺中遺跡が上げられる。調査でも必ずしも実体が明らかにされた訳ではないが、下内膳遺跡では奈良時代から平安時代にかけての建物址が検出され、緑釉陶器等が出土している。この他、洲本川流域を中心に、鴨根原遺跡等[註26]の散布地が、表面採集によって、明らかにされている。

淡路島での窯業生産は古墳時代後期に始まるとされているが、洲本平野では、7世紀中半頃から開始されている[註27]。洲本市庄慶陶瓦窯址[註28]は須恵器とともに硯・瓦等の生産も行われ、洲本平野では最も早く操業の開始された窯址である。これに引き続き、洲本市土生寺陶瓦窯址が8世紀前半から、新宮窯址・官林瓦窯址が8世紀後半から9世紀にかけて操業を開始している。これらの窯址は、いずれも洲本市大野付近、段丘上の起伏を利用して営まれている。したがって段丘上はこの時期まだ水田化されていなかったと思われる。

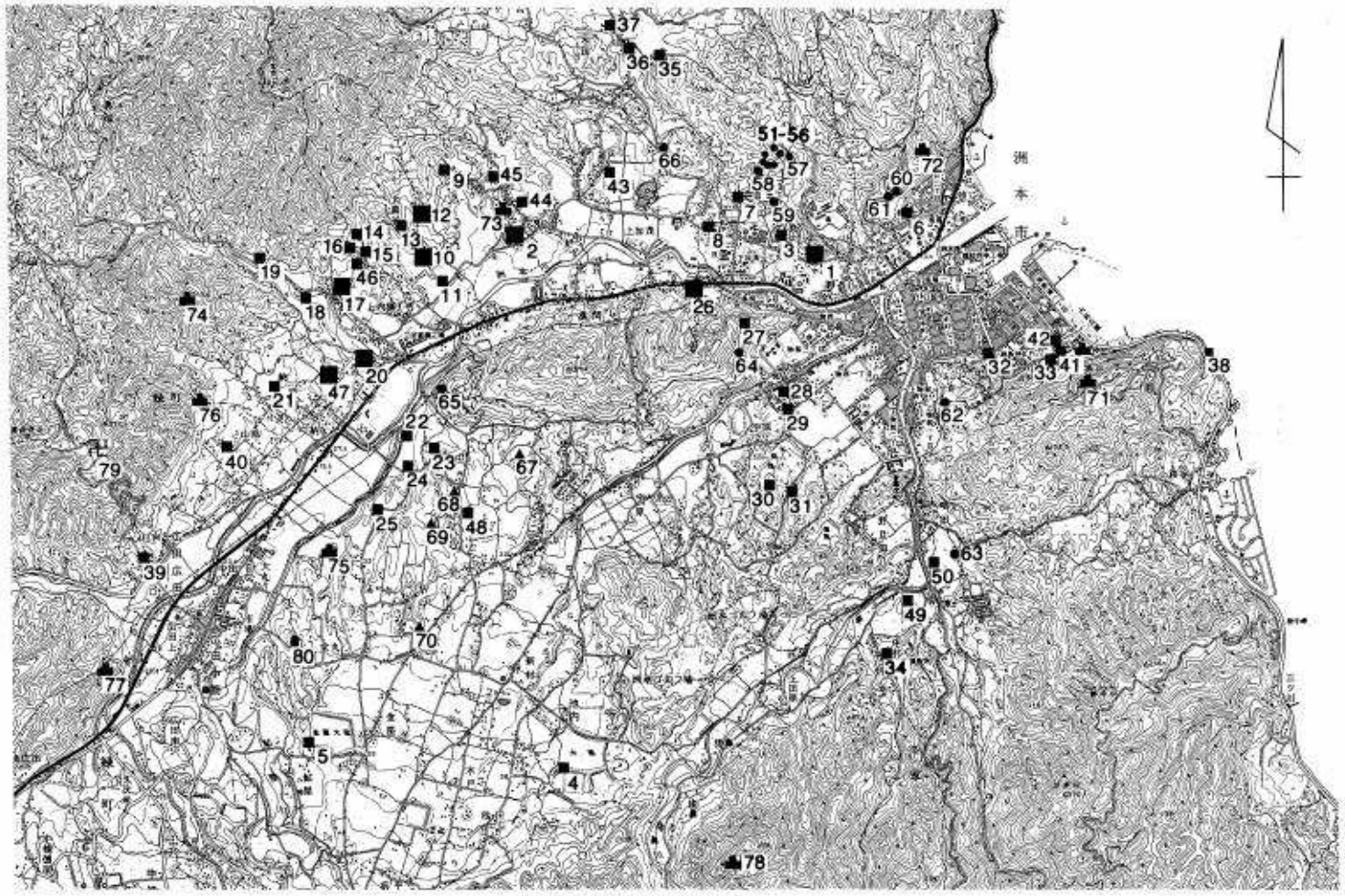
「延喜式」によれば、淡路の調の品目の一つに塩があげられ、平城宮からは塩を調として納入した付け札が出土している[註29]。したがって製塩が行われていたことは確実であろうが、しかし洲本平野部の周辺ではこの時期の製塩遺跡は確認されていない。

中世前半、淡路は一国として佐々木氏等が守護に任命されているが、阿波とのつながりが深くなる。また中世後半には細川氏が守護となり、淡路を支配するが、その居館は三原町の養宜館であったといわれている。そして細川氏が三好氏に滅ぼされると、淡路も三好氏の支配するところとなるが、一方安宅氏等淡路の国人も台頭してくる。16世紀に入ると安宅氏は洲本城、炬口城等を居城とし、16世紀後半豊臣秀吉によって滅ぼされたといわれる。その他平野を取り囲む山々には時期のはっきりしない城址が、羽風山城はじめ残されている[註30]。

中世の遺跡としては、下内膳遺跡[註31]、大森谷遺跡[註32]、寺中遺跡等[註33]があげられるが、大森谷遺跡は12世紀後半から15世紀にかけての建物址が検出され、13世紀までは魚住を中心とした遺物が出土、それ以降は備前を中心とした遺物が出土している。寺中遺跡でも15世紀代の建物址等が検出され、備前焼等の遺物が出土している。これら中世の遺跡も立地は沖積地とのその縁辺であり、平野中央の段丘上、先山山麓の丘陵は空白地帯である。おそらくこれらの地域の開発は遅れ、近世以降と思われる。

註1　洲本測候所調べ
註2　神戸新聞1986年7月16日掲載記事
註3　『洲本市内遺跡分布調査概報Ⅰ』洲本市教育委員会　1983年
註4　丹羽佑一『武山遺跡発掘調査報告』洲本市教育委員会　1974年
註5　註4に同じ
註6　下内膳遺跡発掘ニュース1～3　1978年
調査担当の浦上雅史氏の教示を得た。

註７　岡本稔「淡路弥生時代の研究―洲本川流域を中心として―」『淡路考古学研究会誌２』1974年
註８　註７に同じ
註９　新見貫次『洲本市史』洲本市　1974年
註10　別府洋二他『大森谷遺跡』兵庫県教育委員会　1985年
註11　1984年兵庫県教育委員会調査
註12　岡本稔「淡路島の土器製塩」『淡路地方史研究会会誌７』1970年
註13　種定淳介『兵庫の銅鐸』兵庫県立歴史博物館　1987年
註14　註６に同じ
註15　註３に同じ
　　『遺跡分布地図及び地名表』兵庫県教育委員会　1972年
註16　註９に同じ
註17　浦上雅史他「曲田山古墳石室実測調査報告」『淡路考古学研究会誌２』1974年
註18　田村昭治「旧城内遺跡」『淡路考古学研究会誌２』1974年
註19　岡本稔他『山下町居屋敷遺跡発掘調査報告』洲本市教育委員会　1975年
註20　註19に同じ
註21　「津名郷」については比定地が一定していないが、ここでは洲本城付近の旧津田村を比定地とする淡路草の説をとった。
註22　註９に同じ
註23　菊川兼男他『三原郡史』三原郡史編纂委員会　1979年
　　今井林太郎他『兵庫県史第１巻』兵庫県史編集専門委員会　1974年
　　註９に同じ
註24　『淡路常磐草』の説と『兵庫県史』の説があり、両説とも紀伊からの上陸地は同じ洲本市由良付近、大野駅を現在の洲本市大野付近に比定することで変わり無いが、上陸後、県史は海岸沿いに北上し、途中から山越えして、洲本市小路谷・上物部・大野に至ると考え、『淡路常磐草』は上陸後すぐ山越えして洲本市千草に出、そこから千草川沿いに北上し、物部から西進して大野に至るという説である。ここでは一応『淡路常磐草』の説に従った。
註25　註６に同じ
註26　註３に同じ
註27　浦上雅史「淡路島の古窯址出土の須恵器について」『淡路考古学研究会誌３』1980年
註28　田辺昭三「大野庄慶須恵器窯について」『淡路考古学研究会誌１』1972年
註29　菊川兼男『三原郡史』　三原郡史編纂委員会　1979年
註30　註29に同じ
註31　註６に同じ
註32　註10に同じ
註33　註11に同じ



第1図　位置と周辺の遺跡

遺跡地名表

遺跡名	時代	備考
1 武山遺跡	縄文・弥生・平安	
2 下内膳遺跡	弥生(前～後)古墳奈良・平安・中世	
3 空の谷遺跡	弥生(前)	
4 池の内大池遺跡	縄文・平安	サヌカイト・平瓦
5 金屋池遺跡	縄文	石鏃・サヌカイト
6 籠遺跡	弥生(中)	
7 下加茂岡遺跡	弥生(中・後)	
8 下加茂遺跡	弥生(中)	
9 野神遺跡	弥生・奈良	
10 大森谷里池遺跡	弥生(後)	
11 方城遺跡	弥生	
12 大森谷遺跡	弥生	
13 大森谷浜田遺跡	弥生	
14 尾筋丸山遺跡	弥生	
15 尾筋岡遺跡	弥生	
16 八夕遺跡	弥生	
17 森遺跡	弥生(中)古墳(後)平安末～鎌倉・室町	
18 大西遺跡	弥生(後)	
19 薬師遺跡	弥生(後)	
20 寺中遺跡	弥生(中・後)奈良・室町	
21 二反畑遺跡	弥生後(須恵・土師)	石鏃
22 戸狩遺跡	弥生(後)	
23 葉林遺跡	弥生(後)	
24 寺田遺跡	弥生(後)古墳(後)	
25 金屋宇山遺跡	弥生(後)	
26 尾崎遺跡	弥生(中)	
27 亀谷山遺跡	弥生(中・後)	

遺跡名	時代	備考
28 馬木遺跡A地点	弥生(中)奈良	
29 馬木遺跡B地点	弥生・白鳳～奈良	
30 太郎池遺跡	弥生(中・後)	
31 深田遺跡	弥生	
32 居屋敷遺跡	弥生(後)	
33 山下町遺跡	弥生	
34 丁遺跡	弥生	
35 三木田池遺跡	弥生	
36 清間遺跡	弥生	
37 西の下遺跡	弥生	
38 宮崎遺跡	弥生(末)	製塩土器
39 宮の筋遺跡	弥生(後)	
40 城福寺原遺跡	弥生	
41 旧城内遺跡	古墳(初・中)	
42 山下町居屋敷遺跡	古墳(後)	
43 里池遺跡	奈良	
44 追下池遺跡	古墳(後)奈良・平安	
45 西の森遺跡	平安	
46 向上遺跡	奈良	
47 鴨模原遺跡	奈良	
48 野上遺跡	奈良	
49 中村遺跡	弥生・奈良	
50 明田遺跡	奈良	
51 下加茂岡1号墳	古墳(後)	
52 下加茂岡2号墳	古墳(後)	
53 下加茂岡3号墳	古墳(後)	
54 下加茂岡4号墳	古墳(後)	

遺跡名	時代	備考
55 下加茂岡5号墳	古墳(後)	
56 下加茂岡6号墳	古墳(後)	
57 下加茂コヤダニ古墳	古墳(前)	
58 宇山古墳	古墳(後)	
59 下加茂岡古墳	古墳(後)	
60 宇山牧場1号墳	古墳	
61 宇山牧場2号墳	古墳	
62 曲田山古墳	古墳(後)	
63 明田丸山古墳	古墳(後)	
64 亀谷古墳	古墳(後)	
65 先山古墳	古墳(後)	
66 ババの森古墳	古墳(後)	
67 庄慶陶瓦窯跡	白鳳～奈良	
68 土生寺陶瓦窯跡	奈良(前)	
69 新宮窯跡	奈良(後)	
70 宮林瓦窯跡	平安	
71 洲本城址	戦国末～近世	
72 炬口城址	戦国末	
73 安宅館跡	戦国末	
74 羽風山城址		
75 勝間城跡		
76 山添城址		
77 広田城址		
78 大河内城址		
79 大宮寺城址		
80 伝堂丸銅鐸出土地		

第２章　確認調査

第１節　調査の方法と経過

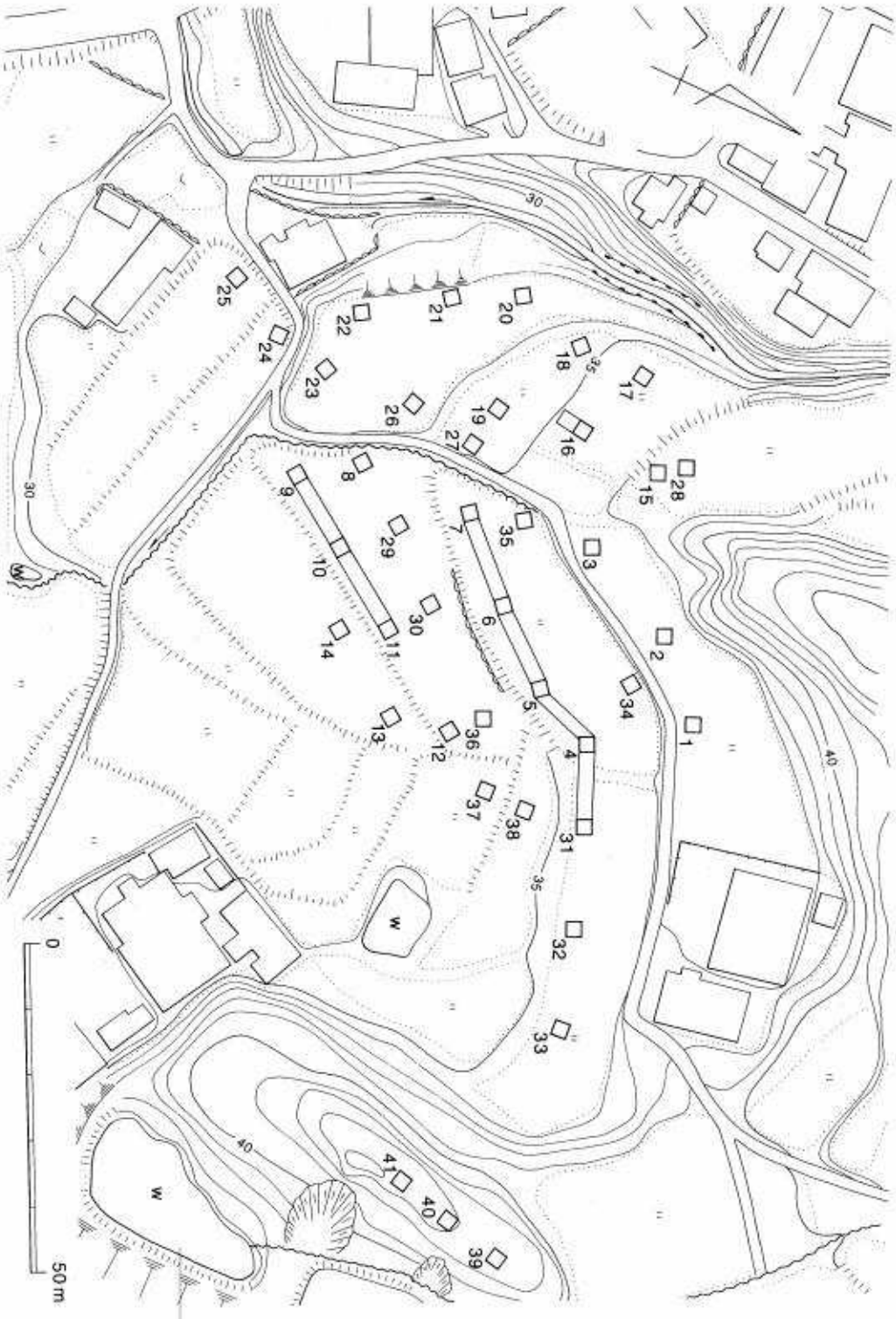
調査区の東西は先山からの流水によって形成された、深く、細長い開析谷に画され、調査区の東端は先山から伸びてくる尾根から派生した小支尾根上にあたる。調査区の中央から西端は、調査区北側の尾根裾の段丘上にあたり、調査区中央には小さな谷筋が入り込んでいる。調査区の現状は東端の尾根を除いて水田化され、階段状の水田となっている。

先の分布調査では、段丘上の水田を中心に遺物が採集され、一部東端の尾根でも採集されている。

こうした調査区の地形と分布調査の結果から、遺存状況は必ずしも良いものと考えられなかった。そこで確認調査にあたっては、まずグリッドを粗く設定し、とりあえず遺構と包含層の有無の確認を行うことにした。また遺構等が確認された場合は、必要に応じグリッドを追加したり、トレンチによる調査に切りかえるという方法を取った。

調査は昭和58年12月１日、段丘上の水田部より開始した。開始早々、１・２・４・７グリッドで柱穴が確認され、９・10・11グリッドでは柱穴と包含層が確認された。また16・18・19・20～21グリッドでは包含層だけが確認され、遺跡の存在が確実となり、遺構も遺存していることが明らかになってきた。

そこで当初予定の28ケ所のグリッド調査が終了した12月10日からは遺跡の範囲確認のための調査に移った。まず４グリッドと７グリッド間の５・６グリッドでは遺構が検出されなかったため、この間に巾２ｍのトレンチを設定し、４グリッドの遺構の広がりを確認するため、このトレンチを31グリッドまで延長した。９～11間でも遺構の繋がりを確認するため巾２ｍのトレンチ調査を行った。その他16グリッドも包含層下の遺構を確認するため、グリッドを拡張した。またその他の地区では、グリッド間を埋めるように新たに、２ｍ方角のグリッドを設定して、調査を行った。その結果、２ｍ方角のグリッド41ケ所、巾２ｍのトレンチ２本（延長約64ｍ）、調査面積約292㎡となり、12月24日に調査は終了した。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
30
35
40
W
0
50m

第2図　グリッド配置図

第2節　調査の概要

調査の結果から遺跡全体を、15グリッド～28グリッド、3・5～14・29・30・34～36グリッド、1・2・4・31～33・37・38グリッド、39～41グリッドの4地区に分ける事が可能である。

15～28グリッド

この地区は段丘上の西斜面にあたる地区で、北側から張り出した尾根裾から調査区西側の谷に向けて、かなり急激に落ち込み、階段状の水田が開かれ、大きく削平を受けた地区である。

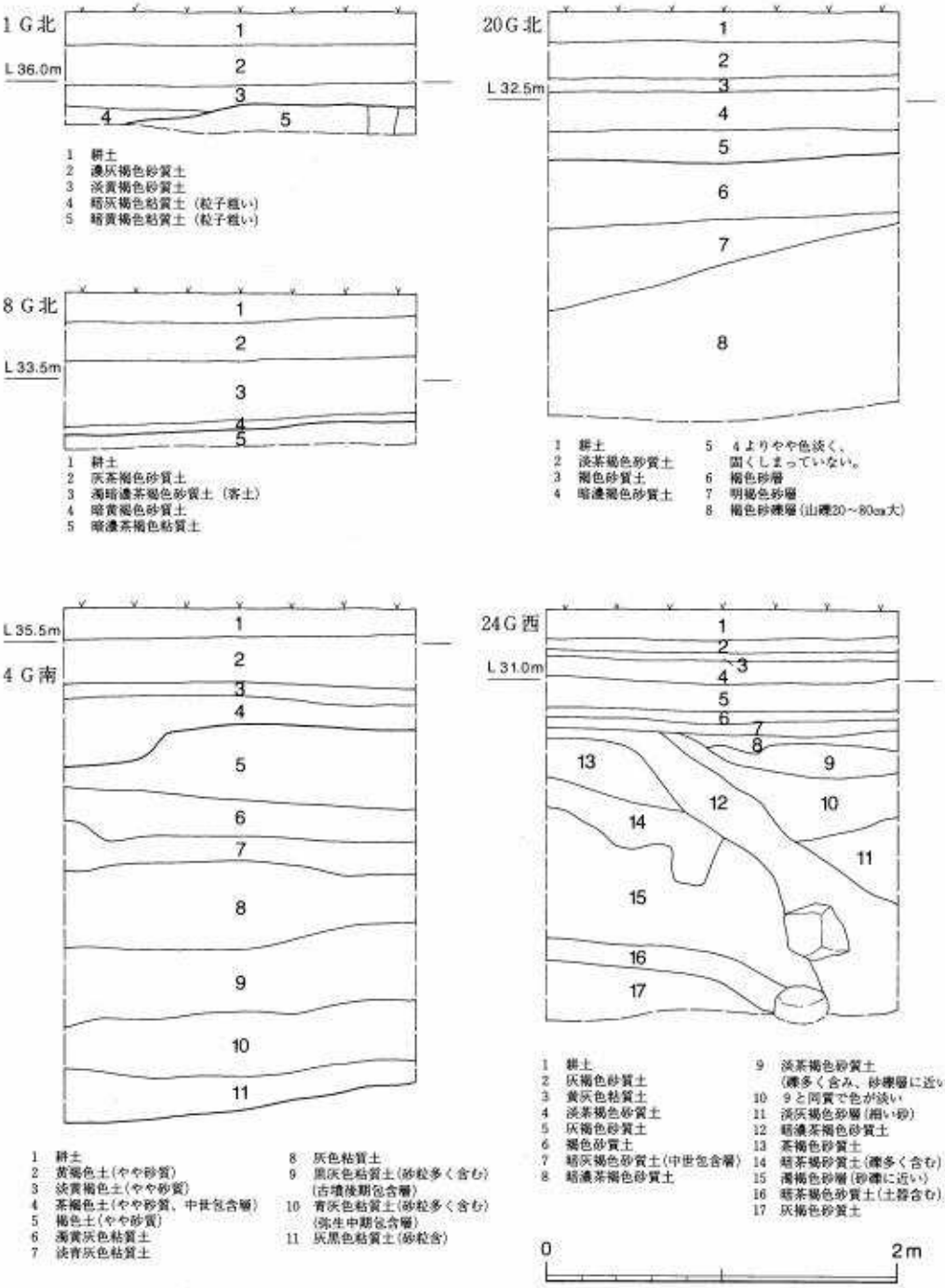
そのため水田の中央よりに設定した26～28グリッドでは耕作土直下で、遺構面にあたる黄褐色シルトが検出された。しかし遺構は、全く検出されなかった。

ただ水田の斜面下方側畦畔よりに設定した16～23グリッドでは黒褐色の包含層(1)が検出された。16～19グリッドでは黄褐色シルト直上から検出され、その内部から13世紀代の瓦器椀が出土している。この包含層は20～23グリッドでも確認されているが、20～23グリッドでは、この包含層下に、完形に近い須恵器杯等、6世紀代の遺物を含む同色の包含層(2)が確認された。包含層(2)は西側の谷に向かって急激に落ち込み、かなり大きな自然石も含んでいる。また20～23グリッドでは包含層(2)の下層である、黄褐色砂層（包含層3）から弥生時代後期の土器が出土した。この包含層(3)は24・25グリッドでも検出され、両グリッドでは弥生時代後期の土器に混じって、弥生時代中期の土器も出土している。ただこの層には、1ｍもある自然石が多量に含まれており、相当な勢いで谷の上流から流されてきたものと思われる。

3・5～14・29・30・34～36グリッド

調査地区北側の尾根裾から、舌状に伸びて来る段丘の東南斜面にあたる地区である。7～11・29・30グリッド・7～11グリッドを繋ぐトレンチでは、柱穴と竪穴住居址と思われる方形土壙の一部が検出された。3・34・35・5・6・36・12～14グリッドでは耕土直下に遺構面である黄褐色シルトが検出されたが、遺構は確認されなかった。また遺構の検出された4・7グリッド間はトレンチ調査を行ったが、遺構は検出できなかった。付近の34・35グリッドでも遺構は検出できなかったことから、4・7グリッド間に遺構の遺存する可能性は少ない。ただ12～14グリッド付近は、地形や9・11グリッド間のトレンチの状況から、遺構の遺存している可能性が高く、面的な調査を行えば遺構が検出されるものと思われる。またこの地区では包含層は確認できず、遺構面直上に耕土あるいは旧耕土が堆積していた。

検出された遺構は、表面観察に止めたため、詳細な性格・時期については不明であるが、包含層から出土する遺物からみて、古墳時代後期・平安時代末～鎌倉時代のものと思われる。


1 G北
L 36.0m
1 耕土
2 濃灰褐色砂質土
3 淡黄褐色砂質土
4 暗灰褐色粘質土（粒子粗い）
5 暗黄褐色粘質土（粒子粗い）
8 G北
L 33.5m
1 耕土
2 灰茶褐色砂質土
3 濁暗濃茶褐色砂質土（客土）
4 暗黄褐色砂質土
5 暗濃茶褐色粘質土
20 G北
L 32.5m
1 耕土
2 淡茶褐色砂質土
3 褐色砂質土
4 暗濃褐色砂質土
5 4よりやや色淡く、固くしまっていない。
6 褐色砂層
7 明褐色砂層
8 褐色砂礫層（山礫20～80cm大）
L 35.5m
4 G南
1 耕土
2 黄褐色土（やや砂質）
3 淡黄褐色土（やや砂質）
4 茶褐色土（やや砂質、中世包含層）
5 褐色土（やや砂質）
6 濁黄灰色粘質土
7 淡青灰色粘質土
8 灰色粘質土
9 黒灰色粘質土（砂粒多く含む）（古墳後期包含層）
10 青灰色粘質土（砂粒多く含む）（弥生中期包含層）
11 灰黒色粘質土（砂粒含）
24 G西
L 31.0m
1 耕土
2 灰褐色砂質土
3 黄灰色粘質土
4 淡茶褐色砂質土
5 灰褐色砂質土
6 褐色砂質土
7 暗灰褐色砂質土（中世包含層）
8 暗濃茶褐色砂質土
9 淡茶褐色砂質土（礫多く含み、砂礫層に近い）
10 9と同質で色が淡い
11 淡灰褐色砂層（粗い砂）
12 暗濃茶褐色砂質土
13 茶褐色砂質土
14 暗茶褐色砂質土（礫多く含む）
15 濁褐色砂層（砂礫に近い）
16 暗茶褐色砂質土（土器含む）
17 灰褐色砂質土
0
2m

第3図　土層断面図

1・2・4・31～33・37・38グリッド

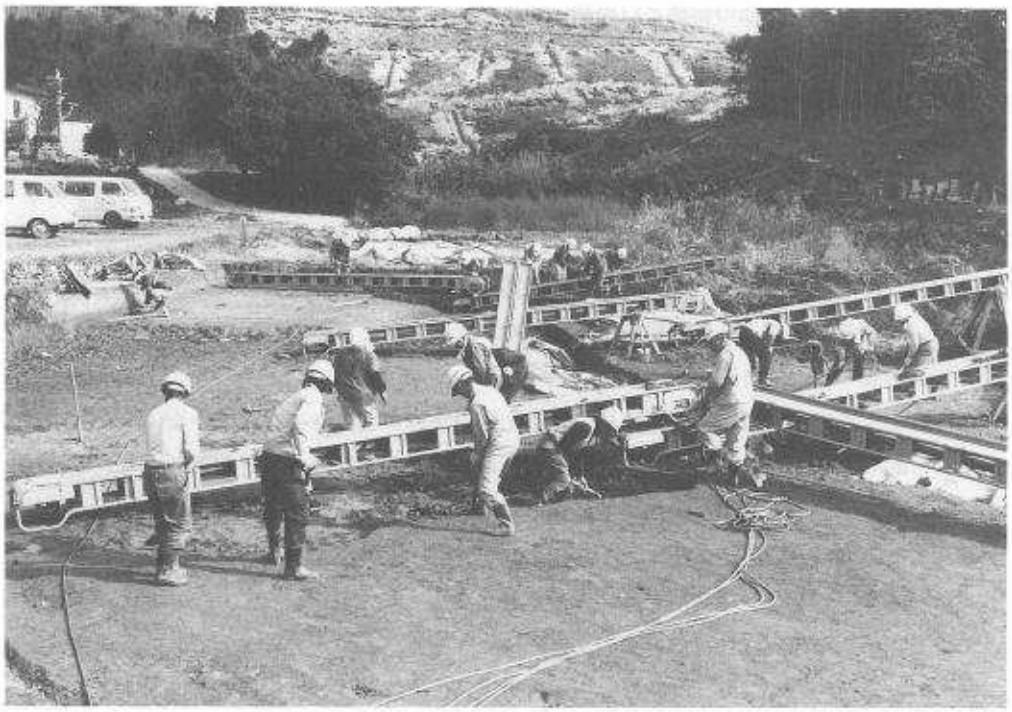
調査区から開けた谷部にあたる地区で、調査区内は谷の末端にあたる。4グリッドとそこから東に伸ばしたトレンチでは、谷がほぼ埋まりきった後に営まれた、柱穴・土壙等の遺構が検出された。他のグリッドでは遺構等は検出されなかった。遺構面を覆う土層からは鎌倉時代～室町時代の遺物が出土しており、先の段丘南東斜面にあたる地区で検出された遺構より、新しくなるものと思われる。

また谷部の肩から落ち際にあたる4グリッドでは、鎌倉～室町時代の遺構面下に6世紀代の包含層が確認され、37グリッドでも同様の包含層が確認された。さらに4グリッドの最下層からは弥生時代中期の土器が出土している。

39～41グリッド

調査区東端の尾根上にあたる地区で、3グリッドともに、表土直下に、所謂地山である黄褐色の砂を多く含むシルトが検出されている。

ただ遺構・遺物等は全く検出されなかった。



調査風景

第3節　遺物

今回の確認調査では、遺構を検出するだけに止めたため、遺物はすべて包含層からの出土である。出土遺物には弥生時代の土器類と石器、古墳時代後期の土器類、平安時代～鎌倉時代、室町時代の土器類等があるが、量的には少ない。

弥生土器（第4・5図）

調査区西側の谷に面した、17～19・21・23・24グリッド、調査区中央付近の谷部にあたる、4グリッドとそこから東に延長した、4・31グリッド間のトレンチから出土している。

1～3・6は24グリッド、5は4グリッドの最下層から出土、8は19グリッド、9は21グリッド、10・14は17グリッド、11は23グリッド、12・13・15は18グリッド出土である。

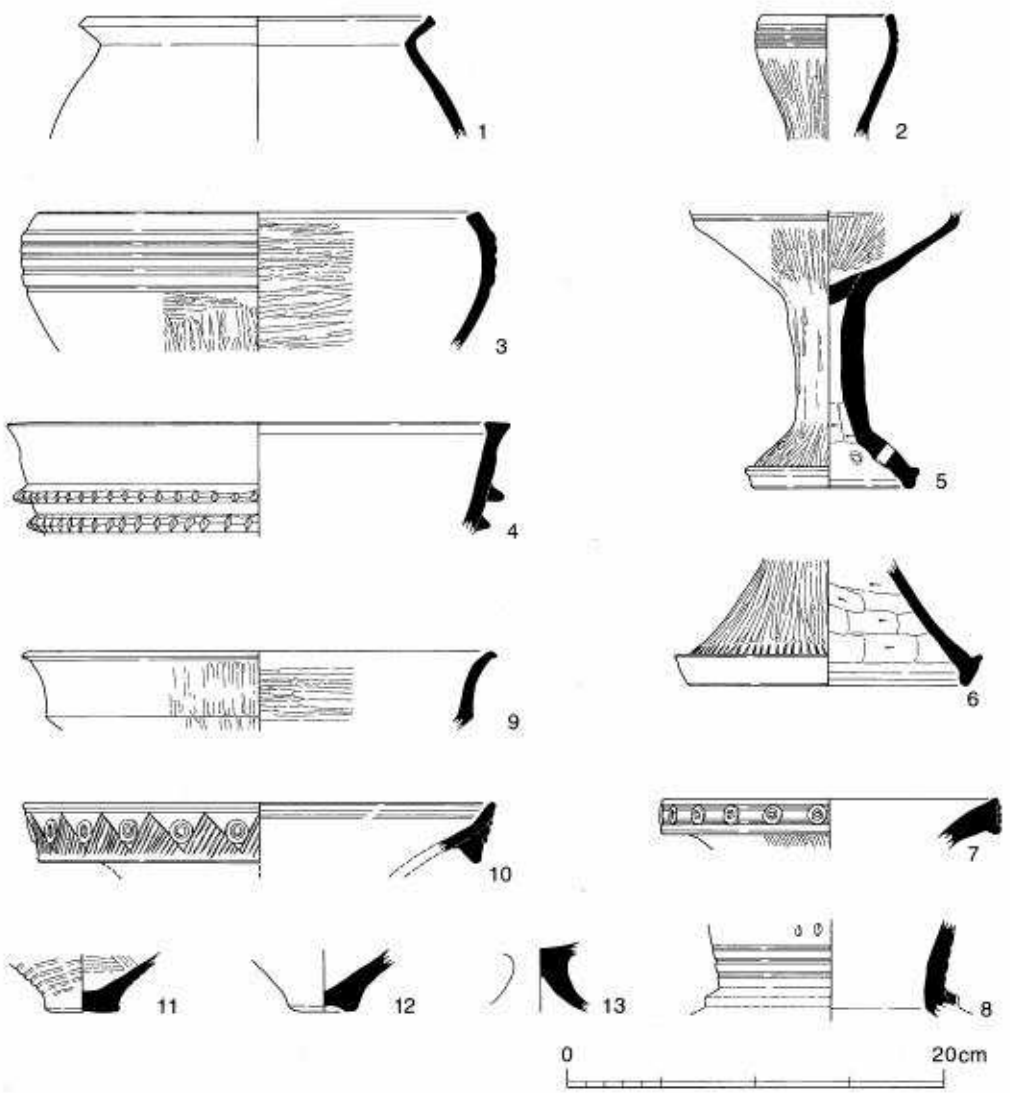
1は口縁端部を上方に摘み上げた甕の口縁部から肩部にかけての破片である。2は口縁下に凹線文が施された、細頸壺の口縁部である。3・4は鉢の口縁部で、3は口縁下に4条の凹線文を、4は刻みを入れた2条の張りつけ凸帯が施され、口縁部外面には櫛描波状文が施されている。5・6は高杯であるが、脚端部を上方に拡張し、6は脚裾部に刺突文が施されている。5は口縁部を欠くが、杯部の体部と口縁部との境界には1条の凹線を入れている。おそらくほぼ直立する口縁を有するものと思われる。この他壺形土器の肩部から胴部に櫛描き文を有する14・15がある。14は櫛描簾状文と斜格子文の組合せである。

7は口縁端面に凹線を施した後、円形浮文を張りつけた壺の口縁部片である。8は壺頸部の破片であるが、頸部と肩部の境には凸帯を張りつけ、頸部には三条の凹線と竹管文を施す。9は直立した後、大きく外反する高杯の口縁部片で、内外面を篦磨きする。10は器台か壺の口縁部で口縁の外面には鋸歯文を施し、その間に円形浮文を張りつける。装飾性に富んだ土器である。11・12は甕の底部で、11は外面を粗い叩きで、内面を刷毛で調整している。13は高杯脚部片で脚柱部の短いものである。

これら弥生土器の位置づけは、淡路島の弥生土器の実態が明らかになっていない現在、困難である。しかし1－6は文様構成、形態等の特徴から、畿内第Ⅳ様式併行期と考えられる。

7～13のうちは、7・9には畿内第Ⅴ様式でも古い様相が見られ、10～13は同様式中でも新しい様相を持っており、若干時間的な差があるものかもしれない。しかし全体的な量が少なく、ここでは一応9～15を一つの時期と考えておく。

この7～13の土器の内、10は口縁部の文様に特徴がある。この土器のように装飾性に富んだ壺、あるいは器台の口縁部は、淡路では洲本市の大森谷遺跡、寺中遺跡、三原郡西淡町の谷町筋遺跡等で出土しており、長頸壺等は伴っていない。逆に長頸壺が見られる西淡町鉾田遺跡では、こうした装飾性の強い土器は見られない。また谷町筋遺跡、鉾田遺跡から出土した布留式土器の中にも見られない。そこで、ここではこうした装飾性の強い土器を一応、Ⅴ様式後半から庄



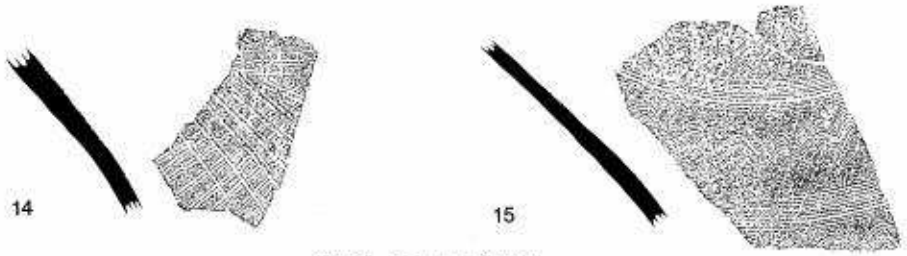
第4図　確認調査出土弥生土器

内式にかけての段階に、併行するものと考えておきたい。

石器（第８図）

礫石錘と剥片がある。礫石錘は灰白色を呈する片岩製の扁平な自然礫の一端に、打ち欠き部の形成が認められる。他端を欠損するため断定はできないが、残存する打ち欠きが両面から複数回施されており、偶然による欠損とは考えがたいため、礫石錘としておきたい。現存長5.0cm、幅4.5cm、厚さ0.7cm、重さ29.5ｇを測る。

剥片は長さ6.0cm、幅5.4cmを測る。大型・幅広のサヌカイト製縦長剥片である。全体に風化・



第5図　弥生土器拓影図

転磨が著しく、灰白色を呈する。

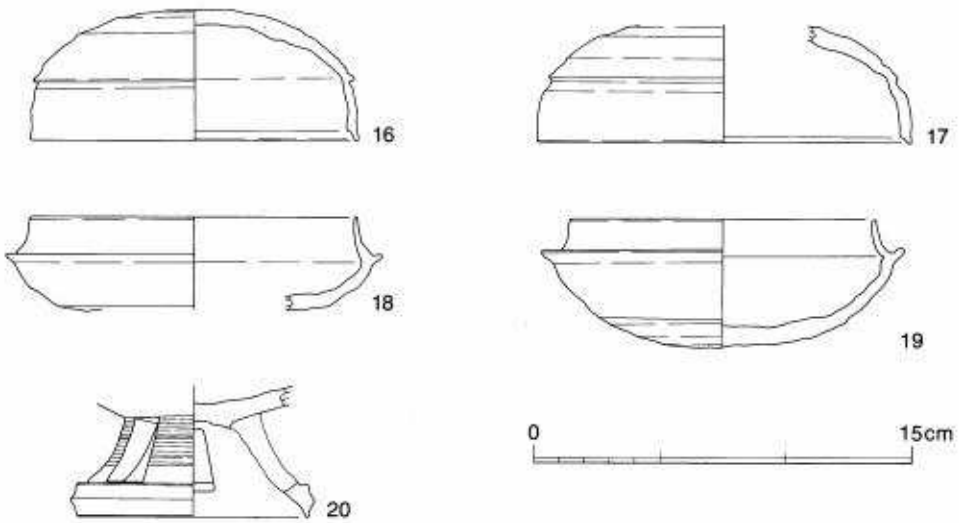
須恵器（第６図）

16・19・20は21グリッド、17は９－10間トレンチ、18は37グリッドから出土している。

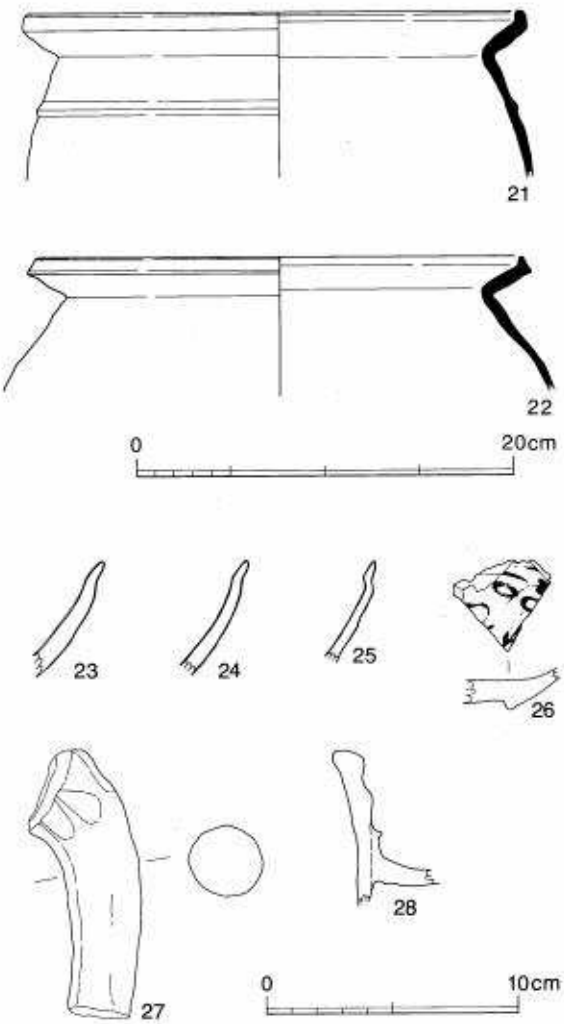
16・17は杯蓋で、16は天井部と体部の境界に明瞭ではあるが、鈍い稜を持ち、口縁内面には段を有する。しかし天井部の篦削りは体部の１/２に止まる。17は天井部と体部との間は段となり、口縁内面は不明瞭な段を有する。篦削りは体部の１/２。

18・19は杯身であり、口縁部は内傾して立ち上がる。両方とも体部の篦削りは比較的丁寧ではあるが、体部の１/２に止まる。18は口径に対して深さは浅く、19は口径に対して深さは深い。20は短脚高杯の脚部で、三方に長方形の透し孔を持つ。脚端部に段を有し、脚外面の上半部はカキ目調整している。

これらの須恵器類には多少時間的な幅が認められ、16・19・20は田辺編年のＴＫ47－ＭＴ15型式に、17・18はＴＫ10型式に比定できるものと思われる。



第6図　確認調査出土須恵器



第7図　確認調査出土中世土器

中世の土器（第７図）

この時期の遺物は調査区の全体から、土師器小皿・甕、須恵器椀、瓦器椀、輸入陶磁器類、国産陶磁器類が出土しているが、小片が多く、図化出来た物は少ない。

21・22は土師器の塝で、21は27グリッド出土、22は20グリッド出土のものである。21は口縁端部を上方に摘み上げ、肩部に乱雑な張りつけ凸帯をめぐらす。22も口縁端部を上方に摘み上げている。21・22ともに器壁は薄く、胎土に雲母を含む。調整は粗い。

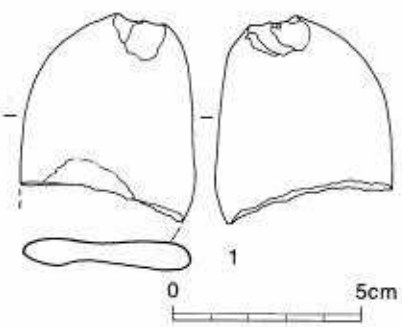
28は瓦質の羽釜で、口縁部は段状となり、口縁端部を内側に拡張している。27グリッド出土。

27は土師器塝の脚で、４～31グリッド出土。

23～26は陶磁器類で、23～25は天目椀である。23は釉に光沢がなく、ハゲた状態になっている。おそらく国産の物であろう。25は釉に光沢があり、形態からみても、輸入品と思われる。24については国産品か輸入品かの区別はつかない。

26は染付け碗の底部であるが、内面の文様構成ははっきりしない。底部は削り出しており、輸入品であろう。

以上が主なこの時期の遺物であるが、大略、21・22・27・28の示す12世紀末～13世紀前半、25の示す14世紀前半、23・24・26の示す16世紀の３時期に分けられる。



第8図　確認調査出土石器

第4節　まとめ

以上が確認調査の概要であるが、これを要約すると

① 確認された遺構としては、柱穴、住居址と思われる方形土壙の一部等がある。

② これらの遺構は4グリッド周辺と7～14・29・30・36グリッドの周辺の2地区にわかれて検出されている。

③ この他17～25グリッドの範囲では包含層が確認され、特に谷の縁辺にあたる地区では、包含層も厚く、古墳時代後期の土器を中心に、比較的良好な状態の土器を含んでいる。

④ 包含層からの出土遺物には、弥生時代中・後期の土器、古墳時代後期の土器、鎌倉時代から室町時代にいたる土器があり、鎌倉時代から室町時代にかけての土器は、12～13世紀前半、14世紀前半、16世紀の3時期のものがある。

⑤ したがって検出された遺構の年代も、5～6時期が考えられるが、個々の遺構の年代は、未調査であるため、特定できない。ただ住居址と考えられる方形土壙は弥生時代中・後期のものか古墳時代後期、柱穴については鎌倉時代から室町時代のものと思われる。

⑥ 4グリッド周辺で検出された遺構は谷の埋没後に営まれたものであり、遺構面を覆う包含層からは室町時代（14・16世紀）の土器が出土している。したがってこの付近の遺構は土器の示す年代に近い物と思われる。

個々の遺構の年代については、必ずしも明らかにしていないが、本遺跡は5～6時期にまたがる集落遺跡であり、遺構の遺存が確認された、7～14・29・30・36グリッド周辺と4グリッドの周辺については、本格的な調査が必要であろう。また比較的良好な包含層が確認された調査区西端の、谷に面した地区についても、何らかの調査が必要と考える。

第3章　本調査

節1節　調査の経過

本調査は、確認調査に引き続き、年明け早々の昭和59年1月5日より開始した。確認調査で遺構の検出された、4グリッド周辺と7～14・29・30グリッド周辺は全面にわたる調査、谷に面して比較的良好な状態の包含層が確認された地区については、遺物採集を行うための、トレンチ調査とした。また4グリッド周辺の調査区は遺構面の下層から、弥生時代中期・古墳時代後期の土器が出土していることから、この地区の遺構調査が終了後にトレンチ調査によって、遺物採集を行うことにした。

調査にあたっては、調査区を水田一筆毎に分け、北東側の水田より、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区と呼ぶことにした。4グリッド周辺の調査区は、道の北側をⅠ区、南側をⅡ区と呼び、また7～14・29・30グリッド周辺の調査区と7グリッド周辺をⅢ区、81～14グリッドの周辺の田をⅣ区と呼ぶことにした。ただトレンチ調査を行う地区については、全てⅥ区とした。

またすでに、本四公団によって、道路建設工事が開始されており、遺跡の調査も急を要をした。そこでⅠ～Ⅳ区の調査は、確認調査で包含層が確認されなかったことから、遺構面である黄褐色土層まで、重機を使って掘り下げ、遺構面の精査、遺構の掘削は人力で行った。ただⅥ区のトレンチ調査は、表土だけを重機によって除去した。

こうして調査にかかったが、調査開始後まもなく、本四公団から、道路建設の関連事業として、Ⅳ区南の水田の基盤整備を実施する計画で、調査を実施して欲しい旨の依頼があった。そこで今回、合わせて実施することになり、この地区をⅤ区として調査を実施した。ただこの地区では包含層が認められ、包含層上面とその下層の黄褐色土層上面に遺構が認められた。しかし包含層上面の遺構は埋土が包含層と似通っており、ここでの遺構検出は難しいと判断され、また調査期間の都合もあって、包含層除去後の黄褐色土層上面で下層の遺構とともに検出にすることにした。

Ⅰ・Ⅱ区の調査は遺構も少なく、比較的容易で、1月26日には遺構面の調査が終了し、遺物採集を目的としたトレンチ調査は2月4日終了した。

Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区の調査は竪穴住居址が、調査面積の割りには多く検出され、時間が当初予定よりもかかり、この地区の調査が終了したのは、2月20日であった。

第2節　遺跡の構造

遺跡はすでに述べた通り、寺中遺跡の位置する段丘・丘陵、尾筋と呼ばれる丘陵とに挟まれ、谷の最深部に小さく張り出した所に位置する。地形的には先山山麓に広がる丘陵地帯の裾にはりつく、段丘上にあたる。この段丘は遺跡付近では扇状地状となり、背後の丘陵裾から、遺跡の眼前に広がる沖積地に向かって傾斜をしている。段丘と沖積地との変換点には段丘崖といったものは見られない。また段丘裾の沖積地には、洲本川の支流である奥畑川が形成したと思われる、旧河道が見られ、その南には自然提防状の微高地が見られる。

遺跡は、北は背後の丘陵まで、東は尾筋西側に入り込んだ谷まで、西側は現集落の東に入り込んだ谷、南は旧河道までの間に広がる。洲本市の実施した分布調査では、旧河道南側の微高地上にも遺物の散布が認められているが、間に旧河道が入り、立地する地形も異なるため、ここでは一応別の遺跡としておく。

遺跡地は、ほぼ中央に南北方向の浅い谷が入り込み、遺跡は東西に二分された状態となっている。段丘上ではあるが、南にかなり傾斜しているため、現状は階段状の水田となっている。

今回の調査対象地は遺跡の奥側、背後の丘陵裾部にあたり、遺跡全体のほぼ1/3を占める。その中で、Ⅰ・Ⅱ区は遺跡の中央に入り込んだ谷の深部にあり、谷が埋没後14・16世紀の遺構が検出されている。またⅢ・Ⅳ・Ⅴ区は遺跡西半に尾根状に細長く伸びた段丘上の北半にあたる地区で、東向きの斜面から弥生時代中期・古墳時代後期・鎌倉時代・室町時代の遺構が検出されている。Ⅵ区では遺構は検出されていないが、弥生時代中期～後期・古墳時代後期・鎌倉時代・室町時代の包含層が確認された。

さて弥生時代中期階段の遺跡の状況は、Ⅲ～Ⅴ区で住居址が黄褐色土層上から検出されており、この地区では黄褐色土層上面が生活面であったことが窺える。しかしⅠ・Ⅱ区では谷を埋める堆積土の最下層にあたる、濃灰色土層からこの時期の遺物が出土しており、谷はまだほとんど土層の堆積が発達しない段階であったと思われる。この段階の谷の深さはⅡ区付近では約4.0mを測る。またⅥ区では最下層の大きな岩石を含む砂層から、この時期の遺物が出土し、調査区西側の谷は現状より広く、大きな石がゴロゴロした谷であったものと思われる。

弥生時代後期段階は今回の調査では遺構が検出されておらず、集落移動があったものと思われる。ただⅥ区では包含層だけが確認されており、背後の丘陵上等に集落遺跡の存在が考えられる。

古墳時代後期段階にはⅢ～Ⅴ区の東斜面に竪穴住居址が検出され、居住空間としては弥生時代と変りがない。ただⅡ区の谷は埋まり始め、この時期にはほぼ半分近く埋まっていたようである。しかし埋土からみると、谷の埋まりかたは急激なものではなく、ゆっくりしたものであったと思われる。Ⅵ区の谷もこの時期の包含層が堆積して、幅が狭くなり、調査区内の谷東肩は

第9図　周辺の地形と遺跡の範囲（網目の細い部分が調査範囲）

この時期の包含層で埋まってしまっている。

平安時代－鎌倉時代にかけての時期においても、居住空間はⅢ－Ⅴ区よりひろがることはなかったようで、この時期の遺構が検出されるのはこれらの地区に限られている。しかしⅢ－Ⅴ区では、斜面下方側の地区で包含層が認められ、この時期の遺構の一部はその上面から検出されている。斜面上方側では包含層は認められず、弥生・古墳時代の遺構と同一面で検出されている。おそらく斜面上方側については遺跡地の開田が行われた際に、削平を受けたものと思われる。またⅠ・Ⅱ区の谷はⅢ区の遺構面である黄褐色土層と同じレベルまで、ほぼ完全に埋まりきってしまったようである。Ⅵ区の谷東肩も完全に埋まり、この時期の包含層はほぼ水平に堆積している。この時期に水田化される前の地形がほぼできあがったものと思われる。

室町時代の段階になると、居住空間はⅢ－Ⅴ区から広がり、谷の埋まりきったⅡ区にも進出している。しかしⅡ区東の谷は依然存在しており、ここは居住空間として利用はされていない。またⅥ区の背後については、急傾斜のためか、居住空間としてはこの時期になっても使用されていない。

近世以降、遺跡地は居住空間として利用されることはほとんど無く、水田化されていったものと思われる。その際には傾斜上方を削り、斜面下方に突き出して行われたようである。Ⅲ～Ⅴ区の斜面下方にあたる地区では、包含層上に盛土が、斜面上方にあたる地区では旧耕土以外には盛土といった物は認められていない。したがって斜面上方側にあたる地区では、遺構は大きく削平を受け、特にⅢ区とⅣ区の間にある段下では遺構は全く検出されなかった。

ここでは一応調査地区内での、居住空間と地形の変化、とくに居住空間とⅡ区の谷の変化について記したが、今回の調査は道路予定地内という制約があり、遺跡全体の1/3程度を調査したに過ぎない。したがって森遺跡全体の構造等の解明は今後の調査に期待したい。

第3節　Ⅰ・Ⅱ区の調査

1　調査区の概要

Ⅰ区

Ⅰ区は北側からのびてくる小支丘の東側にあたり、各調査区のなかで最も高い所に位置し、調査面積は最も小さく、約110㎡である。基本土層は上から順に第1層耕土、第2層濃黄褐色砂質土、第3層淡黄褐色粘質土、第4層暗黄褐色粘質土と続く。第4層は遺物包含層となっており、部分的に灰褐色粘質土がその上に堆積している。第4層より下は明黄褐色粘質土、淡褐灰色粘質土、暗灰色粘質土が斜めに重なるように堆積しており、この上面が遺構面となっている。遺構面は西から東に向かって傾斜しており、西端隅付近では岩盤が露出していた。

検出した遺構は柱穴10個と近世墓と考えられる土壙4基である。柱穴は建物址として組みあうものはなかったが、中に礫を多く詰め込んだものを1個検出した。柱穴の深さは平均約30cmで、暗青灰色粘質土や明黄色粘質土を埋土としていた。土壙は平面円形を呈し、深さ約40cmで先にも述べたように近世墓と考えられる。

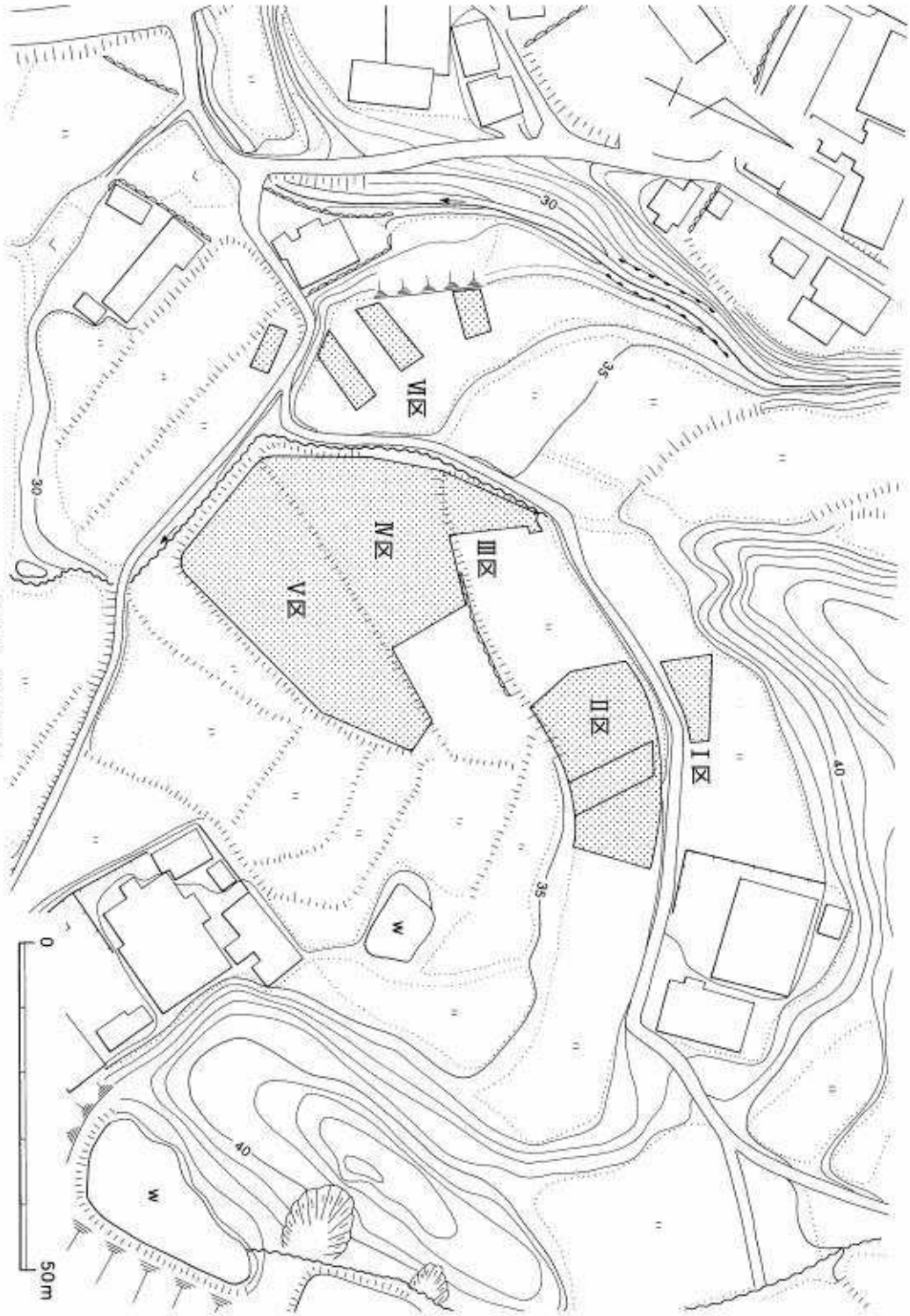
遺構内より若干の遺物が出土したが、いずれも細片で、時期等は不明で図示もできなかった。また包含層からも若干の須恵器・土師器が出土したが図化できたのは陶器1点のみであった。なお、鉄器が1点出土している。

Ⅱ区

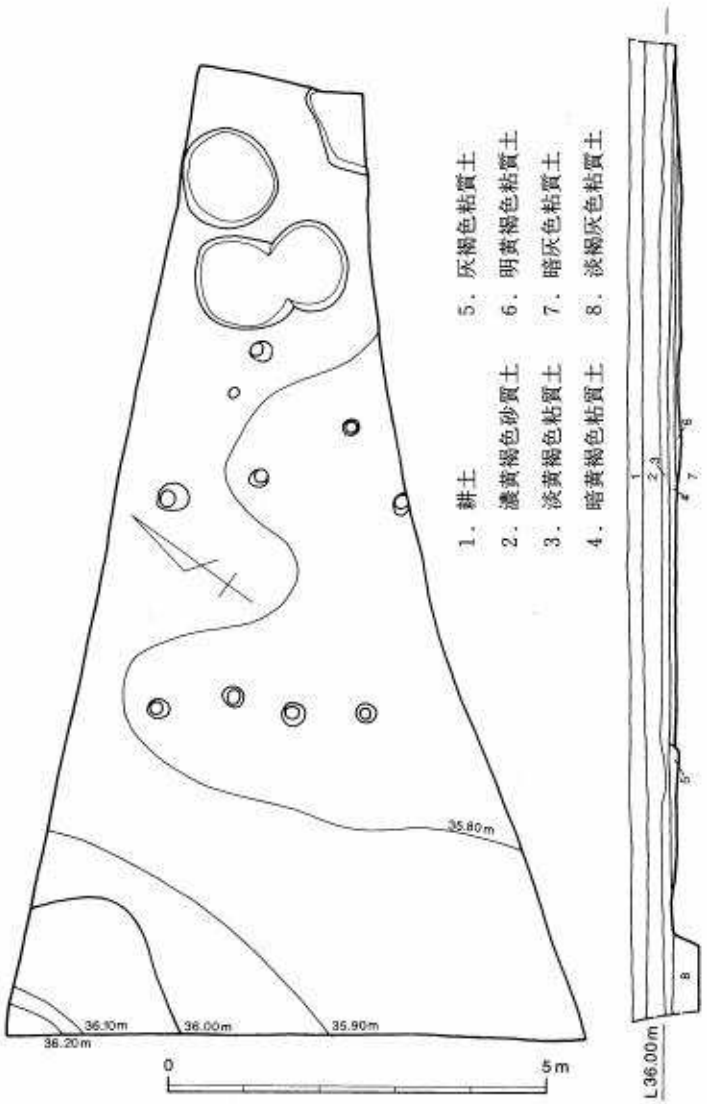
Ⅱ区はⅠ区から里道を挟んだ南東に位置し、調査面積は約800㎡で扇形に近い形状を呈する調査区である。調査区は北部が最も高く、南部に至るに従って徐々に低くなってゆき、ゆるやかな斜面となっている。基本土層は第1層耕土、第2層床土、第3層暗灰褐色シルト、第4層灰褐色シルト、第5層暗灰褐色シルト、第6層濃灰褐色シルト、第7層黄褐色粘質シルトと続き、第7層上面が遺構面となっている。

また、この地区では遺構面の下部で、さらに古い時代の遺物を包含する層が認められ、谷状の地形となり、調査区中央で谷の中央部になっていることが確認調査で判明していたため、調査区中央に幅5m、長さ13mのトレンチを設定し、遺物を採集するとともに土層の堆積状況の観察も合わせて行った。

トレンチは淡青緑色粘土の無遺物層まで掘り下げたが、掘削面からの深さは最も深い所で3.3mを測った。トレンチの土層（第15図）を観察すると、遺構面下は南東の斜面下側に第1層－第7層が堆積しており、その下部にはトレンチ内ほぼ全体に第8層－第10層が堆積している。その下は土層が入り乱れており、安定した土層堆積ではなかったことが窺える。特に第19・



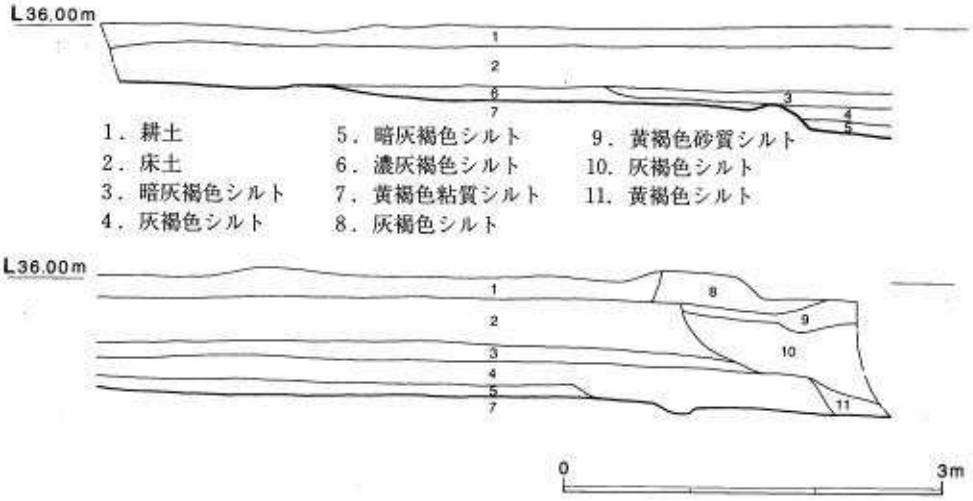
第10図　各区配置図



第11図　Ⅰ区全体図

20・24層上面は不整合が認められ、流水によって洗われていたことが推察できよう。また、第30層中には大きな倒木が認められた。全体的には北側から南側へと土層が堆積していった状況が観察できた。

遺物は弥生時代中期後半から古墳時代後期のものが出土し、第13層～第20層にかけて多く認められた。トレンチ内では遺構は全く検出されなかった。



第12図　Ⅱ区土層断面図（東壁）

2　遺構

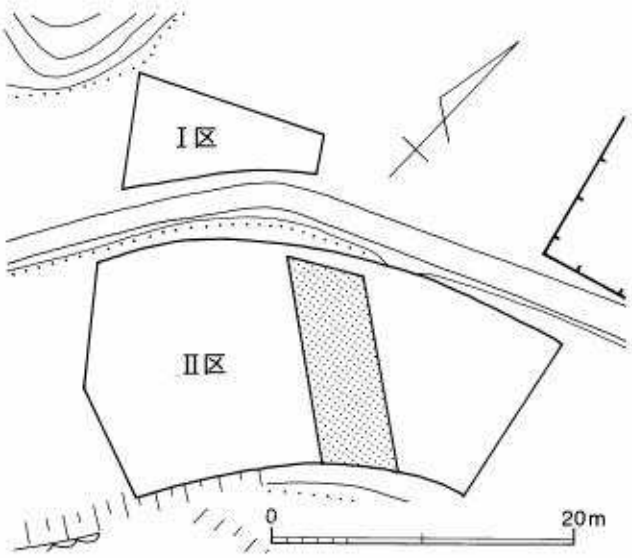
先述の如くⅠ区で検出した遺構は近世墓と考えられる土壙４基と柱穴10個である。

土壙については柱穴を検出した遺構面よりも上層から掘り込んでいると思われたが、上層を重機により掘削したため、どの層位から切り込んでいるのか明確にできなかった。しかし、１基が調査区壁にかかっており、その断面観察より第２層上面から堀り込んでいることが認められ、他の３基についても同様であると考えられる。

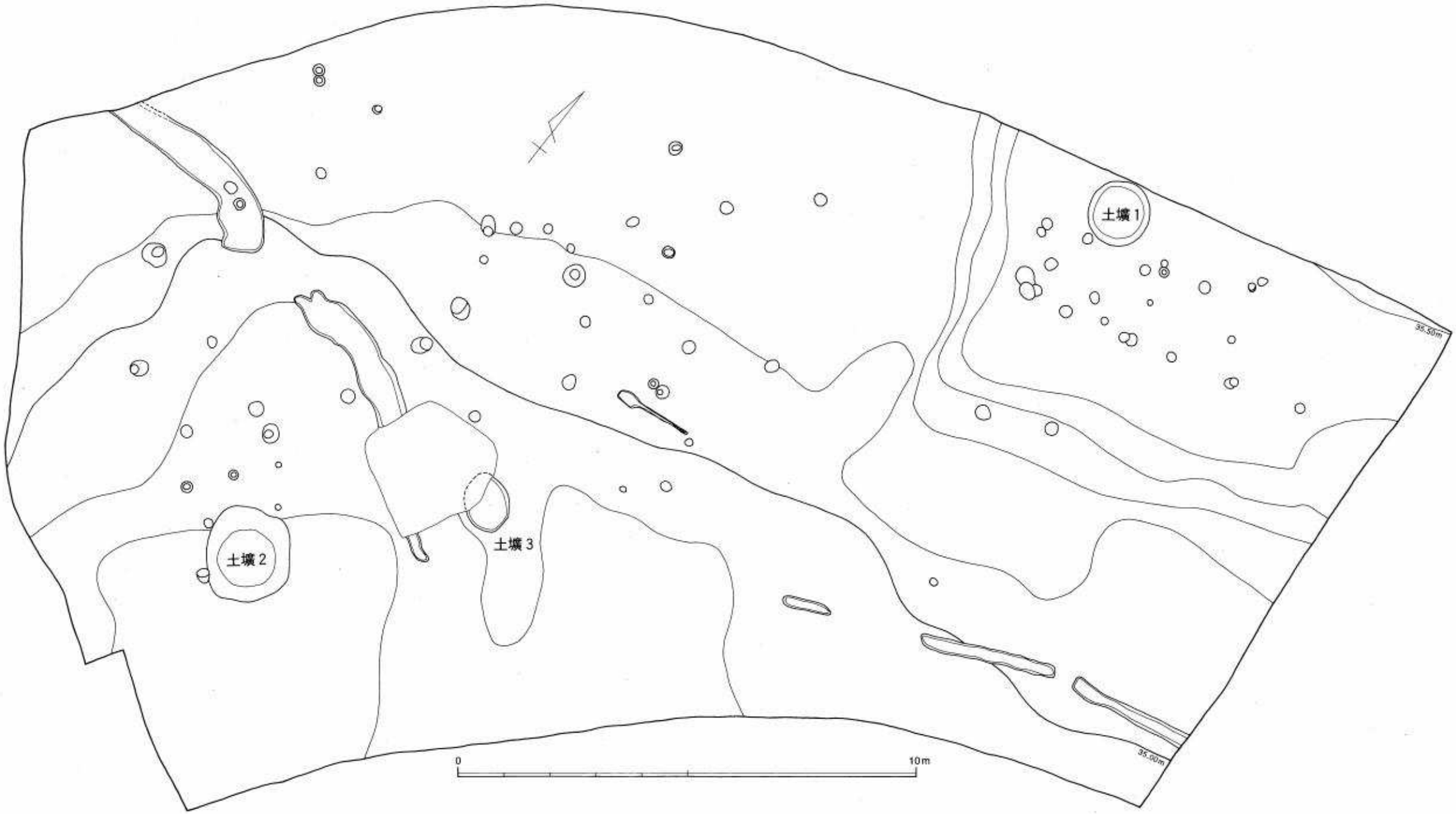
柱穴についてはいずれも掘立柱建物址として組み合わず、南西部の４個が一列に近い状態で並んでいるのみである。しかし、これらも柵列と考えるには無理があると思われる。

Ⅱ区においては土壙３基のほか、ピット・溝が検出できた。

土壙１は調査区内北にあり、平面円形を呈し、径約1.4m、深さ0.3mで、底は平坦である。内部には20cm



第13図　Ⅱ区トレンチ位置図



第14図　Ⅱ区全体図

大の礫1個ほか、竹製の輪状のものが土壙壁に沿うように検出された。この竹製品はタガ状を呈しており、この土壙は近世墓と考えられる。土壙2の上端平面形は隅丸方形に近い形状を示すが、底部の平面形はほぼ円形を呈している。ここでも土壙1同様、土壙底で壁に沿うように木製品が検出された。材質は不明であるが、おそらく竹と思われ、これらのことからこれも近世墓と思われる。土壙の規模は上端で径1.9m、深さ0.6mである。土壙3は調査区の中央やや南寄りに検出されたものである。一部は確認調査で検出されていたもので、平面形は楕円形を呈し、長軸約65cm、短軸約50cm、深さ20cmで、埋土は暗灰褐色土である。内部より遺物は出土しなかったが、おそらく後述の溝・ピットと同時期と思われる。

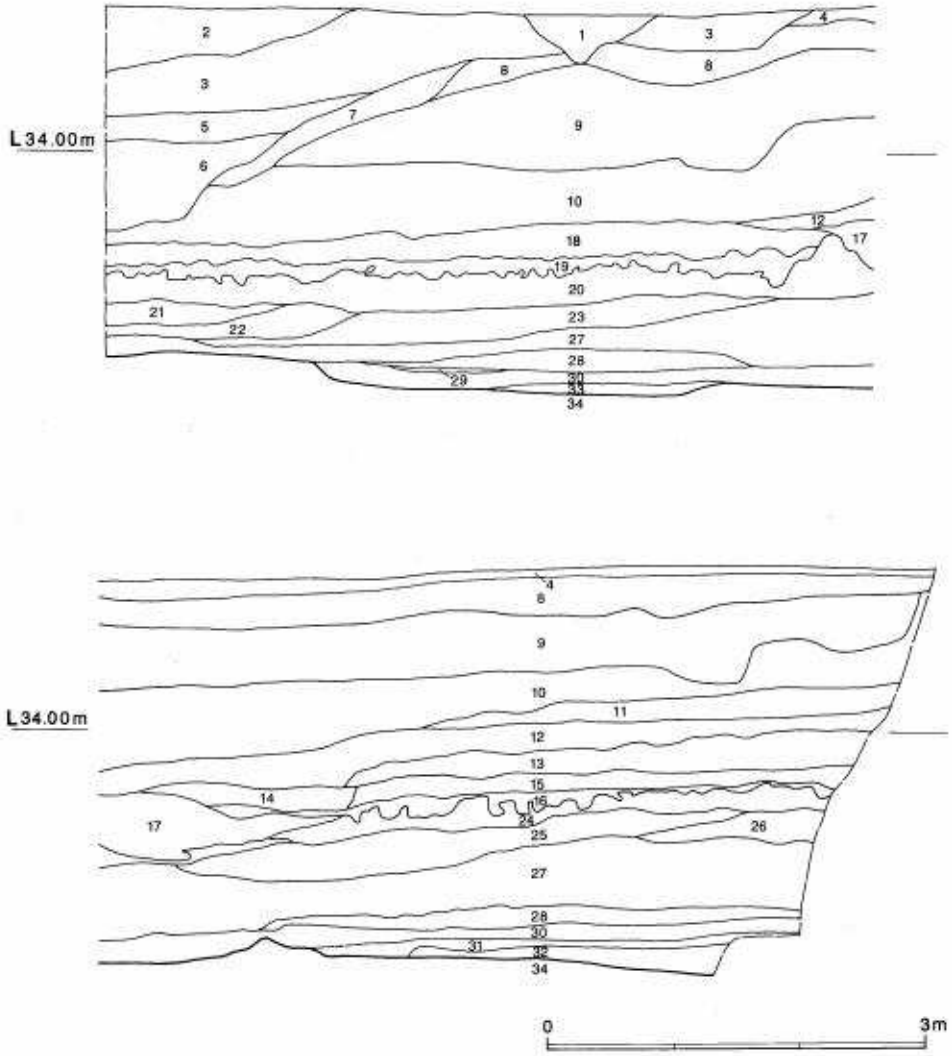
溝状遺構は調査区南西部と南東部で検出したが、南東部のものはほぼ東西方向で幅約15cm、深さ5cm程度で途切れが多く、小規模なものである。埋土は暗灰褐色土であった。南西部で検出した溝状遺構は巾約40cm、深さ15cm前後とやや大きなものであるが、これも途切れていた。この溝の西端は調査区外里道下にのびるが、東端は確認調査のグリッドを越えて、長さ約30cmで途切れている。埋土は暗灰褐色土で遺物は出土しなかった。

ピットは調査区北東部で集中しており、調査区中央から西部にかけては散在していた。いずれも大小あるが、柱根の残っていたものもあり、柱穴と思われる。北東部のピット群は調査区内でも最高所に位置し、また、その場所がほぼ平坦となっており、かつ、柱穴の並びが認められることから、掘立柱建物址であった可能性が強いことを想定しながら、調査を行った。しかしながら南端のものは列状に認められたものの、北側のものは並びとするには間隔の不均等および列のずれが認められる。また、南側のものがピット6個の列であるのに対し、北側のものを列として認めた場合でも4個しかない。しかも南側の列と北側の列を結んだ場合、歪んだ形となる。したがって掘立柱建物であると断定するには躊躇せざるを得ないと思われ、その可能性があることを指摘するにとどめておく。なお、北側ピット列のさらに北側にピットが存在する可能性もあるが、調査区内においてはピットは検出されず、調査区外の里道の存在という制約上明らかにできなかった。その他の部分で検出したピットは47個あり、3－5個が列状に並ぶところが数箇所認められるが、方向にばらつきが多く、これを柵跡として断定するには疑問が残る。

なお、調査区南西部で集石遺構らしきものを検出したため精査をおこなったが、石が組まれた状況は観察できず、単なる集石と思われ、もし人為的なものであったとしても乱雑に石を集めただけのものであると考えられる。

3　遺物

包含層出土遺物



第15図　Ⅱ区トレンチ土層断面図（西壁）

1．灰褐色土
2．濁茶褐色土
3．褐色土
4．黄褐色粘質土
5．濁灰青色砂質シルト
6．濁青灰色砂質シルト
7．黄褐色シルト
8．黄褐色砂質シルト
9．青灰色砂質シルト
10．暗濃青灰色シルト
11．灰黒色シルト
12．暗緑灰色シルト
13．黒灰色シルト
14．明黒灰色シルト
15．黒褐色シルト
16．黒色シルト
17．黒褐色シルト
18．濃緑灰色シルト
19．黒色シルト
20．青灰色シルト
21．灰青色シルト
22．灰青色シルト
23．暗青灰色シルト
24．明青灰色砂質土
25．淡青灰色シルト
26．青灰色シルト
27．淡灰黒色シルト
28．灰色粘土
29．暗黒色粘土
30．灰色粘土
31．淡黒灰色シルト
32．淡青灰色シルト
33．淡灰色粘土
34．淡青緑色粘土

土器（第16図）

Ⅰ区より出土した土器のうち図示できたものは12の擂鉢１点のみであり、第４層の暗黄褐色粘質土から出土したものである。また、Ⅱ区の包含層からは土器類と石器類が出土し、土器類は第３層暗灰褐色シルトおよび第４層灰褐色シルトより出土している。それらは土師器の塝・羽釜（39～46）、備前焼壺・擂鉢（47～51）、天目茶碗（52）、瀬戸・美濃系陶器（53・54）、輸入磁器（55～58）、瓦（59）である。

39～46は土塝および羽釜である。39は口縁部が内側に傾斜し、外半しながら上方へのび、わずかにつまみ出した感じの貼り付けの鍔状突出部をもつ。体部外面には平行叩き痕が残っている。42も39と似た口縁部の特徴を示すが、端部を外方に肥厚させており、上端面はほぼ平坦で内傾する。鍔状の突出部も大きく外側に張り出している。43は羽釜とも呼べる形態を有し、口縁部から体部上方はほぼ直立する。口縁端部の形状は42と類似しているが、鍔状突出部分での体部の屈曲は少ない。44は鍔状の突出部が形骸化しており、屈曲したようになっている。小片のため傾きは不正確であるが、体部上半は内傾しているようである。45は口縁部を大きく外反させ、鍔状突出部も小さい。40は甕に似た形態の特徴を示し、口縁部が外反し、肥厚している。口縁上端面は内傾するがほぼ平坦である。体部外面に叩きを施している。41は口縁部が外反してやや上方に内彎しながらのびる塝の破片である。口縁部上端は平坦面をもち、やや内傾する。体部内面は刷毛調整である。46は瓦質の羽釜で鍔の先端部分を欠失している。口縁部はやや内傾し、外面には凹線で作り出した段が２箇所認められる。

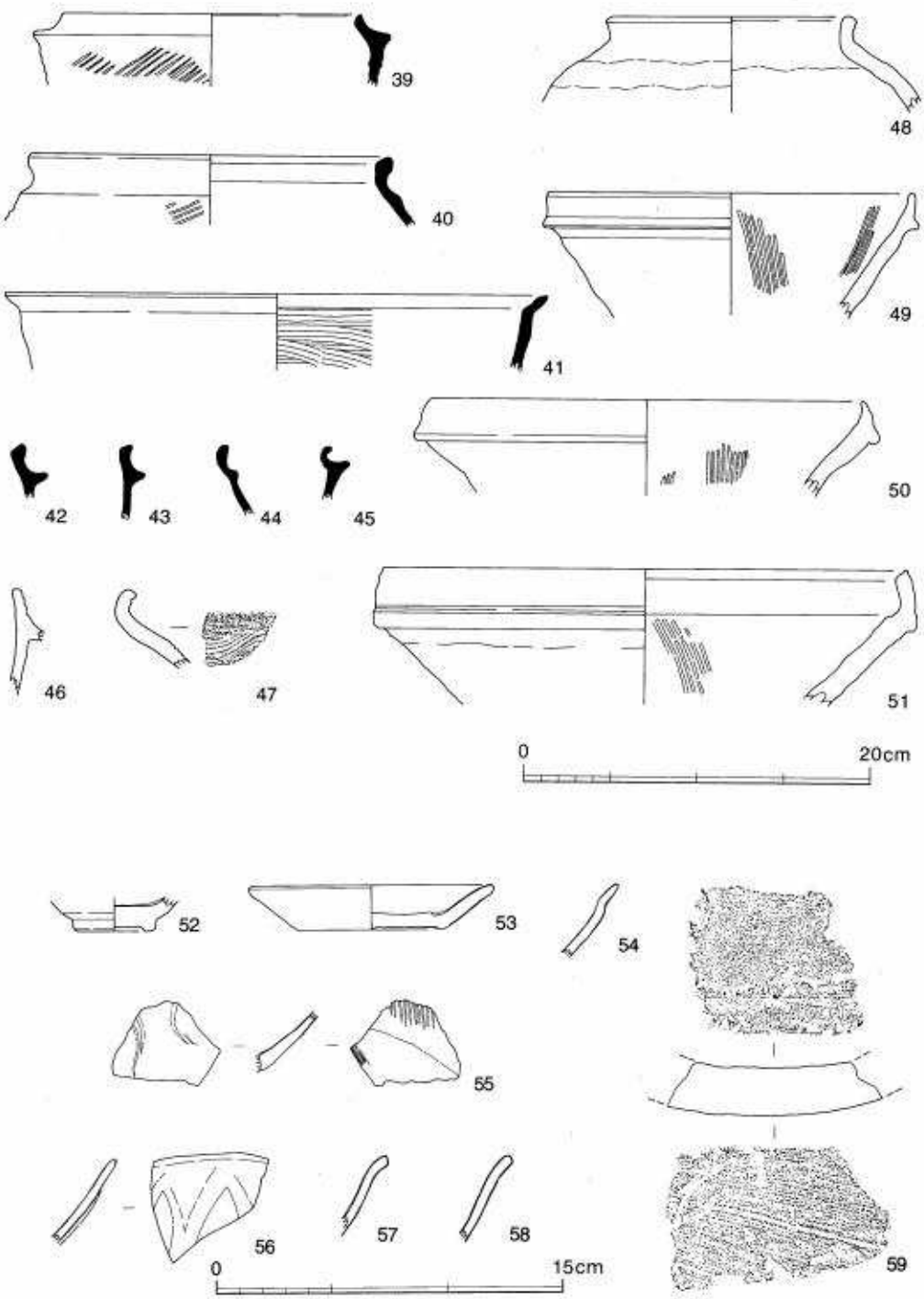
47・48は備前焼の壺の口縁部から肩部にかけての破片である。ともにやや外反する短い口縁部をもつ。47は口縁部外面を少しつまみだしている。47の肩部には櫛描波状文をめぐらせている。

49～51は備前焼の擂鉢でいずれも櫛描きの擂目を施している。49は口縁端部を肥厚させずに口縁部下に突出部をもち体部との境としている。50は口縁端部を上下に拡張し、特に上方への拡張が大きく、端部は尖っている。51は口縁部がくびれて上方への拡張が著しいもので、口縁部外面には一条の凹線をめぐらしている。

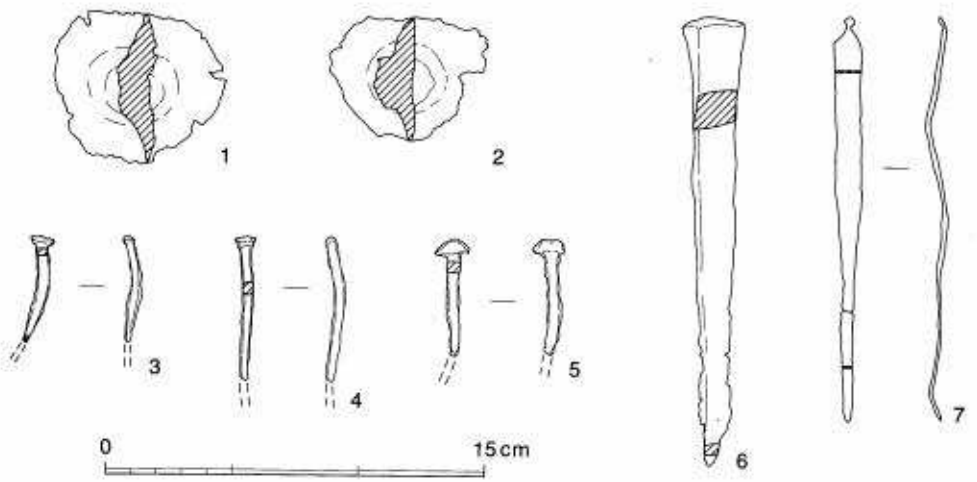
52は天目茶碗の底部である。内面に天目釉を施し、外面は露胎でロクロ削り仕上げである。高台も削り出しであるが低い。

53は瀬戸・美濃系の皿で、内外面に灰釉を施しているが、内面見込み部は釉のかきとりが認められる。重ね焼き痕および目跡が認められる。54も瀬戸・美濃系の陶器と思われ、体部からやや屈曲して外反する口縁部をもつ碗である。内外面に灰釉が認められ、口縁端部は釉が剝げている。

55～58はいずれも青磁碗である。55は内面に花文と思われる文様を陰刻し、外面には櫛描きで文様を施し、黄緑色に近い色の釉をかけている。同安窯系の青磁碗であろう。56は外面に鈍



第16図　Ⅱ区包含層出土土器類



第17図　Ⅰ・Ⅱ区包含層出土金属製品

い鎬蓮弁文を有するもので、青色に近い色の釉を施している。龍泉窯系のものである。57・58は外反する口縁部をもつ無文の青磁碗である。58はやや厚手のものである。

59は須恵質の平瓦の破片で、凸面には糸切り痕と思われる条線が認められ、端面はナデ仕上げとなっている。凹面の端面付近は面取りをしている。

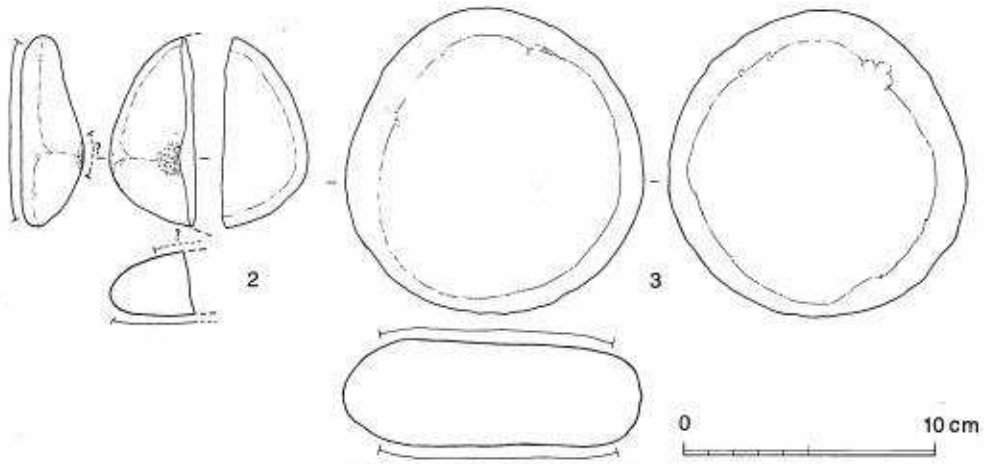
金属器（第17図）

1・2は平面ほぼ円形を呈し、断面山形で、上部が平坦になった不明の鉄製品である。1はⅠ区第4層、2はⅡ区第3層より出土したものである。3～5はいずれも先端を欠失する鉄釘で、Ⅱ区第4層から出土している。3は頭部を一方に打ち広げてから折り返しているようである。断面は四角形で、残存長は4.3cmである。4は頭部頂が丸くなっており、あまり広がらない。断面長方形で残存長は5.7cmである。5は断面が方形に近く、頭部はかなり打ち広げられている。現状では頭部が山形を呈しているが、錆化によるものである。残存長は4.7cmである。6はタガネ様の鉄製品で、断面方形を呈し、先端は尖り、頭部はやや広がっている。木質の残存は認められない。長さ17.8cmで、Ⅱ区第4層から出土している。7は赤銅製の斧で、頭部先端に耳掻きと思われる突起をつけている。無文で、4箇所で折れ曲がっている。現状長は16cmである。Ⅱ区第4層から出土している。

石器（第18図）

Ⅱ区第4層から磨石2点が出土している。2は斑栃岩製で約1/2を欠損している。裏面は良好な使用面となっている。表面の一部に敲打痕様の部分が認められるが、軽微で使用痕か風化によるものか判然としないため磨石とした。現存長7.5cm、現存幅3.4cm、現存厚2.5cm、現存重92.0ｇを測る。

3は花崗岩製で比較的大型である。両面とも平坦面となっているが、線状痕や明瞭な磨耗痕



第18図　Ⅱ区包含層出土石器

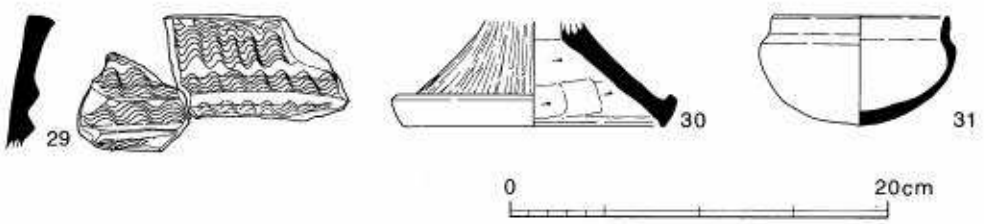
は観察し得ない。完形で、長さ12.2cm、幅11.8cm、厚さ4.1cm、重さ930.0ｇを測る。

トレンチ出土遺物（第19・20図）

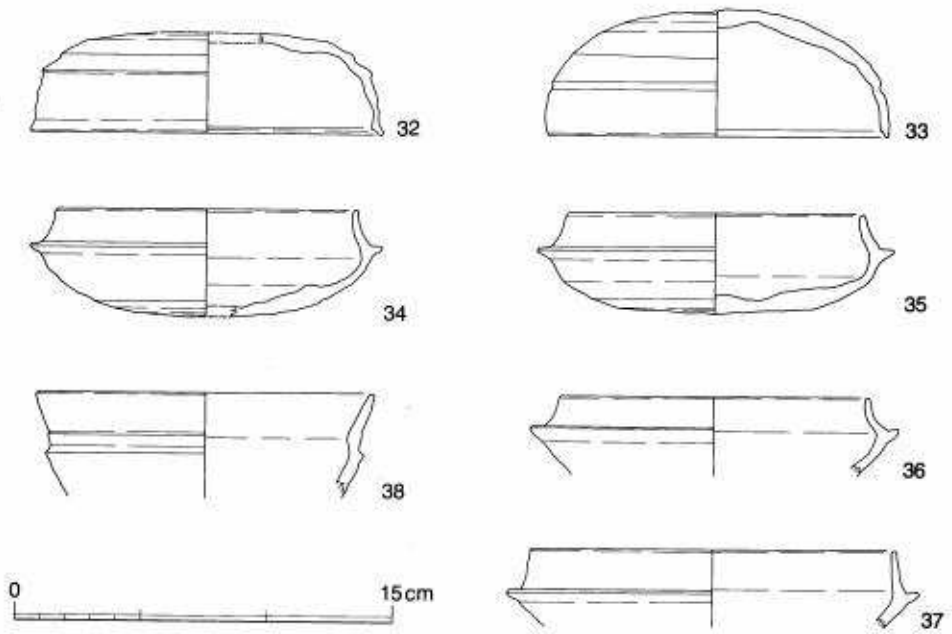
Ⅱ区トレンチより出土した遺物は先述のように第13層～第20層にかけて多く認められたが、それらは弥生時代～古墳時代に属するものであった。これらのうち図示できたものは第19・20図に掲げた。

29は大型の壺または鉢の破片で断面三角形の突帯が２条残存している。口縁部から突帯上部にかけては櫛描波状文を密に巡らせ、突帯間および突帯下にも波状文を施している。30は高杯の脚部である。外面は縦方向の篦磨きを施し、内面は横方向の篦削りである。裾端部は上下に拡張している。31は土師器の短頸壺でほぼ直立する短い口縁部をもつ。表面が磨滅しているため、調整痕は残っていない。

32・33は須恵器の杯蓋である。32の天井部は平らに近く、口縁部との境には稜をもつ。口縁端部は凹面をなす。33の天井部は丸く、口縁部との境には沈線を巡らす。口縁端面は段状となっている。34～37は須恵器の杯身で34～36の立ち上がり部は内傾し、外反ぎみに上方へのびる。受部はともに水平にのびる。38は無蓋高杯の杯部で、体部外面上端に２段の稜をもち、そこか



第19図　Ⅱ区トレンチ出土弥生土器・土師器



第20図　Ⅱ区トレンチ出土須恵器

ら屈曲して外上方にのびる口縁部へと続く。口縁端部は丸く仕上げている。

4　小結

Ⅰ・Ⅱ区において検出した遺構は近世墓６基のほか、ピット・溝・土壙である。ピットについては僅かにⅡ区で掘立柱建物址の可能性のあるものが指摘できたのみであった。また遺構内からの遺物の出土数も極めて限られ、しかも細片であり、時期等は不明である。

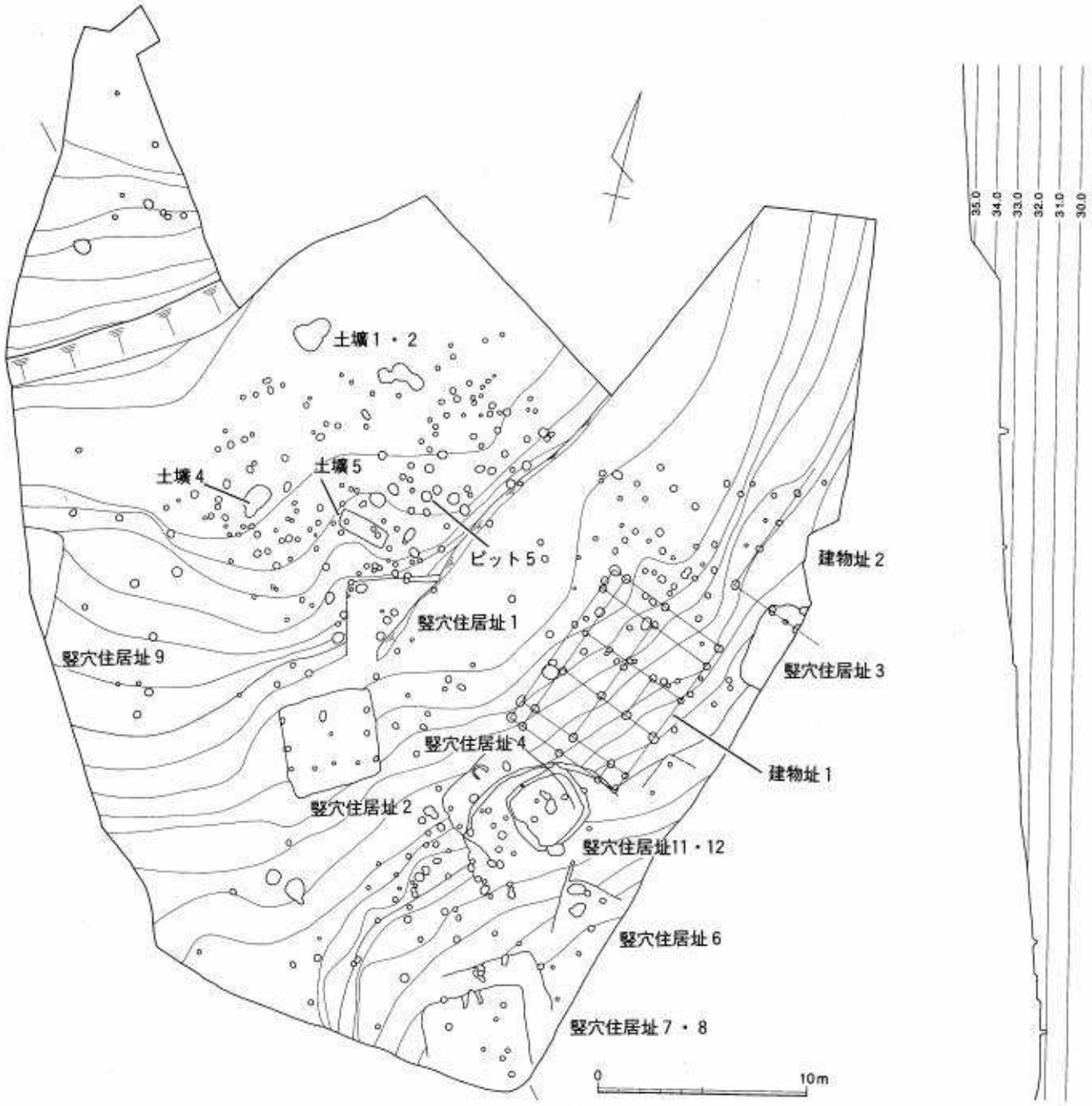
次に包含層からの出土遺物をみると、１・４の土堝は淡路島内では本遺跡に近接した洲本市大森谷遺跡[註1]、兵庫県内では西宮市西宮神社境内地[註2]で同様のものが出土しており、姫路市加茂遺跡[註3]、三田市平井遺跡[註4]で類似例が出土している。大森谷遺跡例は包含層出土であるが、伴出した須恵器・陶磁器より14世紀後半から15世紀を中心とした時期と考えられている。西宮神社境内地報告書ではその所属時期が明らかにされていないが、加茂遺跡では類似している土釜Ⅲ類が備前焼Ⅳ B期の擂鉢と伴出して土壙から出土している。年代は15世紀の後半頃である。以上のことから、本遺跡出土の土堝39・42については14世紀後半から15世紀代の年代を与えることができる。47・48の備前焼壺は備前Ⅱ後半～Ⅲ期[註5]で14世紀前半と考えられる。擂鉢は49が備前Ⅳ期、50が備前Ⅳないし Ⅴ期、51が備前Ⅴ期にあたり、15～16世紀の年代が与えられる。53の瀬戸・美濃系Ⅲは16世紀代と考えられ、55の青磁碗は同安窯系青磁碗Ⅰ類[註6]に属すると思われ、12

世紀後半～13世紀の年代が与えられている。56は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5類で14世紀前半頃と考えられる。57・58の無文の青磁碗については56と同時期かあるいは年代が若干降るものと思われる。包含層出土遺物の年代をみると、本遺跡の下限年代は16世紀と考えることができるであろう。

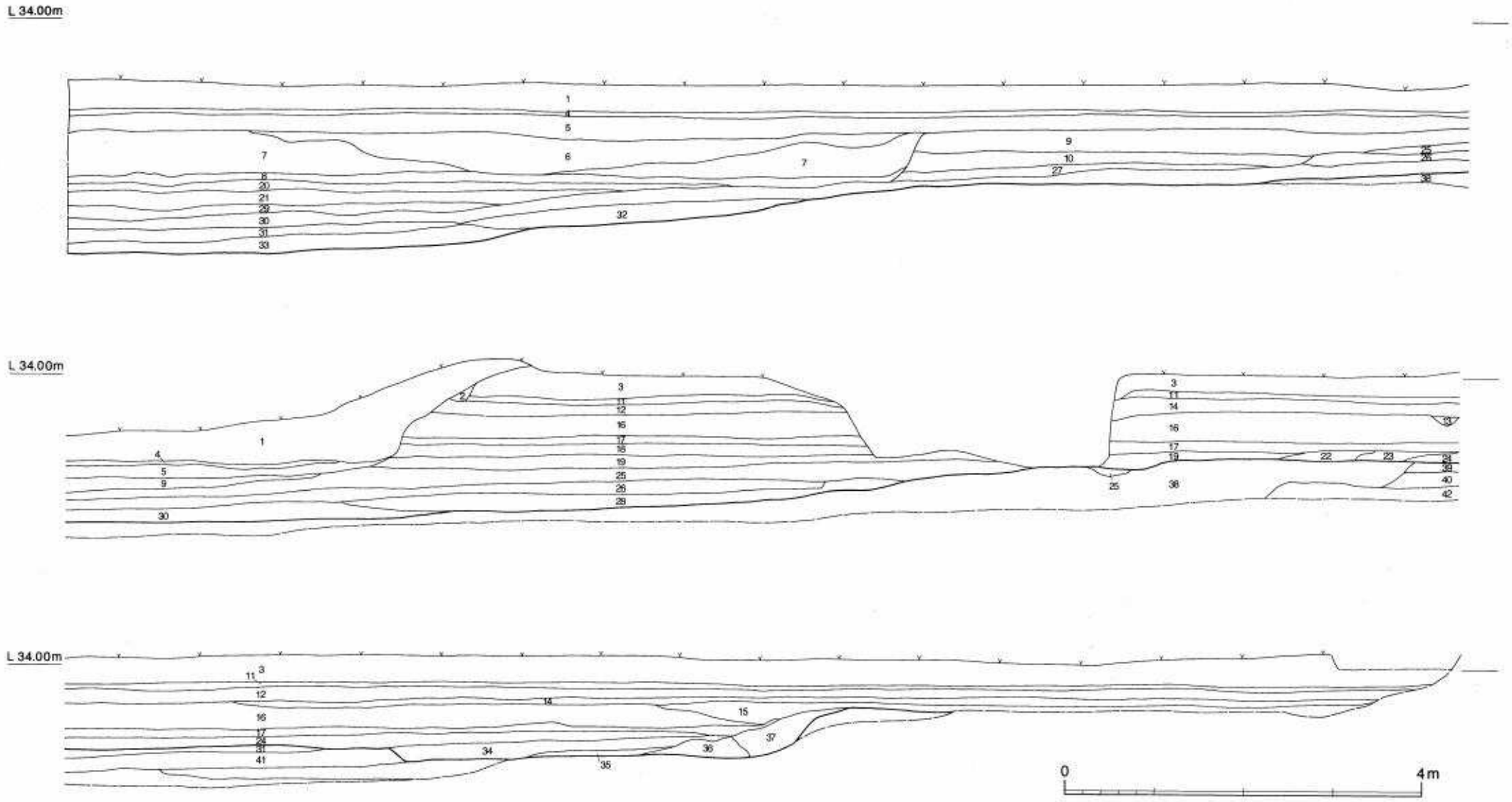
一方、トレンチ出土の遺物については、30が畿内第Ⅳ様式に併行するものであり、29についてもその特徴から弥生時代中期のものとみて差し支えないものと思われる。32は陶邑ＴＫ23～47型式[註7]に相当し、33はＭＴ15～ＴＫ10型式の特徴を示す。34～37はＴＫ10型式にあたると考えられる。その所属時期は32が5世紀末－6世紀初頭、33－37は6世紀前半である。38はＴＫ23型式もしくはＴＫ47型式であると思われ、5世紀末～6世紀初頭にあたる。トレンチ出土遺物については大きく分けて弥生時代中期後半と古墳時代後期の2時期が認められた。

本遺跡のⅢ・Ⅳ・Ⅴ区において弥生時代中期後半と古墳時代後期の竪穴住居址を検出しており、Ⅱ区トレンチ内出土遺物からみて、本地区においては当該時期の遺構は認められないものの、生活範囲の一部であったものと思われる。あるいは本地区北方の尾根に別の居住地があったのかもしれないが、この点に関して全く不明である。今後、周辺の調査が進めばしだいに明らかになってゆくものと思われる。

註1　市橋重喜「中世土器」『大森谷遺跡』兵庫県教育委員会　1985年
註2　『西宮神社境内地発掘調査報告書』西宮市教育委員会　1983年
註3　『加茂遺跡』姫路市文化財調査報告書Ⅴ　姫路市教育委員会　1975年
註4　岡田章一氏の御教示による。
註5　間壁忠彦・間壁葭子「備前焼研究ノート」『倉敷考古館研究集報』1・2・5号
1966～1968年
註6　横田賢次郎・森田勉　「大宰府出土の輸入中国陶磁器について一型式分類と編年を中心として」
『九州歴史資料館研究論集』4　1978年
註7　田辺昭三『陶邑古窯址群』Ⅰ　平安学園考古学クラブ　1966年
田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981年



第21図　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区全体図



1. 耕土
2. 灰褐色シルト
3. 耕土
4. 床土
5. 盛土
6. 暗黒褐色シルト（盛土）
7. 暗褐色シルト（盛土）
8. 旧耕土
9. 旧耕土
10. 淡灰褐色シルト
11. 床土
12. 旧耕土
13. 灰褐色シルト
14. 旧床土
15. 淡黒灰色シルト
16. 盛土
17. 旧耕土
18. 床土
19. 淡灰褐色シルト
20. 床土
21. 淡灰褐色シルト
22. 灰褐色砂質シルト
23. 黒褐色シルト
24. 黒褐色砂質シルト
25. 黒褐色シルト
26. 淡灰茶褐色シルト
27. 淡褐色シルト
28. 淡黒褐色シルト
29. 黒褐色シルト
30. 灰茶褐色シルト
31. 黒褐色シルト
32. 灰褐色シルト
33. 淡灰褐色シルト
34. 黒灰褐色砂質シルト
35. 淡黒褐色シルト
36. 黒褐色シルト
37. 黒褐色砂質シルト
38. 暗黒褐色シルト
39. 砂質シルト
40. 暗褐色砂質シルト
41. 淡黒褐色シルト
42. 暗褐色砂質シルト

第22図　Ⅳ・Ⅴ区土層断面図（西壁）

第4節　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区の調査

1．調査区の概要

段丘上の東斜面にあたる地区で、上方の水田から一筆毎に、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区とした。調査前の現状はⅢ区からⅤ区に向け階段状に落ち、Ⅲ区とⅣ区の段差約1.5mを測る。

しかしこうした段差は水田化の際のものと判断され、検出される遺構も各区で時期的に大差は認められないため、報告にあたってはまとめて扱うことにした。

遺構はⅢ・Ⅳ区では表土・盛土下の黄褐色シルト上で検出され、部分的に包含層の認められる所もあったが、基本的には両地区では包含層は認められなかった。ただⅤ区の南半ではⅢ・Ⅳ区の遺構面である黄褐色シルト上に黒褐色等の包含層が認められ、その上面にも柱穴等の遺構が認められた。しかしこの上面での遺構の検出は、遺構埋土と包含層が似通っているため、困難で、上面の遺構も下層の黄褐色シルト上面で検出した。したがって上層・下層の遺構を同一面で検出したことになる。

遺構面である黄褐色シルト層上面は、各区の斜面上方側が、削平のため、等高線の間隔が広く、ほぼフラットな面となっている。特にⅢ区とⅣ区の間は1.5mもの段差があり、その下部にはフラットな面が広がっているが、そこでは遺構の密度は非常に粗となっている。

比較的旧状を保つと見られる各区の南半は、全体的に北西から南東に傾斜しており、Ⅴ区の東半はかなりな傾斜を持つ。この斜面は調査区北半は等高線がほぼ平行して走り、若干の凹凸はあるものの、比較的均一な斜面である。しかし調査区西端付近で等高線の間隔が広くなり、張り出して、尾根となっている。調査区西側の現道下部が、その尾根状の張し出しの中心になると思われる。標高は最高所のⅢ区で約35.7m、最も低いⅤ区の7号住居址付近で約31.2mを測り、Ⅳ区のフラットな面は約33.7mを測る。

この3地区は、本遺跡では最も多くの遺構が検出され、遺跡存続期間中には絶えず、居住空間として利用された地区である。検出された遺構は弥生時代中期の竪穴住居址2棟、古墳時代後期の竪穴住居址8棟、鎌倉時代の建物址2棟、室町時代の土壙・柱穴等であるが、これらの遺構はⅣ・Ⅴ区に多く、特に調査区中央付近の斜面部に集中して検出されている。おそらく遺構面が調査区両端では、礫を含んだ土層となるため、住居等の利用には向かなかったためと思れる。

Ⅲ区では柱穴が若干検出された以外、遺構はほとんど検出されていない。これは後世の削平のためとも思われるが、本来この地区には遺構が少なかったためと思われる。

2．遺構

今回の調査では弥生時代中期、古墳時代後期、鎌倉時代、室町時代（14・16世紀）の遺構が検出された。住居址番号等が前後するが、時期の古いものから順に記載する。

竪穴住居址12（第23図）

Ⅴ区の中央付近で検出されたもので、斜面下方側はすでに流失しており、斜面上方側だけが半円形に検出されたものである。また床面中央から北壁際にかけては、竪穴住居址11と古墳時代の住居址４に切られている。

検出できた部分での規模は、東西約7.9m、南北3.9mを測り、本来は径８m前後の円形住居であったと思われる。残存壁高は最高部で約18cmを測る。

壁下には巾約13cm、深さ約10cmの壁溝が検出されたが、西端部では壁溝は検出されていない。

床面は斜面上方側の壁から約5.5mまでは、斜面下方側に僅に傾斜するもののほぼフラットで、この付近まで床面が遺存していたものと思われる。床面上には炭化物が多く見られ、西壁際、北壁際の床面上には甕等の土器が遺存していた。また東隅の床面上には台石かと思われる約30cmの山石が認められた。

床面上には、いくつかの柱穴が検出されているが、この住居址に伴うものは５本と考えられる。その配置から見ると、斜面下方側の間隔が広く、おそらくこの部分にも、柱穴が存在していた可能性が高い。したがってこの住居址に伴う主柱穴は６本程度と考えられる。

床面中央のやや斜面下方よりには、長軸約80cm、短軸約55cm、深さ30cmの土壙が検出され、土壙の内部には20cm大の石が埋め込まれていた。この土壙を住居址の中央土壙とするには、位置がやや斜面下方に寄っていることから若干疑問もあるが、周囲の床面上に焼土が見られることから、この住居址に伴う中央土壙と判断した。

竪穴住居址11（第23図）

竪穴住居址12の北西隅で、住居址12を切って検出された住居址である。長軸約3.7m、短軸約3.3mを測る。長軸をほぼ斜面と平行する方向に置いた隅丸方形の住居址である。残存壁高は北西隅の部分で、約50cmを測る。

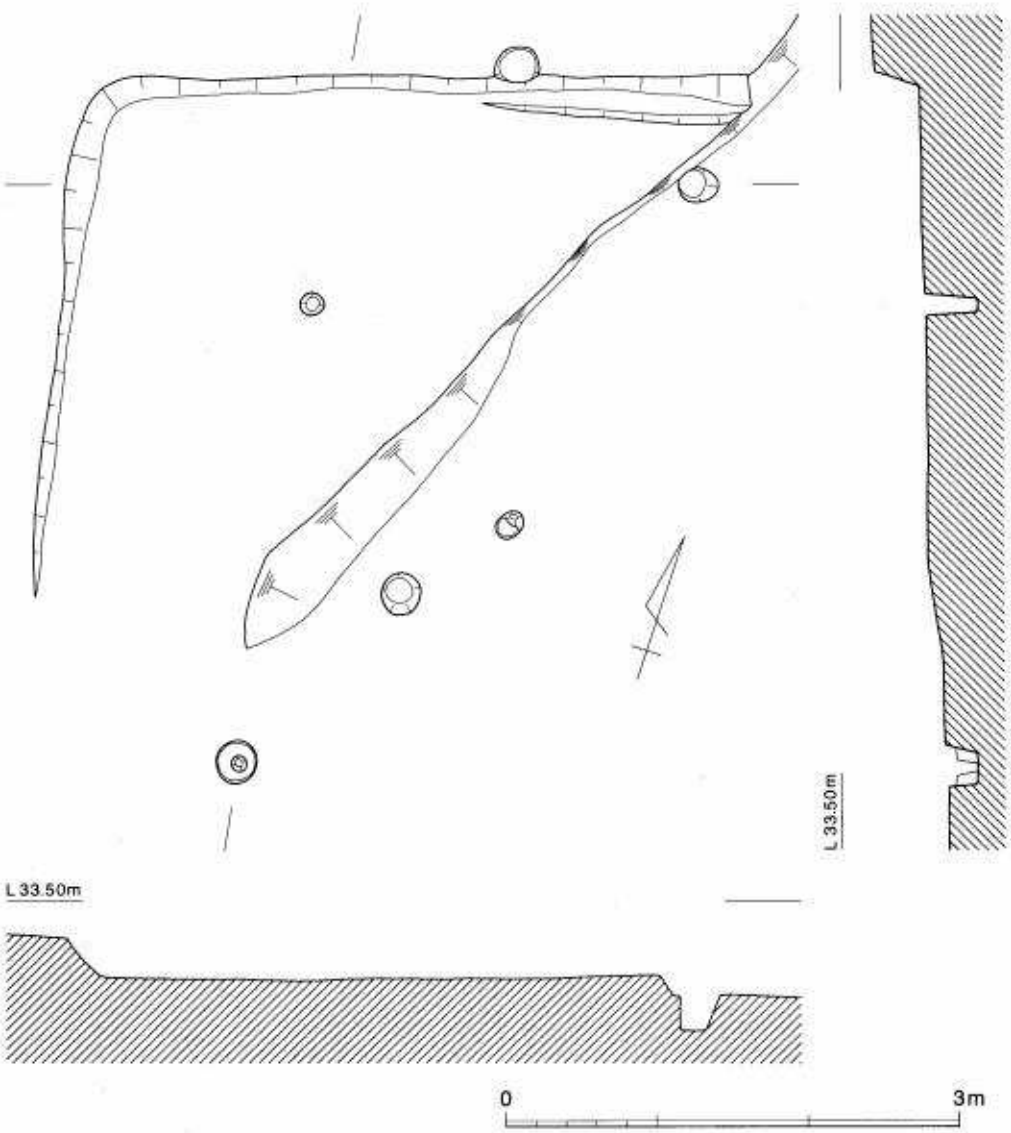
壁下には巾約20cm、深さ約10cmの壁溝が廻らされている。

床面中央には長径約70cm、短径約50cm、深さ約25cmを測る、二段に掘られた中央土壙が検出されている。中央土壙内部からは、小量の炭化物が出土したが、炉を想定させるほどのものでもなかった。

主柱穴は二本で、住居址周辺の斜面とほぼ平行し、中央土壙とほぼ一直線に並ぶように配置されている。

北側の柱穴の側から、台石かと思われる約30cm大の山石が出土している。

第23図　竪穴住居址11・12

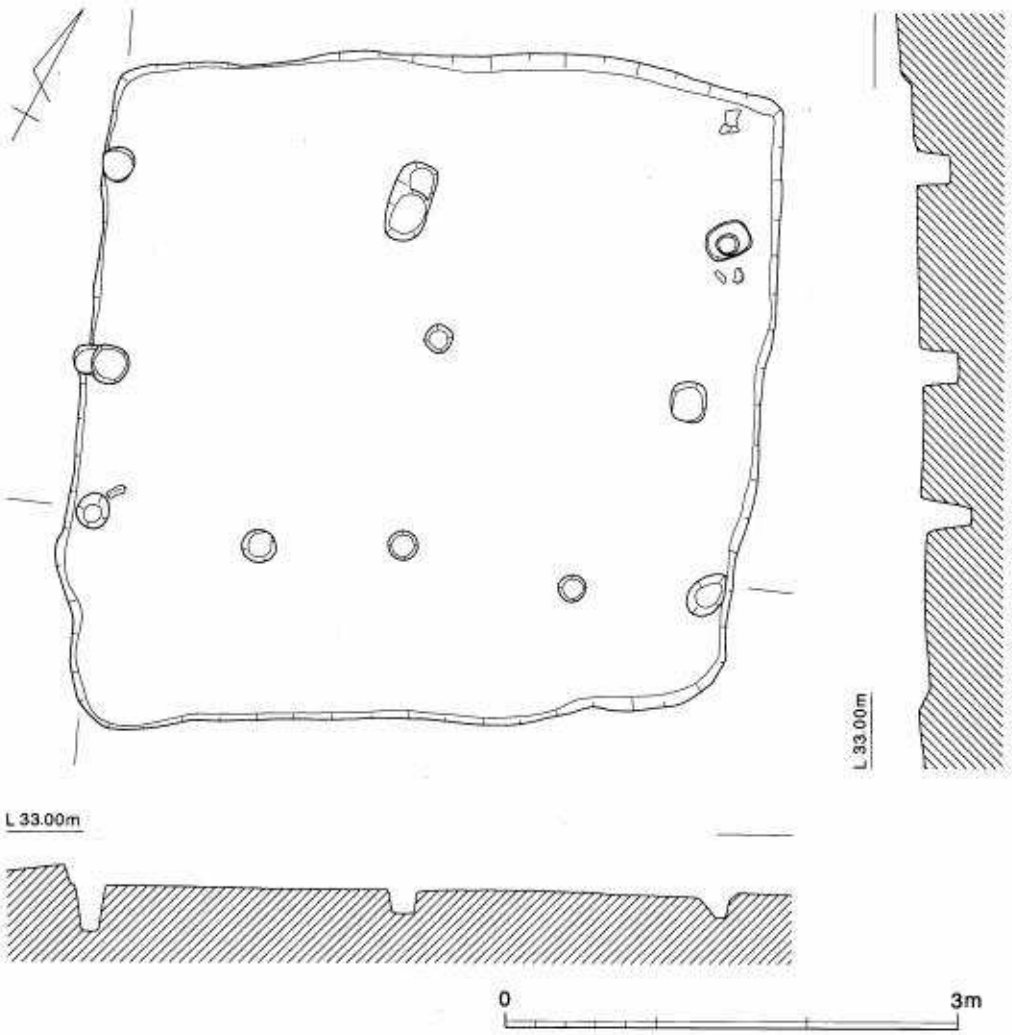


第24図　竪穴住居址１

竪穴住居址１（第24図）

調査区のほぼ中央で検出された住居址であるが、北西隅を除き、水田化の際に、削平をされてしまっており、北西隅だけが三角形状に検出された住居址である。

検出された部分は斜面上方側の北辺とそれに直交する西辺で、その部分での規模は、北辺4.5m、西辺3.5mを測る。本来それ以上の規模であったと思われるが、他の住居址の規模から見て、斜面上方側の北辺をやや上回る程度の規模であったと思われる。



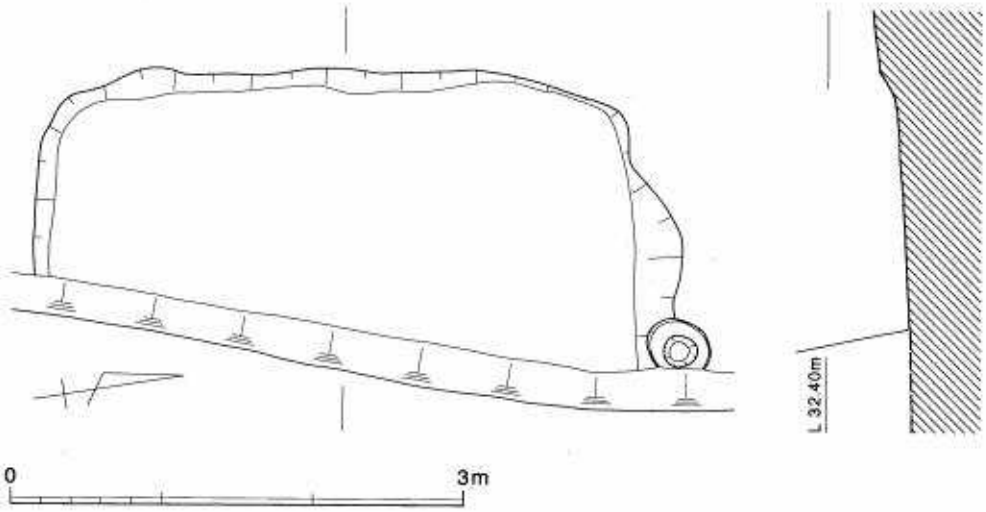
第25図　竪穴住居址２

平面形は方形プランを呈し、残存壁高は最高部で約28㎝を測る。北壁下の東半には巾20㎝、深さ約５㎝の壁溝が、約1.8ｍの長さで検出された。

床面はやや傾斜するが、ほぼ水平で、柱穴は確認できなかった。北西隅の床面上からは土師器高杯の杯部が出土している。

竪穴住居址２（第25図）

竪穴住居址１の下方で検出された住居址で、一辺約4.5ｍの正方形に近い方形の住居址である。ただ南壁は東端付近から外に膨らんでおり、また西壁の南端付近に住居址のコーナー状の脹らみが見られ、本来の南壁は両者を結んだ線の可能性が高い。そうすると住居址の規模は東



第26図　竪穴住居址３

西約4.5m、南北約4.2mとなり、平面プランは東西にやや長い方形となる。

残存壁高は17cmを測り、壁溝はみられない。

柱穴は８本が、棟方向を周辺の斜面と平行させた、２間×２間に配置されている。北・南側柱列はそれぞれ北・南壁から約1.1m離れ、東・西側柱列は壁に接している。柱間は棟方向が長く、東から約2.15m、2.02mとなっている。梁桁の柱間は東側柱列と西側柱列とで異なっており、東側柱列は南から約1.3m、1.0m、西側柱列は南から約1.0m、1.3mとなっている。南側柱列の柱間には２本の柱穴が、中央の梁桁の間にも柱穴１本が検出されており、その位置からみて住居址に伴うものと判断される。

床面上には若干の遺物が遺存しており、北東隅の床面上からは土師器の甕・須恵器杯身が出土、南西の隅柱の際からは土師器杯が出土している。

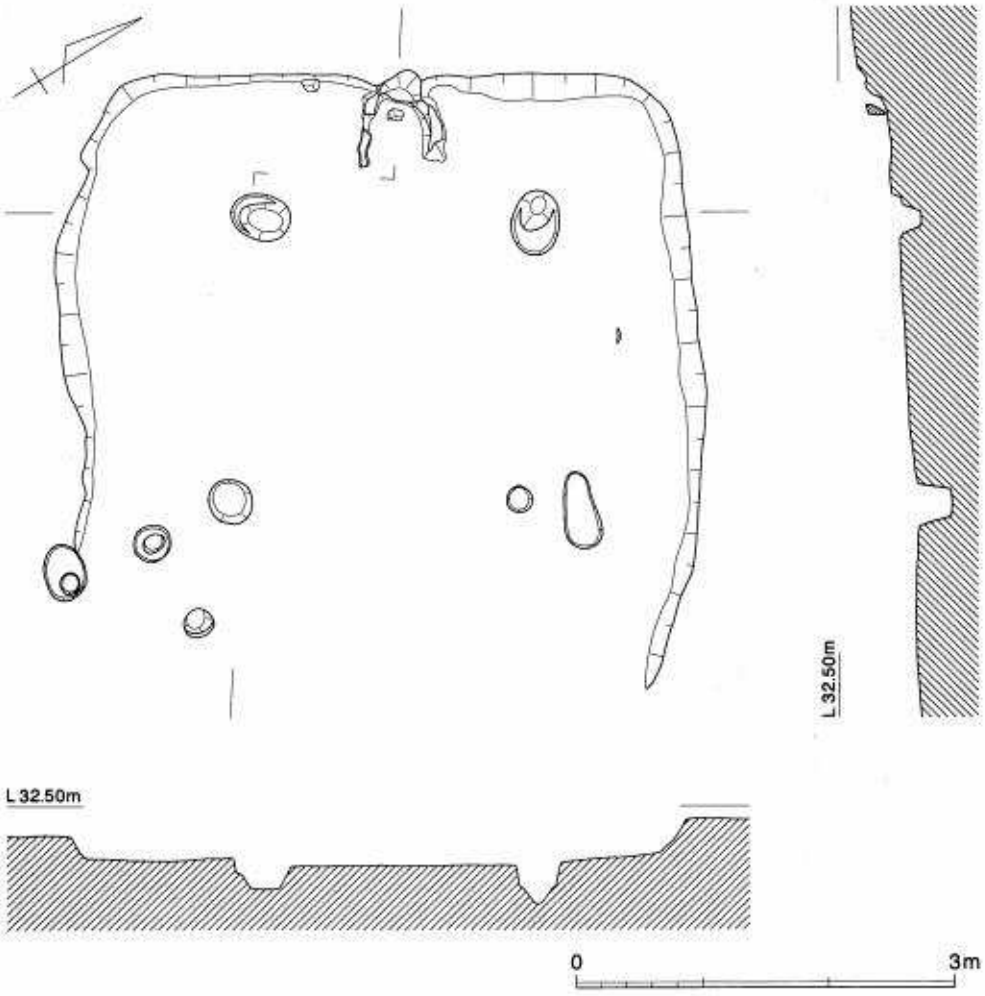
竪穴住居址３（第26図）

今回検出した住居址の中では、最も北に位置する住居址で、調査区内では斜面上方側の約１/２が検出されている。残りの部分は調査区外となり、検出できなかった。

検出できた部分は、南北約4.23m、東西約1.85m測り、残存壁高は最高部で約16cmを測る。ただ北壁は崩れており、住居址本来の規模は南北4.0m、東西1.85m以上であったと思われる。

平面形は方形を呈し、床面上からは柱穴等は確認出来なかった。また床面には礫が多く含まれ、床面は斜面下方側に緩く傾斜している。

住居址埋土からは須恵器杯身等が出土している。



第27図　竪穴住居址４

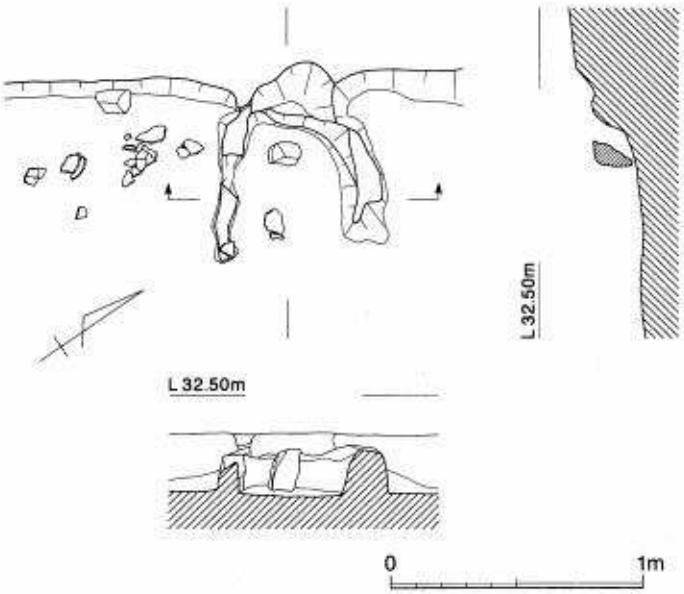
竪穴住居址４（第27・28図）

住居址11・12を切った状態で検出された住居址で、斜面下方の南壁はすでに流失しており、検出できなかった。

住居址の規模は南北約3.7m、東西約5.0m以上を測り、斜面に直交する側を長辺とする長方形プランを呈する。南壁が検出できなかったため、南北の規模を知り得る術もないが、柱穴の位置からみて、南北の規模はほぼこの５m前後であったと思われる。

壁下には壁溝等は見られず、残存壁高は最高部で約18cmを測る。床面は斜面上方側から下方側に向かって、やや傾斜している。

四本柱の構造をもつ住居址で、南東隅の柱穴の径が小さいが、これは竪穴住居址11・12と切



第28図　竪穴住居址４カマド

り合っている関係で、検出しにくく、住居址11の床面で検出したためである。

斜面上方側の壁中央には竈が作り付けられており、竈の規模は焚口約50㎝、奥行き約50㎝で、焚口の奥には約20㎝大の礫が立てられていた。礫は支脚として利用されたものであろう。竈内には焼土、炭化物が堆積していた。竈の壁は黄褐色粘土をU字状に積んで構築しており、最高約18㎝の高さまで確認された。竈の両側には黄褐色粘土が広がり、竈の壁が流失したものと判断された。焚口の奥から屋外に向かって、煙道が約20㎝まで確認された。

竈両側の床面には遺物が多く、須恵器杯、土師器甑・甕が出土している。その他床面から、製塩土器等の遺物が出土している。

竪穴住居址６（第29図）

この住居址は北西隅だけが検出された住居址で、周辺の斜面とはほぼ45°の向きとなることから、住居址がどうか疑わしかった。しかし内部から土器が出土したことや、コーナー部に貯蔵穴とみられる土壙が検出されたことから、一応住居址と判断した。

検出できた部分での規模は、南北約2.8ｍ、東西約2.8ｍを測る、方形の住居址である。残存壁高は最高部で約12㎝を測る。

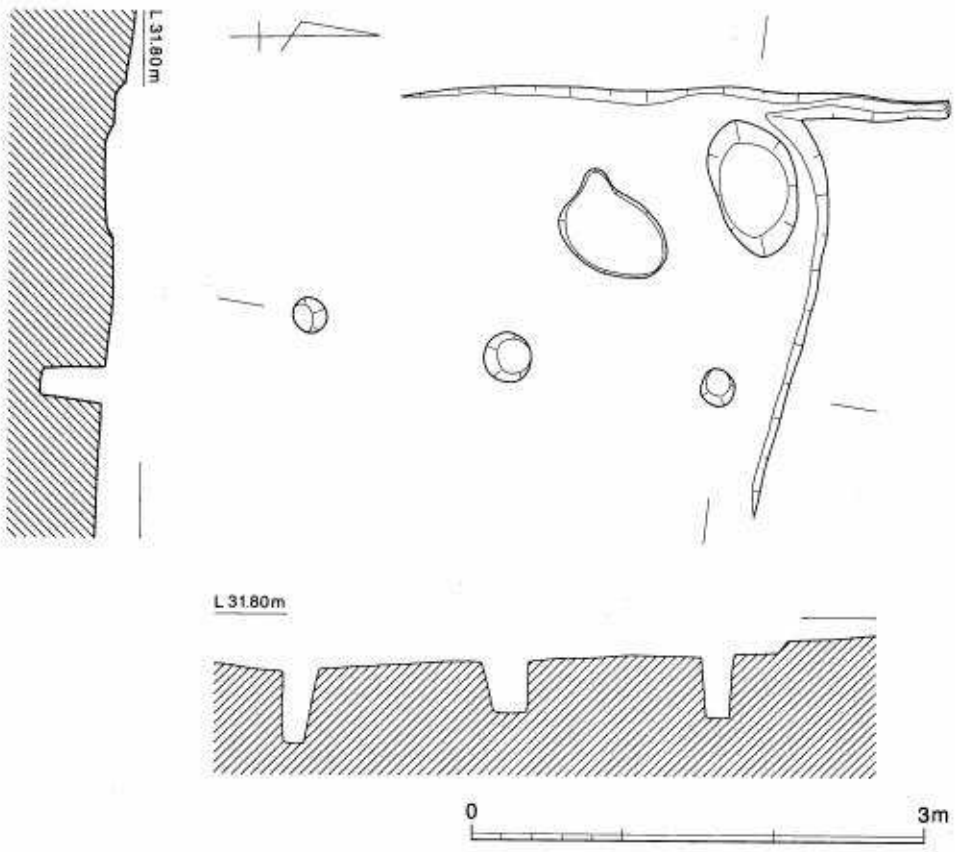
床面上からは柱穴３本が検出されたが、柱穴の位置から見て、主柱穴は２本と考えられる。住居址コーナー部には、長径90㎝、短径約55㎝、深さ約10㎝の土壙が検出された。その位置から住居址に伴う貯蔵穴と思われる。

また住居址床面上には焼土が見られ、土師器高杯の脚片が出土している。

竪穴住居址７（第30・31図）

最も斜面下方で、竪穴住居址８を切った状態で検出された住居址で、斜面下方側の壁はすでに流失しており、検出できなかった。

このため、住居址全体の規模を把握することはできなかったが、住居址の規模は東西約4.0ｍ、



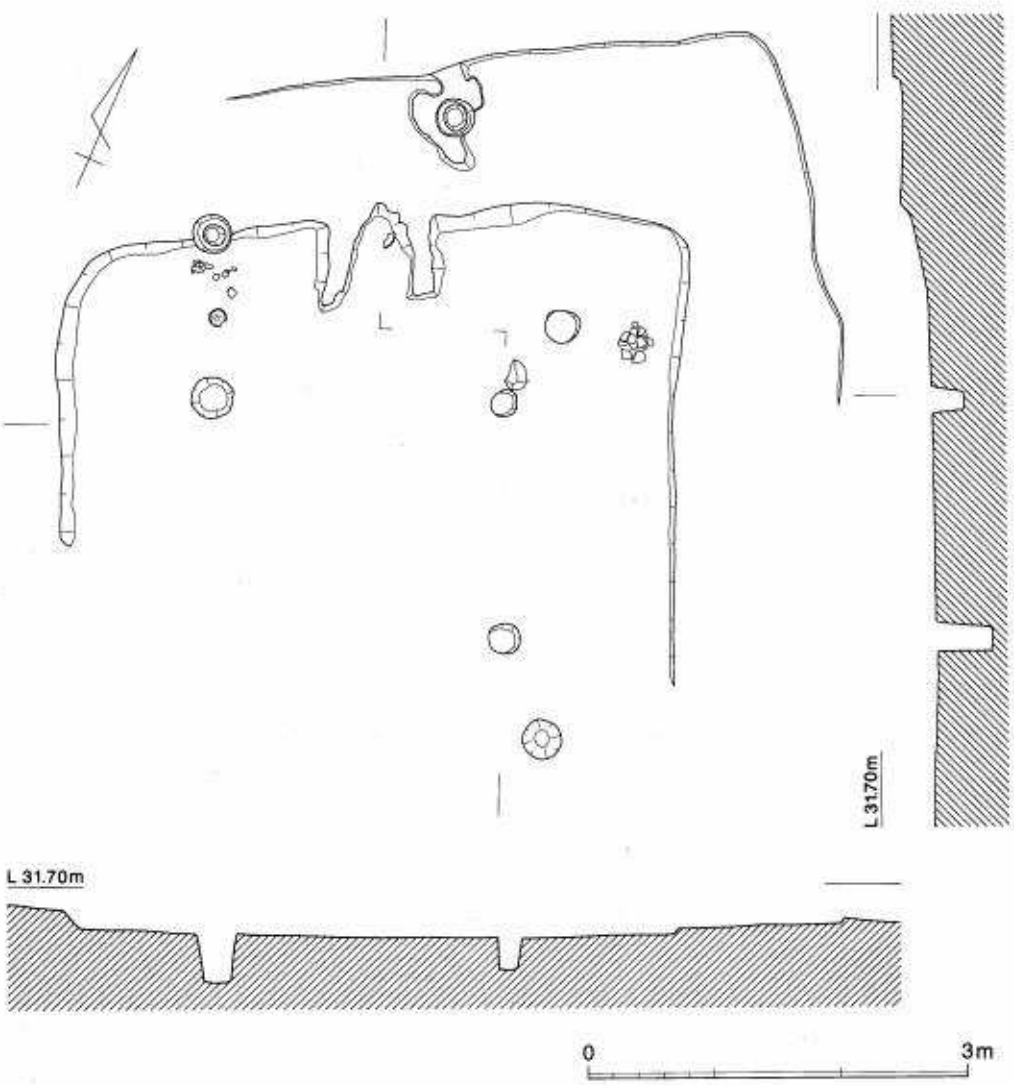
第29図　竪穴住居址6

南北約4.0m以上を測る、方形の住居址である。残存壁高は最高部で約10cmを測る。

床面上からは柱穴5本が検出されたが、住居址の主柱穴と判断されるものは3本である。南西隅の柱穴は検出できなかったが、おそらく住居址本来の主柱穴は4本と思われる。

斜面上方側の壁中央には、竈が作り付けられており、竈の焚口約55cm、奥行き約80cmを測る。竈の壁は、住居址の壁とほぼ直交させ、内側だけをU字形を呈するように、黄褐色粘土を積み上げて構築されており、壁高は最高部で約10cmまで遺存していた。焚口内には焼土と炭化物が充満し、土師器の甑・甕が出土した。

竈両側の床面上にはかなり遺物が遺存しており、特に竈西側の床面上からは須恵器杯・土師器甕類が出土している。また小片であったが製塩土器も出土している。



第30図　竪穴住居址７・８

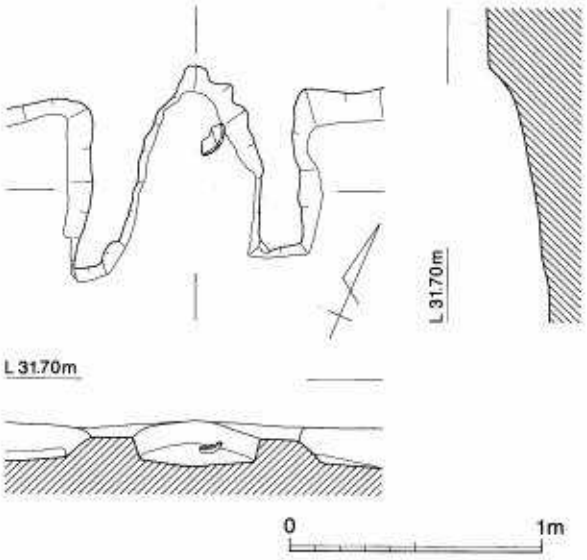
竪穴住居址８（第30図）

竪穴住居址７に切られ、また削平を大きく受けて、遺存状況が悪い。そのため斜面上方側の壁とそれに直交する東壁だけが検出された。

住居址７とは壁をほぼ平行させ、斜面上方側の壁は約4.4ｍ、東壁は約3.05ｍまで確認された。本来の規模はこれ以上あったことは確実だが、斜面上方側の壁際に検出された焼土を竈とすると、竈は東から約2.5ｍの位置にある。他の住居址の竈は住居址のほぼ壁中央となっており、この住居址も例外でないとすれば、住居址の東西の規模は、５ｍ前後であったと思われる。遺存していた壁から平面形は方形を呈していたものと思われる。残存壁高は最高部で約８㎝を測る。

斜面上方側の壁中央には焼土化した黄褐色粘土が、住居址の壁に接し、南北約80cm、東西約60cmの範囲に見られ、遺存状況が悪く、竈として検出することは出来なかった。しかしその位置、黄褐色粘土を使用していること等から竈として判断してよいものと思われる。

床面上からはほとんど遺物も出土せず、住居址に伴うピットも検出できなかった。



第31図　竪穴住居址７カマド

竪穴住居址９

調査区の最も西端で検出された住居址で、他の住居址が東南向きの斜面に位置するのに対し、この住居址は段丘の頂部、尾根状となった所に位置する。住居址の大半は調査区西側の現道下となり、住居址の北東隅付近だけが検出されたに過ぎない。また壁等が崩れていたため、調査当初住居址とは気づかず、調査区西側の壁の断面観察で住居址と確認されたものである。

平面で検出していないため、規模ははっきりしないが、南北約4.8m、東西約1.5m以上を測り、平面形は方形を呈する住居址であったと思われる。

柱穴等は検出出来なかったが、土師器の甕と完形の製塩土器が出土している。

建物址１（第32図）

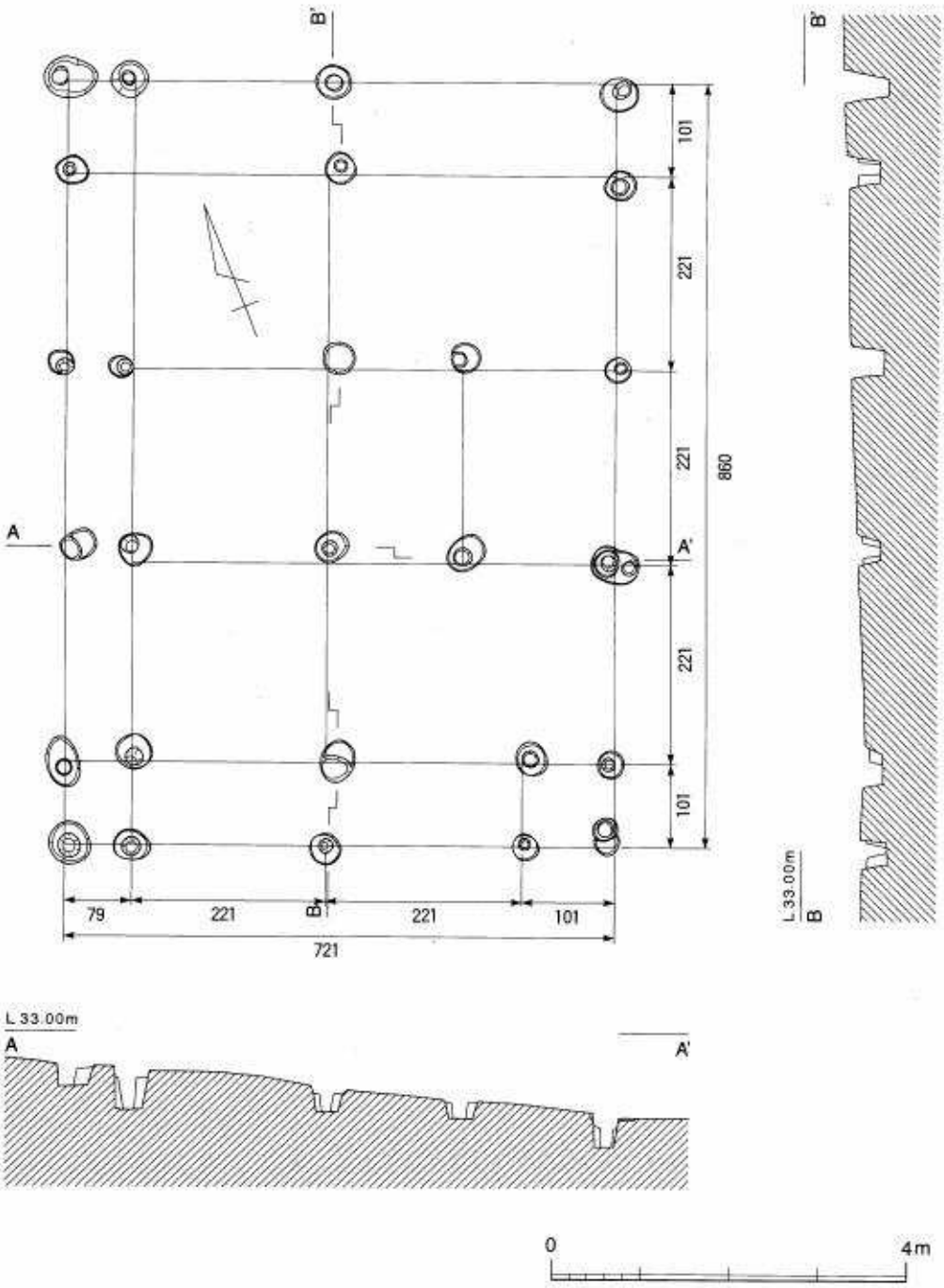
竪穴住居址12と切り合って検出された建物址で、本来は包含層上面に営まれた遺構であるが、その面では検出できず、竪穴住居址等と同一面で検出した。

この建物址は棟方向をＮ22.5°Ｅに置き、斜面下方側を除く三面に庇が付く、南北３間（8.6m）、東西２間（7.2m）の建物址である。北西隅柱は検出されていないが、柱掘形は円形で、径20～50cmと不揃いであり、身舎と庇といった区別はされていない。

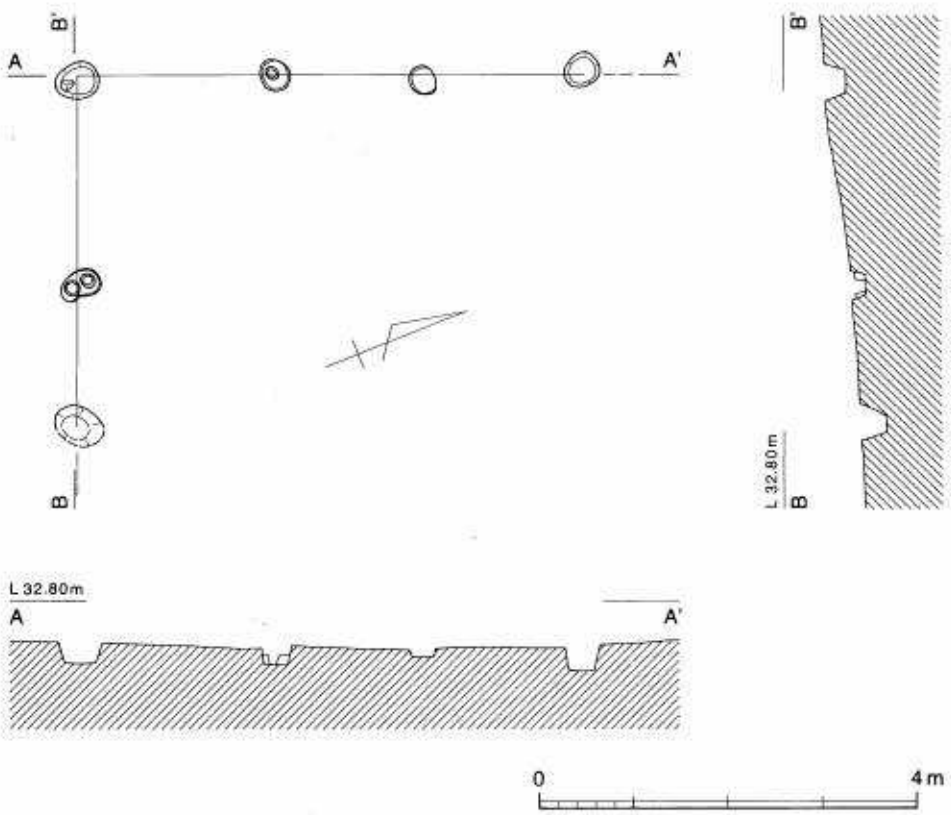
桁行柱間は約221cm等間隔であるが、梁行柱間は棟西側が桁行と同間であるが、棟東側は約322cmを測り、ほぼ１間半をとっている。身舎と庇の柱間は、身舎北側と南側は同間で約101cmを測るが、西側は約79cmと狭くなっている。

梁行の北から第２・３柱穴列の東柱間の中央には柱穴があり、間仕切り等が設けられていたものと思われる。

柱掘形内からは瓦器等が出土している。



第32図　建物址１（柱間の数値はcm単位）



第33図　建物址２

棟は建物の中心から西に寄っていることから、上部構造である屋根の勾配は棟の東側が緩い勾配となり、西側はそれより急な勾配であったと思われる。したがってこの建物は斜面下方側にあたる東側に正面を向けた建物であったと思われる。

建物址２（第33図）

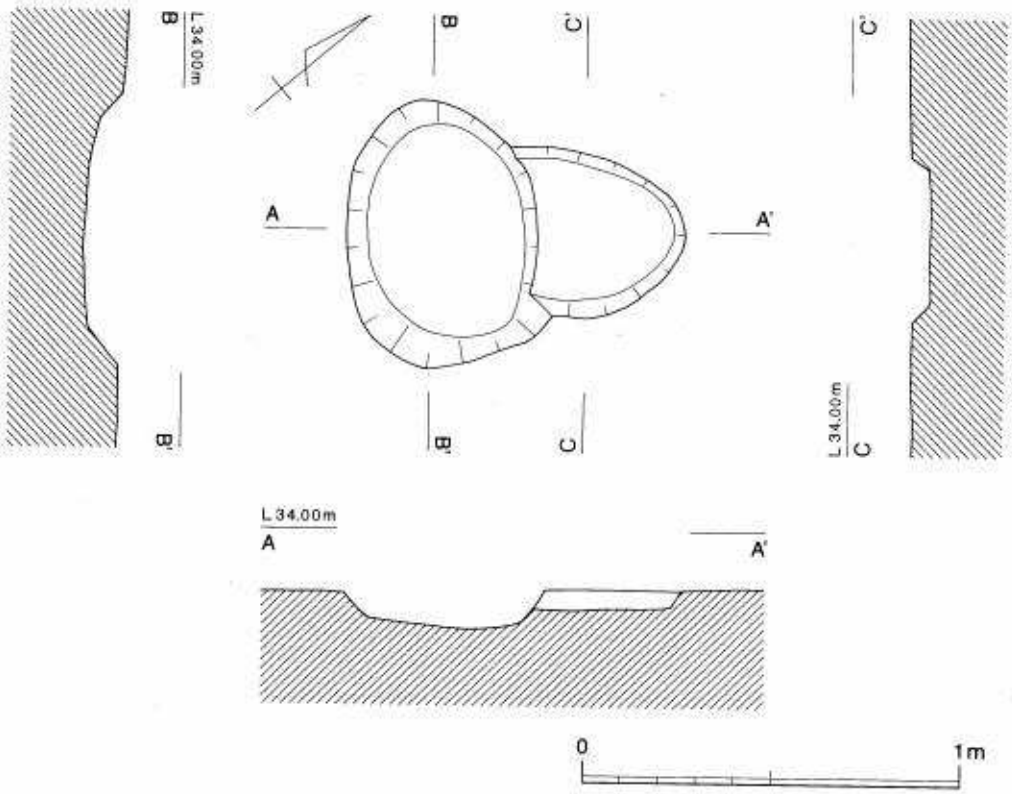
調査区北端付近でＬ字形に検出され、一部の柱穴は竪穴住居址３の埋土上面で検出された。調査区内では南北３間（4.4ｍ）、東西２間（3.7ｍ）まで確認でき、東西については調査区外となるため検出できていない。

南北の柱間は、南脇間が広く約210㎝、他は約160㎝を測る。東西の柱間も西脇間が広く約220㎝、他は150㎝を測る。

このように柱間は揃っておらず、また南北柱穴列の伸びも調査区内で追求したにもかかわらず確認できなかった。こうしたことから建物址とするには疑問の残るものである。

土壙１（第34図　図版29-222）

土壙２に切られた土壙で、全容を窺うことは出来ないが、検出できた部分での大きさは長径



第34図　土壙1・2

約40cm以上、短径約40cm、深さ約10cmを測り、楕円形を呈する土壙である。長径は本来70cm程度あったと思われる。内部の埋土には炭化物が多量に見られ、焼土も若干見られた。土壙内部には図化出来なかったが、常滑の大甕が埋納されていた。出土状況から大甕は横たえて、埋納されていたようである。ただかなり上部が削平されており、大甕も肩部から底部にかけての部分だけが遺存していた。

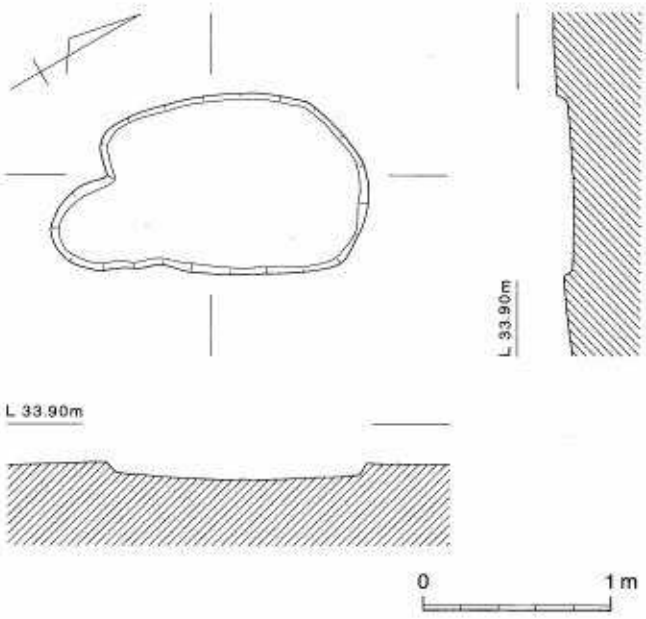
土壙2（第34図、図版29-223・224）

土壙1を切った土壙で、長径約70cm、短径約50cm、深さ約20cmを測る。平面形は楕円形を呈する。埋土は灰褐色シルトであり、炭化物が含まれていた。また図示できなかったが、備前焼の壺が出土している。

土壙4（第35図）

調査区のほぼ中央で検出されたもので、土壙とピットが切り合ったものと思われるが、前後関係は確認できなかった。

長径約140cm、短径約100cm、深さ約5cmを測り、南北に長い楕円形を呈する。内部には炭化



第35図　土壙4

物が充満し、周辺の遺構面上には焼土が認められ、土壙と関係するものと思われる。

土壙5（第36図）

調査区中央で検出された、長軸約250cm、短軸約90cm、深さ約25cmを測る。長方形の土壙である。底の断面は船底状となるが、遺物の出土は全く無かった。内部の埋土には少量の炭化物が含まれていた。当初木棺墓とも考えられたが、断面観察でも木棺の痕跡は見出されていない。

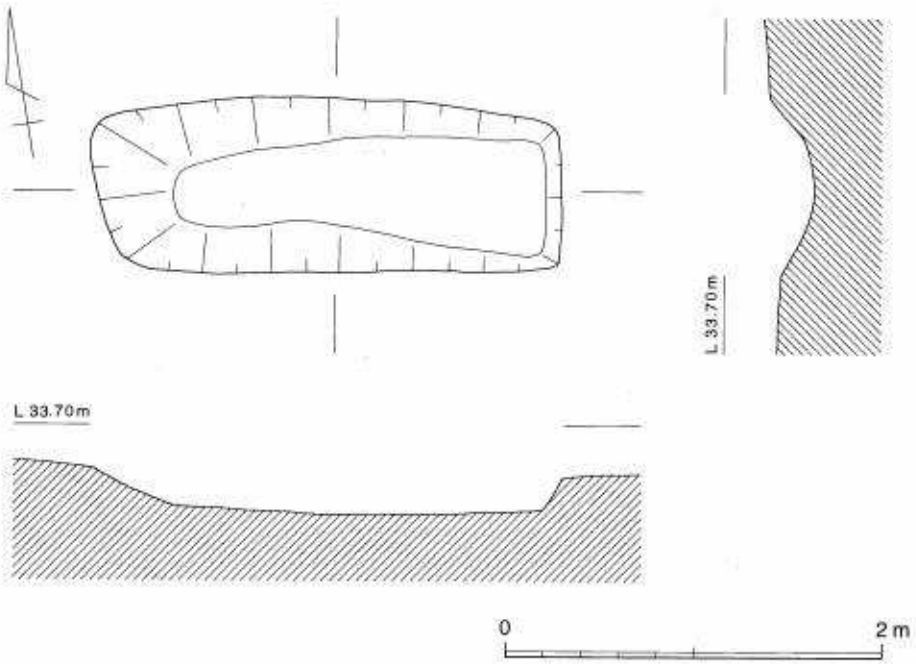
ピット群（第21図）

以上が今回検出された主な遺構の概略であるが、この他にも柱穴とみられるピットが相当数検出されている。これらは大きく、竪穴住居址1の斜面上方側、竪穴住居址4・11・12の西側、建物址1の北側3ブロックに分かれて検出されている。

この内建物址1北側のピット群は、径約15cm～40cmのピットからなり、多少建物址になる可能性のあるものも含まれている。建物址1の西約3.1mの距離をおいて、南北に柱穴4個と、その北端から直角に折れて、東に4個の柱穴が一直線状に並ぶ。これを柵状の施設として建物址1に伴うものと考えられないこともないが、間隔がまばらであり、そうした施設と判断することは難しい。また建物址1の北側に東西2間、南北1間の建物址状に柱穴が並んでいるが、これは歪みが大きく、これも建物址と断定するにはいたらない。ただそういった可能性のあるものとするにとどめたい。

竪穴住居址1の斜面上方ピット群は径約15cm～60cmのピットからなり、柱の痕跡が認められるものと、そうしたものが認められないものとがある。前者は柱穴としてとらえてよいものと思われ、若干並びが認められるものもあるが、いずれも直線状に並びが認められるだけであり、建物址として捉えることはできなかった。ただここの柱穴群は13世紀代～15世紀代のものがあり、建物址1北側の柱穴群に比較して新しいものまで含まれている。

竪穴住居址4・11・12周辺のピット群にも柱の痕跡がみとめられるものとそうでないものとがあり、柱穴としてとらえられるものは、竪穴住居址と切り合っていることもあって、建物址となる可能性のあるものも全く見出せなかった。このピット柱穴群は径約15cm～50cmのピット



第36図　土壙5

からなる。

Ⅲ区のピットは全く散在していただけであった。

3　遺物

遺物は各住居址・柱穴・土壙等の遺構内から出土したほか、斜面下方に遺存していた包含層からも出土している。ただ包含層は重機によって掘削したため、層位的には取り上げていない。

竪穴住居址12出土遺物

今回検出した遺構の中では、切り合い等からみて、最も古い遺構から出土した遺物類であり、土器の他に、石器・紡錘車が出土している。

土器（第37図・第38図62～65）

弥生土器甕・壺・高杯があり、第37図の土器は住居址の床面に遺存していたものである。60・61・63・64は甕で、60は中位がよく張った体部から屈曲して、外上方に開く口縁部をもつ。口縁部の内外面はナデ調整している。体部の外面上半は刷毛調整し、下半は下から上方向に篦削りをしている。体部内面はナデ調整である。底部外側には指圧痕が残る。61の体部外面は60と同様の調整であるが、内面は刷毛調整している。体部から外上方に開く口縁を有し、口縁端部は上下に拡張している。この2個体は胎土・色調ともよく似ている。63～65は口縁部から肩

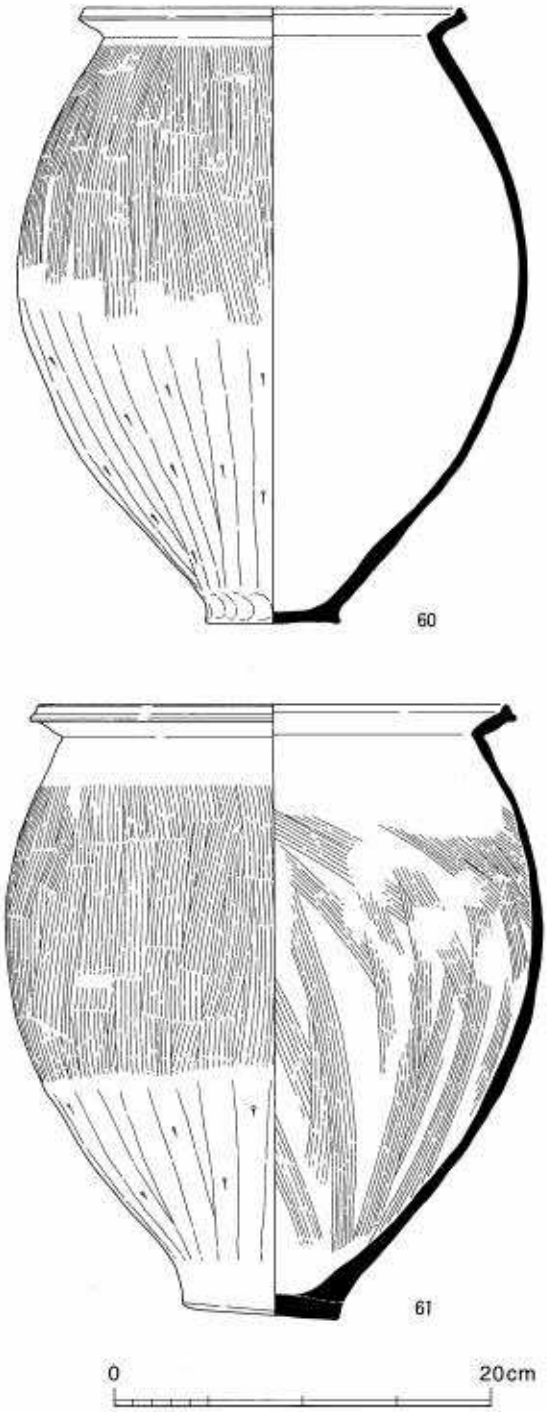
にかけての破片で、63は体部に櫛による刺突文がみられる。体部内外面とも刷毛調整である。64は体部から屈曲して外上方に開く口縁部を有し、口縁端部は肥厚して上下に拡張している。

壺は62の１点だけであり、外反しながら、外上方にのびる口縁部をもつ。口縁端部は上下に拡張している。ただ磨滅しているため、調整等は不明である。

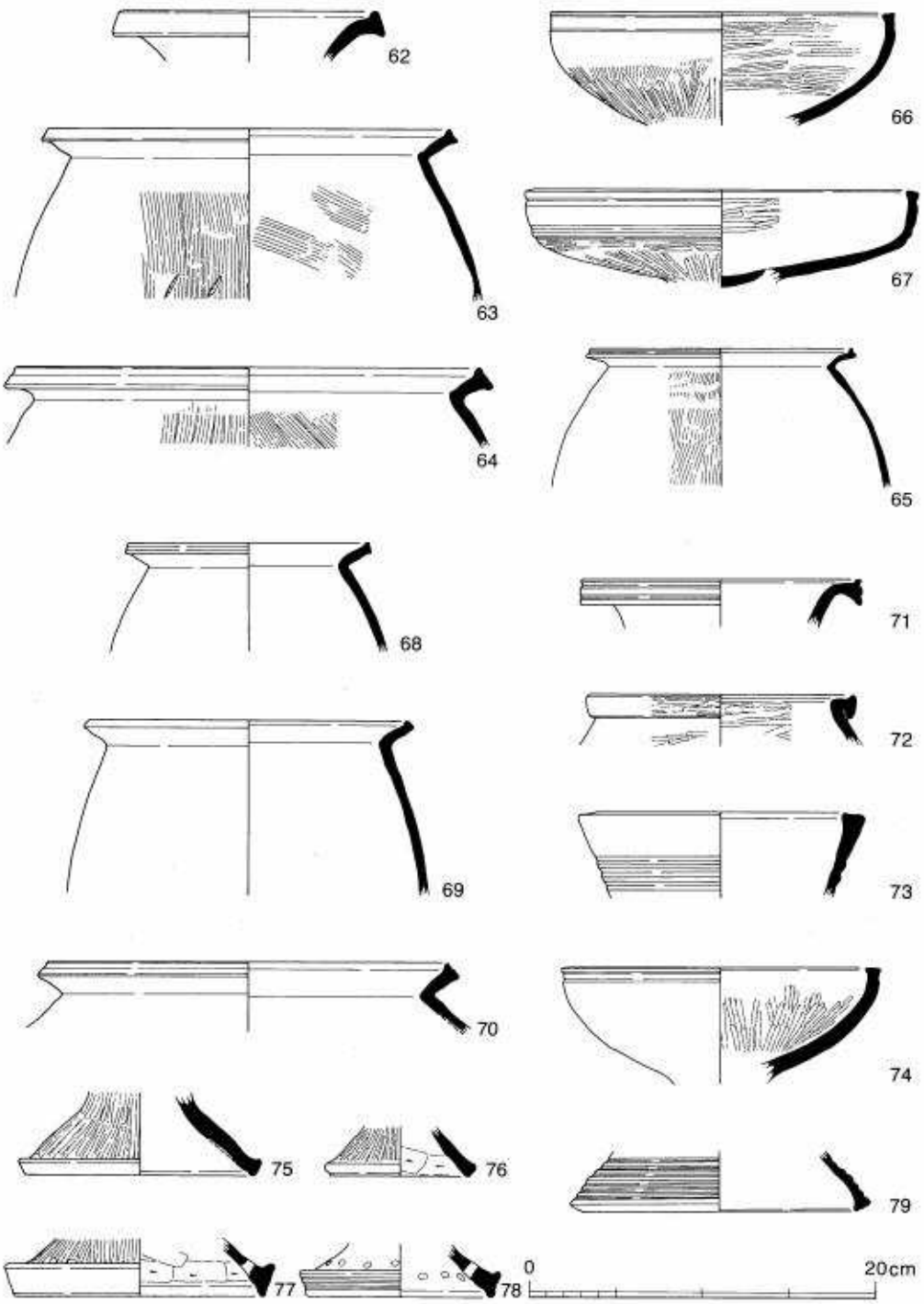
66・67は高杯あるいは鉢と考えられるものであり、66は内彎した体部がそのまま立ち上り口縁部となる。口縁部は巾の広い凹帯ともいえる、板状工具によるナデが施されている。体部の調整は磨滅しているためはっきりしないが、体部外面下半は篦磨き、上半は刷毛調整、内面は横方向に篦磨きしている。高杯か鉢かはっきりしない。67は高杯の杯部で体部から内彎しながら、ほぼ直立する口縁部を有する。口縁端部は内側に拡張し、端面をなす。口縁端部下に１条、体部と口縁部との境に２条の凹線を施す。内面と外面上方は横方向、外面下方は縦方向の篦磨きをしている。杯部と脚部の接合は円盤充塡法を用いている。

紡錘車（第39図）

甕形土器の破片を用いたもので、不整形であるが、約4.6㎝×4.2㎝の円形を呈し、厚さ約８㎜を測る。中



第37図　竪穴住居址12出土弥生土器



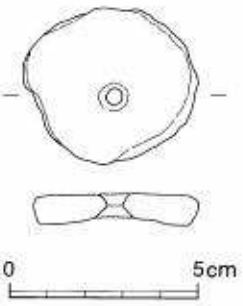
第38図　竪穴住居址11・12出土弥生土器（62～67-12号、68～79-11号）

央の孔は上端で約9㎜、下端で約5㎜である。

石器（第40図）

石器は楔形石器1点と小型のサヌカイト製剥片2点が出土している。

楔形石器はほぼ方形の平面形を呈するサヌカイト製の剥片を用いる。下縁から側縁の一部にかけては自然面が残る。素材剥片の両側縁を上・下の機能部とし、その一方には、階段状剥離が形成される以前に、両面に粗い調整加工を施している。完形で長さ4.7㎝、幅4.9㎝、厚さ0.9㎝、重さ26.8ｇを測る。



第39図　紡錘車

竪穴住居址11出土遺物

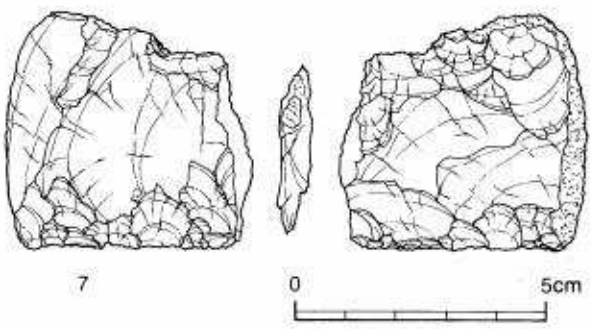
竪穴住居址12を切って検出された住居址で、弥生式土器の甕・壺・高杯・器台等の土器類と石器14点が出土している。

土器（第38図68～79）

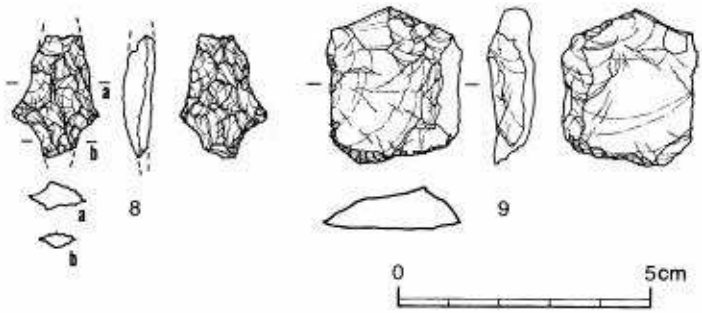
68～70は甕で、68と69は体部から屈曲して立ち上がる口縁部を有し、口縁端部を上方に摘み上げている。70は同じように体部から屈曲して立ち上がる口縁部を有し、口縁端部を上下に拡張している。いずれも磨滅のため調整等ははっきりしないが、68は体部の内外面ともナデ調整である。

71～73は壺で、71は広口壺である。外上方に開く頸部から、ほぼ水平に開く口縁部を有する。口縁端部は上下に拡張し、端面には二条の凹線文を施す。口縁部から頸部外面はヨコナデ調整し、内面は磨滅のため不明である。72は無頸壺で、体部から外方に水平に屈曲する口縁部を有する。口縁端部は、下方に折り曲げ、さらに端部上方をつまみ上げて、端面を形成している。口縁部・体部とも横方向の篦磨きをしている。73は外上方に開く頸部がそのままのびて口縁部を形成する。口縁端部は内上方に摘み上げ、端面をなす。頸部外面には3条の凹線文を施す。

74から78は高杯で、74は杯部である。内彎する体部がそのままのびて、口縁部となる。口縁端部は内側に拡張して端面をなす。磨滅のため調整ははっきりしないが、内面は縦方向に篦磨きしている。75～78は高杯脚部で、75・77・78は脚端部を上方に拡張している。78の脚端面には3条の凹線文を施している。また77と78には脚裾に円形の透し孔がみられる。調整はいずれもはっきりしないが、76と77の内面は篦



第40図　竪穴住居址12出土石器



第41図　竪穴住居址11出土石器

削り、75・76の外面は篦磨きしている。

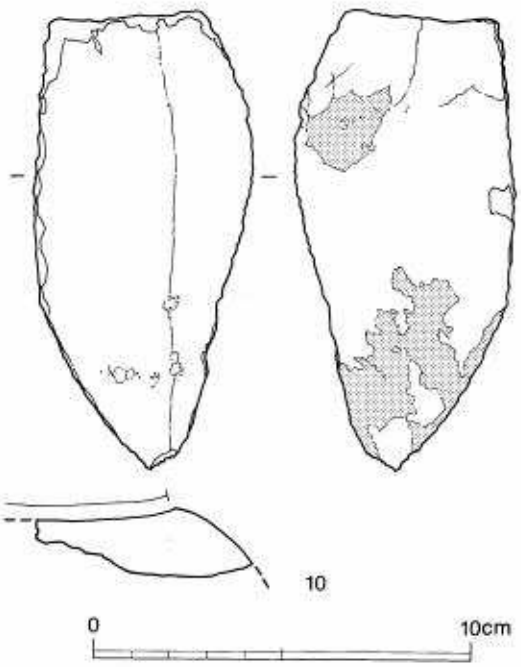
78は器台脚部で、端部は内側に拡張して端面をなす。裾部には6条の凹線文を巡らす。これも磨滅のため調整ははっきりしないが、外面はナデ調整している。

石器（第41・42図）

石器としては石鏃・楔形石器・砥石が各１点、剥片11点がある。剥片は全てサヌカイトを用いており、薄手で３㎝を越えない小型のものが多い。

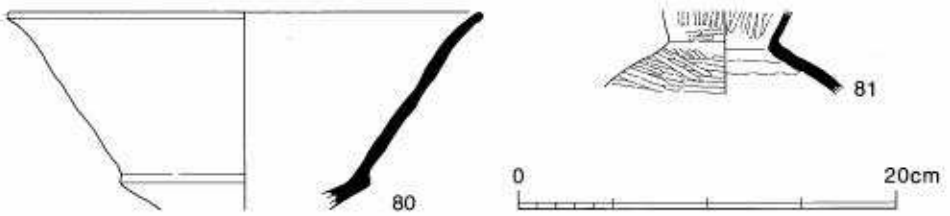
８の石鏃は凸基有茎式で先端部及び茎部の末端を欠損する。調整加工は両面の全体に施されるが、やや粗雑で、そのため若干厚手となっている。サヌカイト製で現存長2.4㎝、幅1.7㎝、厚さ0.6㎝、現存重1.7ｇを測る。

９の楔形石器は平面形がほぼ正方形を呈し、縦断面形が楔形で、上・下縁に階段状剥離の集中が見られる典型的なものである。腹面は主剥離面が大部分を占める。一方の側縁には截断面が残る。サヌカイト製で、完形であり、長さ3.1㎝、幅3.2㎝、厚さ0.9㎝、重さ7.6ｇを測る。



第42図　竪穴住居址11出土石器

10の砥石はきめが細かく、粒子の揃った砂岩を用いている。大型品が受熱のために破砕した破片である。本来の表面であった部分は黒灰色を呈し、約1/2に良好な砥面が残る。裏面は淡橙褐色を呈する破砕面である。この面の形成後に手持ちの砥石として再利用されたらしく、その一端約1/3に新たな砥面が形成されている。現存長12.0㎝、現存幅5.8㎝、現存厚1.9㎝、現存重122.0ｇを測る。



第43図　竪穴住居址1出土土師器

竪穴住居址1出土遺物（第43図）

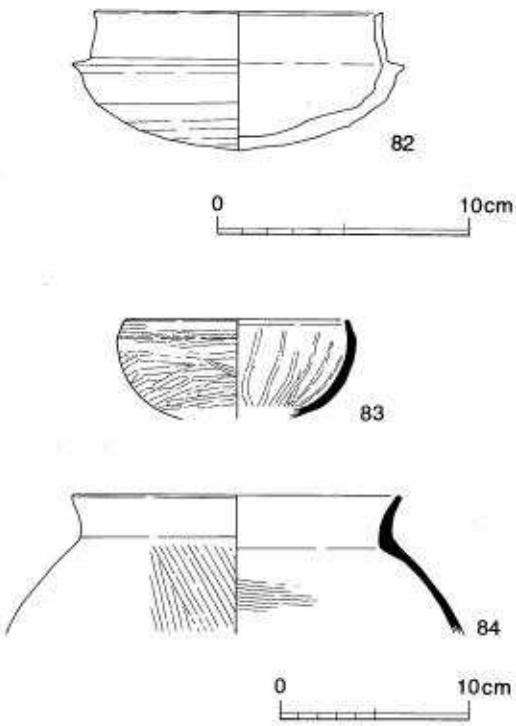
土師器の高杯・壺の2個体だけであり、須恵器は伴っていない。80は高杯杯部で、口径に対して深い杯部をもち、体部と口縁部との境には稜をもつ。口縁部は体部から外上方に開きながら立ち上がる。端部は丸く納められ、体部外面は篦磨きしている。81は壺の頸部から肩部にかけての破片で、よく張った肩部から外上方に立つ頸部が付く。口縁部を欠くが、おそらく頸部がそのままのびて口縁部となり、体部は球形になるものと思われる。頸部は内外面とも縦方向の篦磨き、体部外面は横方向の篦磨き、体部内面はナデ調整している。

竪穴住居址2出土遺物（第44図）

須恵器の杯身、土師器の甕・杯が出土している。

82は須恵器の杯身で、受部はほぼ水平にのび、受部から内傾してたちあがる口縁部は、上半で外反してほぼ直立する。口縁端部は内傾して凹面となる。外面の篦削りは左回りで、体部の約3/4に及ぶ。

83は土師器杯で、内彎する体部がそのまま内傾して口縁部となる。口縁端部は丸い。口縁部は内外面とも横ナデ、体部外面は横方向の篦磨き、体部内面はナデ調整の後、放射状の暗文を施している。84は甕で、あまり肩の張らない体部から、屈曲して立ち上がる口縁部がつく。口縁端部は丸く納め、体部内外面ともに刷毛調整である。



第44図　竪穴住居址2出土須恵器・土師器

竪穴住居址３出土遺物（第46図85・86）

須恵器の杯蓋・身を中心に土師器の甕等も出土しているが、図示し得たのは須恵器杯蓋・身の２点だけであった。85の蓋は天井部の境に鈍い稜をもち、口縁部下端は外方に開き、口縁端部は凹面をなす。86の杯身はほぼ水平の受部から内傾してたちあがる口縁部を有し、口縁端部は丸く納めている。

竪穴住居址４出土遺物

この住居址からは竈周辺を中心に須恵器、土師器、製塩土器、鉄製品（鏃）が出土している。

土器（第46図87～94、第50図114～116）

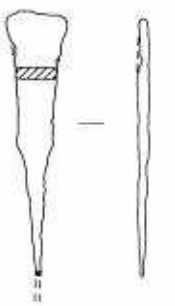
87・88は須恵器の杯蓋で、87は天井部から屈曲して口縁部となり、境は不明瞭な稜となる。口縁端部は外方へ開き、端面は不明瞭な段をなす。88は天井部と口縁部との境は不明瞭となり、口縁端部は丸く納め、端部内側に段をもつ。89～91は須恵器杯身で、89はやや外上方にのびる受部から内傾して立ち上がる口縁部が付く。口縁端部は丸い。90も外上方にのびる受部から、内傾して立ち上がる口縁部をもつ。体部外面の篦削りは体部の約１/２にとどまる。91は外上方に受部がのび、そこから内傾する口縁部が立ち上がる。口縁端部は丸く、体部外面の篦削りは底部周辺にとどまる。

92から94は土師器で92は甕である。張りの弱い体部に外反する口縁部が付く。口縁端部は丸く、中程に粘土紐の継ぎ目が見られる。体部外面は粗い刷毛調整。94は壺で、外上方に立ち上がる口縁部をもち、口縁端部は丸く納める。体部の肩の張りは弱く、ほぼ球形に近い体部となるものと思われる。口縁部の内外面は縦方向の篦磨き、体部の外面は横方向の篦磨き、体部内面はナデ調整している。93は土師器の甑で、長胴の体部がそのままのび口縁部となる。口縁端部はやや尖っている。体部中程に張りつけの把手が付く。把手は剝離しており、形状は不明だが、おそらく角状のものになると思われる。体部外面は刷毛調整、口縁部は横ナデ調整、体部内面はナデ調整である。

これら須恵器、土師器の他に第50図の114～116の製塩土器が出土している。他に数点出土しているが、小片のため図示できなかった。114は内傾した体部がほぼ垂直に立って口縁部となり、口縁端部は丸く納めている。器壁は薄く、内外面ともナデである。115と116はほぼ垂直に立つ体部がわずかに内彎して口縁部となり、端部は丸く納める。共に口縁部には所謂「こうら」が付着している。

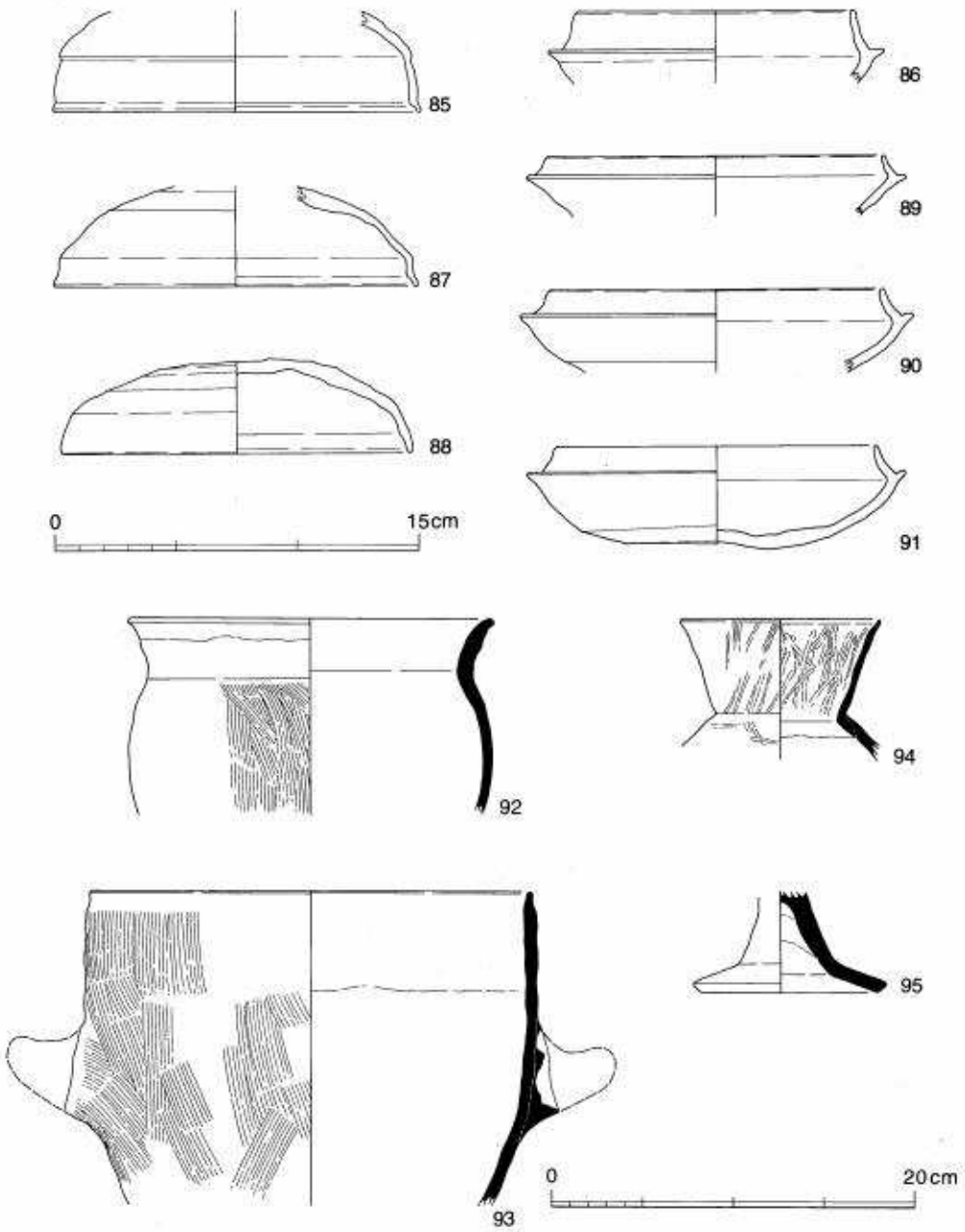
鉄器（第45図）

これらの土器類の他、鉄鏃が一点出土している。所謂鏨頭式の鏃身部をもつので、茎部の先端を欠く。残存長約10.2cm、鏃身部長約5.2cm・茎部長約5cmを測る。



第45図　鉄鏃

石器（第47図）

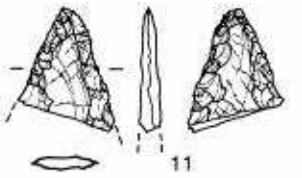


第46図　竪穴住居址３・４・６出土須恵器・土師器

（85・86-３号・87～94-４号・95-６号）

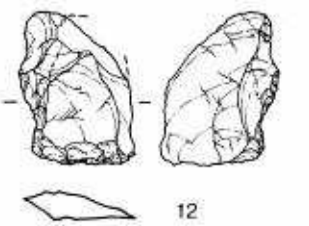
石器は4点が埋土から出土した。石鏃・楔形石器各1点と剥片2点がある。

石鏃は大形品の上半部である。両面とも周縁部のみに調整加工を施す。サヌカイト製で、現存長2.4cm、現存幅1.9cm、現存厚0.4cm、現存重1.5gを測る。



竪穴住居址6出土遺物（第46図95）

遺物量は少なく、図示し得たのは1点だけであった。95は土師器の高杯脚部で、ハの字状の脚柱部が、屈曲して外方に開き、裾部となる。裾端面はほぼ平坦である。内外面ともナデ調整、内面には粘土紐痕が残る。杯部は欠けているが、おそらく稜のない椀形の杯部となるものと思われる。



第47図　竪穴住居址4出土石器

竪穴住居址7出土遺物

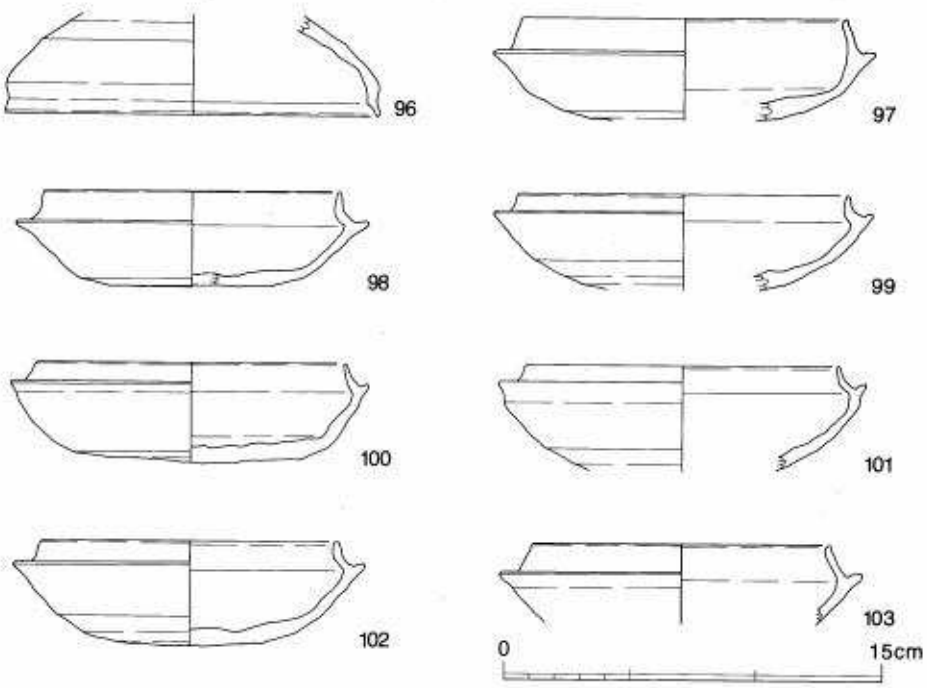
土器（第48図、第49図106・107、第50図109～113）

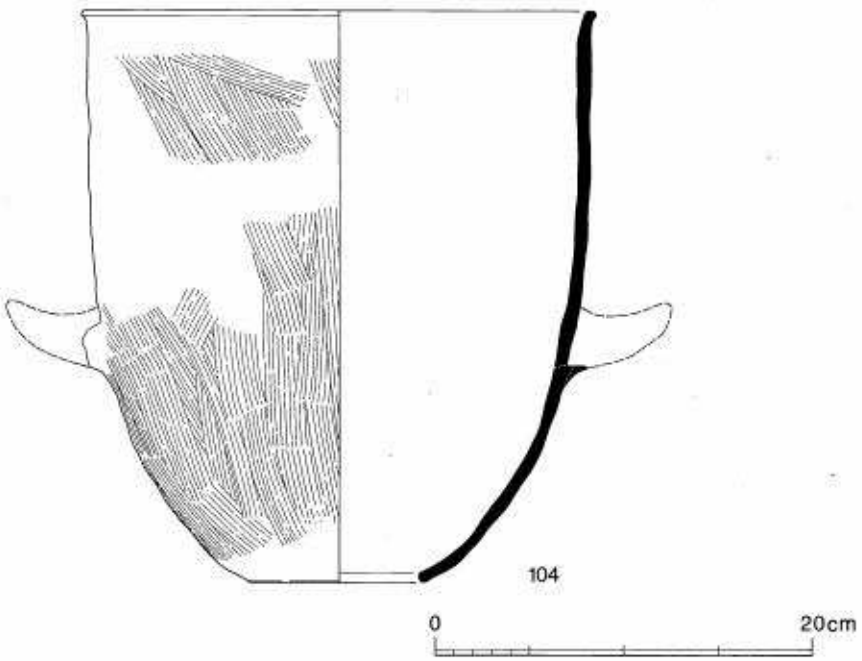
住居址の竈周辺から須恵器、土師器、製塩土器が出土した。

96は須恵器杯蓋で、天井部と口縁部の境は、肥厚させ、稜状としているが、明確ではない。口縁部は短く、端部は凹面となる。天井部は高く、外面の約1/2を篦削りする。97から103は須恵器の杯身で、2タイプが出土している。98～102は、一端受部から内傾して立ち上った口縁部が、中程からほぼ直立して立ち上がる。立ち上がりは低く、口縁端部は丸い。98の受部はほぼ水平であるが、他の受部は外上方にのびる。体部は浅いものと、比較的深いものがあるが、外面の篦削りは体部の1/2以下であり、98と100は底部周辺だけにとどまる。97・103は外上方にのびた受部から内傾した口縁部が立ち上がり、比較的立ち上がりが大きいものである。口縁端部は丸い。

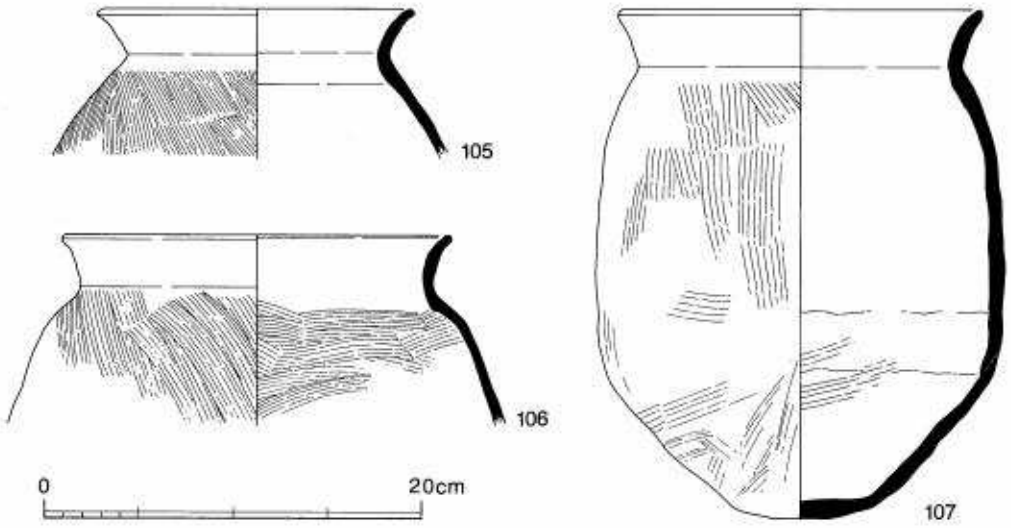
104・106・107は土師器であり、104は甑である。長胴の体部が外反して口縁部となり、口縁端部は面をなす。体部は下半ですぼまり、約9cmの孔となる。体部中程のやや下位には挿入式の把手が付く。把手は失っているが、おそらく角状のものと思われる。体部外面は刷毛調整、内面はナデ調整であり、口縁部は内外面ともナデ調整である。106と107は甕で、107は長胴の体部に、外上方に開いた後、外反する口縁部がつく。口縁端部は丸く、体部は全体に張りが弱い。体部下半で屈曲し、丸底の底部となる。体部外面は粗い刷毛調整、内面にも一部刷毛目が残る。106は比較的肩の張った体部から、外上方に開いた後、外反する口縁部が付く。口縁端部は丸い。体部の内外面ともに粗いナデ調整。

109～113は製塩土器で、体部から内側に屈曲して口縁部となる109、体部が内彎して口縁部となる110と111、体部がすぼまって頸部となり、体部と口縁部との区別がはっきりしているも



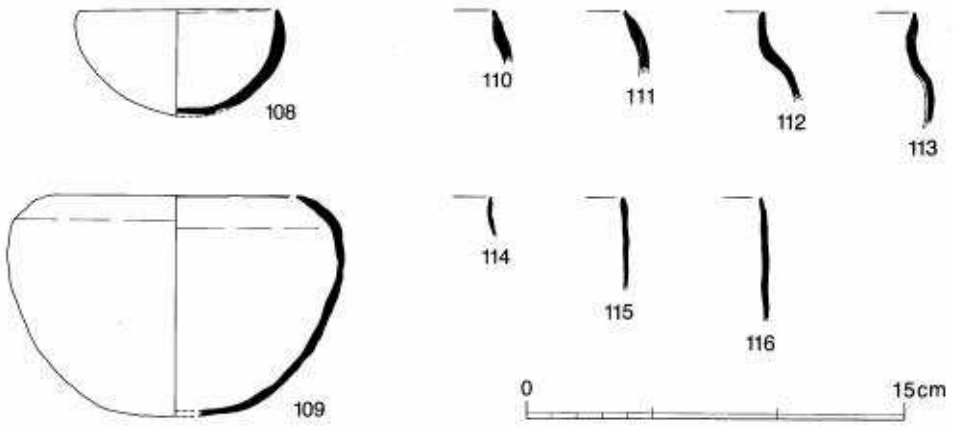


第48図　竪穴住居址７出土須恵器・土師器

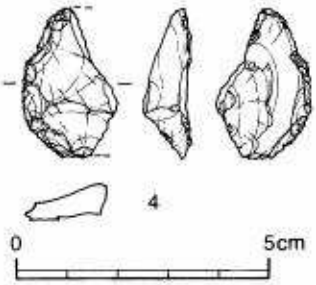


第49図　竪穴住居址７・９出土土師器（105-９号・106・107-７号）

の（112・113）の３タイプみられる。109は底部を欠くが、完形に近い形に復元できたもので、底部は丸底になると思われる。口縁端部は薄く、尖った状態であり、「こうら」が認められる。器壁は全体に薄く、二次焼成がみられる。内外面ともナデ調整し、おそらく椀形になるものであろう。112と113は体部がすぼまって頸部となり、そこから上方に口縁部が立ち上がる。112は口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、113はやや内傾して立ち上がった口縁部が外反して端部となる。ともに口縁端部は丸く、「こうら」の付着が認められる。体部は欠くが、おそらく丸くなるものと思われる。



第50図　竪穴住居址出土製塩土器（114～116-４号・109～113-７号・108-９号）



第51図　住居址７出土石器

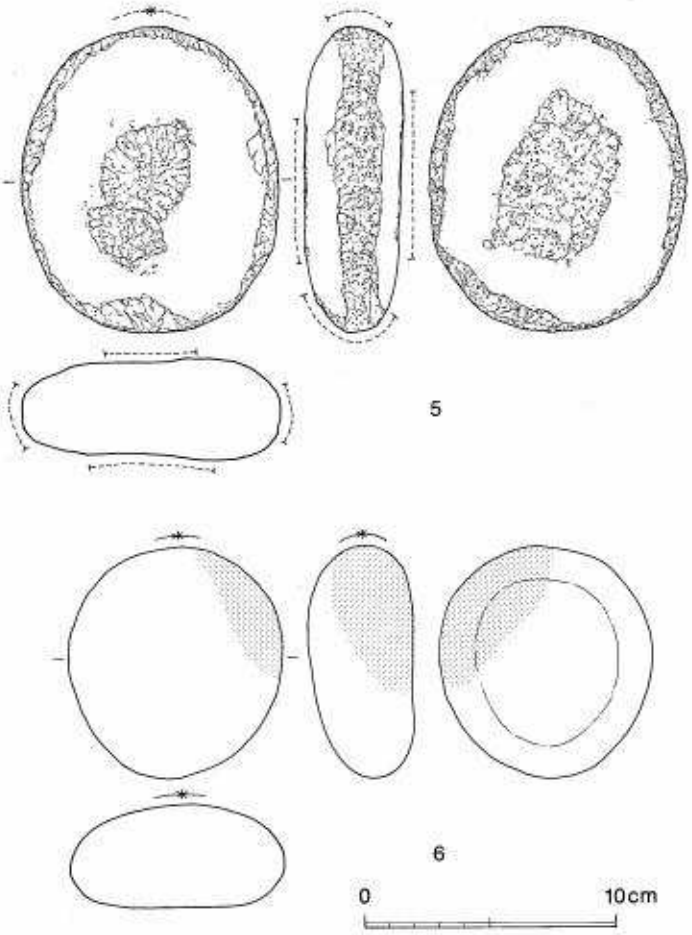
石器（第51・52図）

楔形石器・敲石・磨石各１点の石器が出土している。敲石と磨石は床面上から出土し、楔形石器は埋土中からの出土である。

楔形石器は横長剥片の両側縁を上・下の機能部とする。側縁には削器の刃部様の加工が施される。他方の側縁は二つの切断面によって構成される。サヌカイト製で、長さ3.0㎝、幅1.9㎝、厚さ0.9㎝、重さ3.6ｇを測る。

敲石は砂岩製の楕円礫を素材とする。両面及び全周には使用によるあばた状の敲打痕が明瞭に残され、両面中央には浅い皿状の凹部を、周縁の一部には平坦面を形成している。完形で、長さ12.2㎝、幅10.3㎝、厚さ3.9㎝、重さ723.0ｇを測る。

磨石は手に丁度納まるくらいの花崗岩製の自然礫を用いる。全体に表面は平滑で、片面はほぼ平坦になっている。図中に網点で示した部分には受熱の痕跡が認められる。完形で、長さ9.3㎝、幅8.5㎝、厚さ4.2㎝、重さ475.0ｇを測る。



第52図　竪穴住居址７出土石器

竪穴住居址９出土遺物（第49図105、第50図108）

土師器の甕と製塩土器が出土している。105は肩の張りが弱い体部から外上方に外反する口縁部が付く。口縁端部は丸く、口縁部の内外面ともヨコナデ調整している。体部は外面は斜め方向の刷毛調整、内面はナデ調整している。

108は体部がそのままのびて口縁部となり、口縁端部は丸い。口縁部の内外面には「こうら」が認められ、二次焼成されて、色調は赤く変色している。

土壙出土遺物（図版第29—222～224）

222は常滑の大甕で土壙1から出土している。頸部から上と底部を欠き、肩部から胴部にかけての破片である。外面は部分的に格子目の叩きが残り、内面は板ナデである。

224は備前焼の壺で土壙2から出土したものである。底部を欠くが、口縁部から胴部上半が残る。肩の張らない体部からほぼ直立した頸部が立ち上がり、口縁部はくずれた玉縁となる。体部の内外面ともに板ナデである。

ピット5出土土器（第53図）

竪穴住居址1の北方のピットで、その内部から土師器皿類と備前焼の壺が出土している。

117～120は小皿で底部は全て静止糸切りである。内外面ともナデ調整で、口縁端部はまるい。

121・122は土師器皿で、ともに底部は静止糸切りである。121は底部から内彎した体部が立ち上がり、そのまま口縁部となって、口縁端部は丸い。122は体部からやや屈曲して口縁端部となり、口縁端部は丸い。

123は備前焼の壺で、肩部に4本単位の櫛描き直線文を施す。頸部は直立し、折り曲げて玉縁の口縁部としている。底部は平底で、内面に一部刷毛目が残る。調整は全てナデ調整である。

その他のピット群出土土器

建物址に伴わないピットからも須恵器・土師器・磁器・備前焼等の土器類と金属製品が出土している。しかし小片が多く、図化できたものは僅かである。

土器（第54図）

124と125は須恵器の椀である。ともに底部は回転糸切りであり、底部内面には仕上げナデを施す。125は器壁が極めて薄く、焼きも甘い。

126と127は土師器の椀で、ともに底部は回転糸切りである。127の底部に高台が残る。ともにⅣ区のピットから出土したものである。

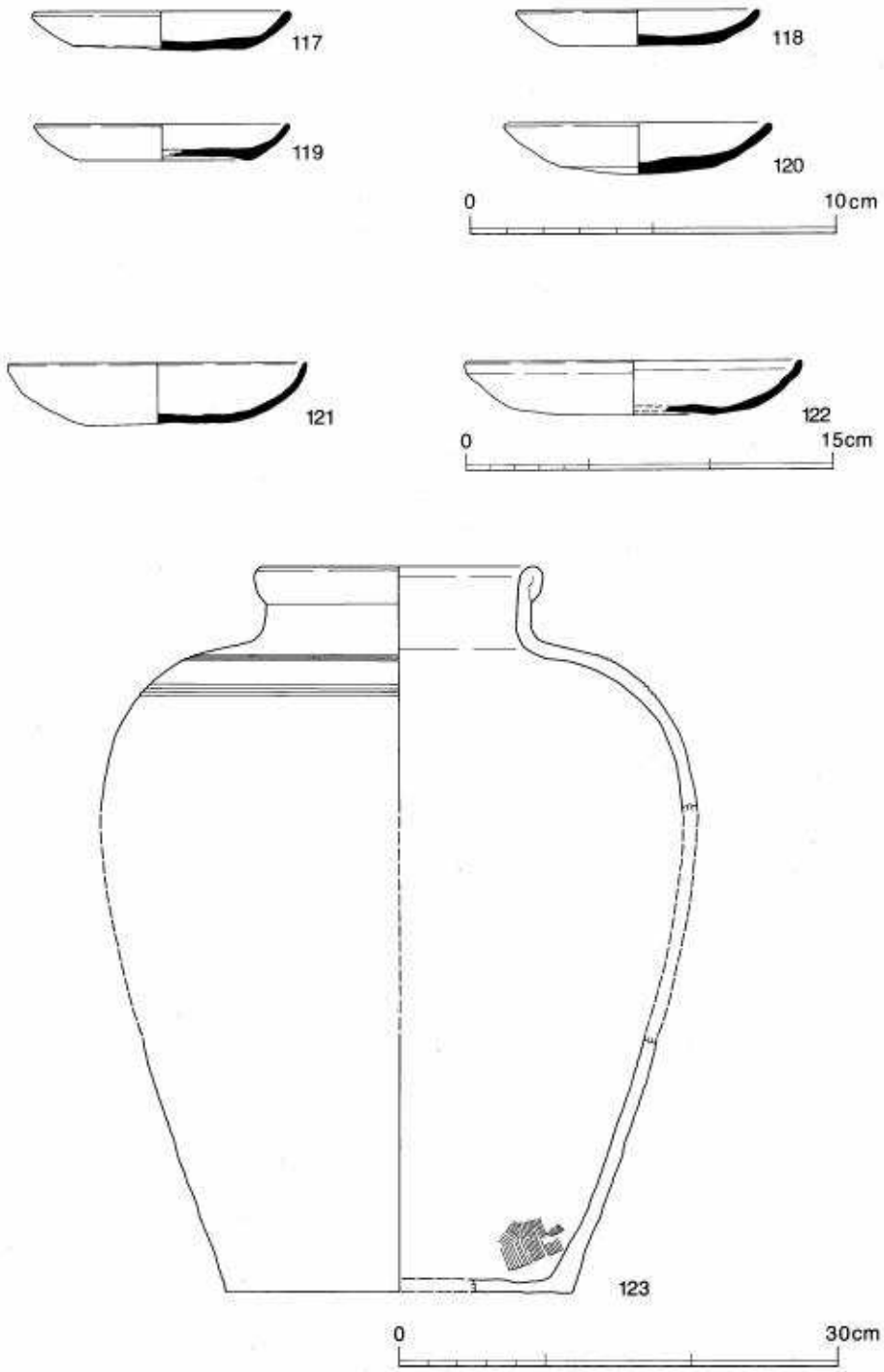
128は青磁碗で、鈍い青緑色を呈する。底部は削り出し高台で、露胎である。体部の外面には鏑蓮弁文を施している。

129は白磁碗で、底部は削り出し高台である。底部の内外面とも露胎で、Ⅴ区のピットから出土したものである。

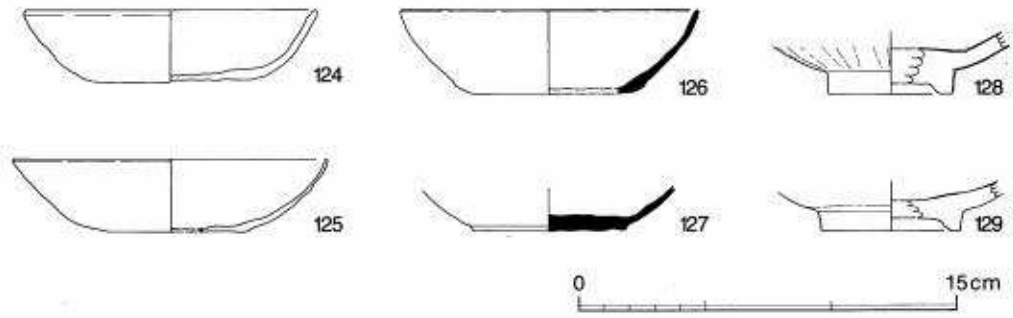
金属器（第60図9・10・13・15～18）

金属製品には銀製品と鉄製品とがあり、10は銀製の環状製品である。径約2.4cm、高さ約0.5mm、厚さ0.25mmを測り、上端を内側に折り曲げている。

9は鉄製の環状製品で、径約2.5cm、高さ約1.0cm、厚さ約1.0cmを測る。13・15～18は鉄釘で13は断面が四角く、頭部は広がり、下端は曲がっている。15の断面が四角いが、空洞となって

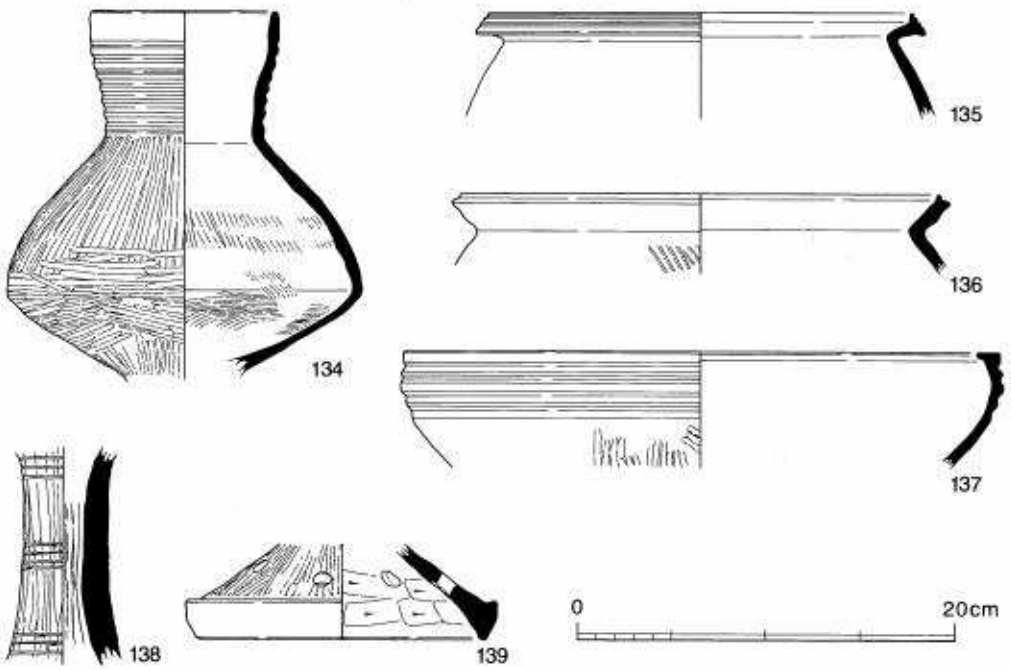


第53図　ピット５出土土器

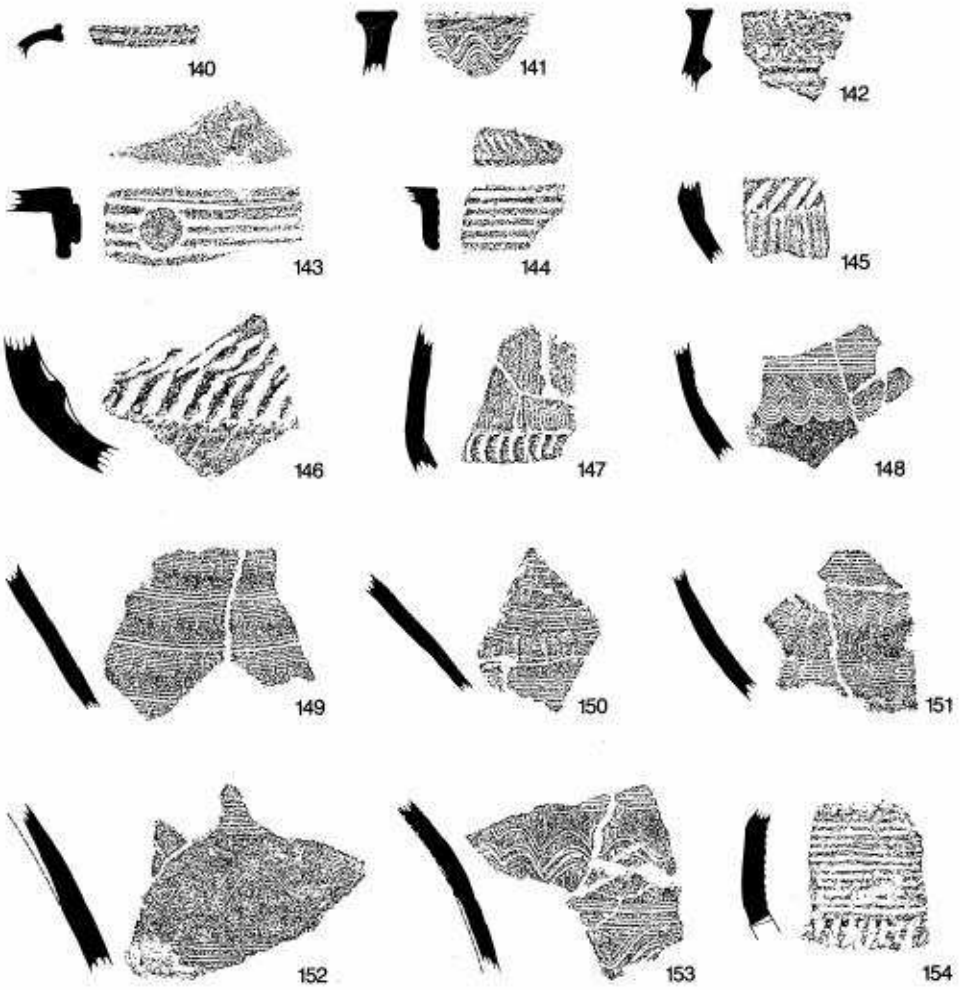


第54図　ピット内出土土器

おり、頭部は広がっている。16は断面四角く、下端は尖っている。頭部は広がり、頭部下で折れ曲がっている。17と18は一端を折り曲げて頭部としたもので、ともに断面は四角く、18の下端は尖っている。



第55図　包含層出土弥生土器



第56図　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区出土弥生土器拓影図

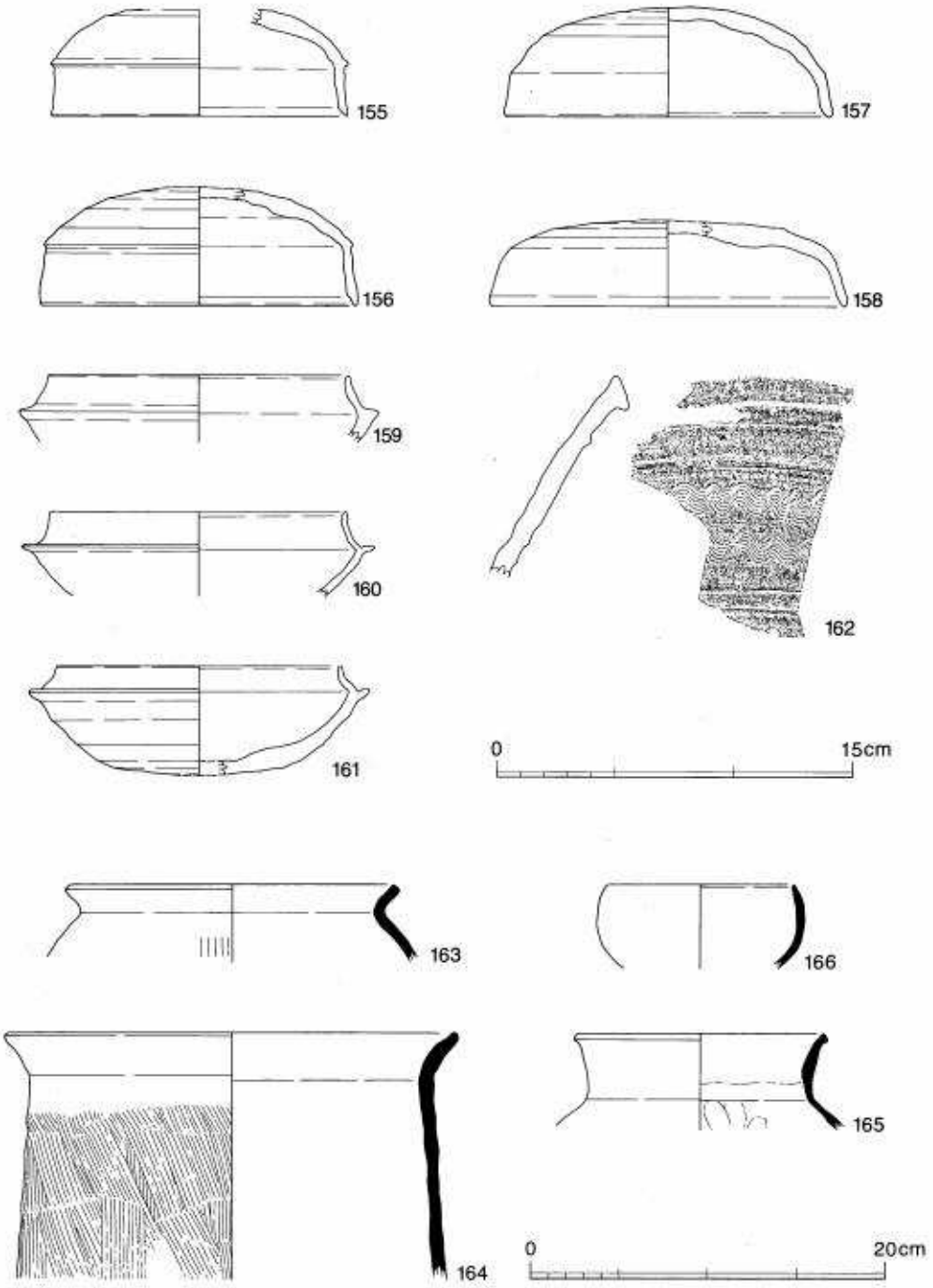
包含層出土遺物

包含層はⅢ区では認められず、斜面下方のⅣ・Ⅴ区の一部で認められた。包含層からは弥生土器・須恵器・土師器の他白磁・瀬戸・備前焼等の土器類と、鉄製品が出土している。

弥生土器（第55図）

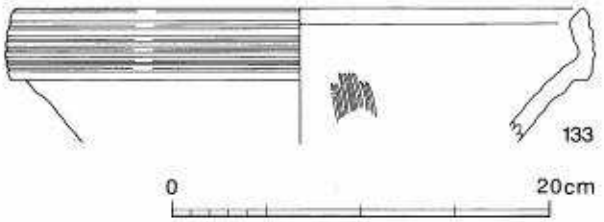
純粋に包含層から出土したものは134の一点だけで、他は住居址11・12の上面や中世のピット埋土内等から出土したものである。

134はⅤ区の黒褐色を呈する包含層から出土した壺である。体部下端は欠損しているが、おそらく脚台が着くものと思われる。算盤玉状の体部で、最大径を体部下半に置く。体部からやや外反ぎみに頸部が立ち上がり、上半で内彎して口縁部となる。頸部には７条の凹線文が施さ



第57図　包含層出土須恵器・土師器

れている。体部外面の調整は上半が縦方向の篦磨き、最大胴径付近はほぼ水平方向、下半は斜め方向の篦磨きである。体部の下端は縦方向の篦磨きをしている。体部の内面には上半にナデ、下半に刷毛調整が認められる。



第58図　包含層出土陶器

135と136は甕の口縁部片で、体部から「く」の字に開く口縁部をもつ。ともに口縁端部を上下に拡張し、135の口縁端面には凹線文を施している。各部の調整は、体部外面がともに叩きの後にナデ調整、内面はナデ調整である。

137は高杯の杯部で体部が内彎して口縁部となる。口縁端部は内側に拡張されて、水平な端面を有する。口縁部外面には凹線文が施されている。調整は体部外面が篦磨き、内面はナデ調整である。

138と139は高杯の脚部で、138は縦方向の篦磨きの後、3段に沈線文を施している。139は端部を上方に拡張した脚裾部片である。外面は縦方向の篦磨き、内面は横方向の篦削りし、円形の透し孔を6方に持つ。

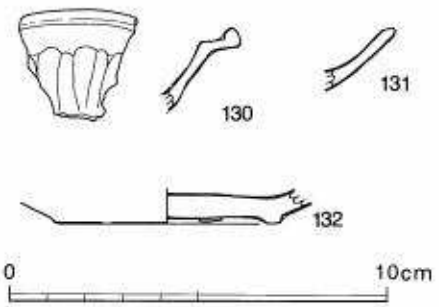
須恵器（第57図155～162）

155から158は杯蓋で、155と156は天井部と口縁部の境に稜をもつ。155は天井部と体部を分ける稜は明瞭で、口縁端部は内傾する面となる。天井部の篦削りは左回りであるが、その範囲は天井部の1/3に止まる。156は天井部と口縁部を分ける稜が鈍くなり、口縁端面は鈍い段をなす。天井部の篦削りは、天井部の3/4に及ぶ。157と158は天井部と体部を分ける稜は無くなり、不明瞭となる。口縁端部も丸く納める。しかし天井部外面の篦削りは157が2/3、158が4/5と広範囲に及ぶ。

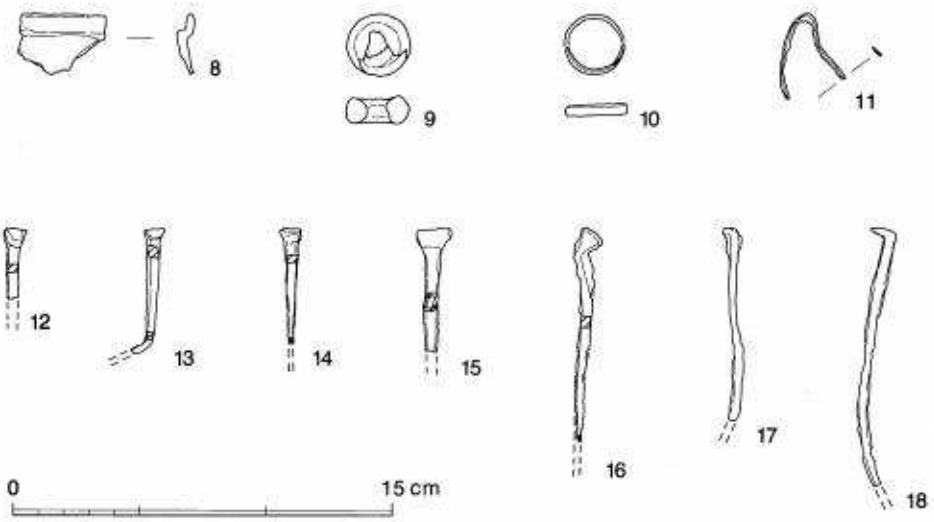
159から161は杯身で、159はほぼ水平の受部から、口縁部が内傾して立ち上がる。160はやや外上方に伸びた受部に、内傾して立ち上がった後、直立する口縁部が付く。器壁が非常に薄い特徴をもつ。161は外上方に伸びた受部から、一旦内傾して立ち上がり、上半で直立して立ち上がる口縁部をもつ。体部は深く、外面の篦削りは体部の約4/5に及ぶ。

162は甕の口縁部で、上下に拡張した口縁下に1条、頸部に2条の突帯文，その間に櫛描きの波状文を2段に施している。

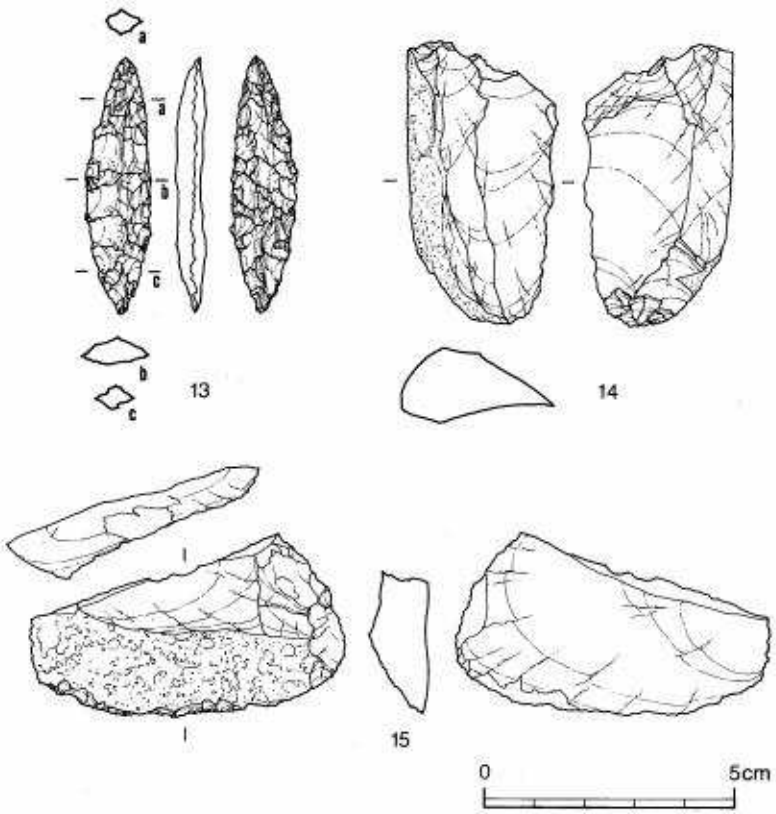
土師器（第57図163～166）



第59図　包含層出土陶磁器



第60図　Ⅳ・Ⅴ区出土金属製品



第61図　包含層出土石器

163と164は甕で、163は口縁端部を内側に僅かに肥厚させ、体部外面に叩きが残る。164は長胴の甕で、口縁端部を僅かに摘み出す。体部の調整は、内面はナデ、外面は刷毛調整である。

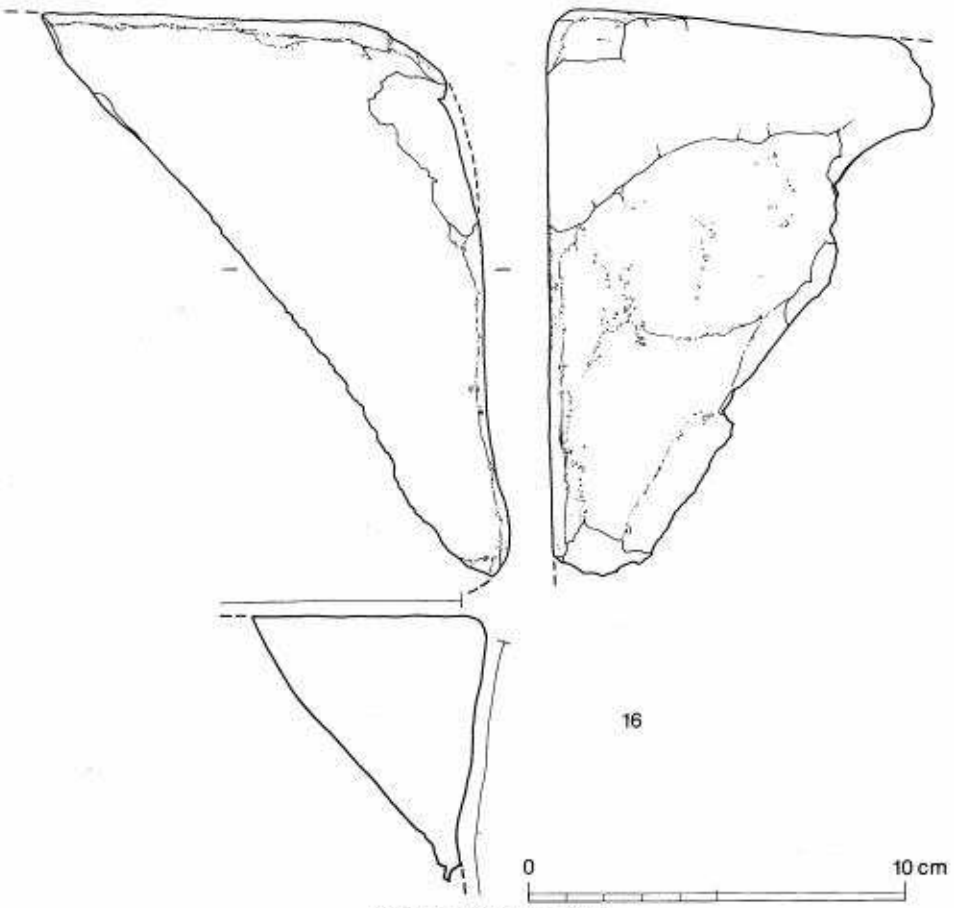
166は内彎する体部がそのまま伸びて口縁部となり、口縁端部は丸く納めている。外面の調整は磨滅のためはっきりしないが、内面はナデの後、篦磨きしている。

165は体部からほぼ直立する口縁部を持つ壺で、口縁端部は肥厚して、内方へ僅かに摘み出す。内外面とも磨滅のため調整は不明である。

中世土器（第58・59図）

133は備前焼の擂鉢で内面に8条単位の摺目を施している。体部から強く屈曲し、大きく立ち上がる口縁部の端面は内傾し、口縁外面には5条の凹線文を施している。

131は口縁端部の内面の釉を掻き取った、所謂口禿げの白磁で、外反する口縁部の端部は面取りしている。



第62図　包含層出土石器

130と132は美濃・瀬戸系の陶器で、130は内面に菊花文を施した、所謂菊皿である。体部からほぼ水平に開く口縁部を持ち、口縁端部は上方に摘み上げている。132は黄褐色を呈する皿の底部で、底部は削り出され、重ね焼きの痕跡が認められる。

金属製品（第60図８・11・12・14）

包含層出土の金属製品には鉄製品と青銅製品とがあり、鉄製品には鍋と釘が出土している。

８はⅣ区から出土したもので、体部を一旦外方へほぼ水平に折り曲げた後、直立させて、口縁とした鍋と思われる破片である。現存する大きさは横約4.1cm、縦約2.4cm、最大の厚さは0.6cmである。

12・14はⅣ区から出土した鉄製の釘で、ともに頭が潰れ、拡張している。12は現存長約2.8cm、軸の厚さ約0.6cmを測る。14は現存長約4.6cm、軸の厚さ約0.6cmを測り、先端を欠損している。

11は青銅製品で、一部が切れて、外に開いてしまっているが、本来は楕円形を呈する環状の製品であったと思われる。現存では長径約3.5cm、短径約1.5cmを測り、厚さ約0.5cmを測る。形状から刀の鞘の責具と思われる。

石器（第61・62図）

６点が出土している。石鏃、楔形石器、削器、砥石、チャート製の剥片が各１点、サヌカイト製剥片（２点）がある。また加工されたものではないが、緑泥片岩の破片が１点出土しており石材として注意される。サヌカイト製の剥片は遺構面上から、その他は第３層から出土している。

13は、サヌカイトを素材とする尖基式石鏃で、やや左右非対称ながら整った柳葉形を呈する。両面の全体に比較的連続した調整加工が施され、両側縁は弱い鋸歯状を呈する。基部をやや突出させて茎状に作り出している。完形で、長さ5.0cm、幅1.3cm、厚さ0.6cm、重さ3.4ｇを測る。

14の楔形石器は厚手の大型品で、石核素材であると考えられる。一方の側縁には自然面を大きく残す。上縁は一部を新しく欠損するものの、下縁とともに著しい階段状剥離が認められる。長さ5.5cm、幅3.0cm、厚さ1.5cm、現存重23.1ｇを測る。

15の削器は厚手で横長状の剥片を素材とし、背面側の下縁に細かい断続的な調整加工を施して刃部としている。一方の側縁は古い切断面となっており、打面部もこれによって欠失している。長さ3.5cm、幅6.2cm、厚さ1.1cm、現存重28.1ｇを測る。

16の砥石は砂岩を使用する大型品である。機能面は２面で、他は自然面と破損面となっている。２面の機能面の内、１面は良好な砥面が形成されているが、もう一面はかなり凹凸が認められることから、台石としても使用されていたと考えられる。現存長15.0cm、現存幅9.6cm、現存厚10.2cm、現存重940.0ｇを測る。

4　小結

以上がⅢ・Ⅳ・Ⅴ区の概略であるが、これらの調査区では、弥生時代・古墳時代・鎌倉時代・室町時代の遺構が検出され、今回調査を行った中では、最も長期にわたる遺構が検出された地区である。

弥生時代の遺構は住居址２棟が検出され、出土遺物から見ると２棟とも畿内第Ⅳ様式に併行する時期と思われる。しかし２基の住居址は切り合っており、その切り合い関係から住居址12が古く、11が新しいことが判明している。出土遺物にもそうした傾向が見られるようである。

古墳時代の遺構には８基の住居址があるが、出土遺物等から、住居址には少なくとも３時期のものがある。まず住居址１は須恵器が集落内に普及する以前の時期と考えられる。しかし高杯の形態から見て、初期の須恵器が出現する段階か、それ以降と考えてよい時期であろう。住居址２は床面から須恵器が出土しており、須恵器の形態的な特徴等から、この須恵器は陶邑の田辺編年のＴＫ47型式の時期に併行するものと考えられる。住居址４は屋内に竈を持つものであるが、竈周辺から出土した須恵器は同じく田辺編年のＴＫ43～209型式に併行する時期と考えられる。ただ陶邑の須恵器と比較すると口縁部の立ち上がりが内傾して低い、受け部が外上方にのびる等、ＴＫ209型式に共通した特徴を持つが、体部が深い、篦削りの範囲が広い等古い要素も残している。この住居址４と時期的に併行するものは住居址７・８・９である。住居址３については床面からの出土遺物がないため、時期的にははっきりしないが、埋土からは田辺編年のＭＴ15～ＴＫ10型式段階の須恵器が出土している。[註1]

鎌倉時代の遺構には、建物址と土壙があるが、建物址は柱穴内からほとんど遺物が出土していないため、時期的にははっきりしない。ただ小片であるが瓦器が出土しており、今回調査した中では、瓦器は13世紀前半の年代があたえられているため、ここでは一応その頃ものと判断しておく。この建物址は２間×３間の規模であるが、３面に庇を持つものである。ただこの庇は身舎との間隔が身舎の半柱間となっており、庇と言うよりは縁状のものを考えたほうがよいかもしれない。いずれにしても建物の構造は特殊なものと思われ、堂等の民家とは違ったものと考えられる。

室町時代の遺構には、ピット群と土壙があるが、ピット群は建物址としては捉えきれなかった。土壙もその性格を把握することができなかった。これらの年代は土壙１・２から備前Ⅳ Ｂ期[註2]の壺・甕が出土しており、15世紀後半～16世紀前半と思われる。

註１　田辺昭三『陶邑古窯址群』Ⅰ　平安学園考古学クラブ　1966年
　　『須恵器大成』角川書店　1981年

註２　間壁忠彦、間壁葭子「備前焼研究ノート」『倉敷考古館研究集報』１・２・５号
　　1966～1968年

第5節　Ⅵ区の調査

1　調査区の概要

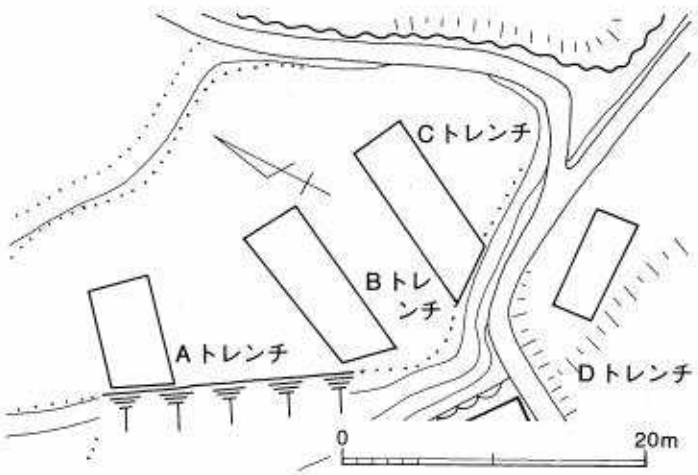
確認調査時に遺跡の西部において、遺構は確認されなかったものの多量の遺物が出土した箇所がある。その位置は西側の河川に面した斜面で、現状は水田となっていた。この場所をⅥ区とし、幅5mのトレンチを4本設定し、遺物の採集と土層の堆積状況の確認を目的として調査を行った（第63図）。トレンチは北西のものより順にA－Dトレンチと呼称する。各トレンチともに砂質シルトおよび砂礫層が堆積しており、主としてこれらに遺物を包含し、淡い色の砂礫層に至って無遺物層となっている。

Aトレンチ（第64図）では第4層～第8層にかけて遺物を包含しており、これらには弥生時代中期－後期、古墳時代後期、平安時代末期－室町時代の土器が含まれていた。第9層の淡灰色砂礫層は無遺物層であった。土層は谷部に向かって若干傾斜している状況が認められた。

Bトレンチ（第64図）は谷部に向かって傾斜した土層の堆積が顕著に認められ、第4層～第8層に多くの遺物を含んでいた。それらはAトレンチ同様弥生時代中期後半－後期、古墳時代後期、平安時代後期～鎌倉時代、室町時代のものであった。また時期は不明であるが、鞴の羽口片も出土している。

Cトレンチ（第64図）では遺物量は少なく、弥生時代、平安時代後期～室町時代のものは含んでおらず、古墳時代後期の遺物のみであった。土層は谷部に向けて若干傾斜しており、トレンチ南西端付近で傾斜が急に変わり、さらにそこに土層の堆積が認められる。

Dトレンチ（第65図）はⅥ区の南端にあたり、他のトレンチとは長軸方向を異にする。確認調査で弥生時代の遺物が多く出土したが、本調査においては遺物の出土量は極めて少なかった。土層は西方の谷部に向かって少し傾斜して堆積している。



第63図　Ⅵ区トレンチ配置図

2　遺物

Ⅵ区より出土した遺物はA・Bトレンチで多く認められ、前述のように弥生時代中期後半～後期、古墳時代後期、平安時代後期－鎌

倉時代、室町時代にまとめられ、それらは土器および少量の鉄器・石器である。

弥生土器（第66図167－177）

167～169は壺の口縁部で、167は口縁端部を下方に肥厚させ、端面に4条の凹線文を巡らし、竹管円形浮文を加飾している。168は口縁端部を上下に拡張し、端面に3条の凹線を巡らしている。さらにその上に篦状工具で刻み目を付けている。169の口縁部は端部を下方に肥厚させ、端面に櫛描波状文を描いている。170－172は甕で、170は口縁端部を上下に若干肥厚させ、2条の凹線を巡らす。体部内面は篦削り調整である。171は口縁端部を下方に若干拡張し、凹線を1条施している。体部外面の調整は叩きである。172の口縁端部はやや薄くし、丸くおさめている。体部外面は叩き、内面は刷毛調整である。173・174は壺肩部で、173は頸部と体部の境に断面三角形の突帯を巡らし、指頭圧痕文を加えている。174の頸部と体部の境にも斜行の刺突文が施されている。175・176は有孔の土器底部で、175は平底で体部外面には叩き目が認められ、176は尖底に近い。177の高杯脚柱部は外面に縦方向の篦磨きを施している。

以上の167－177は弥生時代の遺物で、特に168・169は中期に属するものと思われ、他は後期のものと考えられる。

土師器（第66図178～183・第67図185）

178は甕で、くの字形にゆるく外反する口縁部をもち、端部をさらに外方につまみ出している。体部外面には縦方向の刷毛目を施している。179～183は高杯の脚部でハの字形に開く中空の脚柱部から屈曲して、さらに外方に開く裾部をもつものである。調整痕が残るものについては脚柱部の内面は篦削り、裾部はヨコナデを施している。184は高杯の杯部で浅い鉢状を呈する。口縁端部は内方につまみだしている。内外面ともに篦磨き調整である。第67図185は甑であり、図右側に示した把手がつくものと思われる。口縁部はゆるく外反し、体部内面には横方面の刷毛目を施す。

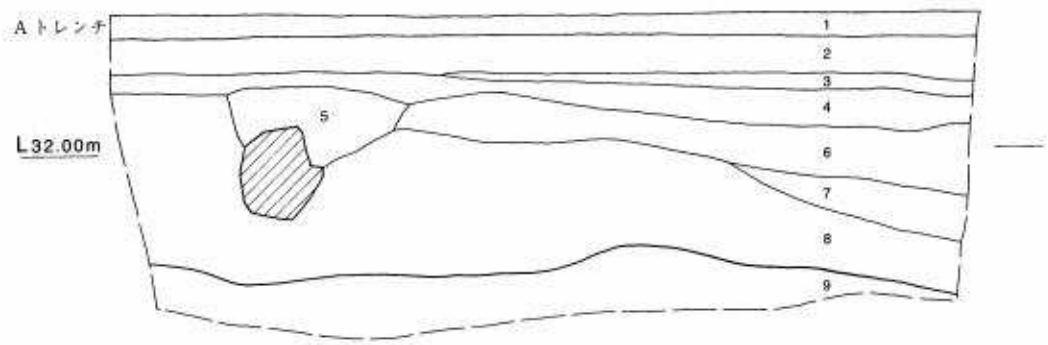
須恵器（第67図186～193）

須恵器には杯蓋（186－190）と杯身（191・192）および無蓋高杯（193）がある。

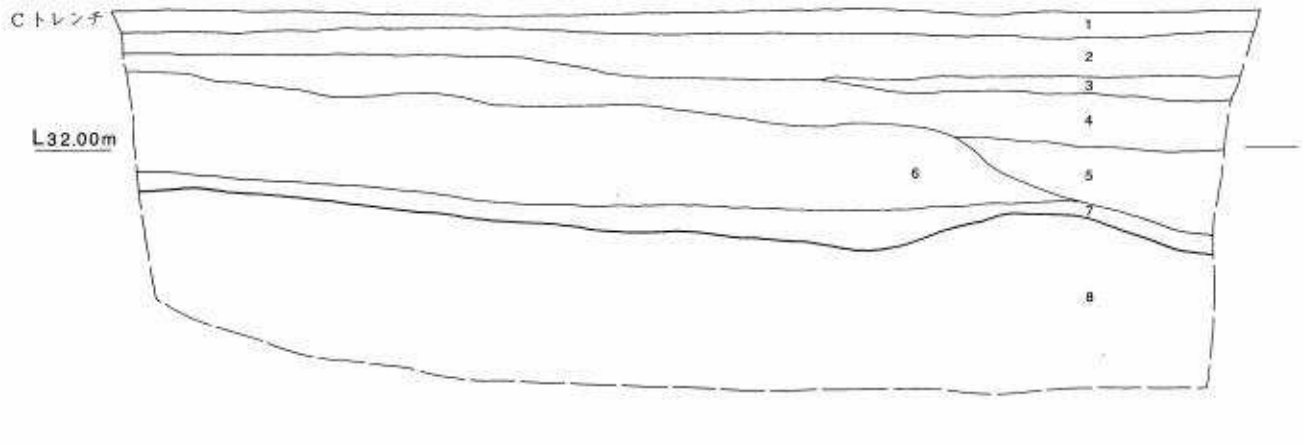
杯蓋には天井部と口縁部との境に鈍い稜をもち、口縁端部が凹面を呈するもの（186～189）と天井部と口縁部の境に凹線をめぐらし、口縁端部内面に段を有するもの（190）とがある。186～189については陶邑編年[註1]のＴＫ47型式からＭＴ15型式に相当し、190はＭＴ15型式からＴＫ10型式のものと思われる。191・192は内傾してやや外反しながらのびる高めの立ち上がり部をもち、端部は丸い。受部はやや斜め上方にのびている。ＭＴ15－ＴＫ10型式に含まれる。193は透しのある長脚をもつ無蓋高杯で、ＭＴ15－ＴＫ10型式のものであろう。

以上述べた第66図178～183および第67図185～193についてはともに古墳時代後期のものと思われ、須恵器からその実年代を与えるならば6世紀初頭～中頃と思われる。

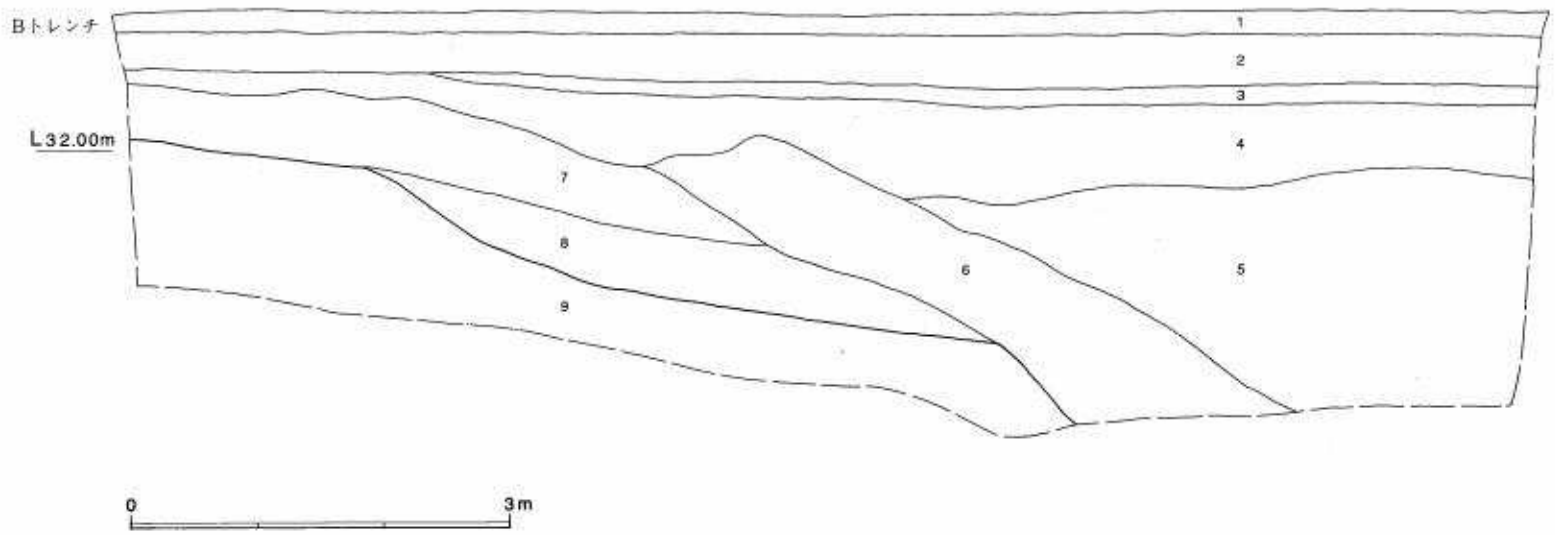
製塩土器（第67図194・195）



1．耕土
2．淡灰褐色砂質シルト
3．淡灰褐色砂質シルト
4．暗茶褐色砂質シルト
5．淡茶褐色砂質土
6．黒褐色砂質シルト
7．乳灰色砂層(粘性あり)
8．褐色砂礫層(4～10cm大礫含む)
9．淡灰色砂礫層(硬5～10cm大礫無遺物層

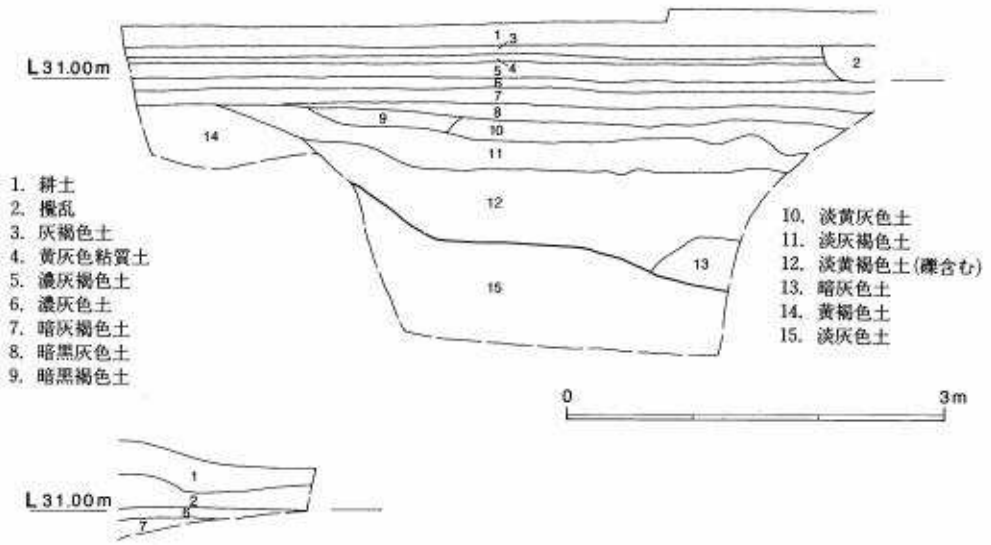


1．耕土
2．淡褐色シルト
3．淡灰褐色砂質シルト
4．暗茶褐色質シルト
5．黒褐色砂質シルト
6．淡黄褐色砂礫層(20～30cm大の礫含む)
7．暗灰褐色砂質層
8．暗黄褐色砂礫層(10cm大の礫含む)



1．耕土
2．淡褐色シルト
3．淡灰褐色砂質シルト
4．暗茶褐色砂質シルト
5．明褐色砂層
(3～10cm大礫含む)
6．黒褐色砂質シルト
7．淡黄褐色砂礫層
(20～30cm大礫含む)
8．褐色砂礫層
(4～10cm大礫含む)
9．暗黄褐色砂礫層
(10cm大の礫含む)

第64図　A・B・Cトレンチ土層断面図　(東壁)



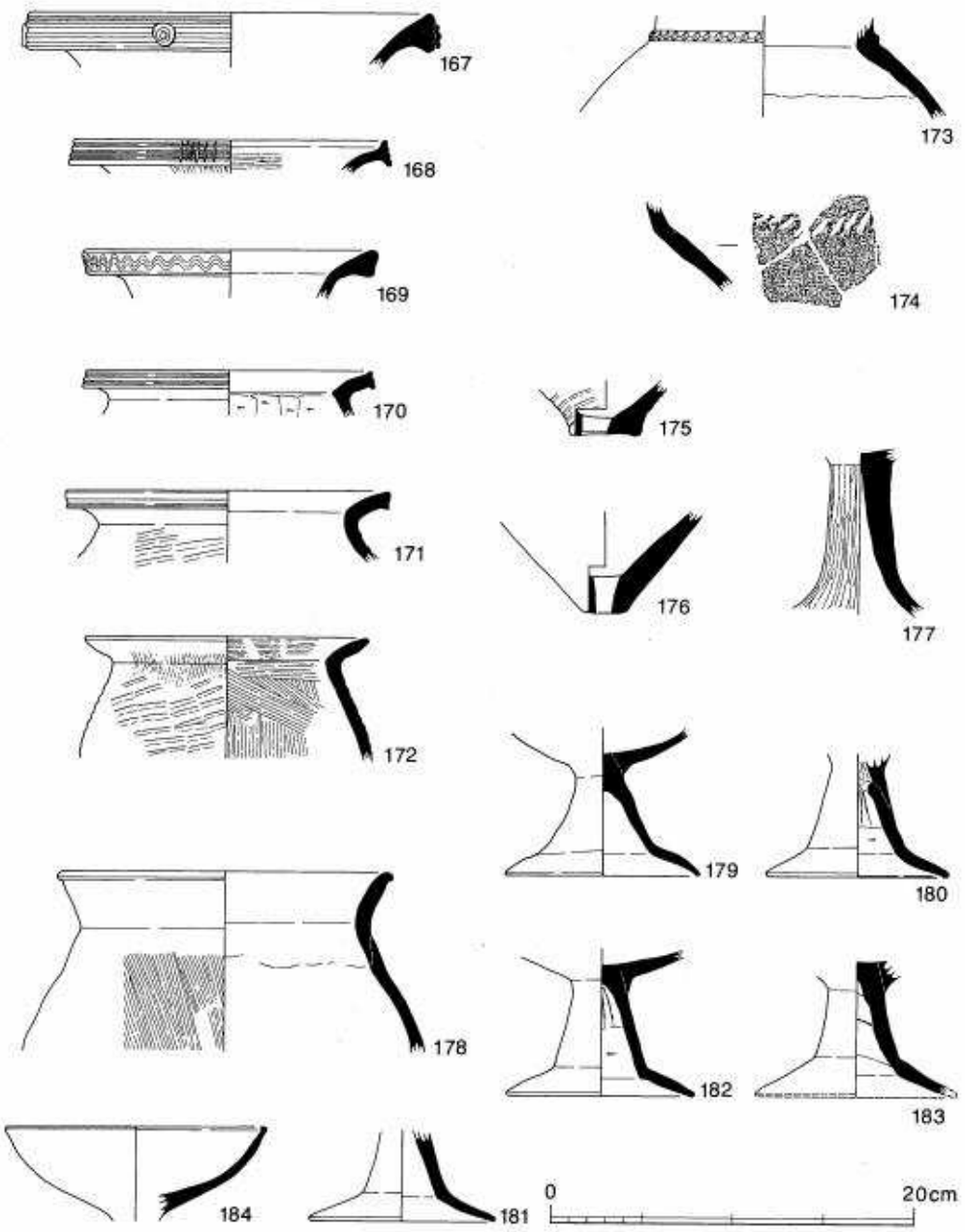
第65図　Dトレンチ土層断面図（南壁）

194・195は製塩土器である。194は椀形の器形で外面に指頭圧痕が認められる。外面は赤紫色に近い色を呈し、二次焼成を受けていることが明らかである。口縁部付近には白い付着物ないしその痕跡が認められる。195は頸部ですぼまり、外反する口縁部をもつもので、薄いつくりである。これらの製塩土器は古墳時代後期頃のものと思われる。

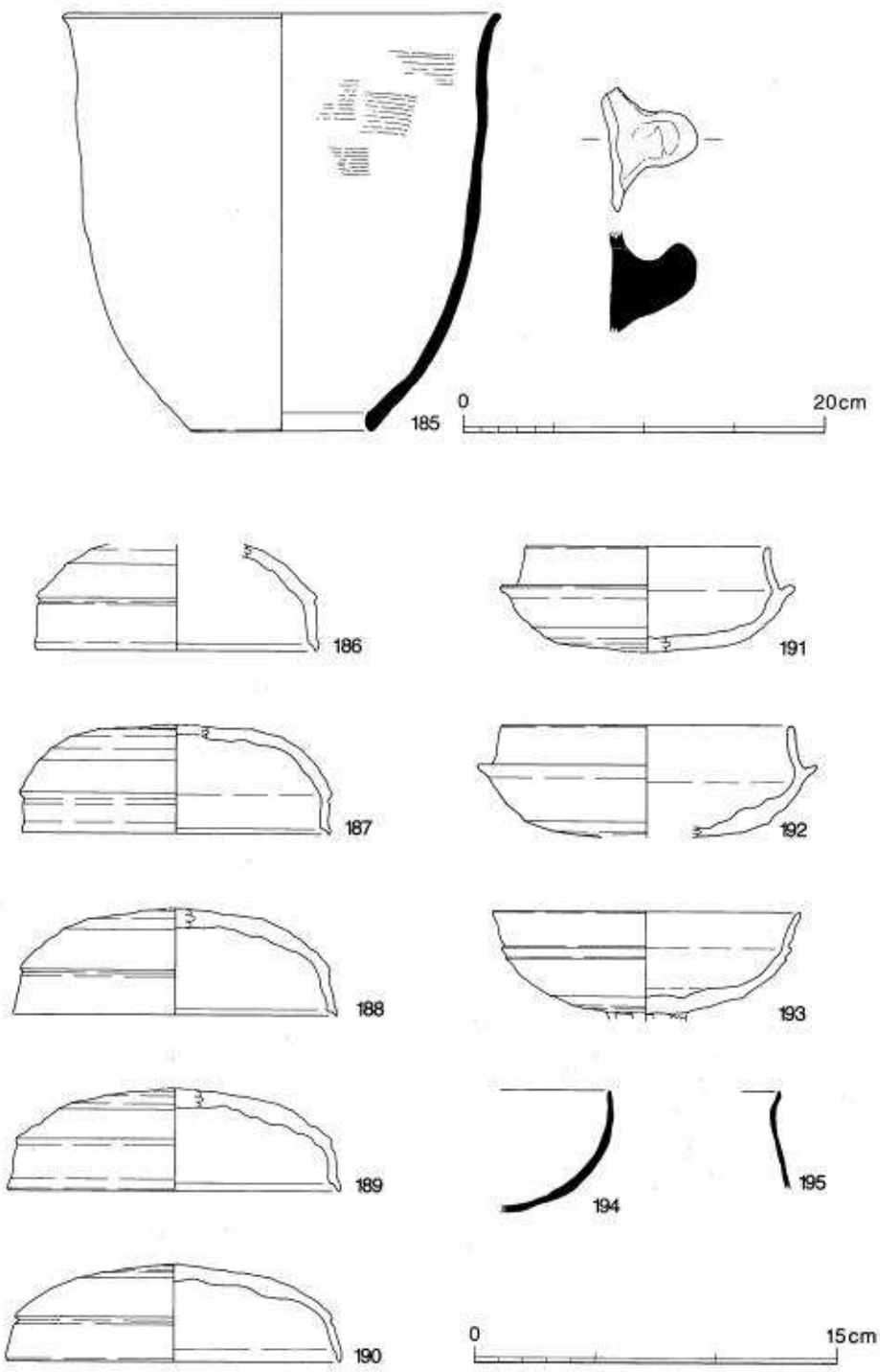
瓦器（第68図196～198・201～203）

196－198は瓦器椀で、196の内面にはほぼいっぱいに斜格子の暗文を施し、ラセン状の暗文は疎に施している。外面には暗文は施していない。口縁部外面は強いナデにより外反させている。高台は断面三角形を呈するが、高くしっかりしている。また器高も高いものである。197の口縁部外面もナデにより外反させているが、196ほど強いものではない。高台は断面長方形に近いが低い。全体的に器高に比べ、口径が大きい。暗文は内面のみラセン状の太く粗いものが認められるが、見込み部分は磨滅のため不明である。198も口縁部外面をヨコナデしているが、外反度は少ない。高台は細く、低いものである。暗文は内面に平行文を描くのみである。201～203は瓦器皿で、201の内面には暗文が施されているようであるが、磨滅により不明である。202は口縁部が外方に流れており、たちあがりは非常に弱い。内面に暗文が施されているようであるが、表面が磨滅しており、図示できない。203は口縁部外面をヨコナデによって屈曲させ外反させている。内面の暗文は口縁付近がラセン状、見込み部分はジグザグ状のようであるが、表面磨滅のため不明な部分が多い。

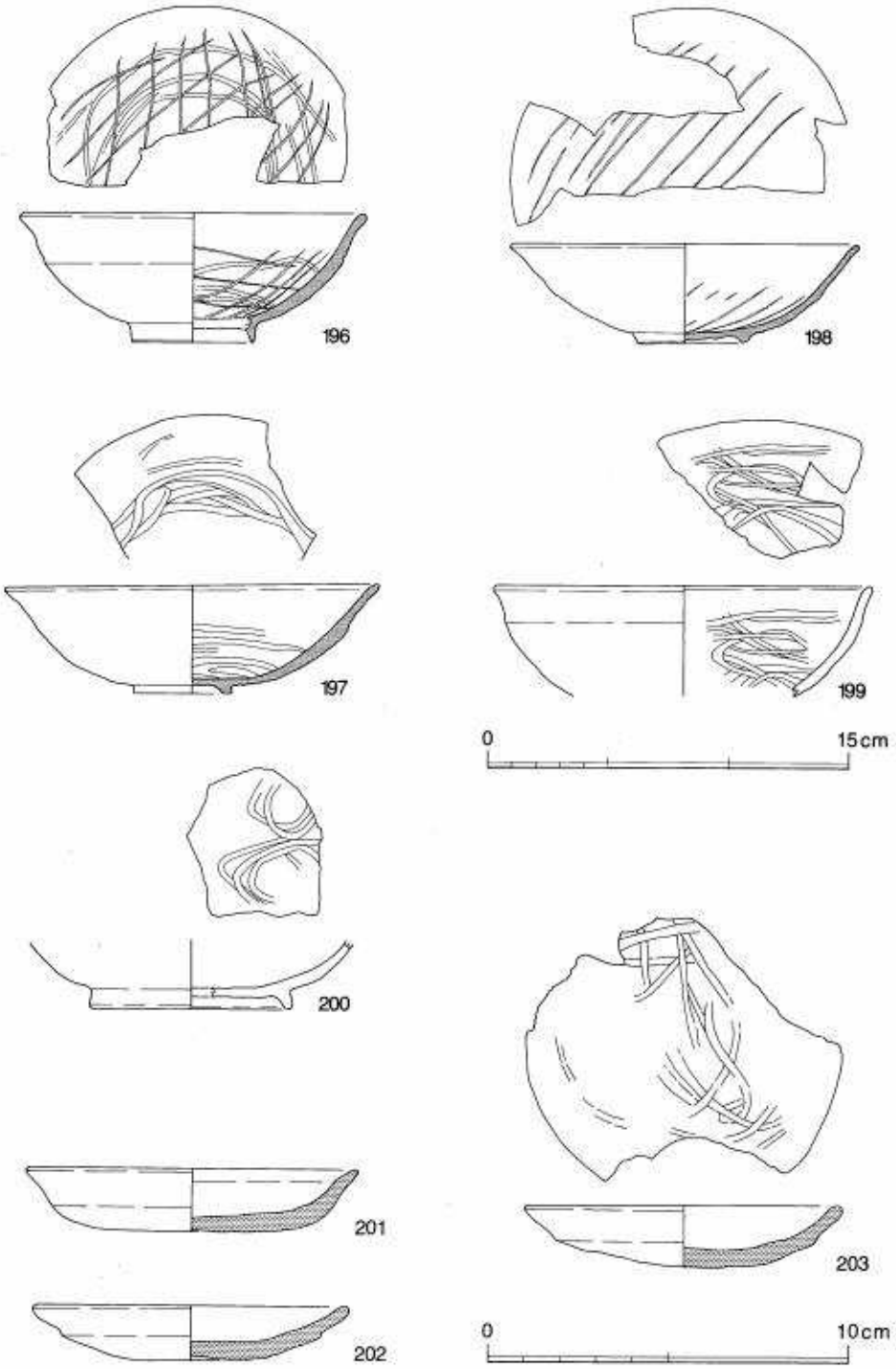
黒色土器（第68図199・200）



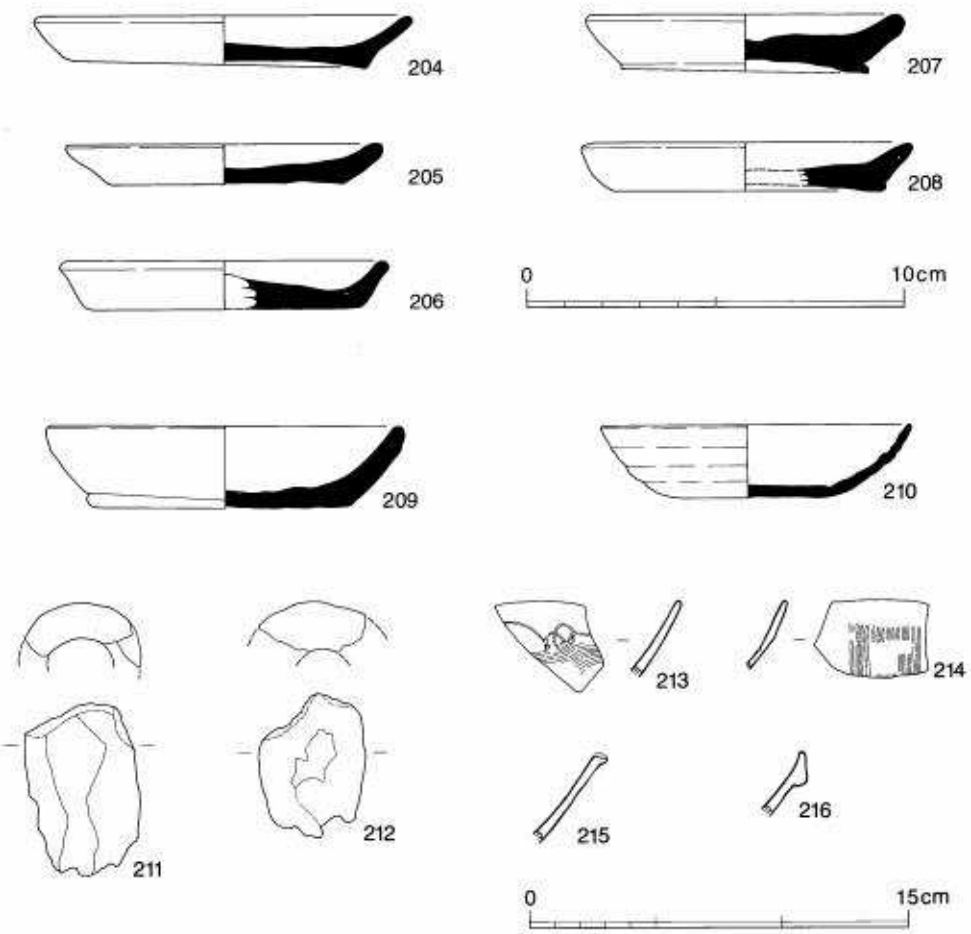
第66図　包含層出土弥生土器・土師器



第67図　包含層出土須恵器・土師器・製塩土器



第68図　包含層出土・瓦器・黒色土器



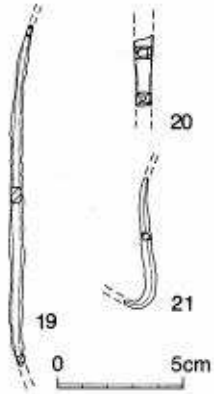
第69図　包含層出土土師器・磁器・輪

199・200はともに内黒の黒色土器で、199は口縁部が外反する。内面には顕著な暗文が認められ、外面下半にも暗文が認められるが、磨滅により不鮮明である。200の底部はしっかりした、高く大きい高台をもつ。内面には暗文が認められるが、磨滅により不明瞭である。

土師器（第69図204～210）

204～208は土師器小皿で、204の底部は静止篦切りのようである。口縁部内外面および杯部内面はナデ仕上げである。205・207・208は底部回転糸切りで、他の部分はナデを施している。206の底部は静止糸切りで、内外面ともナデ調整である。209は大型の土師器皿もしくは杯で、内外面ともにヨコナデ仕上げ、底部外面は回転糸切りである。210は土師器の杯で、器壁は薄く仕上げている。ロクロ目が顕著で、底部は回転糸切りである。この土器は二次焼成を受けたものと思われ、内外面が赤紫色に変化している。

輸入磁器（第69図213～216）



第70図 包含層出土鉄器

213～216は輸入磁器で213・214が青磁碗、215・216は白磁碗である。213の青磁は内面に、214は外面にそれぞれ文様を描いている。214の内面には沈線が入り、同安窯系青磁碗Ⅰ類[註2]に属するものである。215は端反り口縁の白磁で、Ⅴ－4類、216は玉縁口縁の白磁でⅣ類である。

鞴（第69図211・212）

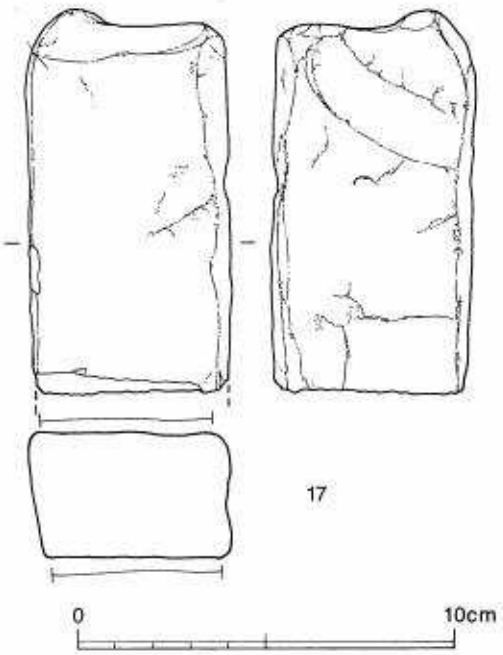
211・212は鞴の羽口片で、ともにもとは円筒形を呈していたもので、211は図の下部にいくに従って徐々に細くなっており、かつ下部の方がよく熱を受けて変色している。212についても同様のことが窺える。

鉄器（第70図19～21）

いずれもＢトレンチからの出土である。19は現存長13.5cmで、両端が細くなり、断面は四角形である。21も断面が四角形で、一端が大きく曲がっている。釣り針のような形をしているが、両端とも細くなっている。また、両端を欠失している。20も両端を欠失しており、現存長2.9cmである。断面長方形で、中空である。下方にゆくに従って徐々に細くなっている。

石器（第71図）

砥石が1点だけ出土している。形態的には平面、断面ともに長方形の安定した形態を呈するが、表裏の作業面は必ずしも良好な砥面を形成しない。約1/3を欠失しており、現存長10.2cm、現存幅5.4cm、現存厚3.2cm、現存重345.0ｇを測る。



第71図　包含層出土石器

3　小結

確認調査においては、遺物包含層は大きく3層に分けられ、それぞれ古墳時代後期、平安時代末～鎌倉時代、鎌倉時代～室町時代の順になっていることが窺われたが、本調査においては遺物包含層は大略三層に分けることができたものの、遺物は土層と関係なく、各時代のものが混在した状態で出土した。ただ上層には下層に比較して新しい時代の遺物が多く存在する状況は認められた。しかしながら、土層による明確な時期の分離はできな

かった。

次に遺物であるが、第67図194・195の製塩土器については、淡路島内の製塩土器の編年が確固たるものになっていない現状であるが、田村昭治氏によって編年案[註3]が示されており、それによると、194が形態的にはG類の浜田例に近いが、薄手である点が異なっている。また、195はF類の例に近い形態を有しているが、口縁部が外反する点が違っている。これらのことから田村編年案に示されている土器の形態との差異は若干認められるものの、195・196はともに6世紀代のものと考えられる。また、断定的なことは言えないが、トレンチより出土している須恵器が6世紀初頭－中頃のものに限られていることにより、これらの製塩土器もその頃に限定できるかもしれない。

瓦器椀は淡路においてその出土例が少なく、報告されたものでは洲本市武山遺跡で数点認められる[註4]のみである。橋本久和氏はこの資料をもって、淡路型の瓦器と称すべきものと考えている[註5]。しかし本遺跡Ⅵ区出土のものの特徴をみると、武山遺跡の淡路型よりも和泉型に近い特徴を示している。したがってここでは和泉型瓦器椀の編年に照らしてみることにする。196は橋本氏の言うⅡ期にあたり、197についてはⅡ～Ⅲ期、198はⅢ期に相当し、12～13世紀の実年代と考えられる。

黒色土器については明確な形態分類、編年案が示されていない現状であるが、大阪府堺市内の黒色土器編年案[註6]によれば、199・200ともに第Ⅳ期の特徴を示しており、橋本氏の編年案[註7]によればⅡb期新段階に属し、その所属時期については10世紀後半頃と考えられている。

第69図213～216の輸入磁器は214の同安窯系青磁椀Ⅰ類が13世紀、215・216の白磁椀Ⅴ－4類・Ⅵ類が12世紀後半～13世紀前半と考えられている[註8]。

註1　田辺昭三『陶邑古窯址群』Ⅰ　平安学園考古学クラブ　1966年
註2　横田賢次郎・森田　勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について―型式分類と編年を中心にして―」『九州歴史資料館研究論集』4　1978年
註3　田村昭治「淡路島の製塩土器について」『山下町居屋敷遺跡発掘調査報告』洲本市教育委員会　1977年
註4　『武山遺跡発掘調査報告』洲本市教育委員会　1975年
註5　橋本久和「瓦器椀の地域色と分布」『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会　1980年
　　橋本久和「瓦器椀の地域色と分布」『摂河泉文化資料』第19・20号　1980年
註6　森村健一「堺市内出土黒色土器について」『堺環濠都市遺跡―市之町東地区―』堺市文化財調査報告書第7集　堺市教育委員会　1981年
註7　橋本久和「畿内の黒色土器(1)」『中世土器の基礎研究』Ⅱ　日本中世土器研究会　1986年
註8　註2に同じ

第4章　まとめ

第1節　遺構

1　弥生・古墳時代の遺構

両時期の遺構としては竪穴住居址10棟があるが、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ地区で検出されただけで、Ⅰ・Ⅱ・Ⅵ地区では検出されていない。

弥生時代の遺構

この時期、Ⅰ・Ⅱ・Ⅵ区は谷であることから遺構は検出されず、遺構はⅣ・Ⅴ区で検出されている。弥生時代の遺構は竪穴住居址11・12の2棟の住居址であるが、切り合い関係から12が古く、11が新しいことが判明している。とはいっても出土した土器にはそれほど時期差があるわけではなく、ともに畿内第Ⅳ様式の範疇で捉えられるものである。

竪穴住居址11は長軸約3.7m、短軸約3.3mの隅丸方形プランを呈する小形の住居址で、床面の中央に土壙が穿たれ、長軸に並行して柱穴2個が掘られている。竪穴住居址12は斜面下方側を流失しているため規模の確定は出来なかったが、残された部分から径約8m前後の住居址と考えられる。柱穴は6本程度と思われ、床面中央には11と同様の土壙を持つ。

こうした構造の住居址が検出されたが、この時期の住居址としては淡路島では始めて確認されたものである。したがって島内の他遺跡との比較はできないが、県下のこの時期の住居址と比較した場合、ほとんど変わるところはない。床面中央の土壙は一般的に中央土壙と呼ばれ、県下だけでなく、弥生時代の住居址に広く見られるものである。しかしそれが如何なる施設であったかについては、炉跡、柱穴、湿度維持の施設等が考えられているが、まだ定説は得られていない。これはその出現の時期、あるいは終焉期の様相や時期、他の住居内施設との関係を踏まえて、解決されなければならない課題であろう。

古墳時代の遺構

この時期も遺跡周辺の地形はⅠ・Ⅱ・Ⅵ区が谷となっており、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区だけが舌状に張り出した台地となっていたことは、前述した通りである。このⅢ・Ⅳ・Ⅴ区の乗る台地は調査区を越えて、南に伸びており、この時期の遺構も南寄りに多いことから、遺跡が調査区の南に広がっていることは確実である。したがって今回の調査結果から、遺跡あるいは集落の構造といったものを考えることはできない。今後の調査に期待したい。

しかし、今回の調査では、この時期の遺構としては竪穴住居址8棟が検出され、古墳時代における本遺跡の存続年代の一端をとらえることができた。すでに述べた通り8棟の住居址は、

出土した土器から、3時期に分けることができる。まず第1の段階は住居址1の須恵器を伴わない時期の住居址であり、淡路島に須恵器が出現する以前の時期と考えられ、一応布留式土器の段階と考えられる。しかし出土した遺物が少ないため、はっきりと断定はできないが、加東郡社町家原遺跡の祭祀関連遺構[註1]出土の土師器と似通っており、家原遺跡ではＴＫ73～216型式[註2]の須恵器を伴っている。したがってこの住居址の時期を、須恵器を伴わないものの、すでに須恵器出現以後の段階と捉えておきたい。

第2の段階は住居址2の示す、田辺編年のＴＫ47型式の段階である。この段階の住居址もまた、ただ1棟の検出であるが、住居址の構造が特殊なものである。竪穴住居であることに変わりがないが、柱穴が2×3間に配置され、掘立柱建物と共通した配置となっている。

第3の段階は住居址4・7・8・9の示す、田辺編年のＴＫ43～209型式の段階であり、この段階に始めて、住居内に作り付けの竈が出現する。竈が検出されたのは4・7・8の住居址であるが、ともに斜面上方側の辺の中央に竈が作り付けられていた。

以上が今回検出された古墳時代の住居址であるが、いずれの段階とも集落構造を言及するところまでは及ばない。ただ住居址の示す年代はおおよそＴＫ216型式併行期からＴＫ47型式、やや遅れてＴＫ43～209型式にかけてであり、途中断絶しているようにも見受けられる。しかし住居址3の埋土中からはＭＴ15～ＴＫ10型式の須恵器が出土している。したがって住居址3をこの段階に捉えることもでき、そうすれば住居址群の示す時期に断絶はほぼ無くなる。またⅡ・Ⅵ区のトレンチからはこの時期の須恵器が出土しており、遺跡がＴＫ216型式段階からＴＫ209型式段階までの5世紀後半から6世紀末～7世紀初頭まで存続することは確実であろう。

ＴＫ43～209型式段階の各住居址の構造の内、屋内の作り付けの竈は、淡路島では初見である。したがって淡路島での竈を伴う住居址の出現を論ずることは時期尚早であろう。しかし最近、竈を伴う住居址は県下各地で発見されはじめ、5世紀段階のものでは加古川市東溝遺跡[註3]、太子町立岡遺跡[註4]、加東郡社町家原遺跡[註5]、神戸市下宅原遺跡[註6]が挙げられる。東溝遺跡では布留式土器の段階とされ、これを類竈ととらえる見方と、竈そのものと捉える見方とがあり、確定はしていない[註7]。しかし下宅原遺跡でも須恵器を伴わない布留式土器の段階の竈が検出され、5世紀中半と考えられている。また同じ5世紀中半の竈を持つ住居址は立岡遺跡でも発見されており、この時期には県下でも竈が出現するのであろう。

そしてＴＫ23・ＴＫ47・ＴＫ43・ＴＫ209型式段階にかけての住居址群が検出された家原遺跡では、竈はどの段階の住居址にも見られ、かなり普遍的になっていくように思える。ただ各段階の全ての住居址に竈が作り付けられているのではなく、竈の検出されない住居址も見られ、同一集落内で、竈を伴う住居址と伴わない住居址の在り方が、注目される遺跡である。

本遺跡のようにＴＫ43～ＴＫ209型式段階の竈を持つ住居址が検出された遺跡は、県下には多くみられ、相当普及しているようである。しかし、すべての住居址が竈を伴っているわけで

はなく、同一集落内でも竈も持つ住居址と、持たない住居址がある。それがなにを意味しているかについてははっきりせず、移動式竈との関連も考え合わせ、今後の検討課題である。

2　中世の遺構

この時期は出土遺物からすると鎌倉時代（13世紀）、室町時代（14世紀後半～15世紀）、室町時代末期の3時期が想定されるが、個々の遺構からの出土遺物が少なく、遺構の時期が出土遺物から特定できるものは、建物址1、土壙3・4、ピット5と少量のピットだけである。したがって個々の遺構について時期を断定することはできなかったが、埋土の違いから3時期に分けることが可能である。まず遺構埋土に炭化物の混入したものが第Ⅰ段階の時期、遺構埋土に多くの炭化物・焼土が混入しているものが第Ⅱ段階の時期、それ以外の白っぽい灰褐色の埋土のものが第Ⅲ段階の時期と考えられる。

この3段階の時期に属する遺構としては建物址1・2と土壙・ピット群がある。当遺跡は前章までででも記しているように、傾斜地における水田地にあたるため、後世の削平により消滅した遺構も多いと考えられる。このような悪条件のもとで建物の規模が明らかにできたのは建物址1だけであった。建物址1は三面に庇あるいは縁を持つ建物で、社寺あるいはそれに類する堂といった特殊な建物が想像される。時期については第Ⅰ段階の鎌倉時代（13世紀）と推定しうるものと思われる。

他のピット群は個々の建物を復原するには至らなかったが、相当数の建物があったと考えられる。ピットの中にはその埋土に木炭片・灰・焼土が混じっているものがあり、第Ⅱ段階に属すると思われ、このようなピットはⅣ区に集中していた。またピット内の埋土から第Ⅰ段階に属するもの、第Ⅲ段階に属するものもⅢ・Ⅳ・Ⅴ区には認められた。しかしⅡ区の遺構には第Ⅰ段階・第Ⅱ段階に属するものはなく、ほとんどの遺構が第Ⅲ段階に属するか、もしくはそれ以降のものと思われる。

土壙群の内、土壙1は多量の炭・灰・焼土が入っており、周辺にピットが存在することから、屋内の工房址とも考えられる。土壙3・4はそれぞれ備前・常滑の壺あるいは甕を出土しており、貯蔵施設かと推測されるが、用途は明確でない。Ⅱ区の土壙は内部から箍状の木製品が出土しており、墓壙と思われるが、時期的には明確でない。

このように鎌倉時代～室町時代の遺構は建物址1の特殊な建物を中心に、3時期の遺構と考えられ、第Ⅰ・第Ⅱ段階の遺構がⅢ・Ⅳ・Ⅴ区に営まれ、第Ⅲ段階の遺構がⅡ区にも広がって行くものと思われる。

第2節　遺物

1　弥生時代の遺物

森遺跡から出土した弥生時代の遺物は中期～後期にあたる土器であるが、従来の編年観に従ってこれらの土器を中期と後期のものに分け、器種別にその特徴をみることにする。

壺

中期の壺にはA～Cの三種が認められる。

壺Aは広口のもので口縁部のみ残存しており、その形態は口縁部を上下に拡張するもの（62・71・168）と端部を肥厚させるもの（169）とがあり、文様には口縁端面に凹線文をめぐらすだけのもの（71）とその上に刻目を付加するもの（168）がある。他に櫛描波状文を描くもの（169）や無文のもの（62）がある。

壺Bの長頸のものには口頸部が内彎する度合いが大きいもの（2）と小さいもの（134）がある。体部まで遺存している例では体部が最も張る部分は下半にあり、やや尖る形態を呈している。文様は口縁部下に凹線文を3条施すもの（2）と頸部まで7条施すもの（134）がある。

壺C（72）の口縁部は短く水平に屈曲し、端部を大きく上下に拡張しており、無頸壺の範疇である。

他に壺の口縁部と考えられるもの（73）があるが、端部付近は肥厚し、4条以上の凹線文を施している。

壺の頸部・肩部の破片をみると、体部と頸部の境に突帯を貼り付けており、その上から刻目を加えているもの（173）がある。また、頸部に凹線文をめぐらすもの（8）も認められる。体部の文様には、上半に櫛描直線文のみのもの（150）と、直線文と波状文を交互に描いているもの（15・148・151・152・153）、簾状文を描くもの（149）がある。また櫛描簾状文と斜格子文を描くもの（14）がある。

甕

甕は口縁部を上下に大きく拡張するもの（61・63・64・68・70・135）と上方のみに拡張するもの（60・65）、上方につまみ上げた程度のもの（1・69）がある。概して、口縁を大きく拡張するものほど体部の張りが上方に偏って、大きいようである。

調整では体部に刷毛調整を施すものが多いが、下半部が残存しているもの（60・61）では外面に篦削りを施している。

文様は体部に刺突文を施すもの（63）が1点認められるのみで、口縁端面に2～3条の凹線文を施すもの（64・68・70・135）が若干認められる。

高杯

高杯には鉢形の深い体部をもつものA（66・74）と、浅い杯部をもち、ほぼ水平にのびる杯底部から直立する口縁部をもつものB（67）とがある。高杯Aの外面口縁部直下には幅広い凹線状の段をもち、高杯Bの外面口縁部下および杯部の屈曲部分にそれぞれ1条、2条の凹線をめぐらせている。

他に高杯Aと同様の形態を示すもので、杯部屈曲部分に凹線をめぐらすもの（5）がある。高杯脚柱部には中空で無文のもの（6）と篦描直線文を描くもの（138）が認められる。

鉢

鉢Aは内彎する口縁部もつもので、端面が内傾するもの（3）と水平のもの（137）があり、口縁下に4条の凹線文を施している。

鉢B（4）の口縁部は外上方にまっすぐのびており、端部は水平で内外に拡張している。口縁からやや下がったところに貼付突帯を付し、刻目を加えている。鉢Bに属すると考えられる小片（29・141・142）では、口縁下に櫛描波状文をめぐらすものがある。

脚部

高杯あるいは鉢の脚部には端部を殆ど拡張しないもの（76）と、上下に拡張するもの（5・6・30・77・78・139）があり、後者には脚端面に3条の凹線文を施すもの（78）がある。また、裾部に透し孔を穿つもの（77・78・139）や、篦状工具による刺突文を施すもの（5）が認められる。

器台

器台（79）は1点認められ、脚端部を左右に少し拡張している。凹線文を端部いっぱいまで密に施しており、現状では6条認めらる。

後期の土器には壺・甕・高杯・器台および底部が認められる。

壺

壺の口縁部は2点（7・167）出土しており、どちらも広口の形態で、口縁端部は下方に拡張している。口縁端面には凹線文を施し、その上に竹管円形浮文を貼り付けている。

甕

甕A（170・171）は口縁端部に面をもつもので、甕B（172）は口縁端部を丸くおさめるものである。甕Aの端面には凹線文を施し、体部外面は叩き、内面は篦削り調整である．甕Bの体部外面は叩きの後、一部刷毛、内面は刷毛調整である。

高杯

杯部（9）は1点のみ出土している。外反する口縁部をもつが、外傾度は少なく、内外面とも篦磨き調整である。脚部には長いもの（177）と短いもの（13）がある。

器台

口縁端部を下方に大きく拡張するもの（10）で、1点出土している。口縁端部に1条の凹線

をめぐらし、上向きの細線鋸歯文を描き、その間に竹管円形浮文を加飾する。口縁部内面には鈍い凹線状のものをめぐらす。

底部

孔のないもの（11・12）と有孔のもの（175・176）があり、いずれも平底である。調整には外面に叩きを施すものと、ナデのものがあり、それぞれでの調整の差は認められない。

本遺跡出土の弥生土器の特徴は以上述べた通りであるが、中期・後期に属すると思われる土器はいずれも破片が殆どで、図上で完形に復原できたものは中期の甕2点である。これらの制約はあるが、次にはこれらの土器の細かい所属時期について検討してみることにする。

本遺跡出土の弥生中期の土器はそれらの特徴により、畿内的様相を示していることが明らかである。壺A口縁部では凹線文があるものとないもの、壺Bでは凹線文が多条のものと少条のものが認められる。また、体部の破片には櫛描直線文や波状文・簾状文・斜格子文を施している。これらの特徴は畿内第Ⅲ様式（新）から第Ⅳ様式に相当する。高杯・鉢についても凹線文が認められるものが殆どであるが、鉢Bの（4）については刻目を施した突帯を貼り付けており、Ⅲ様式（古）段階に溯る可能性が高い。器台は凹線文が多条化している。甕は全容が窺えるものでは、胴部下半の篦削り、体部が球形に近いこと、および口縁部の拡張が大きいことから第Ⅲ（新）～Ⅳ様式に比定しうる。また、他の甕についても、口縁部の特徴や凹線文により同様の時期と思われるが、（1・69）についてはやや古い要素を残しており、（11・64・135）は口縁部の拡張が大きく、新しい様相を呈している。

畿内では一般に第Ⅲ－第Ⅳ様式の特徴変化として、①凹線文の出現以前、②凹線文出現、③凹線の盛用、④無文化の傾向として捉えられているが[註7]、本遺跡出土土器について単純に照らし合わせてみれば、（1・4・69・138・169）が古い様相を呈し、（62・72・74）が新しい様相を呈している。全体にみると、Ⅲ（古）段階に溯る可能性のあるもの（4）が少量で、Ⅲ（新）－Ⅳ様式が最も多く、Ⅳ様式でも新しい様相を示すものが若干認められるという状況である。

後期の土器についても破片であり、量も少ないため、それらの特徴から従来の編年観に照らし合わせてみると、口縁端部に面をもち、凹線文を施す甕Aは後期でも早い時期に属し、同様に口縁部に凹線文を施し、円形浮文を貼り付けした壺（7・167）も前半の所産であろう。他の土器については詳細な時期を断定する決め手を欠くが、器台（10）の凹線文の使用は淡路地方に特徴的な手法であり、細線鋸歯文と竹管円形浮文の組合せも特徴的である。

淡路地方における弥生土器の実態については不明な点が多く、また本遺跡出土の弥生土器は量が少ないことや、破片が多く、出土状態が良好でないことから、現状では畿内の編年に照らし合わせて大まかな時期を推定するにとどまらざるを得ないが、今後良好な資料が発見・発表されることにより、淡路の弥生土器の様相が明らかになるであろう。

2　古墳時代の遺物

この時期の遺物としては、住居址１・２・３・４・６・７・９から出土した須恵器・土師器・製塩土器・鉄製品等があるほか、Ⅱ～Ⅳ区の包含層からも須恵器・土師器が出土している。その中で住居址内から比較的良好な状態で出土した須恵器と、淡路島内では初めて住居址内からの出土が確認された製塩土器について見てみたい。

須恵器

今回の調査で出土した須恵器は、その出土状態からいえば、Ⅳ・Ⅴ区で検出された住居址２・３・４・７の床面直上及び埋土から出土したものと、Ⅱ区トレンチ内・Ⅲ～Ⅳ区・Ⅵ区Ａ～Ｄトレンチのそれぞれの包含層から出土したものとがある。その他確認調査時においても若干出土している。

出土した須恵器の内、最も良好な資料となるものは、杯類であり、それぞれの持つ特徴から、杯身・蓋ともにⅣ段階に分類することが可能である。

まず杯蓋の内、第Ⅰ段階のものとしては、16・32・186・187・188があり、口縁部と体部を分ける稜が鋭く、口縁部が真っ直ぐ下がって、口縁部内面には明瞭な段を持つ。そして器高が高く、天井部は丸みを持つ。

第Ⅱ段階のものとしては、Ⅳ・Ⅴ区の包含層から出土した155・156、及びⅥ区トレンチから出土した189であり、稜が丸みをおび、口縁端部内面の段もくずれて、全体に鋭さが無くなっている。前段階のものと比べ、口径が大きくなり、天井部は丸みを失っている。

第Ⅲ段階としては住居址３から出土した85、Ⅱ区トレンチ出土の33、Ⅵ区出土の190、確認調査出土の17等があり、器形的な特徴として、天井部と体部を分ける稜が形骸化し、その痕跡をとどめるだけのものもみられる。また口縁部は外に開き始め、口径が大きくなるのに対し器高が低くなる。天井部は丸みを失い、全体に扁平な感を受ける。大型化が最も進んだ時期である。

第Ⅳ段階としては住居址４・７及びⅤ区包含層から出土した87・88・96・157・158であり、稜が完全に無くなり、全体に丸みを帯びる。口縁端部の内面には比較的明瞭な段を残す。

次に杯身についてみると、杯身も４段階に分けることが可能である。

第Ⅰ段階は口縁部の立ち上がりが高く、僅かに内傾して直線的に伸びる。口縁端部には明瞭な段を有する。口径に対して器高が高く、底部は丸みを持つ。(82)

第Ⅱ段階のものは立ち上がりは短くなり、受部は外上方にのびる。器形全体に偏平な感となる。(19・191・192)

第Ⅲ段階は立ち上がりは短く内傾し始め、口縁端部の段は消失する。受部は外上方に伸びる。(18・34・35・37・86・97・160)

第Ⅳの段階のものは立ち上がりはさらに短くなり、「く」の字状に強く屈曲するものが多くなる。受部は外上方に伸び、器高は低く、全体に偏平となる。(38・89・90・91・98～103・160・161)

杯の蓋と身の関係についてはセット関係として捉えられるものが無く断定はできないが、形態的な特徴から、蓋の第Ⅰ段階と身の第Ⅰ段階、蓋第Ⅱ段階と身第Ⅱ段階、蓋第Ⅲ段階と身第Ⅲ段階、蓋第Ⅳ段階と身第Ⅳ段階が同時期として捉えられるものと思われる。

さてそれぞれの時期については淡路島内の須恵器の詳細が不明なため、畿内陶邑の編年に頼らざるを得ないが、第Ⅰ段階の杯身と蓋が田辺編年のＴＫ47型式に、第Ⅱ段階ものが同じくＭＴ15型式に、第Ⅲ段階のものがＴＫ10型式に、第Ⅳ段階のものがＴＫ209型式に対応すると思われる。

以上のように今回の調査で出土した須恵器を分類し、畿内の編年に対応させた訳であるが、出土した須恵器は畿内のものとはかなり異なった特徴を持っている。それは蓋に強く見られ、古い段階（第Ⅰ段階）のものはまだ比較的畿内に近いと言えるが、新しい時期のものに特に顕著に現われている。

まず第Ⅱ段階の蓋であるが、形態的には天井部が平になる傾向が認められるが、口縁端部内面の段や、口縁部と天井部の境の稜は、比較的シャープで、畿内において丸く変化する傾向はそれ程強く現れていない。

第Ⅲ段階の蓋も形態的には更に偏平となるが、口縁端部内面の段はあまり退化すること無く残存している。また第Ⅳ段階の蓋も天井部と口縁部を分ける稜は退化し、口縁端部内面の段も退化している。しかし口縁部内面には凹面が形成され、段のなごりが残っている。

このように畿内地方ではＴＫ10型式段階を最後に消失する口縁端部内面の段が、ＴＫ209型式段階と思われる段階まで残る点は、今回出土した須恵器の特徴である。しかしこの特徴が本遺跡だけのものか、あるいは洲本平野や淡路島全域に及ぶものかは、淡路島における須恵器の資料の増加を待たねばならない。これは須恵器生産も含めた今後の検討課題である。

製塩土器

森遺跡は現海岸線より５㎞ほど内陸に入り、地形的には淡路島で第２の高さをもつ先山の南、洲本川左岸の段丘上に位置している。このような地理的条件に加え、製塩土器はほとんどが住居址内からの出土であるという状況を考え合わせると、森遺跡出土の製塩土器は塩生産に利用されたものではなく、塩消費地におけるものと、捉えた方が妥当であろう。

そうしたことを念頭において、出土した製塩土器をみていきたい。今回出土した製塩土器は108と109を除いては小片で底部の形状は不明である。したがって、これまでの淡路島出土例等に類例を求めながら、森遺跡の製塩土器の形態を見て行きたい。

まず形態的に以下の５分類が可能である。

A　体部から口縁部にかけて、やや内傾しながら直線的に伸びる。器壁は非常に薄い。口径が小さいのに比べ、器高が高いが、容量は少ない。底部は丸くおさまり、脚台が無くなった直後のものである（114～116）

B　口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、肩が張る形態のもの。胴部は丸くなる。Aに比べて容量は増大する。（112・113）

C　大型で深い椀形を呈する。口縁部近くが最大径となり、口縁部が内彎するもので、底部は丸くおさまる。森遺跡出土の製塩土器の中で最大の容量をもつ。（109）

D　小型で半球形をなす。器壁は比較的厚い。（108）

E　C・D類と共通した椀形であるが、最大径が胴部下半にあり、口縁部は直線的に内傾する。（110・111）

次に各類の調整技法について目を向けて見る。製塩土器であるため不明なものが多いが、まずA・B・E類はほぼ共通しており、体部内外面とも指ナデで、口縁部は指押えの痕跡を残すものと、指ナデされているものがある。ただA類には1個体だけ、内面に板ナデによって調整されているものがある。

D類は内外面とも指ナデで調整されている。C類については調整はまったく不明である。

上記のように分類されるわけであるが、各類の淡路島での出土状況を見てみると、A類は名子の浜遺跡等からの出土が知られている。調整技法については森遺跡出土のものと同様に叩きが用いられておらず、指先による調整痕を外面に残す。内面についてもナデ調整で共通しているが、名子の浜遺跡出土のものには貝殻条痕をもつものが少数知られている。

B類は淡路島での出土は知られておらず、今回の調査で新資料を加えたことになる。器形的には、香川県喜兵衛島南東浜遺跡の出土例[註10]に酷似しており、備讃瀬戸との強い関係を示すが、口縁部の調整は叩きが用いられず、指先によるものであり、淡路島における地域的な特色と共通する。

C・D類についても同様に淡路島での出土は知られていない。

E類は多くの遺跡で出土したり、採集されており、その量も多い。洲本市の山下町居屋敷遺跡[註11]では包含層からの出土が知られており、淡路島北部に位置する津名郡北楽町浜田遺跡等からも採集されている[註12]。

次に編年的な位置づけであるが、森遺跡での製塩土器の出土状況をみると、4号住居址からはA類が出土しており、7号住居址ではB・C・E類が伴って出土している。また9号住居址からはD類の出土をみている。

ところで、4・7号住居址からはTK43～TK209型式の須恵器が出土しており、住居址の年代は6世紀後半～7世紀初頭の年代が与えられている。したがって本遺跡ではA・B・C・E類が同時期に使用されていたことになる。しかし形態的にはA類は弥生時代より続いて来た

型式の脚台が消えた直後のもので、B・C・E類に先行するものである。またD類は形態から考えて、A類より後出であることは確かであろうが、9号住居址から須恵器の出土がないため、B・C・E類との前後関係は明らかにできない。

さてC・D類であるが、この二つの形態は従来知られていた製塩土器としては類例を見ないものである。特に球形を呈するD類は、二次的な火を受けて赤紫色を呈し、口縁部の内外面に「こうら」が認められる事から、塩に関する何等かの行為に用いられたことは確かであろう。しかしその形態・容量考えると塩水の煎熬と言う製塩土器の用途には必ずしも適していると考えられない。

また調整についてであるが、一般的に製塩土器は粗製である。これは製塩土器が大量生産を必要としたためである。淡路島の古墳時代後期の製塩土器は、内外面に指先による整形の痕跡をそのまま残しており、粘土の接合痕を残すものも多い。C・D類についてもその調整の粗雑さは共通している。体部から底部にかけて凹凸の多い歪なプロポーションをしており、これを日常の使用した土師器とは考え難い。

以上の二点は、C・D類の用途を考える上で重要である。これらの器形が、塩の生産遺跡において多量出土が知られておらず、塩の消費地と考えられる森遺跡だけで出土している。これはC・D類は製塩と言う作業に関係した土器ではあるが、A・B・E類のように塩水の煎熬と言う過程に直接使用されたのではなく、塩の運搬あるいは堅塩の製作という行為に使用されたものと考えたほうが良いのかもしれない。

淡路島における製塩土器の資料は、多くが採集資料であり、最近の発掘調査で資料が増加しているものの、いずれも包含層から出土した資料である。今回初めて遺構に伴って製塩土器が出土し、須恵器との共伴関係が明らかにできたことは重要である。

3　中世の遺物

当時期の出土遺物は、須恵器・土師器・陶器・磁器・金属製品と種々である。出土品の大部分は遺構上面の包含層から出土したものであり、遺構に伴う出土品はⅣ・Ⅴ区の土壙及びピット群から出土した一部のもののみである。以下各種別ごとに、当遺跡での状況を記してみる。

瓦器

Ⅵ区の調査区の包含層より椀の比較的大型の破片がまとまって出土している。現在のところ淡路島内における瓦器の出土例は少く時期の判定は畿内の編年案と比較せざるを得ない。それによるとほぼ12～13世紀の年代が考えられる。また形態的な特徴からみると大阪南部の和泉型に近いと考えられる。

黒色土器

出土量は僅かであるが、瓦器と同じくⅥ区のピット内より出土している。これも淡路島内では比較資料がなく、大阪南部地方との比較によると平安時代中頃の時期が想定できるが、他に同時期の出土品がないため不安が残る。

磁器

輸入磁器と考えられる青・白磁が包含層等から出土している。時期的には大宰府編年のⅣ期にあたると考えられるものから、中世末期に及ぶものが見られる。

陶器

Ⅳ区の土壙１・２内より出土した大型品が２例ある。まず土壙１より出土した大甕は体部の破片で詳細は不明だが、胎土の特徴から常滑焼と推定される。時期的には13世紀前半と考えられる。土壙２より出土した壺は玉縁の口縁部を持つ備前焼の壺であり、時期的には備前第ⅣＡ期が考えられる。他にピット５からも大型の壺が出土しているが、これも備前焼であり、時期的には備前の第ⅣＡ期のものと考えられる。

この他備前焼の擂鉢の破片が比較的多く出土している。時期的には間壁編年のⅣ期のものが多い。

上記の他に土師器としては皿・鍋・椀・羽釜がある。羽釜については瓦質のものが混じっている。その他中世末の伊万里・唐津・瀬戸・美濃系のものが小片であるが出土している。

金属製品ではⅥ区の土壙・ピット及び包含層から、鉄製の角釘・銅製品・銀製品等が出土しており、当時期の遺構の性格の一端を窺わせる。

最後に鎌倉時代以降の土器片等の出土量を、今回図示した以外のものを含めて、時期的に比較して見ると、大きく３時期のピークがある。第１は瓦器椀・輸入磁器・常滑焼に代表される13世紀頃である。第２は備前焼の壺に代表される14世紀後半～15世紀頃、第３は輸入天目碗・染付け皿、瀬戸系の菊皿に代表される16世紀頃である。

これらの出土遺物は第１・２期のものはⅣ・Ⅴ・Ⅵ区から多く出土し、第３期のものの多くはⅡ区から出土している。これはⅣ・Ⅴ区の遺構の在り方と、Ⅱ区の遺構の在り方とも関わり当遺跡の存続時期、時期的な違いによる遺跡の変貌を示しているものと考えられる。

第3節　まとめ

洲本市内における淡路縦貫道に係る発掘調査は当遺跡が大森谷遺跡に次いで2例目である。

今回の調査では、弥生時代中期（第Ⅳ様式）の住居址2棟、古墳時代の住居址8棟、鎌倉時代（13世紀前半）の建物址、室町時代の土壙・ピット群を発見することができた。

弥生時代の遺構については住居址が2棟発見できただけであるが、本来的には同時期の遺構が他にも存在した可能性がある。それは確認調査も含め、少量とはいえ弥生時代中・後期の土器が出土しているところから判断している。おそらく小規模ながら集落が存在していたと考えられる。

古墳時代の遺構はⅣ・Ⅴ区で発見された8棟の住居址である。時期的には5世紀中半～6世紀初頭、6世紀末～7世紀初頭の2時期に分かれる。各住居址とも後世の削平によるのか、残存状況が悪く住居址そのものの詳細は充分に把握できなかった。これら2時期における住居址の形態上の大きな変化は竈の出現である。ここでの竈を有する住居址はいづれも後者の時期である。県内においてもここ数年来、竈を有する住居址の調査例が増加してきている。その中で当遺跡の竈の出現時期は遅いようである。ただ淡路における竈を有する住居址の調査は今回が初例であり、淡路地方における竈の出現時期についての検討は、今後こうした住居址の調査例の増加をまたねばならない。

鎌倉時代以降の遺構は建物址・土壙等であるが、その性格については一部を除き明確にできなかった。当遺跡は第1章でも触れたように先山の山麓に位置し、山頂の千光寺は淡路島内の信仰を集めている。其処への参拝道が調査地の一角にいまも残り、当遺跡がこの千光寺と何らかの関係を持つものと考えられなくもない。また鎌倉時代、洲本平野には内膳荘が成立し、当遺跡も荘園との関係なくしては論じられないものであろう。しかしそれも明確な資料がなく、今回の調査結果からは荘園と本遺跡の関係は何ら確認し得なかった。

以上で今回の調査結果の概略を見てきた。洲本市内の遺跡の在り方が、現状では調査例も少なく、充分把握できていない中で、弥生時代から中世末に至る大まかな居住条件の変遷の一端が明らかになったと考えている。

註1　森下大輔・吉識雅仁『家原・堂ノ元遺跡』加東郡教育委員会　1982年

註2　田辺昭三『陶邑古窯址群』Ⅰ平安学園考古クラブ　1966年

註3　石野博信他『播磨東溝弥生遺跡Ⅰ・Ⅱ』兵庫県教育委員会　1968，1969年

註4　檀本誠一他『川島立岡遺跡』兵庫県教育委員会　1971年

註5　註1に同じ

註6　神戸市教育委員会「下宅原遺跡」『昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報』1986年

註7　石野博信「考古学から見た古代日本の住居」『家』社会思想社　1975年

註8　西谷　正「加耶地域と北部九州」『大宰府古文化論叢』吉川弘文館　1983年

註9　伊藤暁子「入門講座　弥生土器―近畿―」『弥生土器Ⅰ』ニューサイエンス社　1984年

註10　近藤義郎『土器製塩の研究』青木書店　1984年

註11　洲本市教育委員会『山下町居屋敷遺跡』1977年

註12　淡路島の製塩土器については淡路文化史料館の浦上雅史氏より多くの御教示を得た。

遺物観察表

凡例 ・出土地区欄の「G」はグリッドを、「A－T」、「B－T」、「C－T」はAトレンチ、Bトレンチ、Cトレンチを表す。
・法量欄の（ ）内の数字は推定復原値を表す。色調欄の（ ）内の記号は農林省農林水産技術会議監修の「土色帖」に依った色彩記号である。
・色彩欄の「内」、「外」、「断」はそれぞれ土器の「内面」、「外面」、「断面」を表したものである。

確認調査出土遺物

弥生時代の遺物

No	器種	出土地区遺構層位	法量（cm）	残存率	形態・技法の特徴	色調	備考
1	弥生甕	24G	口径 18.6	1/7	「く」の字状に屈曲し、外上方にひらく口縁部。端部は上方にややつまみ出す。 口頸部は内外面ともヨコナデ。体部外面はナデ仕上げ。内面はナデ。	明赤褐 (2.5YR5/6)	
2	弥生細頸壺	24G	口径 6.8	1/6	外上方にのびる頸部から、内彎する口縁部。端部は丸くおさめる。 口縁部は内外面ともヨコナデ。頸部外面は縦方向の篦磨き。内面は横方向のナデ。口縁下に3条の凹線文をめぐらす。	明赤褐 (2.5YR5/6)	胎土に微量の黒雲母を含む。
3	弥生台付鉢	24G	口径 24.2	1/6	斜上方にのびる体部から内彎する口縁部。端部は面をなす。 口縁部外面はヨコナデの後横方向の篦磨き。体部外面は縦方向の篦磨き。口縁端面及び口縁部・体部内面とも横方向の篦磨き。口縁下に4条の凹線文をめぐらす。	橙 (5R7/6)	胎土に黒雲母を含む。
4	弥生鉢	31－4G	口径 26.5	1/12	内彎気味にのびる口縁部。端部は内外に拡張し、水平な端面をつくる。内外面とも調整不明。口縁下に刻み目をもつ貼り付け凸帯を2条めぐらす。口縁部外面に櫛描波状文を施す。	にぶい橙 (10YR7/4)	胎土に黒雲母を含む。
5	弥生高杯	4G	脚台径 18.3		円筒状の脚柱部から「ハ」の字状に短くひらく裾部。脚端部は上下に肥厚し面をつくる。杯底部と口縁部の境に凹線文を施す。脚裾部には、5方向から円孔を穿つ。杯部と脚裾部外面は縦方向の篦磨き。脚柱部外面はナデ調整。杯底部の内面は篦磨きし、脚裾部内面はナデ。脚柱部の内面は、横方向の篦削り。	にぶい黄橙 (10YR7/3)	胎土に黒雲母を微量に含む。
6	弥生高杯脚	24G	脚台径 14.7	1/4	なだらかに斜めにひらく裾部。端部は上下に大きく拡張する。 外面は縦方向の篦磨き。内面は横方向（右→左）の篦削り。端部はヨコナデ。裾部下端に篦状工具による刻み目を施す。	にぶい黄橙 (10YR7/4)	胎土に微細な黒雲母を多量に含む。

No	器種	出土地区 遺構層位	法量 (cm)	残存率	形態・技法の特徴	色調	備考
7	弥生 広口壺	21G	口径 17.6	1/12	外上方にひらく口縁部。端部はわずかに下方に拡張する。口縁端面に2条の凹線文をめぐらし、竹管円形浮文を貼り付ける。口縁部外面は縦方向の刷毛目の後ナデ、内面はヨコナデ。	橙 (5YR7/6)	胎土に微細なクサリ礫・黒雲母を含む。
8	弥生 広口壺	17G	頸部径 10.6	1/7	やや外傾する筒状の頸部。 内外面とも調整不明。頸部下半に刺突文と3条の凹線文を施し、肩部との境に凸帯文をめぐらす。	内 橙 (2.5YR6/6) 外 橙 (2.5YR7/6)	
9	弥生 高杯	23G	口径 24.4	1/13	屈曲した後、強く外反する口縁部。端部は面をなす。 口縁部外面は縦方向の篦磨き、上端にヨコナデによる鈍い段をつくる。 内面は横方向の篦磨き。端部はヨコナデ。	にぶい橙 (5YR7/4)	胎土に微細な黒雲母を含む。
10	弥生 器台	18G	口径 24.8	1/17	内彎気味に開く口縁部。端部は下方に拡張する。 口縁部外面は横方向のナデ。内面は篦磨きを施し、上端に擬凹線文を施す。口縁端面は上端に1条の凹線文をめぐらした後、細線鋸歯文と竹管円形浮文を加飾する。	内 橙 (5YR7/6) 外 にぶい橙 (5YR7/4)	胎土に微細な黒雲母を含む。
11	弥生 底部	18G	底径 3.9		外面は右上がりの叩き (2.5条/cm)。内面は刷毛目 (3本/cm)。底面はナデ。	内 淡橙 (5YR8/3) 外 橙 (5YR7/6)	胎土に微細な黒雲母を含む。
12	弥生 底部	17G	底径 3.7		ドーナツ状のあげ底。 外面はナデ。内面は板ナデの後、ナデ。底面に指押えが認められる。	内 褐灰 (7.5YR4/4) 外 橙 (5YR7/6)	胎土にやや粗い黒雲母を含む。
13	弥生 高杯脚	18G			外彎しながら開く低い脚部。 脚部外面及び杯底部内面は篦磨き。 脚部内面はナデ、わずかに絞り目が残る。	にぶい橙 (7.5YR7/4)	胎土にやや粗い黒雲母を含む。

古墳時代の遺物

No	器種	出土地区 遺構層位	法量 (cm)	残存率	形態・技法の特徴	色調	備考
16	須恵器 杯蓋	21G	口径 12.9 器高 5.3	1/2	口縁部は下方に下がり、端部は段をなす。稜線はやや鈍く、天井部は丸い。 内外面ともに回転ナデ。天井部の約1/2に回転篦削りを施す。ロクロ回転方向は右まわり。	内 灰 (N6) 外 灰 (7.5Y6/1) 断 赤褐 (10R4/3)	底部外面1/2程度に自然釉をかぶる。
17	須恵器 杯蓋	9～10G	口径 14.7	1/4	口縁部は下方に下がり、端部は段をなす。稜線は鈍い。 内外面ともに回転ナデ。天井部の約2/3に回転篦削りを施す。ロクロ回転方向は右まわり。	明青灰 (5B7/1)	
18	須恵器 杯身	37G	口径 12.8	1/4	たちあがり部は内傾してのび、端部は丸い。受部は短く外上方にのび、端部は丸い。底部は浅く、平らである。 内外面ともに回転ナデ。底部の約3/5に回転篦削りを施す。	内 明青灰 (5B7/1) 外 暗青灰 (5B4/1)	
19	須恵器 杯身	21G	口径 11.8 器高 5.2	1/3	たちあがり部は内傾して、外反しながらのび、端部は丸い。受部は外上方にのび、端部は丸い。底部は深く、丸い。 内外面ともに回転ナデ。底部の約3/5に回転篦削りを施す。ロクロ回転方向は右まわり。	内 褐灰 (7.5YR4/1) 外 灰 (5Y4/1)	
20	須恵器 高杯脚	21G	脚台径 9.1 残存高 5.3	2/3	脚部は短く、端部は段を成し、3方に長方形の透しを穿つ。 杯底部内面はナデ、外面は篦削り、脚部は内外面ともに回転ナデである。外面上半部にカキ目調整。	内 青灰 (5B6/1) 外 オリーブ灰 (2.5GY5/1)	外面に自然釉が認められる。

中世の遺物

No	器種	出土地区 遺構層位	法　量（cm）	残存率	形態・技法の特徴	色　調	備　考
21	土師質 土器 甕	27G	口径　26.5	2/3	「く」の字状に屈曲し、外上方にのびる口縁部。端部は上方に大きくつまみ出す。肩の張らない体部。 口縁部外面は横方向のナデ。頸部外面は指押え。肩部外面に小さな貼り付け凸帯をめぐらす。	橙 (5YR7/6) にぶい橙 (5YR7/4)	胎土にやや粗いクサリ礫を含む。
22	土師質 土器 甕	20G	口径　25.6	1/8	「く」の字状に屈折し外上方にひらく口縁部。端部は上方につまみ出す。 口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は叩きの後ナデ。内面は横方向の刷毛調整（6本/cm）の後ナデ。	明赤褐 (10YR3/3)	胎土に微量の黒雲母を含む。
27	土師質 土器 土場脚	31～ 4G			まっすぐにのびる脚部。 脚部の全面にナデ。上位に指おさえが残る。	灰白 (2.5Y8/2)	
28	瓦質 土器 羽　釜	27G			やや内彎する口縁部。端部は面をなす。口縁部外面直下に幅の広い鍔をもつ。 外面および口縁端面は横方向のナデ。口縁部外面に2条の段を有する。鍔部は横方向のナデ。内面は刷毛調整。粘土紐接合痕が残る。	明赤灰 (7.5R7/1) 灰 (N4)	
23	施釉 陶器 碗	10G			外上方にのびる口縁部をもつ。端部は丸くおさめる。 内外面に天目釉を施す。体部下半以下露胎。	明褐 (7.5YR5/6)	天目茶碗
24	施釉 陶器 碗	32G			内彎しながら外上方に屈曲する口縁部をもつ。端部は尖り気味。 内外面ともに天目釉を施す。	明褐 (7.5YR5/6)	天目茶碗
25	施釉 陶器 碗	32G			内彎しながら外上方に屈曲しながらのびる口縁部をもつ。端部は尖り気味。 内外面ともに天目釉を施す。	明褐 (7.5YR5/6)	天目茶碗
26	磁　器 皿	31～ 4G			内彎気味にひらく体部。底部は円形に削り出す（碁笥底）。 内外面ともに施釉。草花文様を付す。	灰白 (5Y8/1)	輸入磁器

Ⅱ区出土遺物

弥生時代の遺物

No	器種	出土地区遺構層位	法量（cm）	残存率	形態・技法の特徴	色調	備考
29	弥生鉢	Ⅱ区トレンチ			わずかに外反しながら上方にのびる口頸部。端部は肥厚し、面をなす。内外面とも調整不明。頸部に2条の貼付凸帯をめぐらし、凸帯の上下及び凸帯の間に櫛描波状文を施す。	淡橙 (5YR8/3)	胎土に径3㎜前後のクサリ礫を含む。
30	弥生高杯脚	Ⅱ区トレンチ	脚台径 13.7	1/4	直線的に斜めにひらく裾部。端部は上下に大きく拡張する。外面は縦方向の箆磨き。内面は横方向（左→右）の箆削り。端部はヨコナデ。	内 浅黄橙 (10YR8/3) 外 浅黄橙 (10YR8/4)	

古墳時代の遺物

No	器種	出土地区遺構層位	法量（cm）	残存率	形態・技法の特徴	色調	備考
31	土師器壺	Ⅱ区トレンチ	口径 9.2 器高 5.8 体径 10.4	完形	短く直立する口縁部。端部はやや尖る。体部は扁球形に近い。底部は丸い。内外面とも調整不明。	橙 (2.5YR7/8) 橙 (5YR7/8)	
32	須恵器杯蓋	Ⅱ区トレンチ	口径 13.8 器高 4.0	1/9	口縁部は下方に下がった後、やや短く外反する。端部は凹面をなす。稜の突出は鈍い。天井部は平らである。内外面ともに回転ナデ。天井部は回転箆削り。ロクロ回転方向は左まわり。	内 青灰 (5B5/1) 外 青灰 (5B5/1) 断 赤褐 (10R5/3)	
33	須恵器杯蓋	Ⅱ区トレンチ	口径 13.4 器高 5.0	完形	口縁部は下方に下がり、端部は低い段をなす。天井部と口縁部の境は凹線状となる。内外面ともに回転ナデ。天井部の約4/5に回転箆削りを施す。天井部内面に仕上げナデ。ロクロ回転方向は右まわり。	内 青灰 (5B5/1) 外 明青灰 (5B7/1)	
34	須恵器杯身	Ⅱ区トレンチ	口径 11.8 器高 4.3	1/11	たちあがり部は内傾してのび、やや外反する。端部は丸い。受部は水平にのび、端部は丸い。底部はやや丸い。内外面ともに回転ナデ。底部の約1/2に回転箆削りを施す。底部内面に仕上げナデ。ロクロ回転方向は左まわり。	内 青灰 (5B5/1) 外 青灰 (5B5/1) 断 灰赤 (10R5/2)	

No	器種	出土地区 遺構層位	法量（cm）	残存率	形態・技法の特徴	色調	備考
35	須恵器 杯身	Ⅱ区 トレンチ	口径 11.7 器高 4.0	1/12	たちあがり部は内傾してのび、端部は丸い。受部は水平にのび、端部は丸い。底部はやや浅く平らである。内外面ともに回転ナデ。底部約2/3に回転篦削りを施す。底部内面に仕上げナデ。ロクロ回転方向は左まわり。	内 青灰 (5B5/1) 外 暗青灰 (5B4/1) 断 灰赤 (10R6/7)	
36	須恵器 杯身	Ⅱ区 トレンチ	口径 12.2 残存高 3.1	1/7	たちあがり部は内傾してのび、外反する。端部は丸い。受部は水平にのび、端部は丸い。 内外面ともに回転ナデ。	内 明青灰 (5B5/1) 外 灰白 (N7)	
37	須恵器 杯身	Ⅱ区 トレンチ	口径 14.4 残存高 3.1	1/13	たちあがり部はほぼ上方にのび、端部は丸い。受部は水平にのび、端部は丸い。 内外面ともに回転ナデ。	内 青灰 (5B7/1) 外 灰 (N4) 断 明青灰 (5B7/1)	
38	須恵器 無蓋高杯	Ⅱ区 トレンチ	口径 13.3 残存高 4.2	1/12	口縁部は外上方にひらき、端部は丸い。2条の稜線は鈍く、段状となる。内外面ともに回転ナデ。	灰白 (N7)	

中世の遺物

No	器種	出土地区 遺構層位	法量（cm）	残存率	形態・技法の特徴	色調	備考
39	土師器 土堝	Ⅱ区 包含層	口径 17.1	1/9	内彎する口縁部。口縁端部はやや肥厚する。口縁部外面直下に鍔をめぐらす。 口縁部内外面は横方向のナデ。体部外面は平行叩き。体部内面は篦削り。	内 にぶい赤橙 (10R6/3) 外 にぶい赤褐 (5YR5/3)	
40	土師器 土堝	Ⅱ区 包含層	口径 20.6	1/10	外反しながら上方にのびる口縁部の端部は肥厚し、面をなす。 内外面ともに横方向のナデ。体部外面は平行叩き。	内 淡橙 (5YR8/3) 外 淡橙 (5YR8/4)	胎土に微細な黒雲母を含む。
41	土師器 土堝	Ⅱ区 包含層	口径 31.2	1/12	やや内彎気味に外上方にのびる体部から、口縁部は屈曲し外反する。端部はやや尖り気味。 内外面ともに横方向のナデ。体部外面に指押え、体部内面は横方向の刷毛調整を施す。	内 浅黄橙 (7.5YR8/4) 外 橙 (5YR7/6) 灰褐 (7.5YR4/2)	胎土にやや粗い黒雲母を含む。 体部外面にスス付着。

No	器種	出土地区 遺構層位	法　量（cm）	残存率	形態・技法の特徴	色　調	備　考
42	土師器 土　塝	Ⅱ　区 包含層			外反する口縁部。端部は肥厚し面をなす。口縁部外面直下に鍔をもつ。 内外面ともに横方向のナデ。	浅黄橙 (7.5YR8/3)	
43	土師器 土　塝	Ⅱ　区 包含層			外反気味に立ち上がる口縁部。端部はやや肥厚し面をなす。口縁部外面直下に鍔状の突出部をもつ。 内外面ともに横方向のナデ。	内　淡橙 (5YR8/4) 外　浅黄橙 (7.5YR8/4)	体部外面にス ス付着。
44	土師器 土　塝	Ⅱ　区 包含層			外反する口縁部。端部は丸い。口縁部外面直下に鍔をもつ。 内外面ともに横方向のナデ。	内　橙 (2.5YR7/6) 外　明赤灰 (2.5YR7/1)	体部外面にス ス付着。
45	土師器 土　塝	Ⅱ　区 包含層			大きく外反する口縁部。端部はやや肥厚する。口縁部外面直下に鍔状の屈曲部をもつ。 口縁部内外面は横方向のナデ。体部内面は刷毛調整。	内　橙 (2.5YR7/6) 外　橙 (2.5YR7/6)	体部外面にス ス付着。
46	瓦質 土器 羽　釜	Ⅱ　区 包含層			やや内彎する口縁部。端部は面をなす。 口縁部外面直下に鍔をもつ。 内外面ともに横方向のナデ。口縁部外面上半に2条の段を有する。	内　暗褐灰 (5YR7/1) 灰白 (N8)	体部外面にス ス付着。
47	無釉 陶器 壺	Ⅱ　区 包含層			外反する短い口縁部をもつ。端部は外方にややつまみ出す。 内外面ともに回転ナデ。肩部に櫛描波状文を施す。	灰白 (N8)	備前
48	無釉 陶器 壺	Ⅱ　区 包含層	口径　13.6	1/3	直口する短い口縁部をもつ。端部はやや肥厚し、丸くおさめる。 内外面ともにロクロナデ。粘土紐の接合痕が残る。	内　浅黄橙 (7.5YR8/6) 外　淡橙 (5YR8/4)	
49	無釉 陶器 擂　鉢	Ⅱ　区 包含層	口径　21.0	1/6	外上方にのびる体部。口縁部下を外方に拡張し、体部との境とする。端部は丸くおさめる。 内外面ともにロクロナデ。内面に櫛描きの擂目(7条/単位)をもつ。	赤橙 (10R6/8)	備前
50	無釉 陶器 擂　鉢	Ⅱ　区 包含層	口径　24.8	1/12	外上方にのびる体部。口縁部は上下に拡張し、端部は尖る。 内外面ともにロクロナデ。内面に櫛描きの擂目をもつ。	浅黄橙 (7.5YR8/3)	備前

No	器種	出土地区遺構層位	法量（cm）	残存率	形態・技法の特徴	色調	備考
51	無釉陶器擂鉢	Ⅱ区包含層	口径 30.0	1/12	外上方にのびる体部。口縁部は上方に大きく拡張し、端部は面をなす。口縁部は下方にもやや突出する。内外面ともに回転ナデ。内面に擂目をもつ。口縁部外面に1条の凹線文がめぐる。	内 褐 (7.5YR4/4) 外 灰 (N6)	備前
52	施釉陶器碗	Ⅱ区包含層			内彎気味にのびる体部。高台は低い。内面に天目釉を施釉する。外面は露胎。削出し高台。	内 青黒 (10BG2/1)	天目茶碗
53	施釉陶器皿	Ⅱ区包含層	口径 10.6 底径 1.8 器高 6.2	1/9	外上方にひらく口縁部。端部は丸くおさめる。平底。口縁部内外面は回転ナデ。底部外面はロクロケズリ。内外面ともに施釉し、内面見込み部の釉をかきとっている。	浅黄 (2.5Y7/4)	瀬戸美濃系
54	施釉陶器碗	Ⅱ区包含層			体部からやや屈曲して外反する口縁部をもつ。端部はやや尖る。内外面ともに施釉する。	オリーブ黄 (7.5Y7/4)	瀬戸美濃系
55	青磁碗	Ⅱ区包含層			内彎気味にのびる体部をもつ。内外面ともに施釉する。体部外面大半は露胎、ロクロケズリを施す。内面には花文と思われる文様を陰刻する。外面には櫛描文を施す。	灰白 (7.5Y7/2)	
56	青磁碗	Ⅱ区包含層			外上方にのびる口縁部をもつ。端部は丸くおさめる。内外面ともに施釉する。外面には鎬蓮弁文を施す。	明緑灰 (7.5GY7/1)	
57	青磁碗	Ⅱ区包含層			内彎気味の体部から屈曲して外反する口縁部。端部は丸くおさめる。内外面ともに施釉する。	明緑灰 (7.5GY7/2)	
58	青磁碗	Ⅱ区包含層			外上方にのびる体部からやや屈曲する口縁部。端部は丸くおさめる。内外面ともに施釉する。	明オリーブ灰 (2.5GY7/1)	

Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区出土遺物

11・12号住居址出土遺物

No	器種	出土地区遺構層位	法量（cm）	残存率	形態・技法の特徴	色調	備考
60	弥生甕	Ⅴ区 住-12	口径 19.7 器高 32.5 底径 7.0 体径 26.8	1/4	「く」の字状に屈折し、外上方にひらく口縁部。端部は上方につまみあげる。体部の張りは強く、中位に最大径を測り、底部はあげ底気味。 口頸部は、内外面ともにヨコナデ。体部外面は、上半を縦方向の刷毛目（5本/cm）の後、下半を下から上に篦削り。内面は、肩部に縦方向のナデ。底部はナデ。	内 明褐灰 (5YR7/2) 外 にぶい橙 (5YR6/3)	胎土にクサリ礫・黒雲母を含む。
61	弥生甕	Ⅴ区 住-12	口径 24.4 器高 32.4 底径 7.9 体径 24.2	1/2	「く」の字状に屈折し、外上方にひらく口縁部。端部は上下にやや拡張する。体部は球形を呈する。平底。 口頸部及び肩部上半は内外面ともにヨコナデ。体部外面は上半を縦方向に刷毛目調整（6本/cm）した後、下半に縦方向（下→上）の篦削りを施す。内面は上半が斜め、下半が縦方向の刷毛目（6本/cm）。底部はナデ。	内 明褐灰 (5YR7/2) 外 にぶい橙 (5YR6/3)	胎土に黒雲母を含む。
62	弥生広口壺	Ⅴ区 住-12	口径 14.4	1/2	斜め上方に大きく外反する口頸部。端部は上下に拡張する。 内外面とも磨滅が著しく調整不明。	橙 (5YR7/6)	
63	弥生甕	Ⅴ区 住-12 ピット	口径 23.0	1/4	「く」の字状に屈折し、外上方にひらく口縁部。端部は上下にやや拡張。体部は張り気味。 口頸部から肩部上位にかけて内外面ともにヨコナデ。体部外面は縦方向の刷毛目（7本/cm）。内面は横方向の刷毛目（7本/cm）の後ナデ。体部中位に刺突文を施す。	内 にぶい黄橙 (10YR7/4) 褐 (7.5YR4/3) 外 にぶい褐 (7.5YR5/3)	胎土に角閃石を含む。
64	弥生甕	Ⅴ区 住-12	口径 26.5	1/9	「く」の字状に屈折し、外上方にひらく口縁部。端部は肥厚し上下に拡張する。 口頸部内外面、端面ともヨコナデ。体部外面は縦方向、内面は斜め方向の刷毛目（6本/cm）。	内 橙 (5YR7/6) 外 灰褐 (5YR4/2)	胎土に黒雲母を微量含む。

No	器種	出土地区 遺構層位	法　量（cm）	残存率	形態・技法の特徴	色　調	備　考
65	弥　生 甕	V　区 住-12	口径　15.0	1/6	「く」の字状に折れ曲り、外上方にひらく口縁部。端部は上方につまみ出す。体部は張る。 口頸部は内外面ともヨコナデ。体部外面は縦方向の刷毛目（6本/cm）の後、肩部上位をヨコナデ。内面は調整不明。口縁端面に1条の凹線文をめぐらす。	にぶい橙 (7.5YR7/4)	口縁部外面にスス付着。
66	弥　生 台付鉢	V　区 住-12	口径　18.5	1/8	緩やかに内彎する体部に直立する口縁部が続く。端部は面をなす。 口縁部外面・端面はヨコナデ。体部外面は縦方向の刷毛目（6本/cm）の後篦磨き。内面は横方向の篦磨き。口縁下に段をもつ。	内　にぶい橙 (5YR7/4) 外　にぶい橙 (5YR6/3)	
67	弥　生 高　杯	V　区 住-12	口径　21.3	1/10	ほぼ水平にのびる杯底部から直立する口縁部。端部は内方に僅かに肥厚し、面をなす。脚部は欠損。 口縁部の外面と端面はヨコナデ。杯部外面は上位のみ横方向、以下には縦方向の篦磨き。内面は口縁部、杯部ともに横方向の篦磨きを施す。口縁下に1条、屈曲部に2条の凹線文をめぐらす。円板充填法。	内　橙 (5YR7/6) にぶい 赤褐 (5YR5/3) 外　橙 (5YR7/8) にぶい 赤褐 (5YR5/3)	胎土にクサリ礫・黒雲母を含む。 黒斑あり。
68	弥　生 甕	V　区 住-11	口径　13.8	1/5	「く」の字状に屈曲し、外上方にひらく口縁部。端部は上方にややつまみ出す。 口頸部は内外面ともヨコナデ。体部は内外面ともナデ。口縁端面に2条の凹線文をめぐらす。	内　橙 (5YR7/6) 外　橙 (5YR6/6)	胎土に微量の黒雲母を含む。
69	弥　生 甕	V　区 住-11	口径　18.2	1/4	「く」の字状に屈折し、外上方にひらく口縁部。端部は上方にややつまみ出す。体部は張らない。 口頸部は内外面ともヨコナデ。体部は内外面ともナデ。	にぶい橙 (5YR7/3)	胎土に微細な黒雲母を含む。
70	弥　生 甕	V　区 住-11	口径　22.9	1/9	「く」の字状に屈折し、外上方にひらく口縁部。端部は肥厚し、上方につまみ出す。 口頸部は内外面ともヨコナデ。外面のヨコナデは肩部に及ぶ。	にぶい橙 (7.5YR7/4)	胎土に微細な黒雲母を含む。

No	器種	出土地区 遺構層位	法量（cm）	残存率	形態・技法の特徴	色調	備考
71	弥生 広口壺	V区 住-11	口径 16.0	1/10	筒状の頸部から外反して水平に開く口縁部。 端部は上下に拡張する。 口頸部外面はヨコナデ。内面は調整不明。口縁端面に2条の凹線文。	にぶい 黄橙 (10YR7/4)	
72	弥生 無頸壺	V区 住-11	口径 15.2	1/8	短く水平に屈曲する口縁部。端部は上方につまみ出し、下方は折れる。 口縁端面、口頸部内外面ともにヨコナデの後、横方向の篦磨き。	内 橙 (7.5YR3/6) 外 にぶい褐 (7.5YR5/4)	胎土に黒雲母を少量含む。
73	弥生 壺	V区 住-11	口径 14.2	1/9	斜め上方に立ちあがる口頸部。端部は肥厚し、面をなす。 口頸部は内外面ともヨコナデ。口縁部に4条以上の凹線文をめぐらす。	にぶい 黄橙 (10YR7/4)	
74	弥生 高杯	V区 住-11	口径 16.8	1/8	緩やかに内彎する体部がほぼ直立して口縁部となる。口縁端部は内方にやや肥厚して、面をなす。口縁部の内外面は横ナデ、杯部の内面は縦方向の篦磨き、外面の調整は不明。		
75	弥生 脚台	V区 住-11	脚台径 13.1	1/4	内彎気味に開く裾部。端部は上方に拡張する。 裾部外面は縦方向の篦磨き。内面は横方向の篦削り。端部はヨコナデ。	にぶい橙 (7.5YR6/4)	胎土にクサリ礫と微量の黒雲母を含む。
76	弥生 脚台	V区 住-11	脚台径 7.9	1/4	「ハ」の字状に開く裾部。端部はわずかに肥厚する。 外面は縦方向の篦磨き。内面は横方向（右→左）の篦削り。端面に1条の凹線文をめぐらす。	明赤褐 (2.5YR5/8)	胎土に微細な黒雲母を含む。
77	弥生 脚台	V区 住-11	脚台径 14.0	1/9	斜めに開く裾部。脚端部は上下に大きく拡張する。 裾部外面は縦方向の篦磨き。内面は横方向（右→左）の篦削り。 脚端部にはヨコナデを施す。2孔1組の円形透しを穿つ。	橙 (7.5YR6/6)	胎土に微細なクサリ礫・黒雲母を含む。外面に黒斑あり。
78	弥生 高杯脚	V区 住-11 壁溝内	脚台径 10.4	1/6	斜めに開く裾部。端部は上下に拡張する。 内外面とも磨滅が著しく調整不明。 裾部下位に推定17方の円形透しを穿つ。脚端面に3条の凹線文を施す。	橙 (5YR6/6)	胎土に微量の黒雲母を含む。
79	弥生 器台脚	V区 住-11	脚台径 15.5	1/4	内彎気味に斜めに開く裾部。脚端部は内方に拡張する。 裾部内外面・端面ともにヨコナデ。 6条の凹線文をめぐらす。	橙 (7.5YR6/6)	黒斑あり。

1－9号住居址出土遺物

No	器種	出土地区 遺構層位	法　量（cm）	残存率	形態・技法の特徴	色　調	備　考
80	土師器 高　杯	Ⅳ　区 住-1	口径　24.7	1/4	深い杯部で、稜をもって屈曲した後外上方にのびる口縁部をもつ。端部は丸い。 口縁部外面はヨコナデ。杯底部外面はナデの後篦磨き。内面は不明。	橙 (5YR7/8)	胎土に微細なクサリ礫を含む。
81	土師器 壺	Ⅳ　区 住-1			斜めにのびる口頸部に、張りのある肩部が続くと思われる。 頸部は内外面とも縦方向の篦磨き。体部外面は丁寧な横方向の篦磨き。頸部との境にヨコナデを施す。内面はナデ。指頭圧痕が残る。	にぶい赤褐 (5YR5/4) 赤褐 (5R5/4) (5R4/3)	
82	須恵器 杯　身	Ⅴ　区 住-2	口径　11.3 器高　5.5	1/2	たちあがり部は内傾してのび、上部でやや外反する。端面は浅い凹みをもつ。受部は水平にのび、端部を丸くおさめる。体部は深い。 内外面ともに回転ナデ、底部の約2/3に回転篦削りを施す。底部内面は仕上げナデ。ロクロ回転方向は左まわり。	内　灰白 (5YR8/2) 外　灰褐 (5YR6/2) 断　明褐灰 (5YR7/1)	
83	土師器 杯	Ⅵ　区 住-2	口径　11.4	1/3	椀状の体部に内傾する口縁部がつづく。端部は内方にややつまみ出す。 口縁部は内外面ともにヨコナデ。体部外面は横方向の篦磨き。体部内面は横方向のナデの後、縦方向の篦磨きを放射状の暗文風に施す。体部外面の篦磨きは、口縁部ヨコナデの上に及ぶ。	内　灰黄褐 (10YR5/2) 橙 (7.5YR7/6) 外　橙 (5YR7/6)	
84	土師器 甕	Ⅴ　区 住-2	口径　17.2	1/13	体部から屈曲した後、外反して立ち上がる口頸部。端部は丸い。 口頸部は内外面ともヨコナデ。肩部外面は縦方向の刷毛目（4本/cm）。肩部内面は横方向の板ナデ。	内　浅黄橙 (7.5YR8/4) 外　浅黄橙 (7.5YR8/3)	
85	須恵器 杯　蓋	Ⅴ　区 住-3	口径　15.1 残存高　4.2	1/8	口縁部は外下方に下がった後、短くやや外反する。端部は低い段をなす。稜線は鈍く、凹線に近い。 内外面ともに回転ナデ。ロクロ回転方向は右まわり。	内　明青灰 (5B7/1) 外　灰 (N6) 断　明青灰 (5B7/1)	

No	器種	出土地区 遺構層位	法　量（cm）	残存率	形態・技法の特徴	色　調	備　考
86	須恵器 杯　身	V　区 住-3	口径　11.4 残存高　3.0	1/12	たちあがり部は内傾してのび、端部は丸い。受部は水平にのび、端部は丸い。 内外面ともに回転ナデ。ロクロ回転方向は左まわりか。	内　灰白 (N8) 外　灰白 (N8) 褐灰 (5YR5/1)	
87	須恵器 杯　蓋	V　区 住-4	口径　15.4 残存高　3.25	1/4	口縁部は下方に下がった後、屈曲して、やや外反しながらのびる。端部は低い段をなす。天井部はやや丸くなる。 内外面ともに回転ナデ。天井部の約1/2に回転篦削りを施す。ロクロ回転方向は右まわり。	内　明青灰 (5B7/1) 外　灰白 (N8) 断　緑灰 (5G6/1)	
88	須恵器 杯　蓋	V　区 住-4	口径　14.3 器高　3.8	1/15	口縁部は外下方にひらき、端部は丸い。口縁部内面に低い段をもつ。 天井部はやや平らである。 内外面ともに回転ナデ。天井部の約2/3に回転篦削りを施す。天井部内面は仕上げナデ。粘土紐痕が残る。 ロクロ回転方向は右まわり。	内　灰白 (N7) 外　灰白 (N6) 断　灰白 (N7)	
89	須恵器 杯　身	V　区 住-4	口径　13.6 残存高　2.5	1/4	たちあがり部は内傾してのび、端部は丸い。受部は水平にのび、端部は丸い。 内外面ともに回転ナデ。ロクロ回転方向は右まわりか。	内　明赤灰 (10R7/1) 外　灰 (N6)	
90	須恵器 杯　身	V　区 住-4	口径　13.7 残存高　3.4	1/5	たちあがり部は内傾してのび、やや外反する。端部は丸い。受部はやや外上方にのび、端部は丸い。 内外面ともに回転ナデ。底部は回転篦削り、ロクロ回転方向は右まわりか。	内　明青灰 (10BG7/1) 外　褐灰 (5YR6/1)	
91	須恵器 杯　身	V　区 住-4	口径　13.6 器高　4.0	2/3	たちあがり部は内傾してのび、やや外反する。端部は丸い。受部は外上方にのび、端部は丸い。底部は浅く平らである。 内外面ともに回転ナデ。底部の約2/3に回転篦削りを施す。底部内面は仕上げナデ。粘土紐痕が残る。ロクロ回転方向は右まわり。	内　灰 (10Y6/1) 外　灰白 (10Y7/1) 断　灰 (10Y6/1)	

No	器種	出土地区 遺構層位	法　量（cm）	残存率	形態・技法の特徴	色　調	備　考
92	土師器 甕	V　区 住-4	口径　19.5	1/5	張りの少ない体部から外反する口頸部。端部は丸くおさめる。 口縁部外面は横方向のナデ、下半には板ナデを施す。体部外面は縦の刷毛目（８本/cm）。内面は調整不明。	内　浅黄橙 (7.5YR8/3) 外　浅黄橙 (10YR8/4)	
93	土師器 甑	V　区 住-4	口径　24.0	1/4	直立する口縁部。端部はやや尖る。体部は筒状を呈し、内彎気味にすぼまる。体部中位に貼り付け把手がつく。口縁部は内外面とも横方向のナデ。 体部外面は縦方向の刷毛目（　本/cm）。内面はナデ。	内　淡橙 (5YR8/3) 外　にぶい橙 (7.5YR7/3)	胎土に微細なクサリ礫を含む。
94	土師器 壺	V　区 住-4	口径　10.9	1/4	外上方にまっすぐにのびる口頸部。端部は丸くおさめる。肩の張らない体部が続くものと思われる。 口頸部は内外面ともヨコナデの後、縦方向の箆磨き。肩部外面はナデの後、箆磨き。内面はナデ。 接合痕、指頭圧痕がみられる。	内　橙 (5YR6/8) 外　橙 (5YR7/8)	
95	土師器 高杯脚	V　区 住-6	脚台径　9.6	1/4	「ハ」の字状に開く中空の筒部から屈曲して裾部に続く。端部は面をなす。 脚部は内外面ともナデ。内面屈曲部に指頭圧痕、筒部には粘土紐巻き上げの痕跡が残る。	橙 (5YR7/8)	
96	須恵器 杯　蓋	V　区 住-7	口径　14.7 残存高　3.7	1/3	口縁部は下方に下がった後、やや短く外反する。端部は凹面をなす。稜線はない。 内外面ともに回転ナデ。天井部の約2/3に回転箆削りを施す。ロクロ回転方向は右まわり。	内　明赤灰 (7.5R7/1) 外　明赤灰 (7.5R7/1) 断　赤灰 (7.5R5/1)	
97	須恵器 杯　身	V　区 住-7	口径　12.8 残存高　4.1		たちあがり部は内傾してのび、端部は丸い。受部はやや外上方にのび、端部は丸い。 内外面とも回転ナデ。底部内面に仕上げナデを施す。底部の約1/2に回転箆削り。ロクロ回転方向は右まわり。	内　明青灰 (5B7/1) 外　青灰 (5B6/1)	

No	器種	出土地区 遺構層位	法　量（cm）	残存率	形態・技法の特徴	色　調	備　考
98	須恵器 杯　身	V　区 住-7	口径　11.7 器高　(3.75)	1/4	たちあがり部は内傾してのび、上半でやや直立する。端部は丸い。受部は水平にのび、端部は丸い。底部は平らである。 内外面ともに回転ナデ。底部の約1/2に回転篦削りを施す。底部内面には同心円叩き文及び仕上げナデを施す。ロクロ回転方向は左まわり。	内　灰白 (N7) 外　灰白 (N7~8) 灰黄 (2.5Y6/2) 断　赤灰 (10R5/1)	
99	須恵器 杯　身	V　区 住-7	口径　13.0 残存高　3.8	1/4	たちあがり部は内傾してのび、上半でやや直立する。端部は丸い。受部は外上方にのび、端部は丸い。 内外面ともに回転ナデ。底部の約3/4に回転篦削りを施す。ロクロ回転方向は右まわり。	内　灰白 (N7) 外　暗オリーブ灰 (2.5GY3/1) 断　灰赤 (2.5YR4/2)	
100	須恵器 杯　身	V　区 住-7	口径　6.1 器高　4.0	完形	たちあがり部は内傾してのび、端部は丸い。受部は外上方にのび、端部は丸い。底部は平らである。 内外面ともに回転ナデ。底部の約1/2に回転篦削りを施す。底部内面には仕上げナデ。ロクロ回転方向は左まわり。	内　灰 (N6/1) 外　灰 (N6) 暗オリーブ灰 (5GY3/1)	
101	須恵器 杯　身	V　区 住-7	口径　12.4 残存高　4.2	1/4	たちあがり部は内傾してのび、上半でやや直立する。端部は丸い。受部は外上方にのび、端部はやや尖る。 内外面ともに回転ナデ、底部の約2/3に回転篦削りを施す。ロクロ回転方向は右まわり。	灰白 (N8)	
102	須恵器 杯　身	V　区 住-7	口径　11.6 器高　4.2	1/8	たちあがり部は内傾してのび、上半でやや直立する。端部は丸い。受部は外上方にのび、端部は丸い。底部は平らである。 内外面ともに回転ナデ。底部の約2/3に回転篦削りを施す。底部内面には仕上げナデ。ロクロ回転方向は右まわり。	内　灰白 (N7) 外　灰 (7.5Y6/1) 断　灰白 (N7)	
103	須恵器 杯　身	V　区 住-7	口径　11.8 残存高　3.1	1/4	たちあがり部は内傾してのび、上半で直立する。端部は丸い。受部は外上方にのび、端部は丸い。 内外面ともに回転ナデ。ロクロ回転方向は右まわりか。	灰 (N6)	

No	器種	出土地区 遺構層位	法　量（cm）	残存率	形態・技法の特徴	色　調	備　考
104	土師器 甕	V　区 住-7	口径　26.0 器高　30.2 底径　8.8	1/4	口縁部は短く外反し、端部は面をなす。体部上半は筒状を呈し、下半は内彎気味にすぼまる。体部のやや下寄りに挿入把手がつく。 口縁部は内外面とも横方向のナデ。体部外面は縦方向の刷毛目（5本/cm）底部付近にはナデを施す。内面は板ナデにより平滑に仕上げている。 底部に1個以上の孔を有する。	にぶい橙 (5YR7/4)	
105	土師器 甕	Ⅳ　区 住-9	口径　16.1		張りの少ない体部から屈曲し、外上方に外反する口頸部。端部は丸くおさめる。 口頸部は内外面ともヨコナデ。屈曲部に指頭圧痕が残る。体部外面は斜め方向の刷毛目（5本/cm）。内面は横方向の板ナデ。	内　浅黄橙 (7.5YR8/3) 外　浅黄橙 (7.5YR8/4)	
106	土師器 甕	V　区 住-7	口径　20.3	1/4	屈曲した後外反して立ち上がる口頸部。端部は内方にややつまみ出す。 口頸部は内外面とも横方向のナデ。体部外面は縦方向、内面は横方向の刷毛目（4本/cm）。	内　にぶい橙 (5YR7/4) 外　にぶい橙 (7.5YR7/3)	
107	土師器 甕	V　区 住-7	口径　18.8 器高　(27.0) 体径　21.6	1/6	緩やかに屈曲した後、外反する口頸部。端部は丸くおさめる。肩の張らない長胴の体部で、底部は丸底。 口頸部は内外面とも横方向のナデ。体部外面は縦方向の刷毛目（4本/cm）。	内　にぶい黄橙 (10YR7/3) 外　にぶい黄橙 (10YR7/4)	
108	製塩 土器	Ⅳ　区 住-9	口径　7.85 器高　4.05	完形	やや内彎気味の口縁部。端部は丸くおさまる。体部は丸味をもつ。 内外面ともにナデか。口縁部上半内外面に「こうら」が認められる。二次焼成を受けている。	内　暗灰黄 (2.5Y5/2) 外　黄橙 (7.5YR8/6)	胎土に微細なクサリ礫を含む。
109	製塩 土器	V　区 住-7	口径　9.6 器高　8.8	1/4	内彎気味にのび、上半で内方に屈曲する口縁部。端部は尖る。底部はやや丸底気味。薄手のつくりである。「こうら」が認められ、二次焼成されている。 内外面ともにナデ及び指おさえか。	橙 (5YR7/6) 淡橙 (5YR8/4)	胎土に微細なクサリ礫を含む。 磨滅のため調整不明。

No	器種	出土地区 遺構層位	法　量（cm）	残存率	形態・技法の特徴	色　調	備　考
110	製塩 土器	V　区 住-7			内彎しながらのびる口縁部。端部は尖る。 内外面ともにナデ。口縁部内面上半に指おさえ。粘土紐接合痕が認められる。	内　淡橙 (5YR8/3) 外　にぶい橙 (5YR7/3)	胎土にやや粗い黒雲母を含む。
111	製塩 土器	V　区 住-7			内彎しながらのびる口縁部。端部は鋭い。 内外面ともにナデ。口縁部内面上半に指おさえ。粘土紐接合痕が認められる。	内　にぶい橙 (5YR7/4) 外　にぶい橙 (7.5YR7/4)	胎土に微細なクサリ礫・黒雲母を含む。
112	製塩 土器	V　区 住-7			頸部で一度すぼまり、外反気味に上方にのびる口縁部。端部は丸い。体部は丸味をもつ。 内外面ともにナデ。口縁部外面に指おさえ。「こうら」が認められる。二次焼成を受けている。	橙 (5YR7/6)	
113	製塩 土器	V　区 住-7			体部より一度内傾して、やや外上方にのびる口縁部。端部はやや尖る。体部は丸味をもつ。 口縁部内外面上半は指おさえ及び粘土紐接合痕が認められる。下半はナデ。「こうら」が認められる。二次焼成を受けている。	内　橙 (7.5YR7/6) 外　橙 (5YR6/6)	
114	製塩 土器	V　区 住-4			外反しながらのびる口縁部。端部は垂直にのび丸い。薄手のつくりである。 内外面ともにナデ。二次焼成は不明。	内　浅黄橙 (7.5YR8/3) 外　淡橙 (5YR8/4)	
115	製塩 土器	V　区 住-4			わずかに内彎する口縁部。端部は丸い。薄手のつくりである。 内外面ともにナデ。「こうら」が認められる。二次焼成を受けている。	内　褐灰 (10YR5/1) 外　褐灰 (10YR6/1)	
116	製塩 土器	V　区 住-4			わずかに内彎する口縁部。端部はやや内傾し、丸い。薄手のつくりである。 内面は板ナデ。外面はナデ。「こうら」が認められ、二次焼成を受けている。	灰白 (7.5YR8/1)	

Pit 内出土遺物

No	器種	出土地区 遺構層位	法量 (cm)	残存率	形態・技法の特徴	色調	備考
117	土師器 皿	Ⅳ区 P-5	口径 6.9 器高 1.0 底径 4.7	完形	外上方にのびる短い口縁部。端部は丸い。 内外面ともにヨコナデ。底部は回転糸切り。	内 黄橙 (7.5YR8/8) 外 にぶい橙 (7.5YR7/4)	胎土に微細なクサリ礫を含む。
118	土師器 皿	Ⅳ区 P-5	口径 6.5 器高 1.0 底径 4.5	完形	外上方にのびる短い口縁部。端部は丸い。 内外面ともにヨコナデ。底部は回転糸切り。	浅黄橙 (7.5YR8/6)	
119	土師器 皿	Ⅳ区 P-5	口径 6.9 器高 0.9 底径 5.0	2/3	外上方にのびる短い口縁部。端部は丸い。薄手である。 内外面ともにナデ。底部は回転糸切り。	内 浅黄橙 (7.5YR8/6) 外 浅黄橙 (7.5YR8/4)	胎土に微細なクサリ礫を含む。
120	土師器 皿	Ⅳ区 P-5	口径 7.2 器高 1.4 底径 4.3	1/4	外上方にのびる短い口縁部。端部は丸い。 口縁部外面はナデ。口縁部内面はヨコナデ。底部は回転糸切り。	浅黄橙 (7.5YR8/3) 明褐灰 (7.5YR7/1)	
121	土師器 皿	Ⅳ区 P-5	口径 12.1 器高 2.5	2/3	内彎しながら外方にのびる口縁部。端部は丸い。薄手である。 内外面ともにヨコナデ。底部は回転糸切り。	内 灰褐 (5YR5/2) 外 灰赤 (2.5YR5/2)	
122	土師器 皿	Ⅳ区 P-5	口径 13.7 器高 (2.2)	1/4	内彎しながら外方にのびる口縁部。端部は丸い。薄手である。 内外面ともにヨコナデ。底部は回転糸切り。	浅黄橙 (7.5YR8/4)	
123	無釉陶器 壺	Ⅳ区 P-5	口径 18.4 底径 23.6 器高 (49.1)		体部からほぼ直立した頸部が立ち上がり、頸部を外方に折り曲げて口縁部とし、口縁部は縦長の玉縁である。平らな底部から外上方に立ち上がった体部は、肩部の張りが強い。肩部には部分的に自然細がかかり、4本1単位の櫛目文を2条施している。底部外面は未調整。体部は内外面ともナデ調整だが、底部付近に刷毛調整痕が残る。	灰褐 (5YR5/1)	備前Ⅳ A 期
124	須恵器 杯	Ⅲ区 P-1	口径 11.5 器高 2.8 底径 6.6	完形	体部から口縁部にかけて、ほぼ直線的に外上方にのびる。端部は丸い。 底部は平らである。内外面ともに回転ナデ。底部内面に仕上げナデ。底面に回転糸切り痕が残る。	内 灰白 (7.5YR8/2) 外 灰白 (7.5YR8/1)	口縁部に重ね焼きの痕跡。(備前？)

No	器種	出土地区 遺構層位	法　量（cm）	残存率	形態・技法の特徴	色　調	備　考
125	須恵器 杯	Ⅳ　区 土壙3	口径　12.5 器高　2.95	1/3	体部から口縁部にかけて、内彎しながら外上方にのび、上部でやや内傾する。端部は丸い。底部は平らである。薄手である。 内外面ともに回転ナデ、底部内面に仕上げナデ及び粘土紐痕が残る。 底部外面に回転糸切り痕。	灰白 (7.5YR8/1) 灰白 (N7)	口縁部に重ね焼きの痕跡。
126	土師器 杯	Ⅳ　区 P-14	口径　11.8 器高　3.4	1/15	やや内彎しながら外上方にのびる口縁部。端部は丸い。 内外面ともにヨコナデ。底部は回転糸切り。	橙 (5YR7/8)	
127	土師器 杯	Ⅳ　区 P-18	底径　6.0		やや内彎しながら外上方にのびる。 内外面ともにヨコナデ。底部は回転糸切り。	橙 (5YR7/8)	胎土に微細なクサリ礫を含む。
128	青　磁 碗	Ⅳ　区 P-10	底径　4.9	1/2	内彎気味に外上方にのびる体部。高台は台形状で厚い。 内外面ともに施釉する。削り出し高台。体部に鎬蓮弁文様を施す。	明緑灰 (5G7/1)	
129	白　磁 碗	Ⅴ　区 P-6	底径　5.5	1/3	内彎気味に外上方にのびる体部。高台は台形状をなす。 内外面ともに施釉するが、高台付近は露胎。削り出し高台。	灰白 (7.5YR8/2)	

包含層出土遺物

No	器種	出土地区 遺構層位	法　量（cm）	残存率	形態・技法の特徴	色　調	備　考
134	弥　生 直口壺	V　区	口径　9.4 体径　18.8	ほぼ 完形	内彎気味に立ちあがる口頸部。口縁端部は丸くおさめる。算盤玉状の体部。最大径を体部下位に測る。底部は欠損。 口頸部外面はヨコナデ。内面は横方向のナデ。体部外面は、上半に縦篦磨き、下半には縦篦磨きの後、5角形にめぐる横篦磨き、さらに最大径付近に横篦磨きを施す。内面は体部上位にナデ、中位に縦刷毛目（4本/cm）、下位に横刷毛目（4本/cm）の後ナデ調整を行い、さらに最大径付近に強い横方向のナデを施す。頸部に8条の凹線文。	橙 (5YR7/6)	胎土に微細なクサリ礫・黒雲母を含む。体部最大径付近に黒斑あり。
135	弥　生 甕	Ⅳ　区	口径　22.1	1/8	「く」の字状に屈曲し、外上方にひらく口縁部。端部は上下に拡張する。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりの叩き（2条/cm）の後ナデ。内面は調整不明。口縁端面に3条の凹線文をめぐらす。	にぶい橙 (7.5YR7/3)	胎土に微細なクサリ礫を含む。
136	弥　生 甕	V　区	口径　25.1	1/9	「く」の字状に屈折し外上方にひらく口縁部。端部は上方につまみ出す。口頸部は内外面ともヨコナデ。体部外面は左上がりの叩き（3条/cm）、内面は剥離。口縁端面はヨコナデにより凹む。	橙 (5YR7/6)	胎土に微細な黒雲母を含む。
137	弥　生 台付鉢	V　区 P-21	口径　31.4	1/12	斜めにのびる体部から内彎して立ち上がる口縁部。端部は内方に拡張し水平な端面をつくる。 口縁部内外面・端面ともヨコナデ。体部外面は縦方向の篦磨き。内面はナデ。口縁下に4条の凹線文をめぐらす。	黄橙 (7.5YR7/8)	胎土に微量の黒雲母を含む黒斑あり。
138	弥　生 高杯脚	V　区		2/3	中空の脚柱部。 脚柱部外面はナデの後、粗い篦磨き。内面は絞り目、杯部及び裾部への移行部内面はナデ。外面に篦描きの沈線文を3帯めぐらす。	橙 (5YR6/6)	胎土に3㎜大のクサリ礫を含む。
139	弥　生 高杯脚	V　区	脚台径　15.0	1/5	斜めにひらく裾部。端部は肥厚し上方に拡張する。 裾部外面は縦方向の篦磨き。内面は横方向の篦削り。脚端部はヨコナデ。裾部中位に推定7個の円形透しを穿つ。	内　橙 (5YR7/6) 外　浅黄橙 (10YR8/4)	胎土に粗い黒雲母を含む。

No	器種	出土地区 遺構層位	法　量（cm）	残存率	形態・技法の特徴	色　調	備　考
155	須恵器 杯　蓋	V　区	口径　12.5 残存高　4.5	1/20	口縁部は下方に下がった後、短くやや外反する。端部は内傾する。天井部と口縁部とをわける稜の突出は鈍い。 内外面ともに回転ナデ。天井部の約1/2に回転篦削りを施す。ロクロ回転方向は左まわり。	内　灰 (N6) 外　青灰 (5B5/1) 断　灰赤 (10R5/2)	
156	須恵器 杯　蓋	Ⅳ　区	口径　13.3 器高　(5.0)	1/8	口縁部は下方に下がる。端部は低い段をなす。稜の突出は鈍いが残る。天井部はほぼ平らである。 内外面ともに回転ナデ、天井部の約2/3に回転篦削り、天井部内面には仕上げナデを施す。ロクロ回転方向は右まわり。	内　明褐灰 (7.5YR7/1) 外　灰オリーブ (5Y6/7) 断　にぶい褐 (7.5YR5/3)	
157	須恵器 杯　蓋	V　区	口径　13.5 器高　4.7	1/10	口縁部は下外方に下がる。端部は丸い。 内外面ともに回転ナデ。天井部の約2/3に回転篦削りを施すが、一部篦切り未調整が残る。天井部内面は仕上げナデ。ロクロ回転方向は右まわり。	灰白 (N7)	
158	須恵器 杯　蓋	V　区	口径　14.9 器高　(3.7)	1/4	口縁部は下外方に下がる。端部は丸く、天井部は平らである。 内外面ともに回転ナデ。天井部の約2/3に回転篦削り、天井部内面に仕上げナデを施す。ロクロ回転方向は右まわり。	内　明褐灰 (5YR7/1) 外　灰白 (7.5YR8/1)	
159	須恵器 杯　身	Ⅳ　区	口径　12.6 残存高　2.8	1/6	たちあがり部は内傾してのび、端部は丸い。受部は水平にのび、端部は丸い。 内外面ともに回転ナデ。ロクロ回転方向は右まわり。	内　灰赤 (10R5/2) 外　灰赤 (2.5YR6/2)	
160	須恵器 杯　身	Ⅳ　区	口径　12.5 残存高　3.6	1/4	たちあがり部は内傾して、やや外反しながらのびる。端部は丸い。受部は水平にのび、端部はやや鋭く丸い。薄手である。 内外面ともに回転ナデ。ロクロ回転方向は右まわり。	内　青灰 (5B6/1) 外　明青灰 (5B7/1)	

No	器種	出土地区 遺構層位	法　量（cm）	残存率	形態・技法の特徴	色　調	備　考
161	須恵器 杯　身	V　区	口径　11.9 器高　(4.6)	1/2	たちあがり部は内傾してのび、上半でやや直立する。端部は丸い。受部はやや外上方にのび、端部は丸い。底部はやや平らである。 内外面ともに回転ナデ。底部の約2/3に回転篦削りを施す。底部内面は仕上げナデ。ロクロ回転方向は右まわり。	にぶい橙 (7.5YR7/3) 褐灰 (5YR6/1) 灰白 (5YR8/1)	
162	須恵器 甕	V　区			口縁部は下方に拡張し、浅く細い凹線文を施す。口縁下に1条の凸帯をめぐらし、その下に2段の櫛描波状文と、さらに2条の凸帯をめぐらす。 内外面ともに回転ナデ。	内　褐灰 (7.5YR4/1) 外　青灰 (5B5/1) 断　にぶい 赤褐 (7.5R4/3)	
163	土師器 甕	V　区	口径　18.1	1/6	張りの少ない体部から「く」の字状に外反して口縁部となり、端部は面をなす。 口縁部は内外面とも横ナデ、体部外面は粗い刷毛調整。	にぶい橙 (5YR7/3)	
164	土師器 甕	Ⅳ　区	口径　25.2	1/4	やや内傾する筒状の体部から、外反する口縁部。端部はわずかにつまみ出す。 口頸部は内外面ともヨコナデ。体部外面は縦方向の刷毛目（9本/cm）。内面はナデ。	橙 (5YR7/6) 赤褐 (5YR4/6)	胎土にやや粗いクサリ礫・黒雲母が含まれる。
165	土師器 甕	V　区	口径　13.6		外上方にのびる口縁部。端部は面をなす。 肩部内面に指頭圧痕がみられる。	橙 (5YR7/8)	磨滅著しい。
166	土師器 杯	Ⅳ　区	口径　10.3	1/4	内彎しながらのびる口縁部。端部は内傾し丸い。 口縁部内面はヨコナデ、体部内面はナデの後に篦磨き。外面は調整不明。	内　橙 (5YR7/8) 外　橙 (5YR7/4)	

No	器種	出土地区 遺構層位	法　量（cm）	残存率	形態・技法の特徴	色　調	備　考
133	無釉 陶器 擂　鉢	Ⅴ　区	口径　30.0	1/18	内傾して、上下に拡張する口縁部をもつ。 内外面ともに回転ナデ。口縁部外面に擬凹線文。体部内面には８条1単位のおろし目。	青灰 (5B6/1)	胎土粗い。
130	施釉 陶器 菊　皿	Ⅴ　区			外上方にのびる体部からほぼ水平にひらく口縁部。端部は内方にややつまみ出す。 内外面ともに灰釉を施す。内面に菊花文を刻む。	オリーブ黄 (5Y6/4)	瀬戸・美濃系
132	施釉 陶器 皿	Ⅳ　区	底径　6.0	1/6	低い高台をもつ。 内外面ともに化粧土をかけたのち、灰釉を施す。底面に重ね焼きの痕跡が認められる。高台畳付の釉をかきとっている。	オリーブ黄 (5Y6/4)	瀬戸・美濃系
131	白　磁 皿	Ⅲ　区			内外面ともに施釉する。口縁部端面の釉をかきとっている。	灰白 (7.5Y8/1)	

Ⅵ区出土遺物

弥生時代の遺物

No	器種	出土地区 遺構層位	法量（cm）	残存率	形態・技法の特徴	色調	備考
167	弥生 広口壺	Ⅵ区 B-T 包含層	口径 21.5	1/8	外反して斜めにひらく口縁部。端部は下方に粘土紐を貼り付けて拡張。口縁部外面は横方向のナデ、内面は横方向の篦磨き。口縁端面に3条の凹線文をめぐらし、竹管円形浮文を貼り付ける。	明赤褐 (5YR5/6)	胎土に1㎜前後の角閃石・黒雲母を含む。
168	弥生 広口壺	Ⅵ区 B-T 包含層	口径 16.9	1/10	外反して外上方にひらく口縁部。端部は上下に拡張。 口縁部は内外面ともヨコナデ。頸部外面は縦方向、内面は横方向の篦磨き。口縁端面には3条の凹線文をめぐらし、さらに6本1組の刻み目を施す。	橙 (5YR6/6)	胎土に微細なクサリ礫を含む。
169	弥生 広口壺	Ⅵ区 A-T 包含層	口径 15.8	1/9	筒状の頸部に外上方にひらく口縁部が続く。口縁端部は下方に肥厚させる。 口縁端面に櫛描波状文を飾る。	内 淡橙 (5YR8/4) 外 にぶい橙 (5YR7/4)	
173	弥生 壺	Ⅵ区 B-T 包含層	頸部径 12.0	1/7	体部は球形か。 体部外面は刷毛目の後、縦方向の篦磨き。内面はナデ、接合痕が残る。頸部との境に圧痕文をもつ凸帯をめぐらす。	内 橙 (5YR7/6) 外 灰褐 (5YR5/2)	胎土に微細なクサリ礫・黒雲母を含む。
174	弥生 壺	Ⅵ区 D-T 包含層			肩の張らない体部になると思われる。 外面は刷毛目の後ナデ調整。内面はナデ。頸部との境に刺突文を施す。	浅黄橙 (10YR8/3)	
170	弥生 甕	Ⅵ区 B-T 包含層	口径 15.4	1/7	「く」の字状に屈曲し、外上方にひらく口頸部。端部は上下にわずかにつまみ出す。 口頸部は内外面ともヨコナデ。内面屈曲部以下に横方向(右→左)の篦削りを施す。	内 にぶい 赤橙 (10R6/4) 外 にぶい橙 (5YR7/4)	胎土にクサリ礫を含む。
171	弥生 甕	Ⅵ区 A-T 包含層	口径 17.6	1/8	「く」の字状に屈曲し、外反する口頸部。端部は下方に僅かに肥厚する。 口頸部は内外面ともヨコナデ。肩部外面は右上がりの叩き、内面は横方向の篦削り。口縁端面に1条の凹線文を施す。	内 にぶい 赤褐 (5YR5/3) 外 にぶい橙 (7.5YR7/4)	胎土に黒雲母を含む。

No	器種	出土地区 遺構層位	法量 (cm)	残存率	形態・技法の特徴	色調	備考
172	弥生 甕	Ⅵ区 B-T 包含層	口径 15.3	1/8	「く」の字状に屈曲し、外反する口頸部。端部は丸くおさめる。 口縁部外面は横方向のナデ。体部外面は右上がりの叩き(2条/cm)。さらに頸部に縦方向の刷毛目(5本/cm)を施す。口頸部内面は横、体部内面は縦方向の刷毛目(5本/cm)。	淡橙 (5YR8/3)	
175	弥生 底部	Ⅵ区 B-T 包含層	底径 3.8 孔径 1.6		平底。底部の孔は中央よりやや偏っている。焼成前の穿孔。 外面は右上がりの叩き(2条/cm)。内面は板ナデ。	にぶい橙 (5YR7/4)	胎土に微細な黒雲母が含まれる。
176	弥生 底部	Ⅵ区 B-T 包含層	底径 2.4 孔径 1.1		小さな平底。底部中央の孔は焼成前の穿孔。 底部外面はナデ。	内 橙 (2.5YR7/6) 外 にぶい橙 (5YR7/4)	胎土に微細な黒雲母が含まれる。
177	弥生 高杯脚	Ⅵ区 B-T 包含層			わずかに外開きに直立する中空の柱状部から裾部へ滑らかに移行する。 外面は縦方向の篦磨き。内面は裾部がナデ、柱状部には絞り目が残る。	にぶい橙 (5YR7/4)	胎土に微細な黒雲母が含まれる。

古墳時代の遺物

No	器種	出土地区 遺構層位	法量 (cm)	残存率	形態・技法の特徴	色調	備考
178	土師器 甕	Ⅵ区 B-T 包含層	口径 17.8	1/4	肩の張らない体部から外上方に立ち上がる口縁部をもつ。口縁部は端部でやや外彎し、外方につまみ出す。 体部外面は刷毛調整、口縁部内外面は横ナデ、体部内面はナデ調整。	橙 (7.5YR7/6)	
179	土師器 高杯脚	Ⅵ区 A-T 包含層	脚台径 10.4		内彎しながらのびる杯部。「ハ」の字状に開く中空の筒部から、屈曲して裾部に続く。裾部は内彎する。 筒部内面は横方向の篦削り。杯部内外面、脚部外面は調整不明。	橙 (5YR7/8)	胎土に微細なクサリ礫を含む。
180	土師器 高杯脚	Ⅵ区 B-T 包含層	脚台径 10.3		「ハ」の字形に開く中空の筒部から屈曲して裾部に続く。 外面は筒部をナデ、裾部にはナデの後篦磨きを施す。内面は筒部下半に横方向(左→右)の篦削り、上半には絞り目。裾部はナデ。	橙 (5YR7/8)	

No	器種	出土地区 遺構層位	法　量（cm）	残存率	形態・技法の特徴	色　調	備　考
181	土師器 高杯脚	Ⅵ　区 B-T 包含層	脚台径　10.0	1/3	「ハ」の字状に開く中空の筒部から屈曲して裾部に続く。端部は丸い。 筒部内面は横方向の篦削り。	橙 (5YR7/8)	
182	土師器 高杯脚	Ⅵ　区 B-T 包含層			「ハ」の字状に開く中空の筒部から屈曲して裾部に続く。 脚部外面は調整不明。筒部内面は横方向の篦削り。絞り目が残る。 裾部内面はナデ。	明赤褐 (5YR5/8)	胎土に微細なクサリ礫を含む。
183	土師器 高杯脚	Ⅵ　区 A-T 包含層	脚台径（9.8）	1/4	「ハ」の字状に開く中空の筒部から屈曲して裾部に続く。 筒部内面は下半のみ横方向の篦削り。粘土紐を螺旋状に巻き上げた痕跡が明瞭に残る。	橙 (5YR7/8)	
184	土師器 高　杯	Ⅵ　区 B-T 包含層	口径　13.9	1/4	浅い受部からやや内彎する口縁部。 端部は内方にややつまみ出す。 内外面ともに篦磨き。	橙 (5YR7/6)	
185	土師器 甑	Ⅵ　区 A-T 包含層	口径　23.7 底径　9.5 器高　（25.5）	1/12	ほぼ直立した体部が外反して口縁部となり、口縁端部は面をなす。体部上半は直立して筒状となり、下半は内彎してすぼまる。同一個体と思われる挿入式の把手も出土しているが取り付く部位は不明。 体部外面は縦方向、内面は横方向の刷毛整形後、内外面ともナデ調整している。口縁部は内外面とも横ナデ。	橙 (5YR7/8)	
186	須恵器 杯　蓋	Ⅵ　区 C-T 包含層	口径　11.5 残存高　4.4	1/5	口縁部は下方に下がった後、やや外反する。端部は凹面をなす。 内外面ともに回転ナデ。天井部の約2/3に回転篦削りを施す。ロクロ回転方向は右まわり。	内　明青灰 (5B7/1) 外　青灰 (5B5/1)	
187	須恵器 杯　蓋	Ⅵ　区 B-T 包含層	口径　12.6 器高　（4.5）	1/8	口縁部は下方に下がった後、やや外反する。端部は凹面をなす。稜の突出は鈍いがわずかに残る。 内外面ともに回転ナデ。天井部の約2/3に回転篦削りを施す。天井部内面は仕上げナデ。ロクロ回転方向は右まわりか。	内　灰 (N7) 外　灰白 (7.5Y7/2) 断　明赤褐 (10R3/3)	

No	器種	出土地区 遺構層位	法量 (cm)	残存率	形態・技法の特徴	色調	備考
188	須恵器 杯蓋	Ⅵ区 A-T 包含層	口径 8.3 器高 (4.4)	1/3	口縁部は下外方に下がった後、短く外反する。端部は凹面をなす。天井部と口縁部をわける稜は鈍い。 内外面ともに回転ナデ。天井部の約2/3に回転篦削りを施す。天井部内面は仕上げナデ。ロクロ回転方向は右まわり。	内 灰白 (N8~7) 外 灰白 (5Y7/1)	天井部に自然釉が認められる。
189	須恵器 杯蓋	Ⅵ区 A-T 包含層	口径 13.7 器高 (3.2)	1/7	口縁部は下外方に下がった後、短く外反する。端部は凹面をなす。口縁部やや短い。天井部と口縁部をわける稜は鈍く、ほとんど突出しない。 内外面ともに回転ナデ。天井部の約2/3に回転篦削りを施す。ロクロ回転方向は左まわり。	内 青灰 (5B6/1) 外 灰 (N6) 明オリーブ灰 (2.5GY7/1)	
190	須恵器 杯蓋	Ⅵ区 C-T 包含層	口径 13.8 器高 4.1	1/3	口縁部は下外方にひらく。端部は低い段をなす。天井部と口縁部をわける稜は突出せず、代って凹線がめぐる。 内外面ともに回転ナデ。天井部の約1/2に回転篦削りを施す。ロクロ回転方向は左まわり。	内 明青灰 (5B7/1) 外 明青灰 (5B7/1) 断 赤褐 (10R5/3)	
191	須恵器 杯身	Ⅵ区 B-T 包含層	口径 10.0 残存高 4.4	1/6	たちあがり部は内傾してのび、端部は丸い。受部は外上方にのび、端部は丸い。体部はやや深く平らである。 内外面ともに回転ナデ。底部の約2/3に回転篦削りを施す。ロクロ回転方向は左まわり。	内 青灰 (5B6/1) 外 暗青灰 (5BG3/1) 断 赤褐 (10R4/3)	
192	須恵器 杯身	Ⅵ区 C-T 包含層	口径 11.6 残存高 4.6	1/4	たちあがり部は内傾してのび、端部は丸い。受部はやや上方にのび、端部は丸い。体部はやや深く平らにおさまる。 内外面ともに回転ナデ。底部の約1/2に回転篦削りを施す。ロクロ回転方向は右まわり。	内 青灰 (5B6/1) 外 灰 (10Y4/1) 断 にぶい赤褐 (5YR5/3)	
193	須恵器 無蓋高杯	Ⅵ区 C-T 包含層	口径 12.6 残存高 4.4	1/4	口縁部は外上方にひらき、端部は丸い。口縁部と底部の境に2条の段を有する。脚部には三方に透しを穿つ。 内外面ともにロクロナデ。底部の約1/2に回転篦削り。脚部取り付け周辺はナデ。底部内面は仕上げナデ。ロクロ回転方向は右まわり。	内 灰白 (N7) 外 灰白 (N8) 断 灰褐 (5YR5/2)	

No	器種	出土地区 遺構層位	法　量（cm）	残存率	形態・技法の特徴	色　調	備　考
194	製塩 土器	Ⅵ　区 B-T 包含層			内彎気味にまっすぐにのびる口縁部。端部は丸い。 内外面ともにナデ。体部に粘土紐接合痕及び下半に指押え。口縁部上半及び体部下半に「こうら」が認められる。二次焼成されている。	内　淡橙 (5YR8/3) 外　灰白 (7.5YR8/1)	胎土に微細なクサリ礫を含む。
195	製塩 土器	Ⅵ　区 B-T 包含層			外反しながらのびる口縁部。端部はやや内方に傾き丸い。 内外面ともにナデ。口縁部内面上半に指押え。「こうら」が認められる。二次焼成されている。	内　浅黄橙 (7.5YR8/4) 外　淡橙 (5YR8/4)	胎土に微細なクサリ礫を含む。

中世の遺物

No	器種	出土地区 遺構層位	法　量（cm）	残存率	形態・技法の特徴	色　調	備　考
196	瓦　器 椀	Ⅵ　区 A-T 包含層	口径　14.0 器高　5.4 高台径　5.0	1/3	内彎気味に外上方にのびる口縁部。端部はやや外反し丸い。断面が三角形の貼り付け高台をもつ。 口縁部内外面は横方向のナデ。体部外面は指押え及びナデ。体部内面は螺旋状の暗文の後、格子状の暗文を施す。高台取りつけ部にはヨコナデを施す。	褐灰 (10YR5/1)	
197	瓦　器 椀	Ⅵ　区 A-T 包含層	口径　15.4 器高　4.5 高台径　4.1	1/4	外上方にのびる口縁部。端部は丸くおさめる。浅い椀状を呈す。底部は断面台形の貼り付け高台。 口縁部内外面はヨコナデ。体部外面は指押え。体部内面は横方向のナデの後、螺旋状の暗文を施す。高台取りつけ部はヨコナデ。高台内には指押えが残る。	黒 (5Y2/1)	
198	瓦　器 椀	Ⅵ　区 B-T 包含層	口径　14.3 器高　4.1 高台径　4.5	1/2	内彎しながら外上方にのびる口縁部をもつ。端部は丸い。浅い椀状を呈す。断面台形の低い貼り付け高台。 口縁部内外面はヨコナデ。体部外面は指押え。高台取りつけ部にヨコナデ。高台内に指押えが残る。底部内面には平行線の暗文を施す。	内　灰白 (10YR7/1) 外　褐灰 (10YR4/1)	
199	黒色 土器 椀	Ⅵ　区 B-T 包含層	口径　15.4	1/3	内彎しながらのびる口縁部。端部はやや外反し丸い。内面のみ黒色。 口縁部外面はヨコナデ。内面は篦磨きを施す。	内　黒褐 (5YR2/1) 外　にぶい橙 (7.5YR7/4)	胎土に微細なクサリ礫を含む。

No	器種	出土地区 遺構層位	法　量（cm）	残存率	形態・技法の特徴	色　調	備　考
200	黒色土器 椀	Ⅵ区 B-T	底径　8.2	1/4	外上方にのびる体部。浅い椀状を呈す。貼り付けの輪高台をもつ。内面のみ黒色。 体部外面はヨコナデ。内面は箆磨きを施す。	内　褐灰 (7.5YR4/1) 外　淡橙 (5YR8/4)	胎土に微細なクサリ礫・黒雲母を含む。
201	瓦器 皿	Ⅵ区 A-T 包含層	口径　9.0 器高　1.7 底径　6.2	1/2	やや内彎しながら外上方にのび、端部付近で外反する口縁部。端部は丸い。 口縁部は内外面ともにヨコナデ。	褐灰 (7.5YR6/1)	
202	瓦器 皿	Ⅵ区 B-T 包含層	口径　8.6 器高　1.4 底径　4.0	1/2	ゆるやかに外上方にのびる口縁部。端部は丸い。 口縁部外面はヨコナデ。底部はナデ及び指押え。内面には暗文を施す。	灰 (N7)	
203	瓦器 皿	Ⅵ区 B-T 包含層	口径　8.6 器高　1.7	1/3	ゆるやかに外上方にのびる口縁部。端部は丸い。 口縁部は内外面ともにヨコナデ。底部は指押え。内面には不定方向の暗文を施す。	灰 (N5)	
204	土師器 皿	Ⅵ区 A-T 包含層	口径　9.8 器高　1.2 底径　7.7	完形	外上方にのびる短い口縁部、端部は丸い。 口縁部内外面はヨコナデ。底部内面はナデ。底部外面は静止箆切り。	橙 (7.5YR7/6)	胎土に微細なクサリ礫を含む。
205	土師器 皿	Ⅵ区 A-T 包含層	口径　9.1 器高　7.0 底径　1.0	完形	外上方にのびる短い口縁部。端部は丸い。 内外面ともにヨコナデ。底部は回転糸切り。	浅黄橙 (7.5YR8/4)	胎土に微細なクサリ礫を含む。
206	土師器 皿	Ⅵ区 B-T 包含層	口径　8.4 器高　1.3	1/4	外上方にのびる短い口縁部。端部は丸い。 内外面ともにヨコナデ。底部は静止糸切り。	橙 (7.5YR7/6)	胎土に微細なクサリ礫を含む。
207	土師器 皿	Ⅵ区 A-T 包含層	口径　8.2 器高　6.5 底径　1.2	完形	外上方にのびる短い口縁部。端部は丸い。口縁部は厚手である。 内外面ともにヨコナデ。底部は回転糸切り。	浅黄橙 (7.5YR8/6)	胎土に微細なクサリ礫を含む。
208	土師器 皿	Ⅵ区 A-T 包含層	口径　8.7 器高　1.2 底径　7.1	2/3	外上方にのびる短い口縁部、端部は丸い。 内外面ともにヨコナデ。底部は回転糸切り。	浅黄橙 (7.5YR8/4)	胎土に微細なクサリ礫を含む。

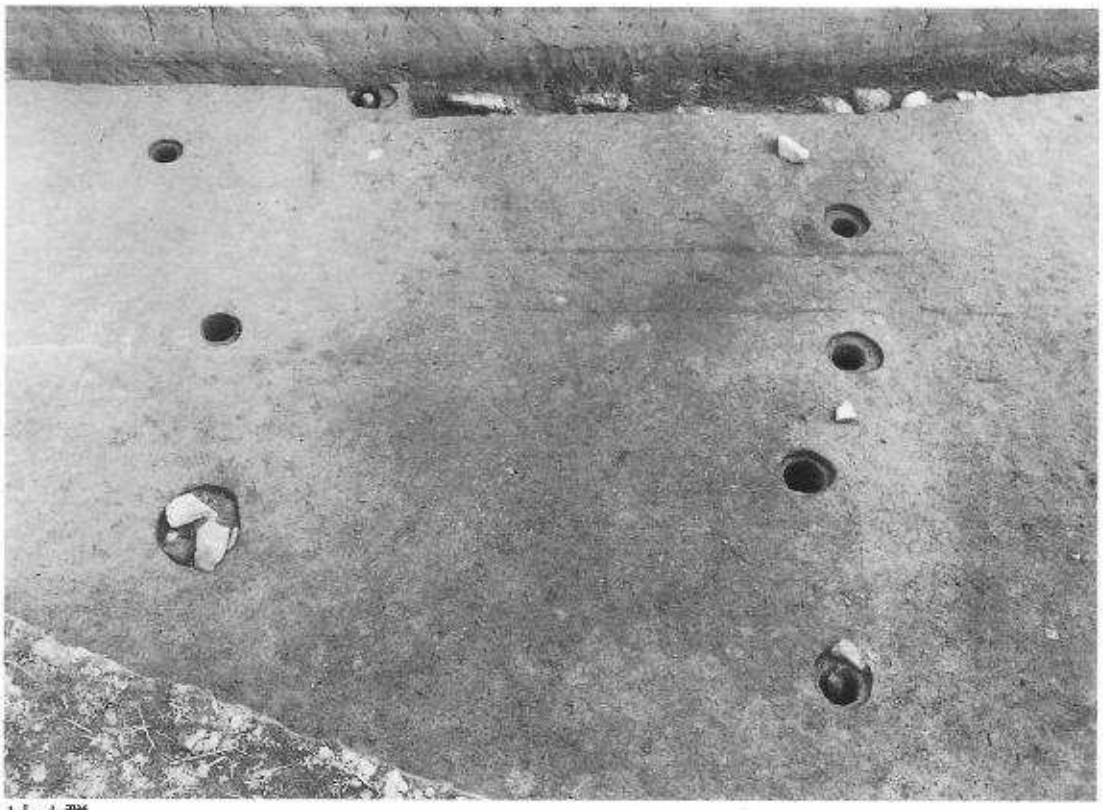
No	器種	出土地区 遺構層位	法　量（cm）	残存率	形態・技法の特徴	色　調	備　考
209	土師器 杯	Ⅵ　区 A-T 包含層	口径　13.8 器高　3.2 底径　10.3	1/4	やや内彎気味に外上方にのびる口縁部をもつ。端部は丸い。 内外面ともにヨコナデ。底部は回転糸切り。全体に厚手のつくりである。	浅黄橙 (10YR8/4)	胎土に微細なクサリ礫を含む。
210	土師器 杯	Ⅵ　区 B-T 包含層	口径　12.1 器高　2.9 底径　7.1	1/2	内彎しながら外上方にのびる口縁部をもつ。端部は丸い。 内外面ともにヨコナデ。底部内面はナデ。底部は回転糸切り。ロクロ目が認められる。	浅黄橙 (7.5YR8/4)	二次焼成が認められる。
213	青　磁 碗	Ⅵ　区 B-T 包含層			内彎気味に外上方にのびる体部。口縁部は丸くおさめる。 内外面ともに施釉する。内面に櫛描きの文様を施す。	灰白 (10Y7/2)	
214	青　磁 碗	Ⅵ　区 B-T 包含層			内彎気味に外上方にのびる体部。口縁部は丸くおさめる。 内外面ともに施釉する。外面に櫛描きの文様を施す。	灰白 (10Y7/2)	
215	白　磁 碗	Ⅵ　区 B-T 包含層			外上方にのびる体部。口縁端部は外方に拡張し、ほぼ水平な面をなす。 内外面ともに施釉する。	灰白 (2.5GY8/1)	
216	白　磁 碗	Ⅵ　区 B-T 包含層			小さい玉縁をもつ口縁部。 内外面ともに施釉する。	灰白 (5GY8/1)	

図　　版

図版一　航空写真

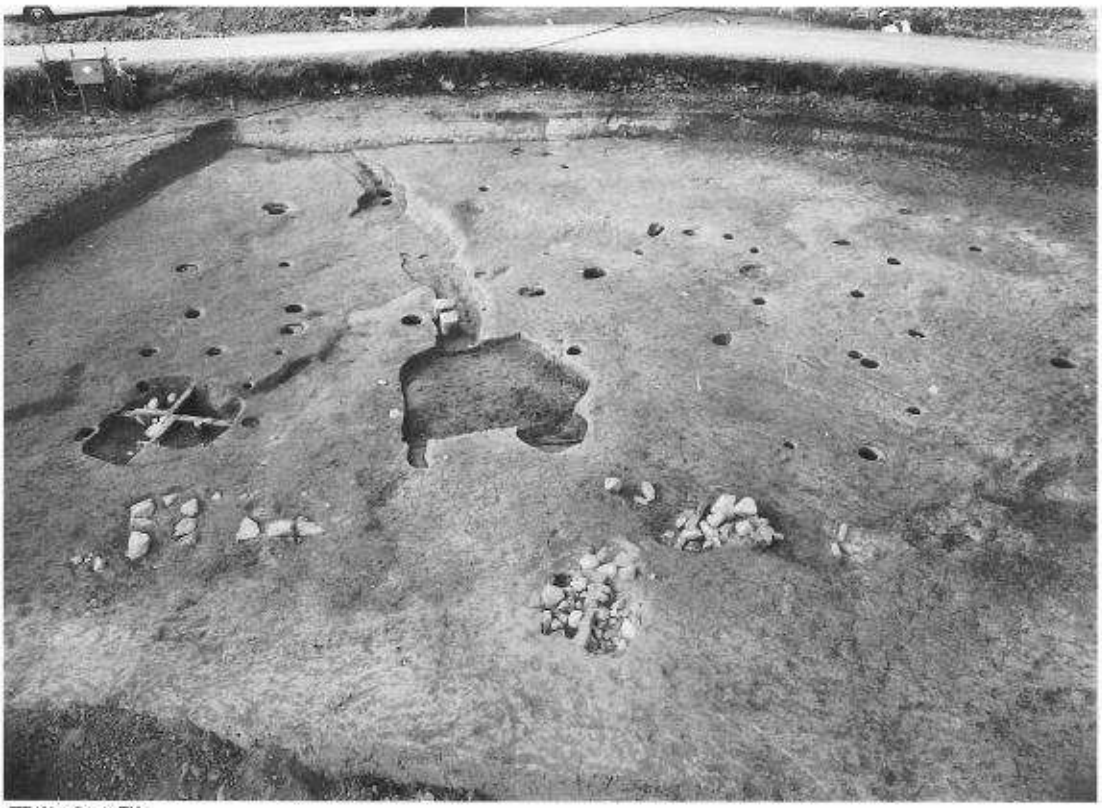
図版二　I区

全景



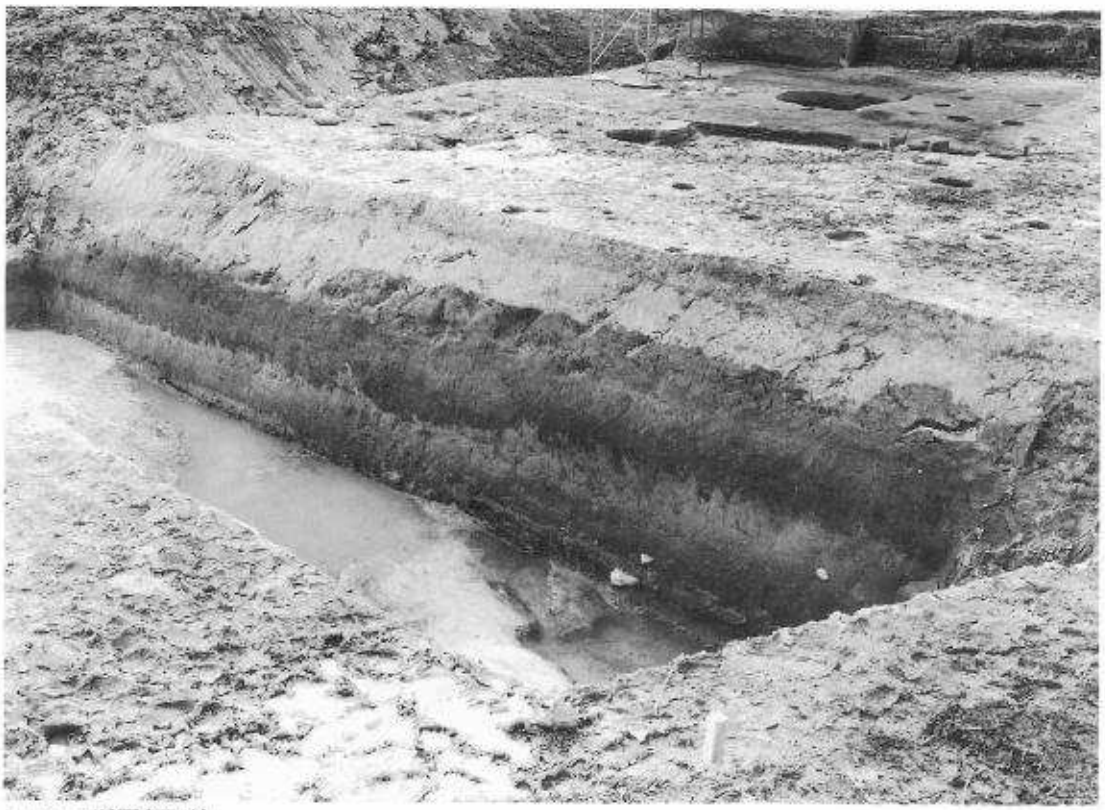
ピット群

全景

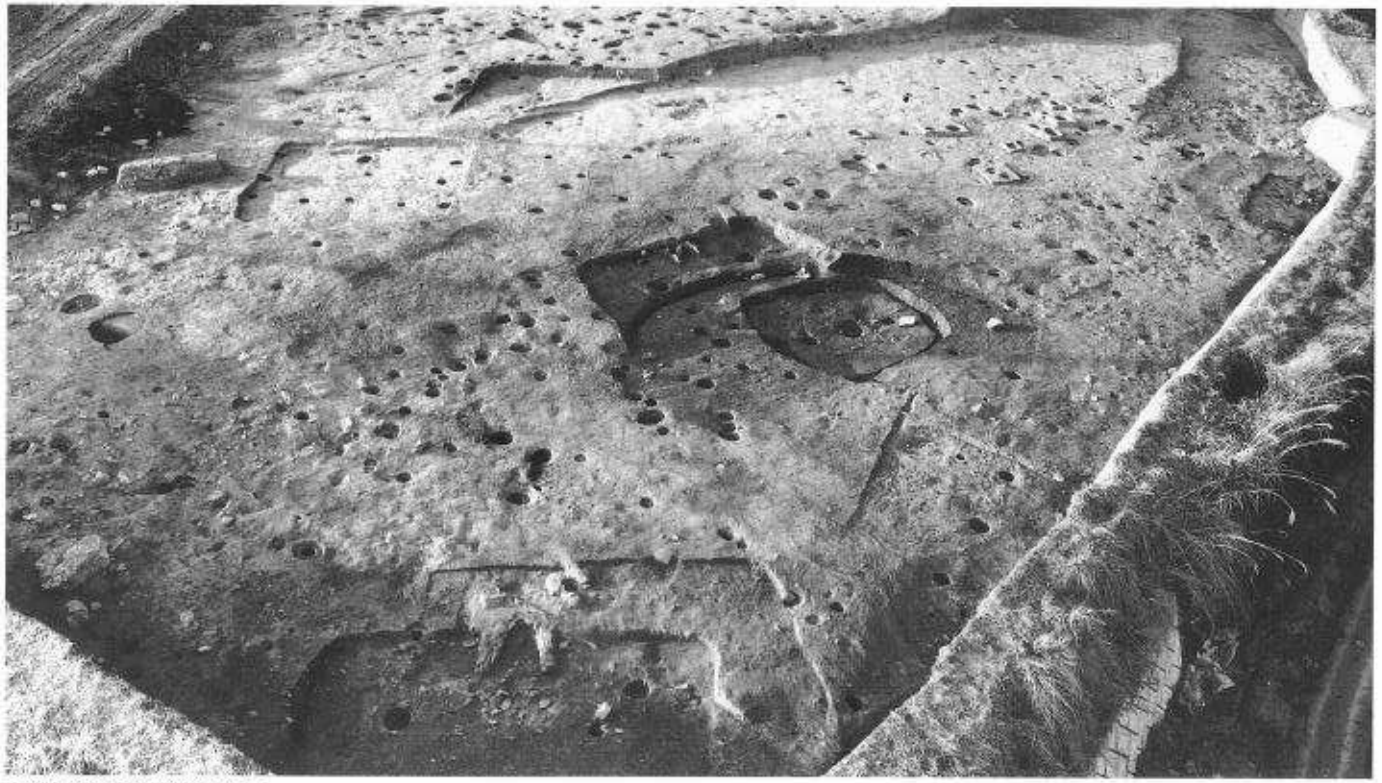


西半ピット群

近世墓



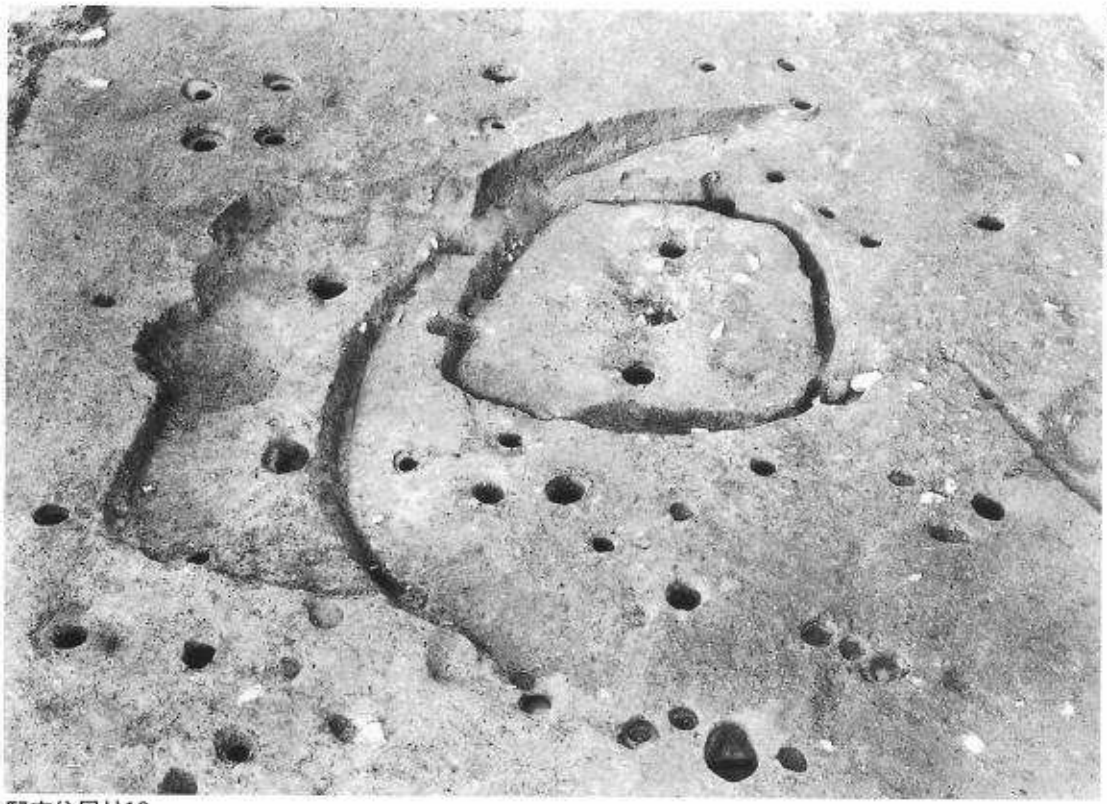
トレンチ断面(西壁)



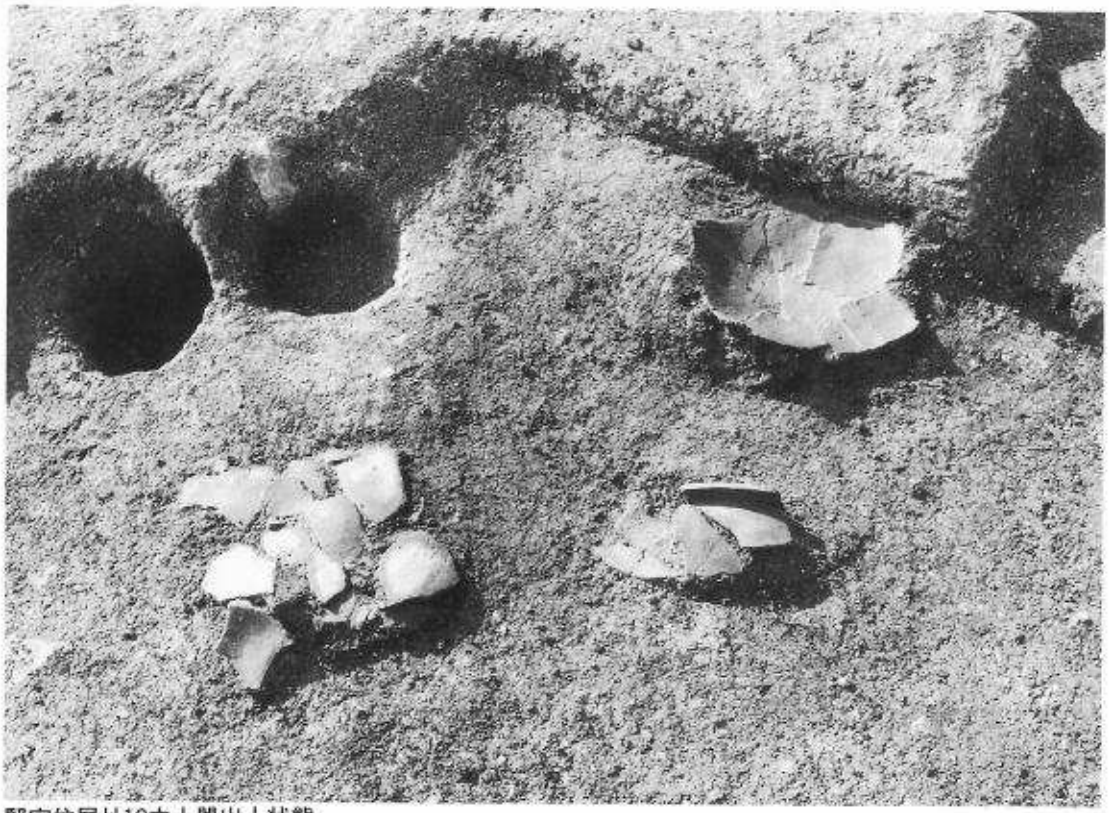
古墳時代以前の遺構全景

土層堆積状態

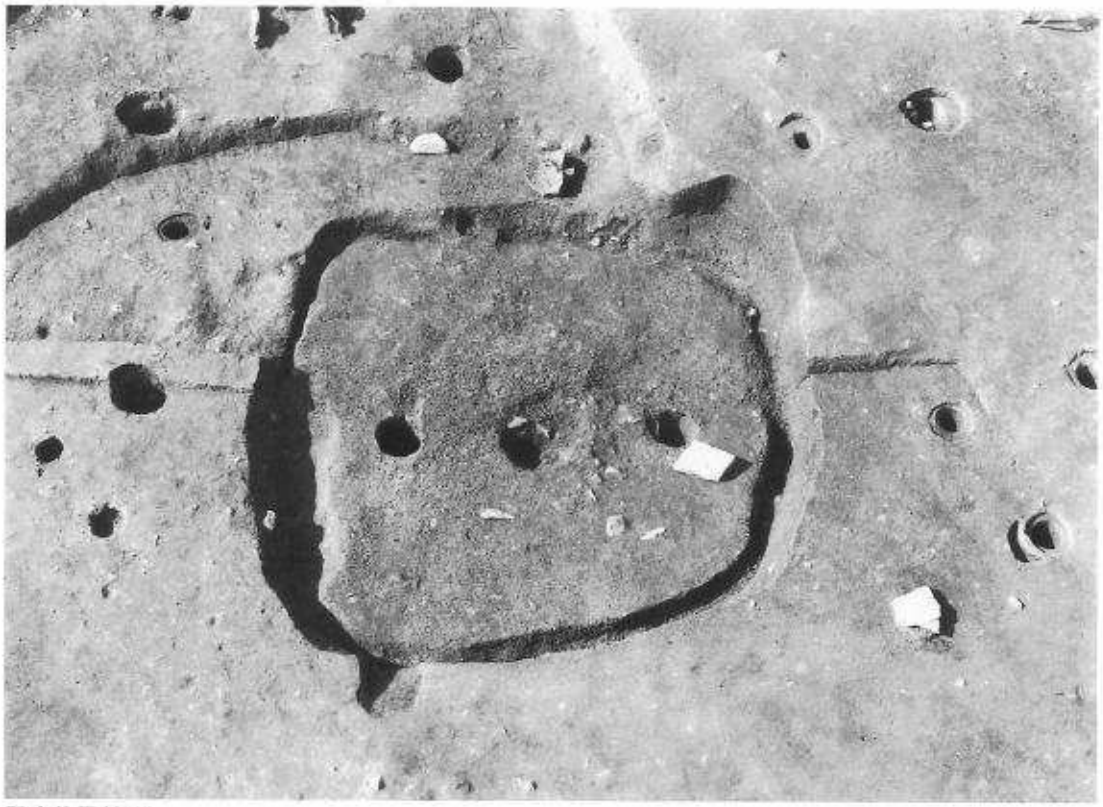
住居址4、11、12土層断面



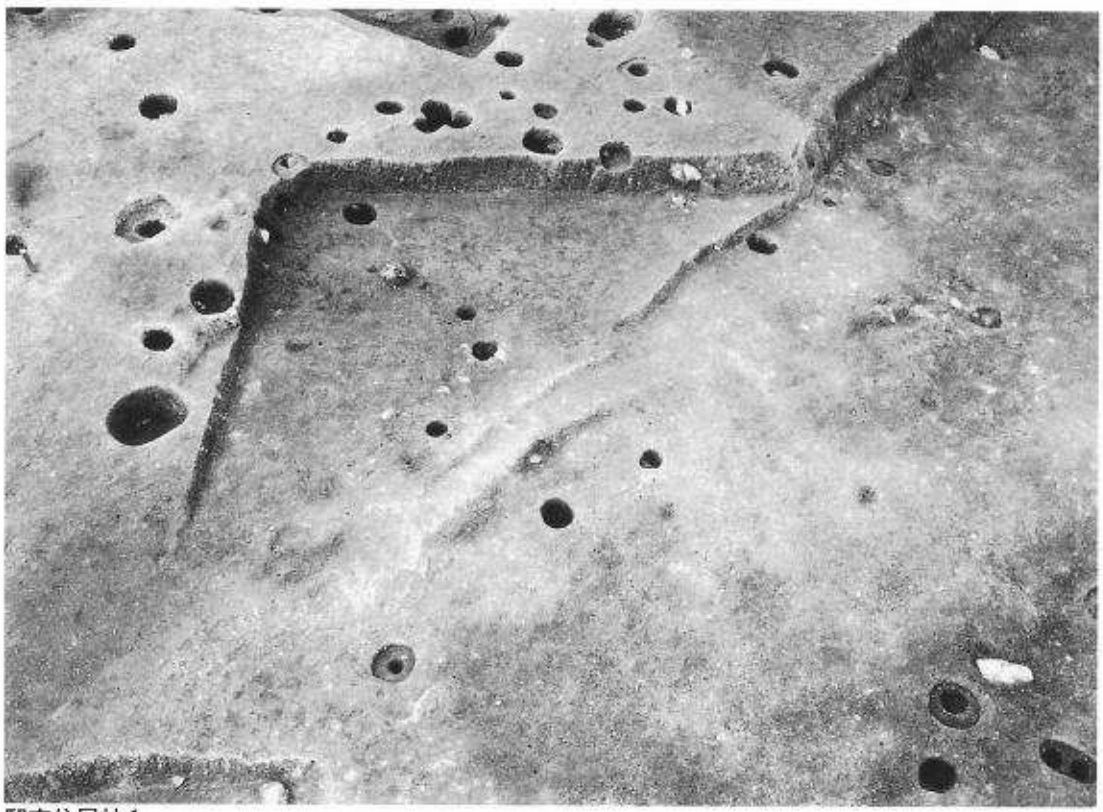
竪穴住居址12



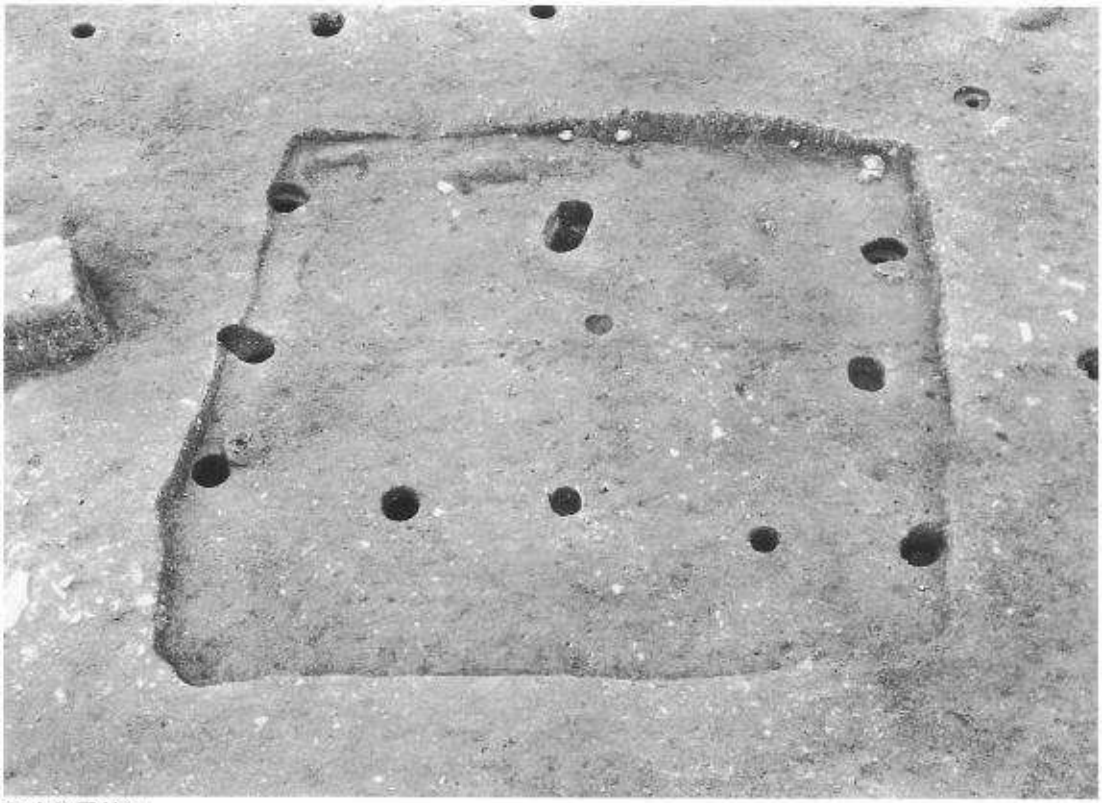
竪穴住居址12内土器出土状態



竪穴住居址11

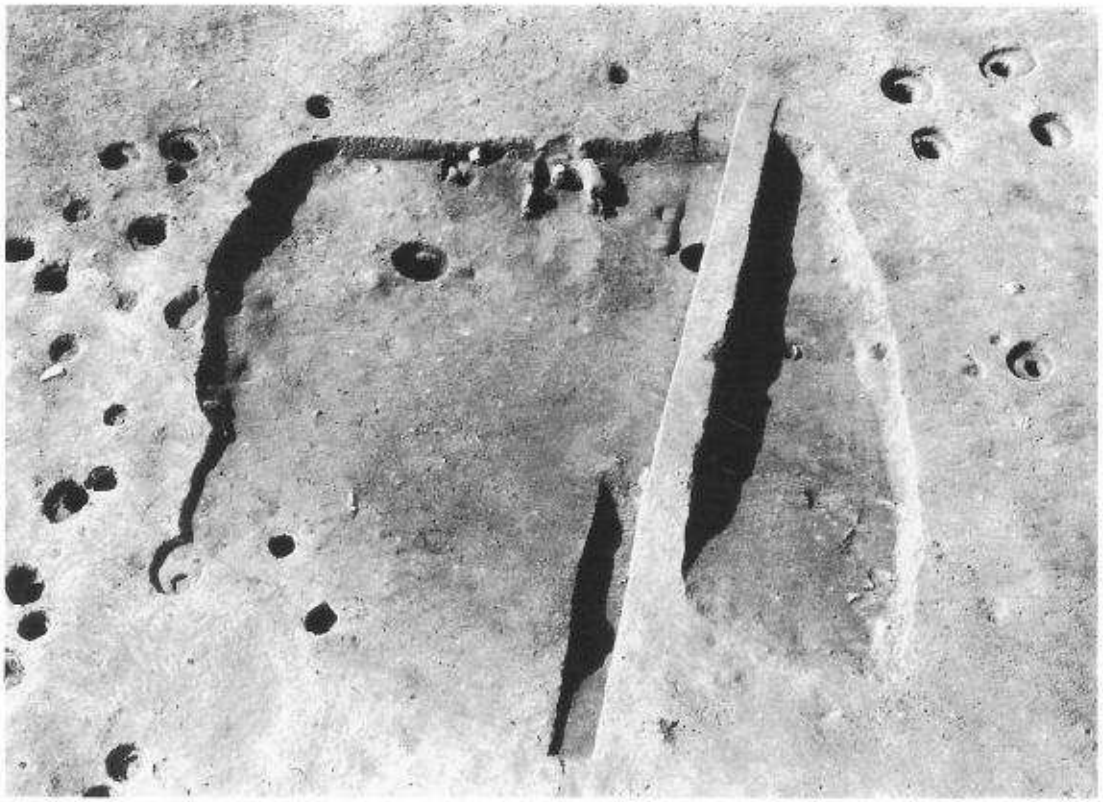


竪穴住居址1

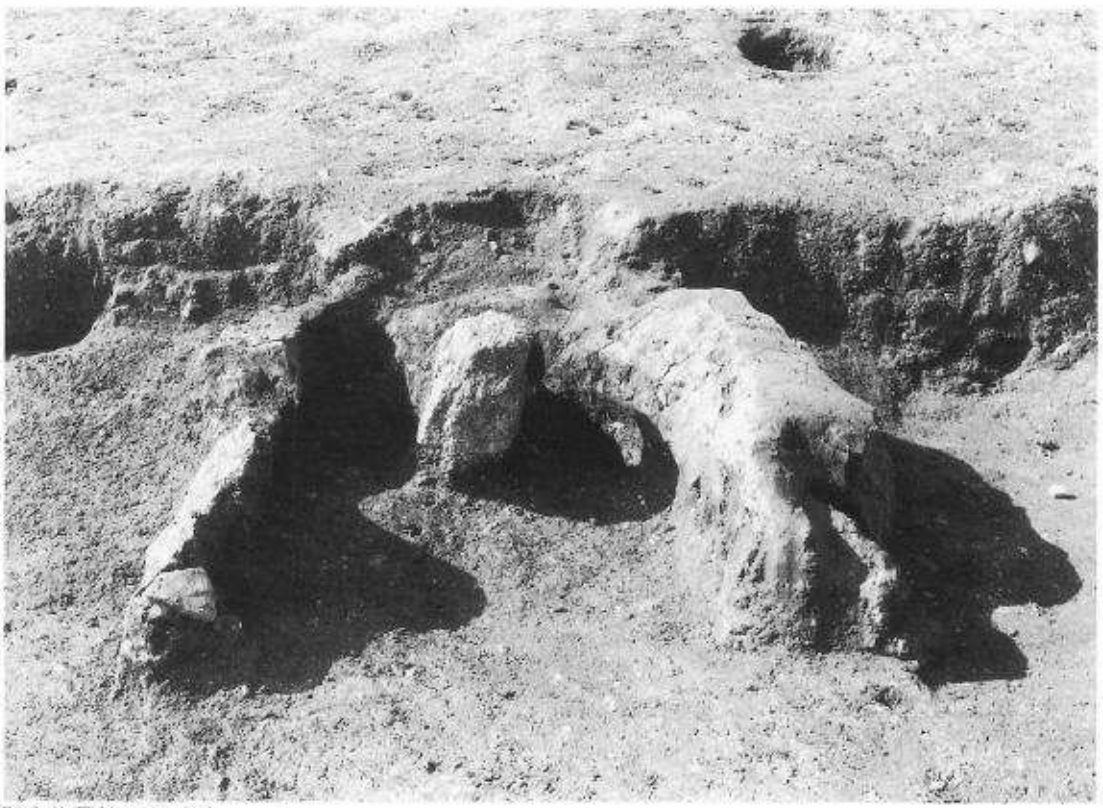


竪穴住居址 2

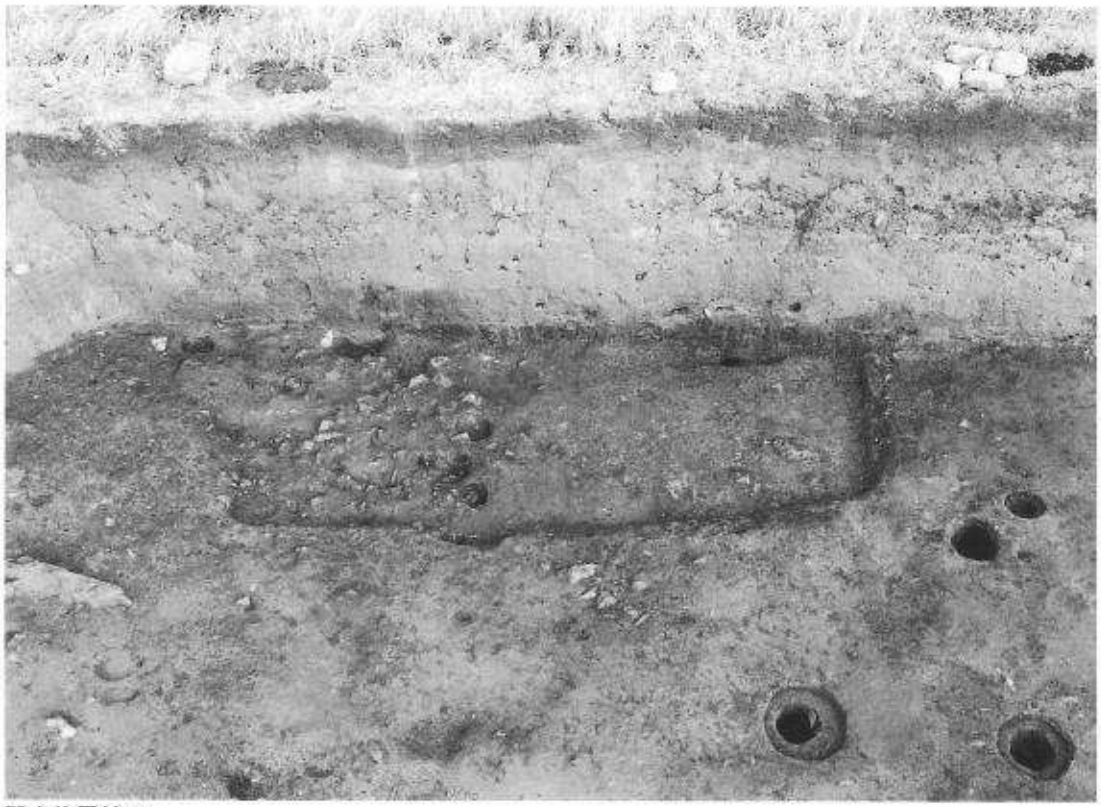
竪穴住居址12内土器出土状態



竪穴住居址 4

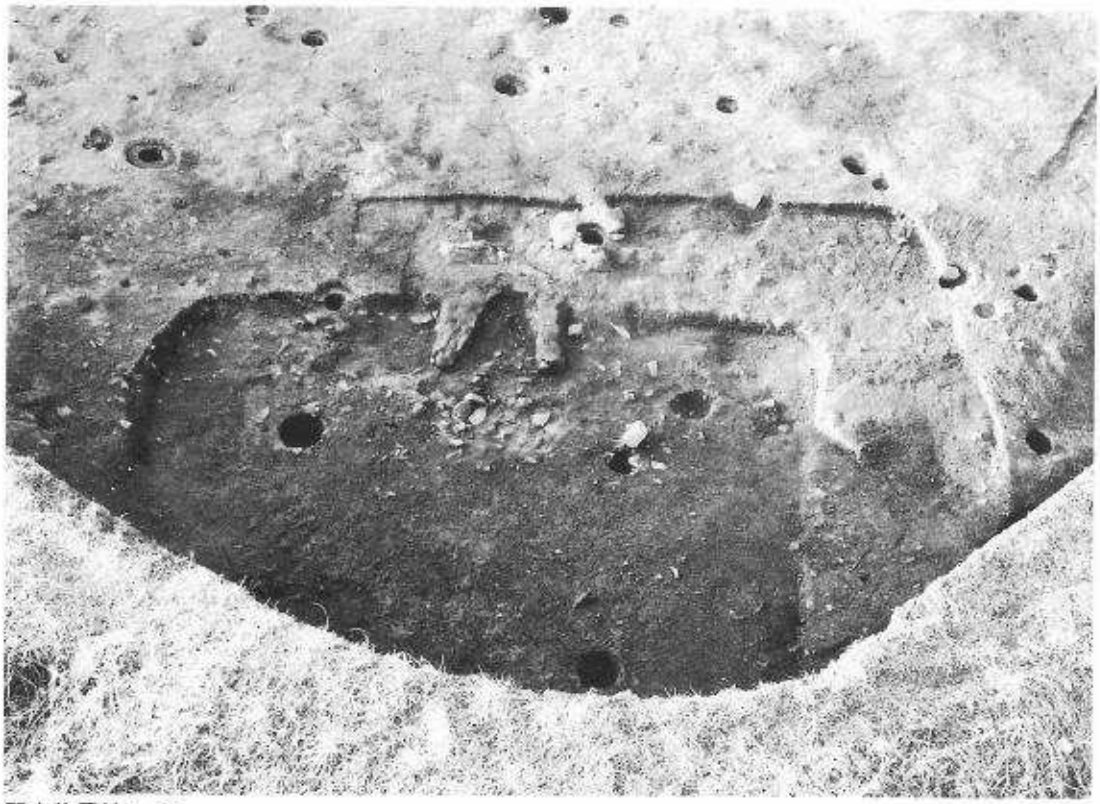


竪穴住居址 4 カマド



竪穴住居址 3

竪穴住居址 6

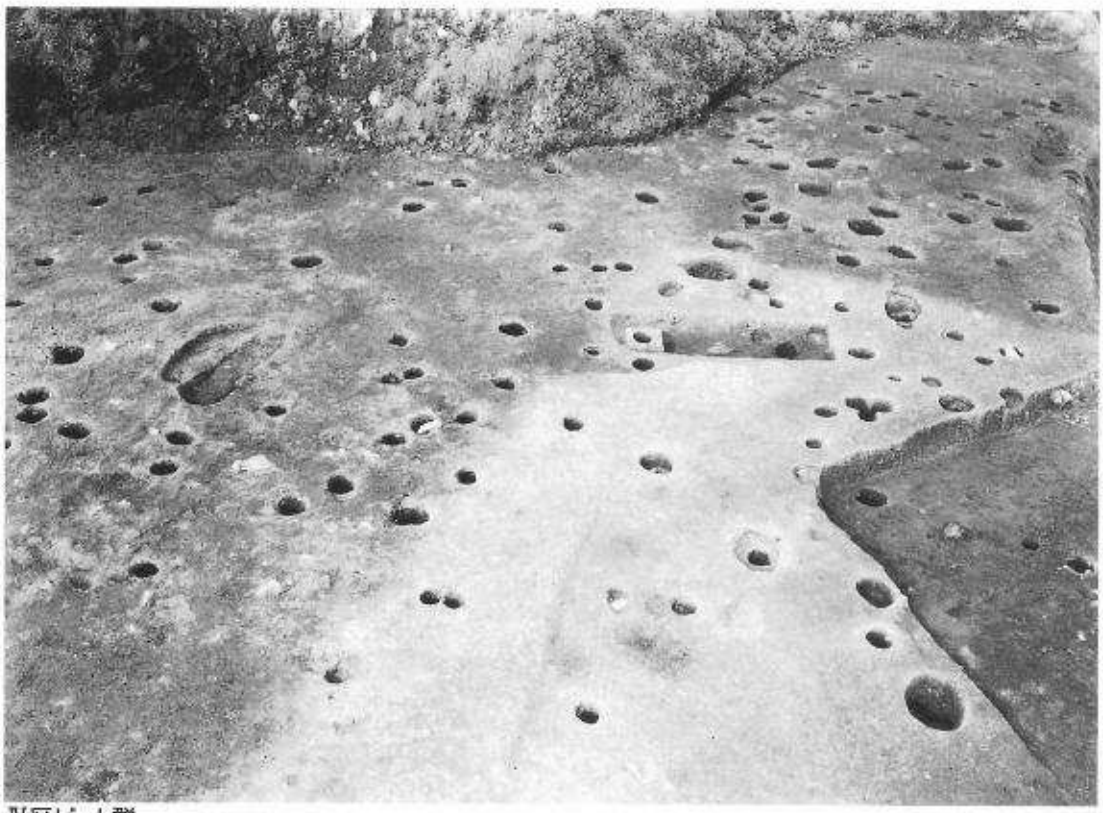


竪穴住居址７・８

竪穴住居址７カマド

第三号遺構全景

Ⅲ区ピット群



Ⅳ区ピット群

Ⅴ地区ピット群と建物址

建物址１（西より）

建物址１（東より）

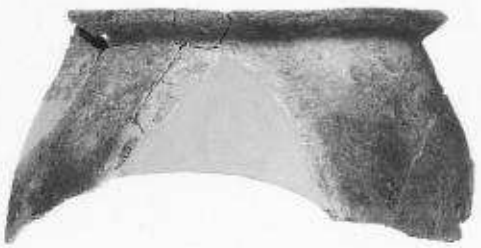
Ⅴ地区柱穴群

Aトレンチ土層堆積状態

Bトレンチ土層堆積状態

60

61



69

63

5

134

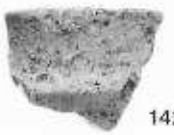
168

71

141

167

72


142

143

73

2

70

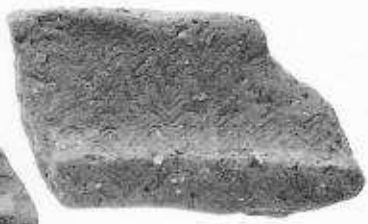
135

64

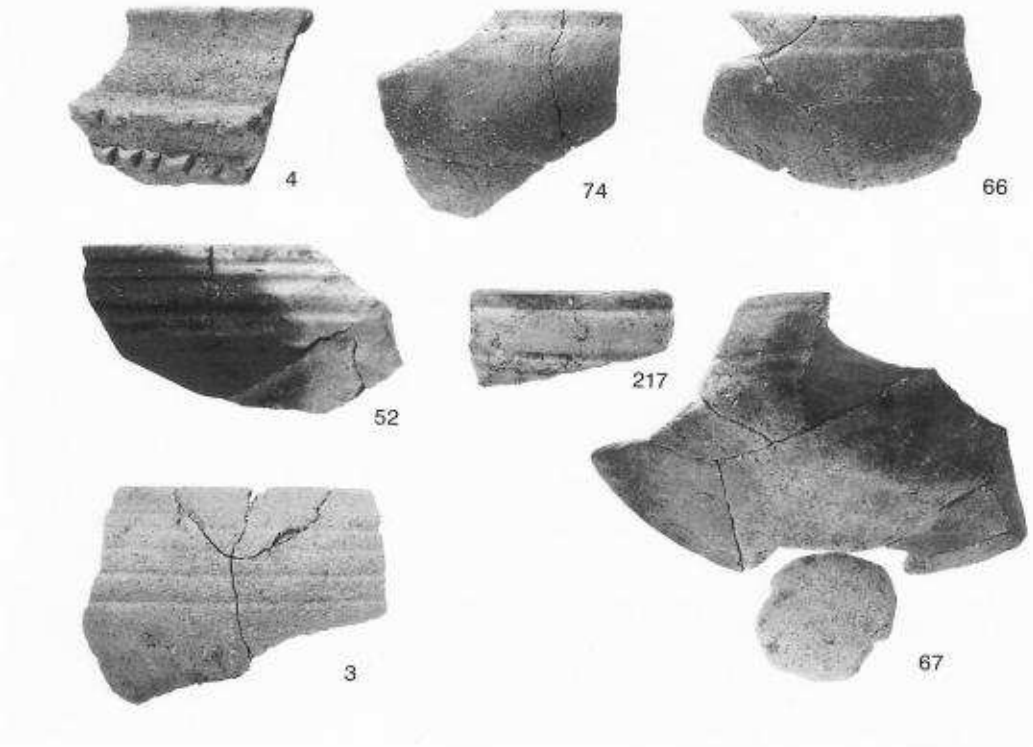
65

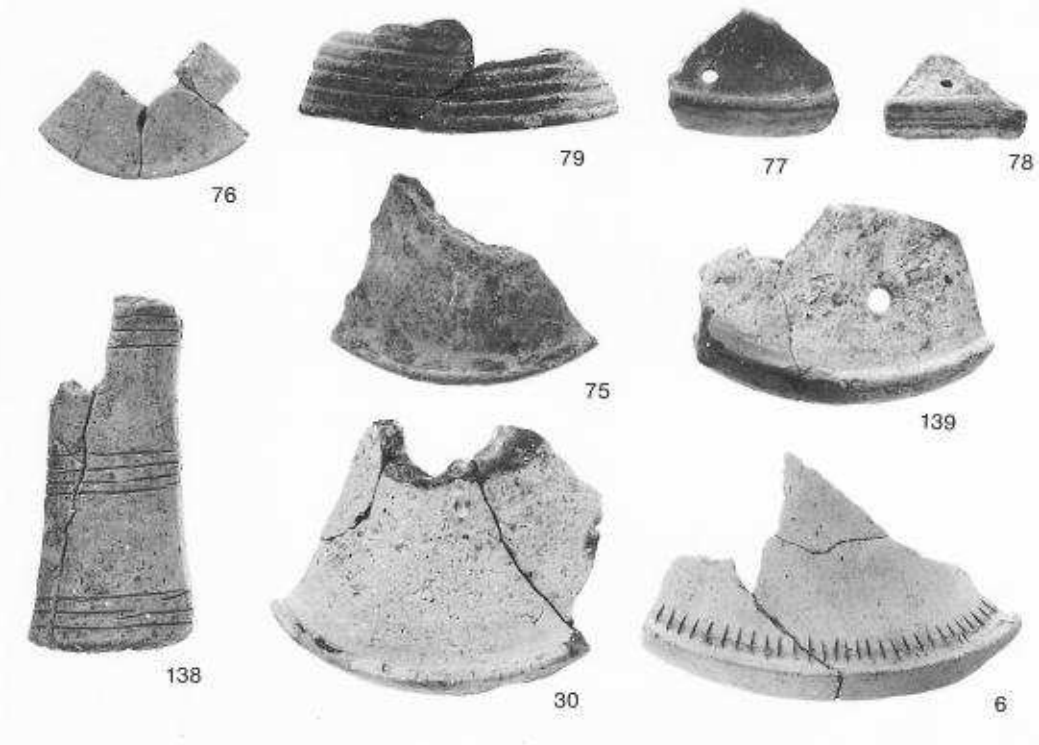
68

136



29


4
74
66
52
217
3
67


76
79
77
78
75
139
138
30
6

170

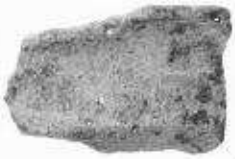
7

13

171

10

172


9

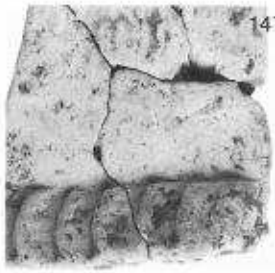
177

175

176

12

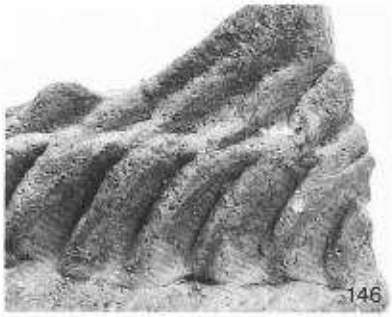
11

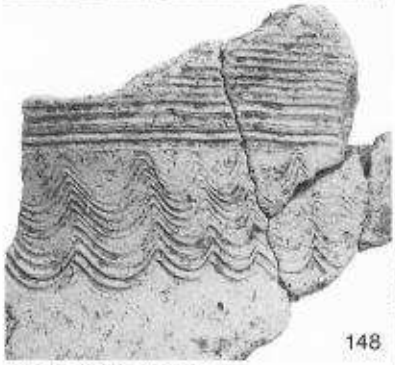

147

144

154

14


146


148

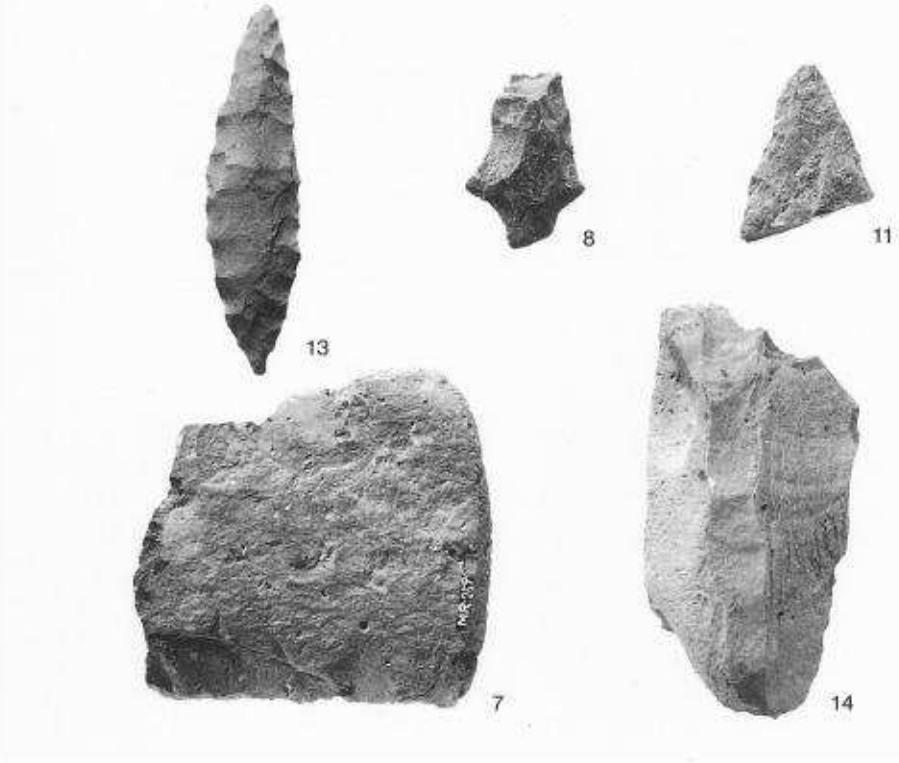
149

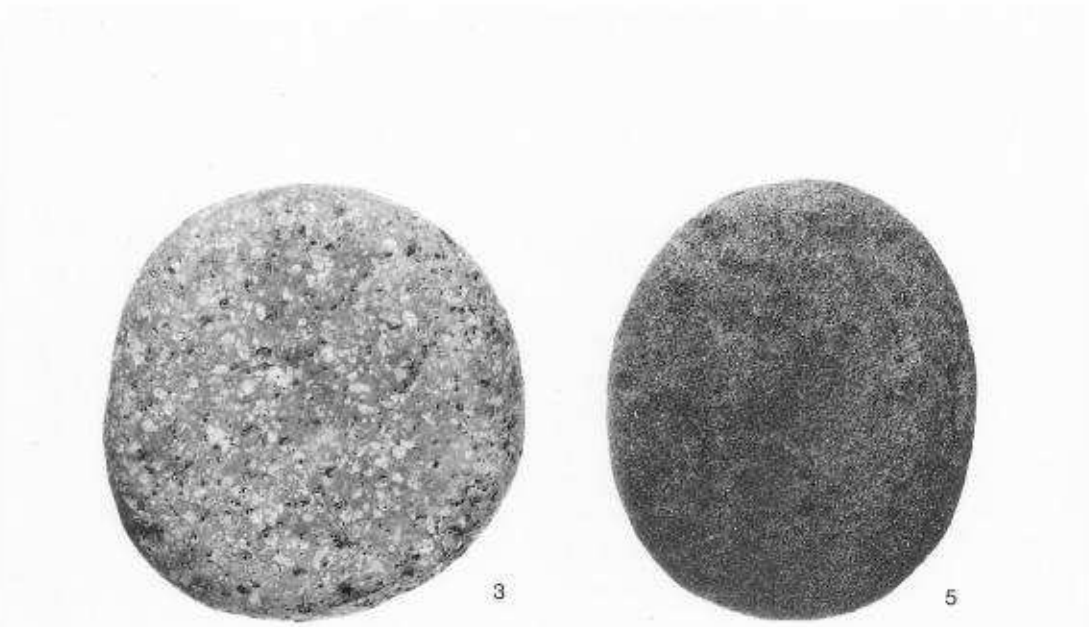
150

15

151

152


13
8
11
7
14


3
5

16

156

33

88

82

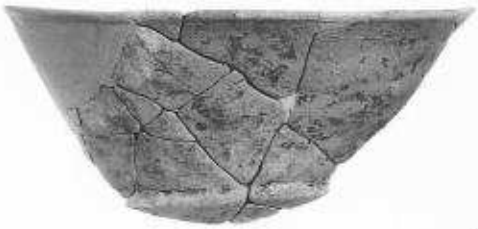
19

91

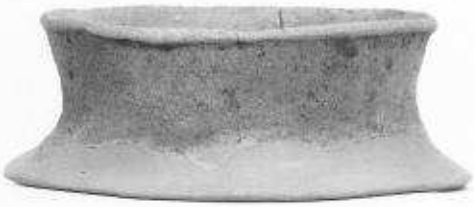
100

193

20



80



165

93

105

164

107

104

108

109

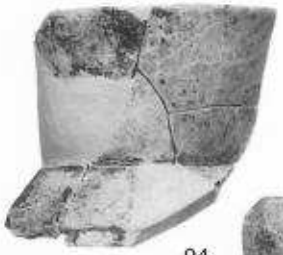
31

218

182

179

185

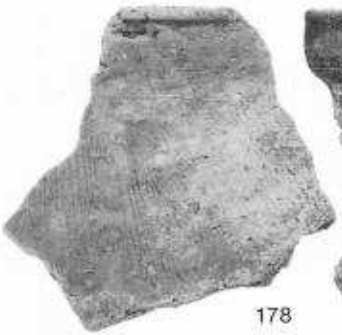

94

116

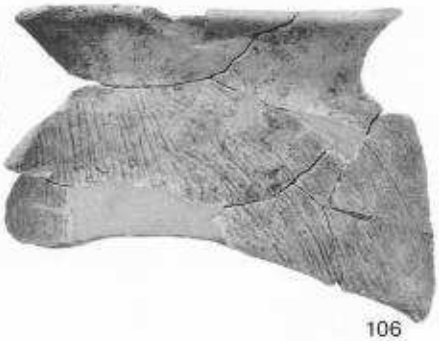
163

83

84


178

92


106

116

219

115

113

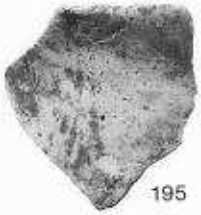
112

114

110

220

194


195

111

221

205

53

118

208

203

117

204

201

209

210

121

125

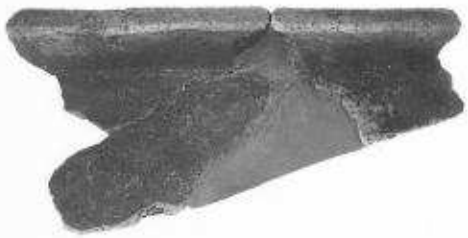
197

124

198

198

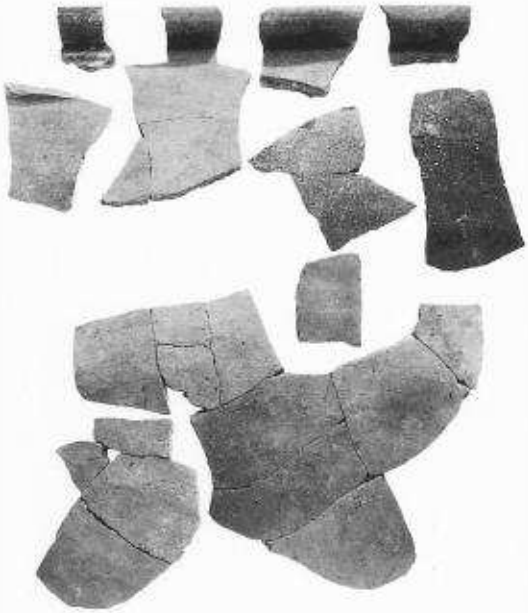
21



22

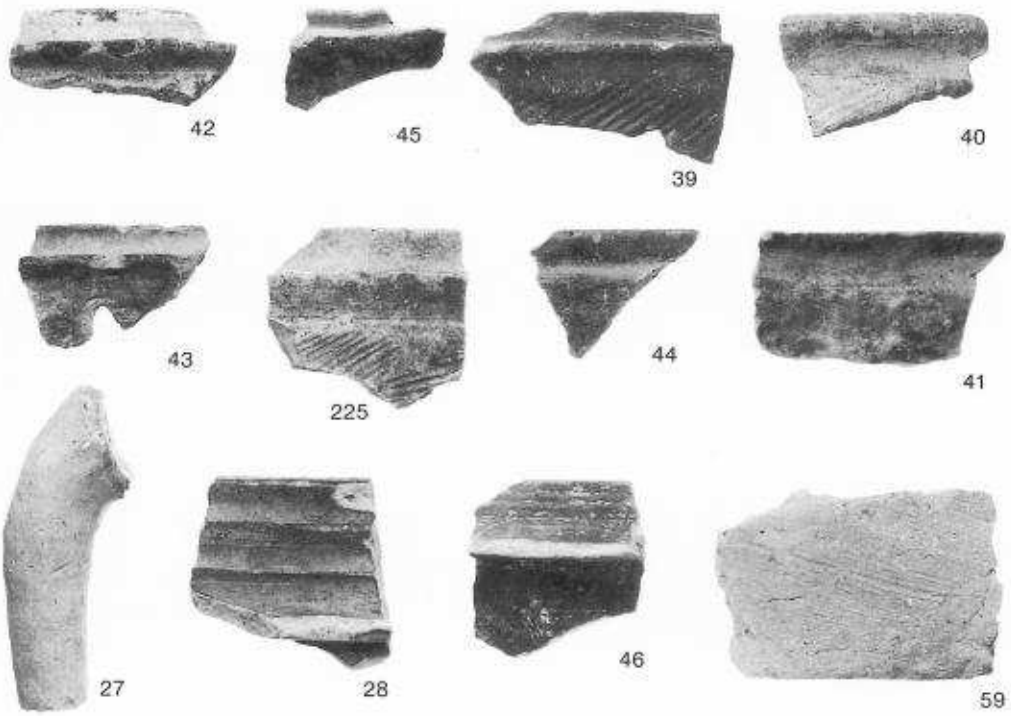
123

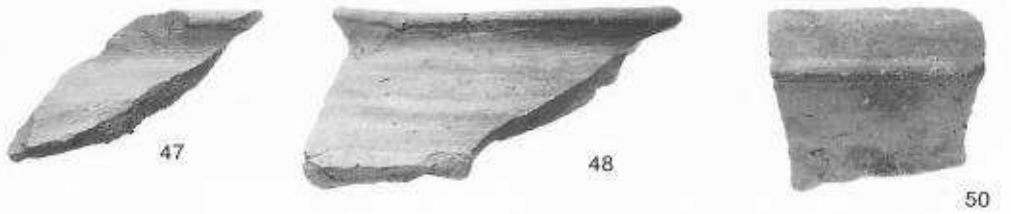
224



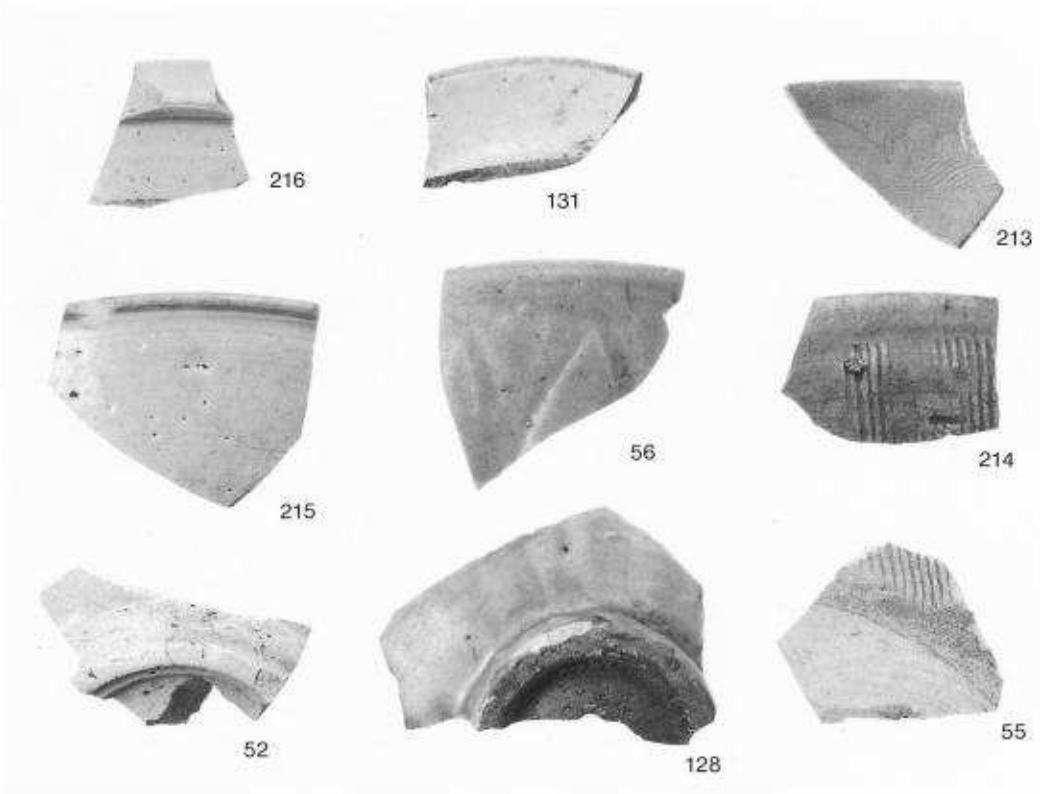
223

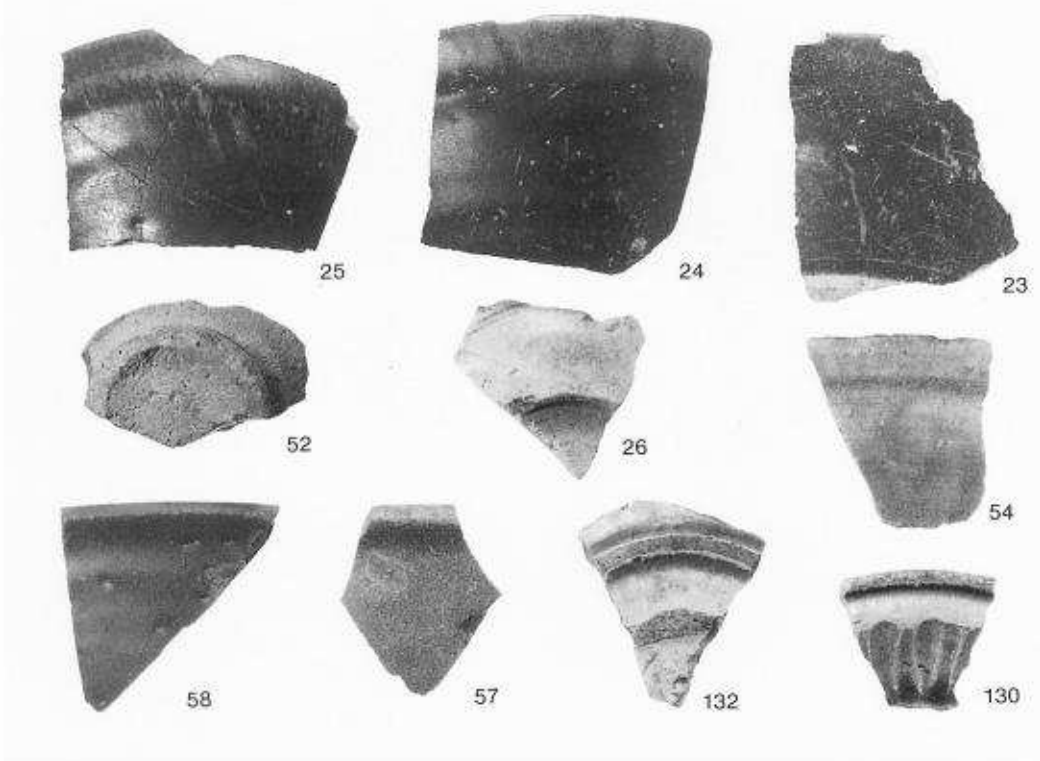
222

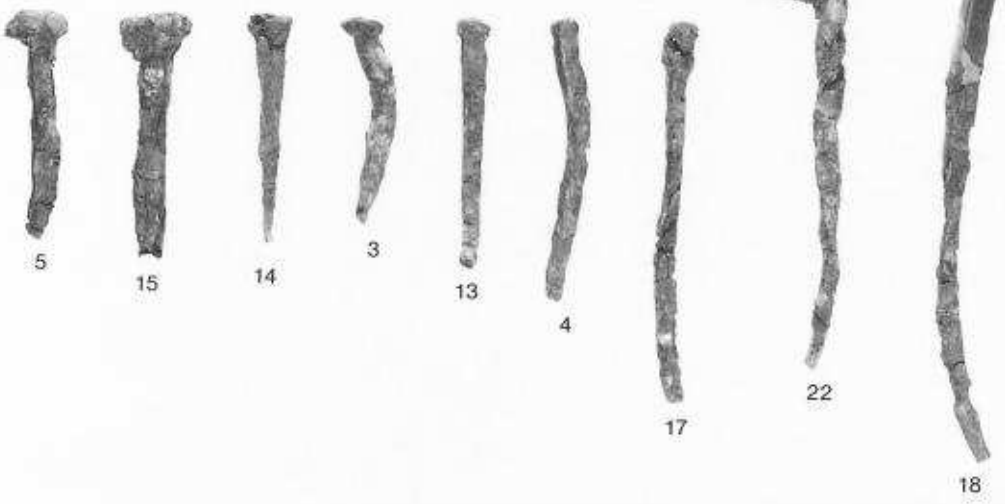

42
45
39
40
43
225
44
41
27
28
46
59


47
48
50

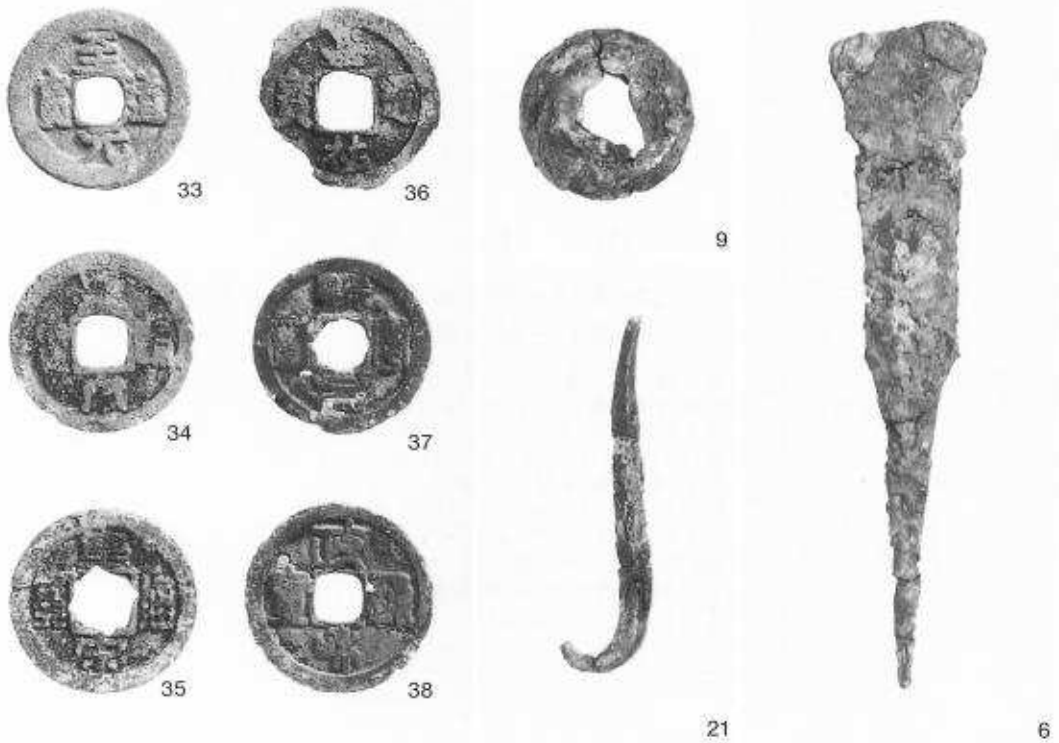
49
133
51


216
131
213
215
56
214
52
128
55


25
24
23
52
26
54
58
57
132
130


5
15
14
3
13
4
17
22
18

8
8
10


33
36
9
34
37
35
38
21
6

森　遺　跡

兵庫県文化財調査報告書　第55冊

昭和63年３月31日　発行

発　行　兵庫県教育委員会
神戸市中央区下山手通５丁目10-1
〒650　TEL（078）351-7711

編　集　兵庫県教育委員会社会教育・文化財課
兵庫県埋蔵文化財調査事務所
神戸市兵庫区荒田町２丁目1-5
〒652　TEL（078）531-7011

印　刷　丸山印刷株式会社
兵庫県高砂市米田町神爪57-1
〒676　TEL（0794）32-1511